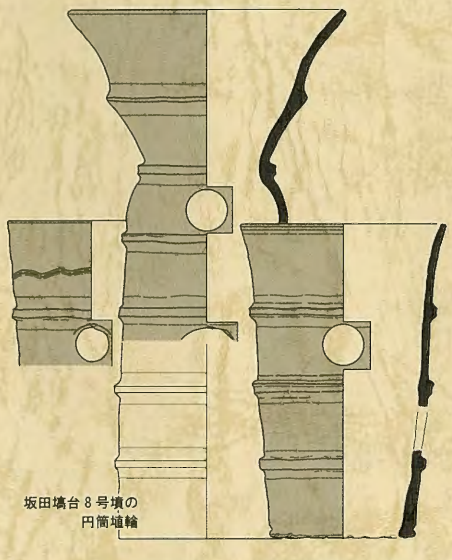
ー茨城県土浦市ー

下坂田塙台遺跡
坂田塙台古墳群

県営畑地帯総合整備事業（担い手支援型）
坂田地区埋蔵文化財発掘調査報告書


坂田塙台８号墳の
円筒埴輪

2013

土浦市教育委員会
有限会社勾玉工房 Mogi

一茨城県土浦市一

下坂田塙台遺跡
坂田塙台古墳群

県営畑地帯総合整備事業（担い手支援型）
坂田地区埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

土浦市教育委員会
有限会社勾玉工房Mogi

序

土浦市は、霞ヶ浦や桜川など豊富な水資源に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため市内には、集落跡や貝塚、古墳など数多くの遺跡が存在しています。これらの遺跡は、当時の人々の生活や環境を知る手掛かりとなります。また、現代に生きる私たちが、豊かな生活を送ることのできる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化財を保護し後世に伝えることは、私たちの重要な任務であり、また、郷土の発展のために大切なことであります。

この度、上坂田地区と下坂田地区において大規模な畑地帯総合整備事業が計画され、昨年度は下坂田塙台遺跡と坂田塙台古墳群の記録保存を目的とした発掘調査が行われました。

調査の結果は本文に記載されているとおりですが、土浦の古代の解明に役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書刊行にあたり、関係者の皆様のご協力とご支援に対し厚く御礼を申し上げます。

平成 25 年 3 月

土浦市教育委員会
教育長　井坂　隆

例　言

1. 本書は茨城県土浦市下坂田1050番地ほかに位置する下坂田塙台遺跡・坂田塙台古墳群の発掘調査報告書である。
2. 調査は土浦市から委託を受けた有限会社勾玉工房Mogi（以下、勾玉工房と表記）が実施した。
3. 発掘調査面積は1,800㎡である。
4. 発掘調査は平成23年12月13日から平成24年2月28日まで実施した。また、出土遺物の整理作業及び報告書の作成は、平成24年10月5日から開始し、平成25年3月8日まで実施した。
5. 発掘調査は大越直樹（勾玉工房 調査研究員）が担当し、整理作業及び報告書作成は、大越のほか、大賀 健・大賀さつき・鈴木 徹が担当した。
6. 発掘調査の参加者は次のとおりである。（敬称略）

   露久保三郎　岡田　眷　沼田久雄　鈴木利勝　柿崎　昇　豊崎利司　滝田一徳　森永典昭　植木昭子
   高畑仁子　糸賀文子　佐賀　実　小池一司　岡田正光　桂木郁夫　草野敏男　濱田　朗　福田範幸
   小林和代　青木敏雄
7. 整理作業は勾玉工房において行い、参加者は次のとおりである。

   遺物基礎整理作業　根本時子　篠原みよ子　石津弘子　佐藤政代
   遺物実測作業　大賀さつき　大越直樹　阿天坊弥生　小川美由紀　森 優里絵　髙橋歩美
   デジタル編集　森 優里絵　髙橋歩美　饗庭紀子　岩崎美奈子
   事務・経理　石橋明子
8. 本書に用いた遺構写真は大越が、遺物写真は大越・髙橋が撮影した。
9. 本書は比毛君男・大越・大賀 健・大賀さつき・鈴木が次のとおり分担執筆した。編集は土浦市教育委員会の指導のもと、大越・鈴木・森が行った。

   第1章……比毛君男（上高津貝塚ふるさと歴史の広場 学芸員）
   第2・3章・第4章遺構……大越直樹（勾玉工房 調査研究員）
   第4章 第2・3節遺物・遺物観察表（埴輪以外）……大賀　健（勾玉工房 代表取締役）
   第5章 第3節……大賀　健・大賀さつき（勾玉工房 取締役）
   第4章 第1・4～7節遺物・遺物観察表（埴輪）・第5章 第1・2節……鈴木 徹（勾玉工房 調査研究員）
10. 本調査に関わる出土遺物及び記録図面・写真等は、一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場（土浦市立考古資料館）が保管している。
11. 発掘調査から報告書の作成に当たり、次の方々にご協力いただいた。また、出土人骨の鑑定は、国立歴史民俗博物館の西本豊弘教授に依頼した。ご芳名を記して感謝の意を表します。（敬称略）

    秋元陽光　石橋　充　犬木　努　小澤重雄　折原洋一　忽那敬三　斉藤　新　田中　裕　長井正欣
    萩原恭一　土生朗治　日高　慎　古谷　毅　本田信之　松田政基　茨城県教育庁文化課
    茨城県県南農林事務所　土浦市産業部耕地課　坂田地区県営畑地帯総合土地改良事業実施協議会
    豊藤建設株式会社　芦田測量

凡　例

1. 第1図は国土地理院発行5万分の1地形図「土浦」、第2図は同2万5千分の1地形図「常陸藤沢」を用いた。
2. 本書に記してある座標値は世界測地系第Ⅸ系を使用している。全体図・遺構図の方位は座標北を示す。
3. 本書における方位の記述は、便宜的に調査区1・3区は南北、2・4区は東西に調査区長軸を向けた状態で行っている。
4. 堆積土層及び遺物の色調については、『新版標準土色帖』2008年版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修）を用いた。
5. 標高は東京湾平均海面（T.P.）を基準としている。
6. 掲載した図面は以下の縮尺で表した。

調査区全体図	1/500	各地区全体図	1/250
遺構図　住居跡・掘立柱建物跡・		遺物図　縄文・弥生土器・	
土坑・ピット・溝跡	1/60	土製品・石製品	1/3
カマド	1/30	土師器・須恵器・埴輪・	
溝跡のうちSD03・04・11	1/100	灰釉陶器・土師質土器	1/4
8号墳	1/150	石器・鉄製品	1/2

なお、変則的な縮尺を用いた場合には、個別にその倍率を示した。

7. 遺物図における拓本の配置は、縄文・弥生土器が左から外面（・断面）・内面、土師器・須恵器・埴輪が左から外面・内面（・断面）の順である。
8. 遺物写真は実測図の縮尺に合わせて掲載した。
9. 掲載図中のスクリーントーン及び記号は、以下に示すとおりである。

遺構図　…火床面　…焼土　…炭化材　…貝層
遺構図　…カマド袖　…硬化面範囲
遺物図　…繊維土器断面　…須恵器断面　…黒色処理　…赤彩

遺物出土状況図　○…土器　☆…土製品　□…石器・石製品　△…鉄製品　●…未掲載遺物

10. 遺物の注記に用いた略号は以下のとおりである。
遺跡名：SSH　住居跡：SI　掘立柱建物跡：SB　掘立柱塀・柵跡：SA　土坑：SK　ピット：P　溝跡：SD
攪乱：K　トレンチ：Tr
11. 遺構番号について次に掲げるもの土坑とピットは、本書における表記を次のとおり振り替えた後に欠番とした。
SK01 → SI04、SK09 → SB01-P1、SK10 → SB01-P2、SK11 → SB01-P3、SK12 → SB01-P4、SK18 → SB03-P1、SK19 → SB02-P7、SK20 → SB02-P8、SK21 → SB02-P6、SK22 → SB02-P3、SK23 → SB03-P4、SK27・28 →風倒木、P01 → SB03-P3、P02 → SB03-P2
12. 遺物観察表の法量単位はcm、重量単位はgである。法量値に付した（ ）は復元値、〈 〉は残存値を示す。
13. 出土遺物の修復にはセメダインC及び樹脂材のエポキシレジン6113を用いた。

本 文 目 次

第１章　調査に至る経緯……1

第２章　遺跡の位置と環境……2

第１節　地理的環境……2

第２節　歴史的環境……4

第３章　調査の方法と標準堆積土層……7

第１節　調査方法……7

第２節　標準堆積土層……8

第４章　検出された遺構と遺物……9

第１節　調査成果の概要……9

第２節　縄文時代……16

第１項　住居跡……17　第２項　土坑（貝層含む）……18

第３項　遺構外出土遺物……20

第３節　弥生時代……24

第１項　住居跡……25　第２項　遺構外出土遺物……26

第４節　古墳時代……28

第１項　住居跡……29　第２項　ピット……40

第３項　溝　跡……41　第４項　古　墳……45

第５項　遺構外出土遺物……66

第５節　平安時代……73

第１項　住居跡……74　第２項　掘立柱建物跡……90

第３項　土　坑……94　第４項　ピット……96

第５項　溝　跡……96　第６項　遺構外出土遺物……100

第６節　中・近世……101

第１項　方形竪穴遺構……102　第２項　掘立柱建物跡……103

第３項　柵・掘立柱塀跡……104　第４項　土　坑……105

第５項　ピット……106　第６項　溝　跡……107

第７項　サク状遺構（畑跡）……108　第８項　遺構外出土遺物……108

第７節　時期不明の遺構……109

第１項　土　坑……109

第５章　まとめ……111

第１節　下坂田塙台遺跡の変遷と歴史的位置……111

第２節　坂田塙台８号墳出土埴輪について……114

第３節　叩き手法を用いる「常総型甕」についての一考察……121

挿図目次

第1図　遺跡周辺図……2
第2図　周辺の遺跡……3
第3図　標準堆積土層……8
第4図　試掘確認調査出土遺物……10
第5図　調査区全体図……(折図1)
第6図　1区全体図……11
第7図　2区全体図……13
第8図　3区全体図……14
第9図　4区全体図……15
第10図　縄文時代遺構分布図……16
第11図　SI04……17
第12図　SI04出土遺物……18
第13図　SK02……19
第14図　SK02出土遺物……19
第15図　SK02貝類組成……20
第16図　遺構外出土遺物（縄文・土器）……22
第17図　遺構外出土遺物（縄文・土器・土製品）……23
第18図　遺構外出土遺物（縄文・石器）……23
第19図　弥生時代遺構分布図……24
第20図　SI01……25
第21図　SI01出土遺物……25
第22図　SI16出土遺物……26
第23図　遺構外出土遺物（弥生）……27
第24図　古墳時代遺構分布図……28
第25図　SI03……29
第26図　SI03出土遺物……30
第27図　SI05……31
第28図　SI05出土遺物……32
第29図　SI06……33
第30図　SI06カマド……34
第31図　SI06出土遺物……34
第32図　SI11……36
第33図　SI11出土遺物……36
第34図　SI14……37
第35図　SI14出土遺物……38
第36図　SI15……38
第37図　SI15出土遺物……39
第38図　SI18……39
第39図　P16……40
第40図　P16出土遺物……40
第41図　SD05……41
第42図　SD05出土遺物……41
第43図　SD06……42
第44図　SD06出土遺物……42
第45図　SD07・08……43
第46図　SD07出土遺物……43
第47図　SD14……44
第48図　SD14出土遺物……44
第49図　坂田塙台8号墳（SD01・02）……(折図2)
第50図　8号墳調査区小グリッド及び埴輪出土分布図……45
第51図　8号墳出土埴輪A類（1）……48
第52図　8号墳出土埴輪A類（2）……49
第53図　8号墳出土埴輪B類……51
第54図　8号墳出土埴輪C類……53
第55図　8号墳出土埴輪D類（1）……55
第56図　8号墳出土埴輪D類（2）……56
第57図　8号墳出土埴輪E類（1）……58
第58図　8号墳出土埴輪E類（2）・F類……59
第59図　8号墳出土埴輪G類……61
第60図　8号墳出土遺物……61
第61図　14号墳……62
第62図　14号墳出土遺物……63
第63図　15号墳……64
第64図　15号墳出土遺物……65
第65図　遺構外出土遺物（古墳1）……66
第66図　遺構外出土遺物（古墳2）……67
第67図　平安時代遺構分布図……73
第68図　SI02……74
第69図　SI02出土遺物（1）……75
第70図　SI02出土遺物（2）……76
第71図　SI07……77
第72図　SI07カマド……77
第73図　SI07出土遺物……78

第 74 図　SI08……79
第 75 図　SI08 出土遺物（1）……80
第 76 図　SI08 出土遺物（2）……81
第 77 図　SI09・SI13……83
第 78 図　SI09 カマド……83
第 79 図　SI09 出土遺物……84
第 80 図　SI10……85
第 81 図　SI10 カマド……86
第 82 図　SI10 出土遺物……86
第 83 図　SI12……87
第 84 図　SI12 カマド……88
第 85 図　SI12 出土遺物……88
第 86 図　SI13 出土遺物……88
第 87 図　SI17……89
第 88 図　SI17 出土遺物……89
第 89 図　SB01……90
第 90 図　SB01 出土遺物……90
第 91 図　SB02……91
第 92 図　SB03 出土遺物……92
第 93 図　SB03……93
第 94 図　SK03・04……94
第 95 図　SK08……94
第 96 図　SK13……94
第 97 図　SK14……95
第 98 図　SK14 出土遺物……95
第 99 図　ピット……96
第 100 図　SD08 出土遺物……97
第 101 図　SD11……98
第 102 図　SD11 出土遺物……99
第 103 図　遺構外出土遺物（平安）……100
第 104 図　中・近世遺構分布図……101
第 105 図　SI19……102
第 106 図　SI19 出土遺物……102
第 107 図　SB04……103
第 108 図　SA01・02……104
第 109 図　SK31……105
第 110 図　SK32……105
第 111 図　SK35・36……106
第 112 図　SK37 出土遺物……106
第 113 図　SK37……106
第 114 図　SD03・SD04・サク状遺構（南半部）……107
第 115 図　SD12……108
第 116 図　遺構外出土遺物（中・近世）……108
第 117 図　SK06……109
第 118 図　SK07……109
第 119 図　SK25……109
第 120 図　SK29……109
第 121 図　SK30……110
第 122 図　SK33……110
第 123 図　SK34……110
第 124 図　SK39……110
第 125 図　坂田塙台古墳群……112
第 126 図　坂田塙台 8 号墳 円筒埴輪
同工品各類型の器形……115
第 127 図　霞ヶ浦北西部のⅣ群系埴輪……117
第 128 図　「有文埴輪」の類例……119
第 129 図　下坂田塙台遺跡出土の
「常総型甕」と供伴遺物……123
第 130 図　叩き手法を用いる「常総型甕」（1）……125
第 131 図　叩き手法を用いる「常総型甕」（2）……126
第 132 図　叩き手法を用いる「常総型甕」（3）……127
第 133 図　叩き手法を用いる「常総型甕」（4）……128

表 目 次

第 1 表　周辺の遺跡……3
第 2 表　SK02 貝類組成……20
第 3 表　SI03 出土遺物観察表……30
第 4 表　SI05 出土遺物観察表（1）……32
第 5 表　SI05 出土遺物観察表（2）……33
第 6 表　SI06 出土遺物観察表……35
第 7 表　SI11 出土遺物観察表……36
第 8 表　SI14 出土遺物観察表……38
第 9 表　SI15 出土遺物観察表……39
第 10 表　P16 出土遺物……40
第 11 表　SD05 出土遺物観察表……42
第 12 表　SD06 出土遺物観察表……42
第 13 表　SD07 出土遺物観察表……44
第 14 表　SD14 出土遺物観察表……44
第 15 表　8 号墳出土遺物観察表……61
第 16 表　遺構外出土遺物観察表（古墳）……66
第 17 表　埴輪属性表（試掘確認調査）……68
第 18 表　埴輪属性表（SD05）……68
第 19 表　埴輪属性表（8 号墳）……68
第 20 表　埴輪属性表（8 号墳）……69
第 21 表　埴輪属性表（8 号墳）……70
第 22 表　埴輪属性表（8 号墳）……71
第 23 表　埴輪属性表（14 号墳）……71
第 24 表　埴輪属性表（15 号墳）……72
第 25 表　埴輪属性表（遺構外）……72
第 26 表　SI02 出土遺物観察表……76
第 27 表　SI07 出土遺物観察表（1）……77
第 28 表　SI07 出土遺物観察表（2）……78
第 29 表　SI08 出土遺物観察表（1）……82
第 30 表　SI08 出土遺物観察表（2）……83
第 31 表　SI09 出土遺物観察表……85
第 32 表　SI10 出土遺物観察表……87
第 33 表　SI12 出土遺物観察表……88
第 34 表　SI13 出土遺物観察表……89
第 35 表　SI17 出土遺物観察表……89
第 36 表　SB01 出土遺物……90
第 37 表　SB03 出土遺物観察表（1）……92
第 38 表　SB03 出土遺物観察表（2）……93
第 39 表　SK14 出土遺物観察表……95
第 40 表　SD08 出土遺物観察表……97
第 41 表　SD11 出土遺物観察表……99
第 42 表　遺構外出土遺物観察表（平安）……100
第 43 表　SI19 出土遺物観察表……102
第 44 表　遺構外出土遺物観察表……106
第 45 表　遺構外出土遺物（中・近世）……108
第 46 表　坂田塙台古墳群出土円筒埴輪の
類型別属性表……114
第 47 表　ピット計測表……132

図　版　目　次

図版 1
1　武者塚古墳から坂田塙台 8 号墳を望む
2　1 区調査前状況　南から
図版 2
1　2 区調査前状況　西から
2　4 区調査前状況　東から
図版 3
1　1 区北側全景　北から
2　1 区南側全景　南から
図版 4
1　2 区西側全景　西から
2　2 区東側全景　東から
図版 5
1　3 区北側全景　北から
2　3 区南側全景　南から
図版 6
1　4 区西側全景　西から
2　4 区東側全景　東から
図版 7
1　1 区標準堆積土層　東から
2　2 区標準堆積土層　南から
3　3 区標準堆積土層　東から
4　4 区標準堆積土層　南から
5　SI04　東から
6　SK02　北から
7　SK02　南から
図版 8
1　SI01　南から
2　SI16　東から
図版 9
1　SI03　西から
2　SI03 焼土・炭化物検出状況　南から
3　SI03 炉　南から
4　SI05 遺物出土状況　西から
5　SI05・SD07・08　南から
図版 10
1　SI05・SD08　東から
2　SI06（中央）・07（左）　南から
図版 11
1　SI06 遺物出土状況　南から
2　SI06 カマド　南から
3　SI07 遺物出土状況　南から
4　SI07 カマド　西から
5　SI11　西から
6　SI14　東から
7　SI14 遺物出土状況　東から
8　SI14 炉　南から
図版 12
1　SI15　西から
2　SI15 掘方　西から
3　SI18　北から
4　P16 遺物出土状況　東から
5　SD05　北から
6　SD06　東から
7　SD07　東から
8　SD14　西から
図版 13
1　8 号墳　北から
2　8 号墳 SD01　D セクション（西側）　北から
3　8 号墳 SD01　D セクション（東側）　北から
4　8 号墳 SD01 遺物出土状況　北から
5　8 号墳 SD02 西から
図版 14
1　14 号墳 SD13　北から
2　15 号墳 SD09（手前）・SD10（奥）　東から
図版 15
1　SI02　南から
2　SI02 遺物出土状況　西から
3　SI02 カマド　南から
4　SI08 遺物出土状況　南から
図版 16
1　SI08　東から
2　SI08 カマド　南から
3　SI09 遺物出土状況　南から
4　SI09 B セクション　東から
5　SI09（左）・13（右）　西から

図版 17

1　SI09 カマド　西から

2　SI10 カマド　南から

3　SI10　南から

4　SI12 カマド遺物出土状況　東から

5　SI12 カマド　南から

図版 18

1　SI12（手前）・SK05（奥）　東から

2　SI17　東から

図版 19

1　SB01　西から

2　SB01-P1 セクション　南から

3　SB01-P2 セクション　東から

4　SB01-P3 セクション　東から

5　SB01-P4 セクション　東から

図版 20

1　SB02　南から

2　SB02-P3 セクション　南から

3　SB02-P6 セクション　南から

4　SB02-P7 セクション　北から

5　SB02-P8 セクション　東から

図版 21

1　SB03　東から

2　SB03-P1 セクション　東から

3　SB03-P2 セクション　東から

4　SB03-P3 セクション　東から

5　SB03-P4 セクション　東から

図版 22

1　SB03-P5 セクション　南から

2　SB03-P6 セクション　東から

3　SK03（右）・04（左）　東から

4　SK05　北から

5　SK08　東から

6　SK13　南から

7　SK14　南から

8　SK15　南から

図版 23

1　SK16　北から

2　SK17　北から

3　SK26　北から

4　P03 セクション　南から

5　P04 セクション　南から

6　P05 セクション　南から

7　P06 セクション　東から

8　P07 セクション　東から

図版 24

1　P08 セクション　東から

2　P10 セクション　南から

3　P11 セクション　北から

4　P12 セクション　東から

5　P13 セクション　南から

6　P14 セクション　東から

7　P15 セクション　南から

8　P33 セクション　南から

図版 25

1　SD11　西から

2　SI19（中央）・SK34（右奥）・37（右手前）　北から

図版 26

1　SB04　北から

2　SA01（右）・02（左）　東から

図版 27

1　SK31　北から

2　SK32　北から

3　SK35（左）・36（右）　東から

4　SD03　南から

5　SD04　南から

6　SD12　南から

7　SK06　南から

8　SK07　東から

図版 28

1　SK24　南から

2　SK25　南から

3　SK29　西から

4　SK30　東から

5　SK33　北から

6　SK39　北から

7　8 号墳小グリッド設置状況　東から

8　8 号墳調査風景　東から

図版 29
試掘確認調査
SI04 出土遺物
SK02 出土遺物
遺構外出土遺物（縄文・土器）
図版 30
遺構外出土遺物（縄文・土器・土製品）
遺構外出土遺物（縄文・石器）
図版 31
SI01 出土遺物
SI16 出土遺物
遺構外出土遺物（弥生）
図版 32
SI03 出土遺物
SI05 出土遺物
図版 33
SI06 出土遺物
図版 34
SI11 出土遺物
SI14 出土遺物
SI15 出土遺物
P16 出土遺物
SD05 出土遺物
図版 35
SD06 出土遺物
SD07 出土遺物
SD14 出土遺物
8 号墳出土遺物・A 類
図版 36
8 号墳出土遺物・A 類
8 号墳出土遺物・B 類
8 号墳出土遺物・C 類
図版 37
8 号墳出土遺物・C 類
8 号墳出土遺物・D 類
図版 38
8 号墳出土遺物・D 類
8 号墳出土遺物・E 類
図版 39
8 号墳出土遺物・E 類
8 号墳出土遺物・F 類
8 号墳出土遺物・G 類
図版 40
8 号墳出土遺物
14 号墳出土遺物
15 号墳出土遺物
遺構外出土遺物（古墳）
図版 41
SI02 出土遺物
図版 42
SI07 出土遺物
SI08 出土遺物
図版 43
SI08 出土遺物
図版 44
SI09 出土遺物
SI10 出土遺物
図版 45
SI12 出土遺物
SI13 出土遺物
SI17 出土遺物
SB01 出土遺物
SB03 出土遺物
SK14 出土遺物
SD08 出土遺物
SD11 出土遺物
図版 46
遺構外出土遺物（平安）
SI19 出土遺物
SK37 出土遺物
遺構外出土遺物（中・近世）
図版 47
SK02 出土貝類
図版 48
SK31 出土人骨

第１章　調査に至る経緯

1995（平成７）年２月、新治村（当時）教育委員会教育長宛に茨城県土浦土地改良事務所から、下坂田・上坂田の台地上縁辺部にかけて県営畑地帯総合土地改良事業を計画しており、その予定地内の埋蔵文化財の有無について照会が提出された。新治村教育委員会が現地踏査を行ったところ、包蔵地・貝塚・古墳群の存在が確認されたため、試掘確認調査が必要である旨を回答した。

更に2002（平成14）年８月、茨城県土浦土地改良事務所から新治村教育委員会に対して埋蔵文化財の有無と遺跡が存在した場合の取扱についての照会が提出された。それを受けて新治村教育委員会は、同年11月に赤弥堂遺跡の北側に部分的に試掘確認調査を実施した。調査の結果、今回の調査対象範囲内では埋蔵文化財は確認されなかった。

2006（平成18）年２月に新治村が土浦市と合併すると、当事業は計画が具体化し、同年６月に土浦市教育委員会は全域の現地踏査を行った。2007（平成19）年２月には直近で工事予定区間となる赤弥堂遺跡の東側に、遺跡の範囲や密度、性格を把握するための確認調査を行った。翌2008（平成20）年３月には、赤弥堂遺跡の西側から事業区域西端の坂田峯の台古墳群にかけて、事業区域内全体に試掘確認調査を行った。

これら試掘確認調査の結果をもとに、土浦市教育委員会は茨城県土浦土地改良事務所・土浦市産業部耕地課と協議を継続し、道路建設対象箇所に対して記録保存のための発掘調査を行うことで合意した。2008（平成20）年３月25日、茨城県知事と土浦市長との間で坂田地区の埋蔵文化財取扱全般に関する覚書を締結し、同年７月茨城県知事と土浦市長で赤弥堂遺跡（東地区）の発掘調査に関する協定書を締結した。

以後、2008（平成20）年度に赤弥堂遺跡（東地区と中央地区）、2009（平成21）年度に赤弥堂遺跡（西地区）の発掘調査を実施した。2011（平成23）年度は、事業地のほぼ中央にあたる下坂田中台遺跡・下坂田貝塚・坂田台山古墳群と、事業地の東端にあたる下坂田塙台遺跡・坂田塙台古墳群の２地点の発掘調査を実施しており、当報告書は後者分に当たっている。

今回の調査に関する文化財保護法関連の手続は、2008（平成20）年６月17日付けで茨城県土浦土地改良事務所長（呼称は当時）より当事業全体に関する埋蔵文化財の発掘の通知（文化財保護法第94条）が土浦市教育委員会に提出され、６月27日付けで茨城県教育長宛に進達した。

発掘調査は有限会社勾玉工房Mogiが実施することとなり、埋蔵文化財発掘調査の届出（文化財保護法第92条）を、９月30日付けで茨城県教育委員会教育長宛に進達した。11月10日付けで茨城県教育長より埋蔵文化財発掘調査の通知を受けている。

なお、平成24年３月27日付けで発掘調査の終了確認依頼の進達を行い、同年３月30日付けで茨城県教育委員会教育長より終了確認の通知を受けた。

第２章　遺跡の位置と環境

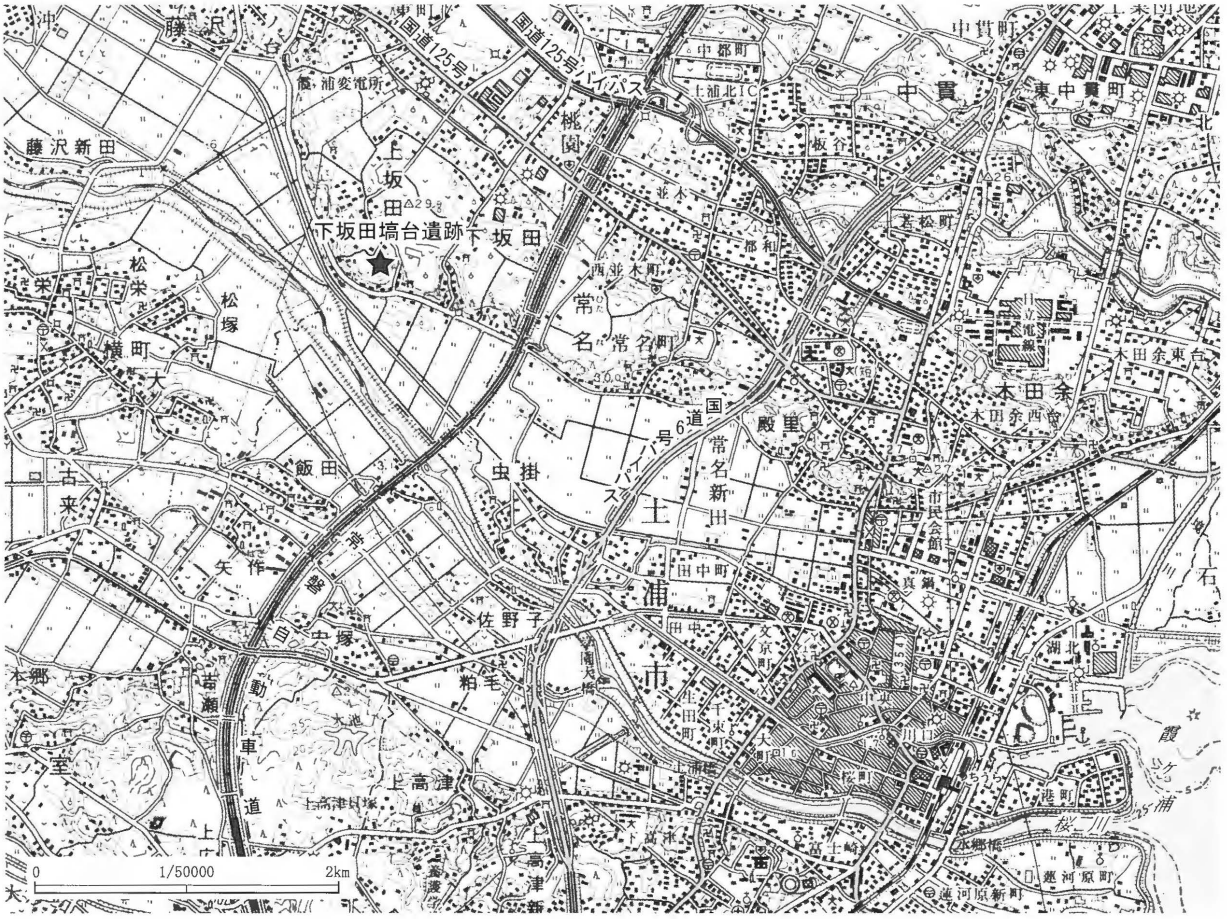
第１節　地理的環境

下坂田塙台遺跡・坂田塙台古墳群は茨城県土浦市下坂田1050番地ほかに所在する。土浦市は茨城県南地区のほぼ中央に位置している。市域北部から東部にかけては かすみがうら市、西部は つくば市、南部は牛久市及び稲敷郡阿見町と隣接している。遺跡周辺の坂田地区は、常磐自動車道の西側、国道125号の南側に立地し、一帯は花卉や梨といった園芸・果樹栽培が行われている。西と東に分かれ、本遺跡の中央（本調査の３区）に字境が通る。西が上坂田で、東が下坂田である。

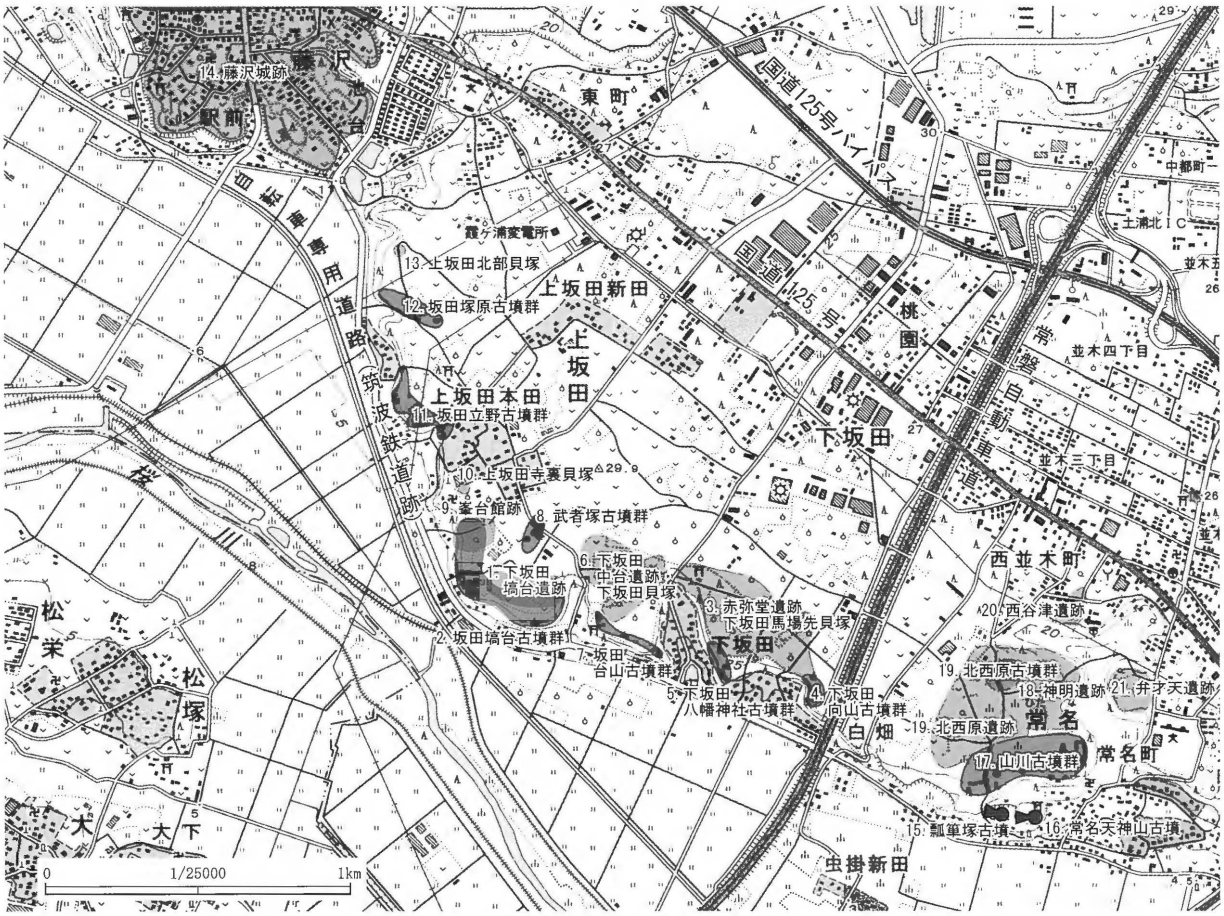
市域の地勢は、新治台地、桜川低地、土浦の入り、稲敷台地で形成されている。新治台地は北部にあり、筑波山塊から南東に伸びている。桜川低地は中央部を南東に流れる桜川の流域である。土浦の入りは東部にあり、霞ヶ浦西端に当る。稲敷台地は南部にある。

新治台地は成田層を基盤に、関東ローム層を載せている。成田層は、古東京湾が存在した13万年前から14万年前の第四紀リス・ウルム間氷期に高海水準下に形成されたものである。関東ローム層は、台地が隆起して陸化してから、富士・箱根などの火山灰が堆積したものである。新治台地の南側に存在するのが桜川低地で、２万年前まで古鬼怒川が流れ、台地を開析したものである。坂田地区は台地の縁辺となり、低地との境は比高20ｍに達する崖を形成している。

遺跡はこの桜川左岸の台地縁辺に占地し、周辺の標高は29～30ｍを測る。現存する古墳群は台地縁辺に沿って雑木林の中に分布し、下坂田塙台遺跡は古墳群の東（南）側と範囲を重複して広がっている。



第１図　遺跡周辺図



第２図　周辺の遺跡

第１表　周辺の遺跡

No.	遺跡名	時代							備考
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中世	近世	
1	下坂田塙台遺跡		○	○	○	○	○	○	H23 年度調査、本書
2	坂田塙台古墳群				○	○			H23 年度調査、本書
3	赤弥堂遺跡・下坂田馬場先貝塚		○		○	○	○	○	H20・22 年度調査、旧 下坂田鹿島前貝塚
4	下坂田向山古墳群				○				H20 年度調査、旧 石橋古墳
5	下坂田八幡神社古墳群				○				旧 釈迦久保古墳群
6	下坂田中台遺跡・下坂田貝塚	○	○		○		○		S17 年重圏文鏡（市指定有形文化財）出土、H2・23 年調査
7	坂田台山古墳群				○				H23 年度調査
8	武者塚古墳群				○				S58 年調査、市指定史跡・県指定有形文化財
9	峯台館跡						○		
10	上坂田寺裏貝塚		○						
11	坂田立野古墳群				○				
12	坂田塚原古墳群				○				
13	上坂田北部貝塚		○						S56 ～ 57 年調査
14	藤沢城跡						○		
15	瓢箪塚古墳				○				湮滅
16	常名天神山古墳				○				H2 年測量調査、市指定史跡
17	山川古墳群	○		○	○		○		H7・15 年調査
18	神明遺跡	○	○				○	○	H9・13 ～ 15 年調査
19	北西原遺跡・北西原古墳群				○				H5 ～ 7・14 年調査
20	西谷津遺跡				○	○			H14 年調査
21	弁才天遺跡				○	○			H8 年調査、湮滅

第2節　歴史的環境

遺跡の所在する坂田地区とその東隣である常名（ひたな）地区は、桜川左岸の新治台地縁辺に立地し、旧石器時代から中世に至る遺跡が確認されている。以下、時代順にその概要を列挙する。

旧石器時代　山川古墳群（17）第2次調査、神明遺跡（18）第4次調査が挙げられる。前者では、層位の異なる石器集中地点が3か所ある。最下層の石器集中地点からは、台形様石器や楔形石器が出土している。この集中地点の周囲からは、炭素C14年代測定により、約3万2千年前の構築と判明した炉跡が検出されている。

縄文時代　下坂田塙台遺跡（1）、赤弥堂遺跡・下坂田馬場先貝塚（3）、下坂田中台遺跡・下坂田貝塚（6）、上坂田寺裏貝塚（10）、上坂田北部貝塚（13）、神名遺跡が挙げられる。

下坂田塙台遺跡では、今回の調査で早期末葉～前期中葉の地点貝塚と中期の住居跡1軒が確認された。

赤弥堂遺跡（下坂田馬場先貝塚）は東・中央・西地区に分けて調査されている。住居跡に関しては、早期から後期にかけてのものが確認されている。早期は東地区において炉穴3基が検出され、条痕文系土器が出土している。前期は中央地区で住居跡2軒、東地区で5軒が検出されている関山式期の集落跡である。全ての住居跡において貝層が確認されている。中期は、阿玉台式期から加曽利E式期の集落跡である。西地区で住居跡13軒が検出されている。阿玉台式期6軒、加曽利E式期は13軒である。中央地区では14軒が検出され、阿玉台式期4軒、加曽利E式期7軒、その他1軒である。後期は、中央地区の三十稲場式期が1軒である。遺物では、西地区から検出された前期の琥珀大珠、中期の線刻画が施された台形土器と土偶が特筆される。

中台遺跡・下坂田貝塚は、地点貝塚が環状に巡っている。ヤマトシジミを主体とした貝層からは、後期・加曽利B式期の遺物が検出されている。塙台遺跡の調査と並行して平成23年度に発掘調査が行われている。

上坂田北部貝塚は前期・関山式期の住居跡が存在する。覆土中からハイガイの貝層が検出されている。神明遺跡は中期・加曽利E式期の集落跡が存在する。また、同時期の土坑からサルボウやハマグリを主体とする地点貝塚が検出されている。上坂田寺裏貝塚は前期関山式期の地点貝塚とされ、ハイガイを主体としている。

弥生時代　今回の下坂田塙台遺跡（1）の調査で、本遺跡に後期の住居跡2軒が検出されたが、周辺では集落跡の確認事例が極めて少ない。本事業の試掘確認調査で赤弥堂遺跡（3）においてわずかな弥生土器片が採集されたが、本調査では遺構は確認されていない。他に山川古墳群（17）の第3次調査で住居跡2軒が調査されているのみである。

古墳時代　古墳（群）及び集落跡が広範に分布する。坂田地区と常名地区の古墳は、北方の坂田塚原古墳群から東方の山川古墳群に至るまで、台地縁辺に切れ目なく分布している。

坂田地区においては、坂田塙台古墳群（2）、下坂田向山古墳群（4）、下坂田八幡神社古墳群（5）、坂田台山古墳群（7）、武者塚古墳群（8）、坂田立野古墳群（11）、坂田塚原古墳群（12）が存在する。

坂田塙台古墳群は、本調査における新規発見の2基を合わせて15基の古墳で構成される。2号墳は武具八幡古墳で、安政元年（1854年）に鉄製武具類が出土し、当時の代官あての発見届である古文書とともに地元・発見者宅に保管されている。11号墳は全長約30ｍの前方後円墳である。平成20年に筑波大学先史学・考古学研究室によって測量調査がされている。今回の調査においては、8号墳の周溝が検出され、墳丘径30ｍ、高さ約5ｍ、二重周溝を有する円墳であったことが判明し、出土した円筒埴輪から5世紀末葉の築造と推定された。新規発見の2基（14・15号墳）はいずれも6世紀代の円筒埴輪を有する円墳である。

本古墳群と谷津を挟んで東隣する台山古墳群は3基の古墳からなり、1号墳（塚山古墳）は昭和39年に國學院大學と県立土浦第二高等学校によって発掘調査が実施された。谷津を挟んでさらに東側の赤弥堂遺跡の調査では、墳丘が削平された円墳2基及び方形周溝墓1基が東地区から検出されている。前者は石橋古墳とともに下坂

田向山古墳群を構成するもので、埴輪は出土していない。方形周溝墓では古式土師器が出土している。塙台古墳群の北側、台地内部・奥には武者塚古墳群があり、2基の古墳が確認されている。武者塚1号墳は、昭和58年に筑波大学によって調査され、特異な形態の石室を持つ終末期古墳であることが判明した。出土品には銀製帯状金具や飾大刀、そして「みずら」がある。台地縁辺沿いの北側には坂田立野古墳群（4基）、坂田塚原古墳群（2基）が展開する。

常名地区には、瓢箪塚古墳（15）、常名天神山古墳（16）、山川古墳群（17）、北西原古墳群（19）が存在する。瓢箪塚古墳と天神山古墳は東西に並んで築造された大型の前方後円墳で、前者は現在消滅している。天神山古墳は全長90ｍの前方後円墳で、4世紀末から5世紀初めごろの古墳と想定されている。山川古墳群は前期から終末期に至る33基の古墳で構成され、このうち20基が前期の方墳である。北西原古墳群は、終末期の方墳4基で構成される。

集落跡は、下坂田塙台遺跡（1）、赤弥堂遺跡（3）、下坂田中台遺跡（6）、神明遺跡（18）、北西原遺跡（19）、西谷津遺跡（20）、弁才天遺跡（21）で確認されている。

今回の塙台遺跡の調査では、前期の住居跡6軒、溝跡3条、後期の住居跡1軒等が確認された。北西原遺跡及び周辺の神明遺跡では前期の集落跡の存在が周知となっている。赤弥堂遺跡で検出された住居跡は、中央地区で前期7軒、中期5軒、後期4軒。西地区は前期6軒、細別不明2軒。東地区は前期6軒が検出されている。

奈良・平安時代　下坂田塙台遺跡（1）、赤弥堂遺跡（3）、西谷津遺跡（20）、弁才天遺跡（21）が存在する。

今回の塙台遺跡の調査では、9世紀代の住居跡8軒、掘立柱建物跡3棟、溝跡2条等が確認され、溝跡は一連の区画溝になる可能性がある。赤弥堂遺跡の中央地区では住居跡7軒が検出されている。時期が特定できるのは、9世紀中葉から後葉にかけて構築された3軒、9世紀代が1軒である。西谷津遺跡は、8世紀前半から9世紀中葉に至る集落跡である。弁才天遺跡は、8世紀前半から9世紀後半までの竪穴住居跡60軒以上で構成される集落跡である。掘立柱建物跡がまとまって検出されている。

中・近世　中世の遺構が検出された遺跡には、坂田地区と常名地区で次の遺跡が挙げられる。坂田地区では、下坂田塙台遺跡（1）、赤弥堂遺跡（3）、下坂田中台遺跡（6）、峯台遺跡（9）、藤沢城跡（14）が存在する。今回の塙台遺跡の調査では、方形竪穴遺構1基等が確認された。赤弥堂遺跡からは中世の道路状遺構が検出されている。中台遺跡からは、試掘確認調査において溝跡・掘り込みが確認され、内耳土器などが出土している。峯台館跡は台地縁辺部を区切るように土塁が明瞭に巡り、その中に存在する坂田塙台11号墳も土塁の一部として利用されている。坂田地区の台地北西端と谷を挟んだ対岸には、旧新治村の中心市街地全体を覆うかたちで藤沢城跡が広がる。

常名地区では、山川古墳群（17）、神名遺跡（18）が存在する。山川古墳群の第2・3次調査や神明遺跡の第1・3・4次調査で、東西125ｍ、南北103ｍの溝で囲まれた方形館跡と考えられる遺構が確認されている。方形の区画溝内には掘立柱建物跡、柱穴群、井戸跡、竪穴状遺構などが検出され、遺物は少ないものの、鎌倉時代の土師質土器小皿や龍泉窯系青磁の画花文碗や常滑産陶器片、銭貨が出土している。

近世の遺構が検出された遺跡には、下坂田塙台遺跡（1）、赤弥堂遺跡（3）、神明遺跡（19）があり、溝跡や墓壙が検出されている。

【周辺の遺跡調査報告書（番号は第１表に対応）】

2　武者塚古墳調査団編　1986『武者塚古墳』武者塚古墳・同２号墳・武具八幡古墳の調査　新治村教育委員会
小野塚拓造　2010「茨城県土浦市所在坂田塙台 11 号墳の測量調査報告」『筑波大学　先史学・考古学研究』第 21 号　筑波大学人文社会科学研究科歴史・人類学専攻
3　有限会社勾玉工房 Mogi 編　2009・10・11『赤弥堂遺跡（東・中央・西地区）』―県営畑地帯総合整備事業（担い手支援型）坂田地区 埋蔵文化財発掘調査報告書―　土浦市教育委員会
4　有限会社勾玉工房 Mogi 編　2009『赤弥堂遺跡（東地区）』（前掲）
6　岩崎卓也　1986「遺跡の環境―出シ山出土の銅鏡」武者塚古墳調査団編『武者塚古墳』（前掲）
9　武者塚古墳調査団編　1986『武者塚古墳』（前掲）
13　前田　潮　1981「調査成果の概要―上坂田北部貝塚」増田精一編『筑波古代地域史の研究』昭和 54 ～ 56 年度文部省特定研究経費による調査研究概要　筑波大学
17　西谷津遺跡調査会編　2003『山川古墳群確認調査　西谷津遺跡　北西原遺跡（第６次調査）　神明遺跡（第４次調査）』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第７集　土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会編　2004『北西原遺跡（第３次・第４次調査）　山川古墳群（第１次調査）』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第３集　土浦市教育委員会
山川古墳群第二次調査会編　2004『山川古墳群（第２次調査）』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第８集　土浦市教育委員会
山川古墳群第三次調査会編　2004『山川古墳群（第３次調査）』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 10 集　土浦市教育委員会
18　土浦市遺跡調査会編　1998『神明遺跡（第１次・第２次調査）』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第５集　土浦市教育委員会
常名台遺跡調査会編　2002『常名台遺跡群確認調査　神明遺跡（第３次調査）』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第６集　土浦市教育委員会
西谷津遺跡調査会編　2003『山川古墳群確認調査　西谷津遺跡　北西原遺跡（第６次調査）　神明遺跡（第４次調査）』（前掲）
神明遺跡第五次調査会編　2005『神明遺跡（第５次調査）』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第９集　土浦市教育委員会
19　西谷津遺跡調査会編　2003『山川古墳群確認調査　西谷津遺跡　北西原遺跡（第６次調査）　神明遺跡（第４次調査）』（前掲）
土浦市遺跡調査会編　2004『北西原遺跡（第１次調査）』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第１集　土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会編　2004『北西原遺跡（第３次・第４次調査）　山川古墳群（第１次調査）』（前掲）
土浦市遺跡調査会編　2006『弁才天遺跡　北西原遺跡（第５次調査）』土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第４集　土浦市教育委員会
20　西谷津遺跡調査会編　2003『山川古墳群確認調査　西谷津遺跡　北西原遺跡（第６次調査）　神明遺跡（第４次調査）』（前掲）
21　土浦市遺跡調査会編　2006『弁才天遺跡　北西原遺跡（第５次調査）』（前掲）
・新治村史編纂委員会編　1986『図説　新治村史』　新治村教育委員会
・前田　潮編　1991『「古霞ヶ浦湾」沿岸貝塚の研究』昭和 63 年度～平成２年度文部省特定研究経費による調査研究概要　筑波大学
・茨城県教育庁文化課編　2001『茨城県遺跡地図』地図編・地名表編　茨城県教育委員会
・塩谷　修　2010「土浦市域の古墳群」佐々木憲一・田中 裕編『常陸の古墳群』　六一書房

第３章　調査の方法と標準堆積土層

第１節　調査方法

試掘確認調査により、縄文時代から平安時代に至る遺構の存在が確認されていた。本調査の結果、周知となっている坂田塙台８号墳の周溝が３・４区端部をまたいだところにあること、また２区には、周知されていない古墳の周溝が遺存していることが判明し、同14・15号墳とした。

調査範囲は、幅員４～６ｍで延びて、３つのクランクを持ち、全体としてＷ字状をなしている。作業効率のため調査区を、北東より１～４区に分割することになった。各区の全長は、１区は南北65ｍ、２区は東西145ｍ、３区は南北40ｍ、４区は東西60ｍを測った。

各区の表土上面から遺構確認面に至る深度は、30から150cmを測り、最も深い３区は安全のため階段掘りにした。表土の掘削は重機を使用し、遺構確認及び覆土掘り下げは人力で行った。遺構覆土掘り下げの際、各遺構には、堆積状況の観察用ベルトを設けて行った。

各グリッド杭は、４分割した調査区の中央に、それぞれ任意で10ｍ間隔の直線状に打設し、光波による世界測地系方眼網にはめ込んだ。調査区ごとのグリッドの呼称は、長軸方向をアラビア数字、短軸方向をアルファベットで付し、例えば「A－1G,A-2G」となるように表記した。各地区のグリッド杭の基点は北もしくは西とした。１・３区は調査区北端を、２・４区は西端を、任意グリッド方眼網の各基点とした。また、遺物量が多い４区の８号墳周溝（SD01・02）調査に当たっては、上記範囲に被る10ｍ方眼網を小グリッド２ｍ方眼網で細分して覆うことにした。これに関しては、10ｍグリッドと異なり南西側を基点にしている。

写真は遺構調査の各段階で適宜撮影することにした。35㎜モノクロネガ及びカラーポジフィルムカメラを用い、補助として600万画素のデジタルカメラを併用した。

実測は主に平板により遺構図を作成し、縮尺は1/10、1/20、1/40、1/60、1/100とした。

調査の経過（日誌抄）

平成23年

12月13日　器材及びテント・トイレの搬入を行うとともに、重機を用いて表土排土を開始する。作業は当初4・3・2・1区の順に行う予定で4・3区の順で行っていた。ところが14日の３区表土排土終了時点で、１・２区に隣接する梨園業者の受粉作業の関係により、工事着工順が１区から優先して行うことになった。冬季につき霜害が予想されるため、遺構確認終了箇所から調査範囲全面をシートで養生した。

14日　１区表土排土に着手するとともに、４区から表土排土終了箇所を追って、人力による遺構確認作業を開始する。

19日　３区・１区の順に基準杭打設を行う。

22日　２区西端を除いた調査区全域の表土排土を、26日までに同範囲の遺構確認を終了する。

26日　３区の遺構掘り下げ作業を開始する。３区は、現状で広範囲な攪乱を受けている。調査区壁際における土層堆積状況と出土遺物の内容から、近世以降の遺構しか存在しないことが判明する。

27日　土浦市教育委員会比毛氏立会いのもと３区の終了確認を行い、同区の調査が終了する。年末・年始の休工につき、危険箇所・シート養生箇所点検など環境整備作業を行って仕事納めとする。

平成24年

１月５日　仕事始めとなり、遺跡調査を再開し、縄文時代から平安時代に至る集落域となっている１区北端から遺構の掘り下げを行う。

19日　１区調査を終了し２区調査を開始する。２区は、古墳時代の古墳と集落、平安時代の集落を主体としているところで、土量が多い平安時代のSD11から遺構掘り下げに着手した。

２月４日　２区西端部の表土排土及び遺構確認を行う。住居跡など、古墳時代、平安時代、中・近世の集落に伴うと考えられる遺構群が確認される。

10日　土浦市教育委員会黒澤氏立会いのもと２区の終了確認を行い、同区の調査が終了する。４区の調査を開始する。同区は坂田塙台８号墳々丘に隣接し、調査範囲に周溝がかかっている。また、同区は古墳時代住居跡、及び中・近世土坑墓が存在している。調査は土量が多い８号墳周溝から着手した。

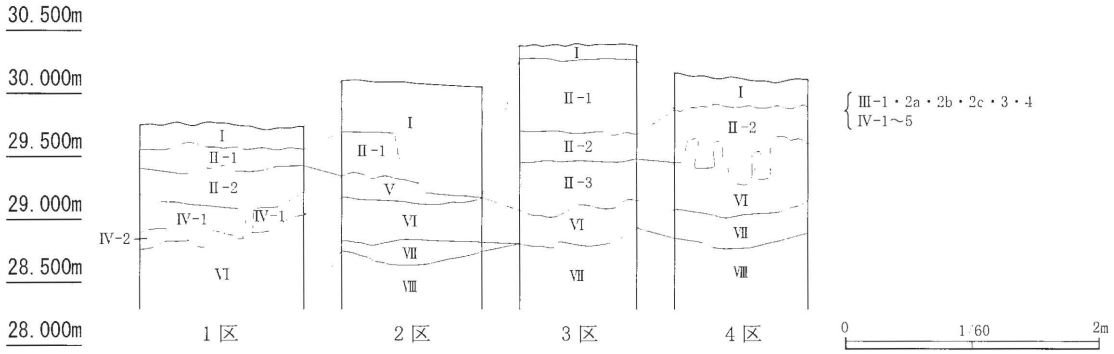
28日　土浦市教育委員会黒澤氏立会いのもと４区の終了確認を行い、現地における全ての調査工程を終了する。以降は、施設と器材の撤収準備・各種の記録整備・書類作成からなる残務が作業の主体となる。

３月２日　テント及びトイレ、器材撤収を行う。

第２節　標準堆積土層

調査区の標準堆積土層は、４地区全てにおいて観測した。下図に示すとおり、表土（現耕作土）層（第Ⅰ層）の下に旧耕作土層（第Ⅱ層）となり、この下に近世（第Ⅲ層）及び古墳～平安時代（第Ⅳ層）の包含層が確認される。さらに、ローム漸移層（第Ⅴ層）、ソフトローム層（第Ⅵ層）と続き、ハードローム層は主に色調の違いから第Ⅶ層と第Ⅷ層に分けられた。

第Ⅲ層と第Ⅳ層は地区によって存否が異なり、第Ⅲ層は３区にのみ確認され、近世以降の道跡や耕作跡の覆土となる。第Ⅳ層は平安時代の遺構が掘り込まれ、主に１区で確認された。２・４区では耕作による削平・撹乱が著しく、第Ⅱ層直下に第Ⅴ層及び第Ⅵ層が現れ、その上部にも掘削が及んでいた。そのため、遺構確認は第Ⅴ層または第Ⅵ層上面で行った。



Ⅰ	極暗褐色土	7.5YR2 3	粘性中	しまり弱	Ⅵブロック・粒子φ２㎜少量
Ⅱ-1	黒褐色土	7.5YR3 1	粘性中	しまり弱	Ⅵブロック・粒子φ２㎜少量、炭化物・粒子φ２㎜少量
Ⅱ-2	黒色土	7.5YR2 1	粘性中	しまり弱	Ⅵブロック・粒子φ２㎜小量、炭化物・粒子φ2-10㎜少量
Ⅲ-1	黒色土	7.5YR2 1	粘性中	しまり強	Ⅵブロック・粒子φ２㎜少量
Ⅲ-2a	褐色土	7.5YR4 3	粘性中	しまり強	黒色土ブロック・粒子φ２㎜少量
Ⅲ-2b	黒色土	7.5YR2 1	粘性中	しまり強	
Ⅲ-2c	黒色土	7.5YR2 1	粘性中	しまり強	Ⅵブロック・粒子φ2-5㎜中量、炭化物・粒子φ２㎜少量、酸化鉄粒子少量
Ⅲ-3	黒褐色土	7.5YR3 1	粘性中	しまり中	礫φ２㎜少量
Ⅲ-4	黒色土	7.5YR2 1	粘性中	しまり中	Ⅵブロック・粒子φ2-5㎜少量
Ⅳ-1	黒色土	7.5YR2 1	粘性中	しまり中	Ⅵブロック・粒子φ２㎜少量、礫φ２㎜少量、炭化物・粒子φ２㎜少量
Ⅳ-2	黒色土	7.5YR2 1	粘性中	しまり中	Ⅵブロック・粒子φ2-20㎜中量、炭化物・粒子φ２㎜少量
Ⅳ-3	黒色土	7.5YR2 1	粘性中	しまり中	Ⅵブロック・粒子φ2-20㎜中量、炭化物・粒子φ２㎜少量、酸化鉄ブロック・粒子φ2-10㎜少量
Ⅳ-4	黒色土	7.5YR2 1	粘性中	しまり中	Ⅵブロック・粒子φ2-20㎜中量、Ⅵブロック・粒子φ２㎜少量、礫φ２㎜少量
Ⅳ-5	黒色土	7.5YR2 1	粘性中	しまり中	Ⅵブロック・粒子φ2-20㎜中量、Ⅵブロック・粒子φ２㎜少量、礫φ２㎜少量
Ⅴ	黒褐色土	7.5YR3 1	粘性中	しまり中	Ⅵブロック・粒子φ2-20㎜多量
Ⅵ	明褐色土	7.5YR5 6	粘性中	しまり強	Ⅵブロック・粒子φ2-20㎜中量
Ⅶ	褐色土	7.5YR4 3	粘性中	しまり強	Ⅶブロック・粒子φ2-20㎜中量、礫φ２㎜少量
Ⅷ	明褐色土	7.5YR5 6	粘性中	しまり強	礫φ２㎜少量

第３図　標準堆積土層

第4章　検出された遺構と遺物

第1節　調査成果の概要

今回の発掘調査では、縄文時代から近世に至る遺構と遺物が検出されている。遺構種別で見ると、住居跡18軒、方形竪穴遺構1基、掘立柱建物跡4棟、柵・掘立柱塀跡2基、土坑25基、ピット40基、溝9条、古墳3基、サク状遺構（畑跡）1か所が検出されている（注1）。

遺　構　縄文時代の遺構は住居跡1軒、土坑1基がある。調査区北東部・1区の中期のSI04、及び早期末葉～前期中葉の地点貝塚・SK02である。

弥生時代の遺構は住居跡2軒である。いずれも後期で、1区のSI04と2区のSI16である。

古墳時代の遺構は前期（～中期）と後期に分けられる。前期（～中期）では住居跡6軒（1区SI03・05、2区SI11・14・15、4区SI18）、ピット1基（2区P16）、溝跡3条（1区SD06・07、2区SD14）があり、後期では住居跡1軒（1区SI06）及び古墳3基（2区14・15号墳、4区8号墳）があり、時期が明瞭ではないが、溝跡・1区SD05が検出された。前期の溝跡は古墳周溝の可能性も窺われるが、限られた調査範囲内では断定する根拠も得られず、今回は古墳として扱うことを避けた。後期の古墳のうち、（坂田塙台）8号墳は周知のもので、14・15号墳が新規に発見された古墳である。

平安時代の遺構は住居跡8軒（1区SI02・07、2区SI08～10・12・13・17）、掘立柱建物跡3棟（2区SB01～03）、土坑10基（1区SK03・04、2区SK05・08・13～17・26）、ピット15基（2区P03～15、4区33・38）、溝2条（1区SD08、2区SD11）である。ピットは、遺物を出土しないものもあるが、覆土の状態から当該期の遺構と判断した。住居跡は9世紀前半と後半のものがあり、掘立柱建物跡のうちSB02は住居跡に切られていることから、住居に先行するものと並行するものがあると考えられる。2区中央を斜行するSD11の東の延長上には1区SD08がある。ともに2段に掘り込まれ、一連の遺構の可能性がある。SI02・17は溝の北側にあるが、他の住居跡・建物跡は南側で検出されており、これらの遺構群を台地南端の崖線とともに囲む区画溝と推察される。

中・近世の遺構は、2区東端から3区を挟んで4区に至る範囲にまとまっている。方形竪穴遺構1基（4区SI19）、掘立柱建物跡1棟（2区SB04）、柵・掘立柱塀跡2基（2区SA01・02）、土坑（4区SK31・32・35～37）、ピット23基（P1・2・17～32・34～37・39）、溝跡3条（3区SD03・04、2区SD12）、サク状遺構1か所（畑跡、3区）がある。これらのうち、中世のものはSI19・SK32・SK37、近世のものはSK31であり、他は時期が限定できない。土坑については、SK31・32は人骨の検出から墓壙であり、4区を中心として付近にある比較的類似した形態をとる土坑群は土坑墓の可能性がある。また、近隣住民の話では、8号墳南の台地崖下には（中世）五輪塔の部材が複数転落しているとのことであり、4区周辺が当時の墓域であった可能性が考えられる。一方、3区の位置は調査着手前まで使用されていた道路であり、地表から1m下にも硬化面が確認された。さらに下層には近世のサク状遺構（畑跡）と溝跡2条（SD03・04）が検出された。

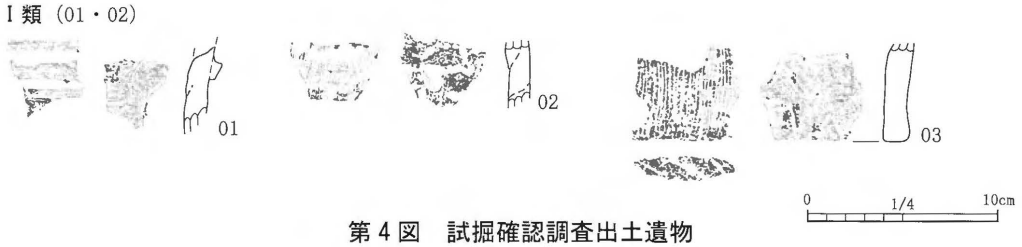
遺　物　出土遺物の総量は、遺物整理箱（37リットル相当）35箱、重量176,437.3gを量り、縄文土器13,222.1g、弥生土器3,884.2g、土師器65,688.5g、須恵器33,211.8g、灰釉陶器227.8g、埴輪34,245.2g、近世陶器438.1g、磁器15.0g、近世瓦370.2g、石器327.6g、鉄滓92.1g等がある。検出遺構の主体をなす、古墳・平安時代の住居・建物跡に伴う土師器と須恵器、周溝が確認された坂田塙台8号墳に伴う埴輪が、全体の75%を占めている。

これらのうち、調査区一括及び表面採集のおもな遺物を種別・地区別に見ると、縄文土器：1区823.3g、2区595.9g、3区51.7g、4区352.7g、弥生土器:1区65.8g、2区152.5g、4区81.5g、土師器:1区592.3g、2区2,674.1g、3区71.0g、4区1,620.0g、須恵器：1区51.0g、2区1,974.6g、3区80.3g、4区969.0gとなる。3区は近世以

降の地形改変が大きいことから、検出遺物も極少量にとどまっている。縄文土器は調査区全体に分布し、東側、特に1区が多い。また、弥生土器は2区に多い。ともに遺構の分布と同調している。土師器は古墳時代各期と平安時代の細別が十分ではない。須恵器はほぼ平安時代のもので、やはり、遺構密度の高い2区に集中している。一方で、1区は極少量で、周辺での遺構分布の薄さを反映しているようであり、前述のSD08・11を区画溝とし、南側が区画内との想定を支持する状況とも考えられる。また、4区では明確な遺構を把握できなかったが、一定量の須恵器の出土から、周辺における遺構の存在が推定される。

試掘確認調査の遺物　試掘確認調査では、縄文土器372.9g、弥生土器30.7g、土師器1,006.8g、須恵器180.0g、埴輪2,175.2g、陶器19.0g、礫571.6gが採取された。縄文土器は調査対象範囲全域にわたって見られ、早期条痕文系・前期羽状縄文系・後期安行式などがある。弥生土器は縄文施文の後期のもので、15・17・28トレンチで出土している。土師器は若干の古式土師器を含むものの、ほとんどが平安時代のもので、須恵器も同時期のものである。調査対象範囲全域にわたるが、8割が22～28トレンチから出土したもので占められている。埴輪は、本調査によって明らかとなった、8号墳（17トレンチ）と14号墳（23トレンチSD-1）に該当する箇所から出土しているほか、11・13・28トレンチからも検出されている。特に、28トレンチでは228.1gとまとまった出土量があり、古墳の存在が推察される。陶器は1トレンチの常滑産焼締陶器の小片1点である。

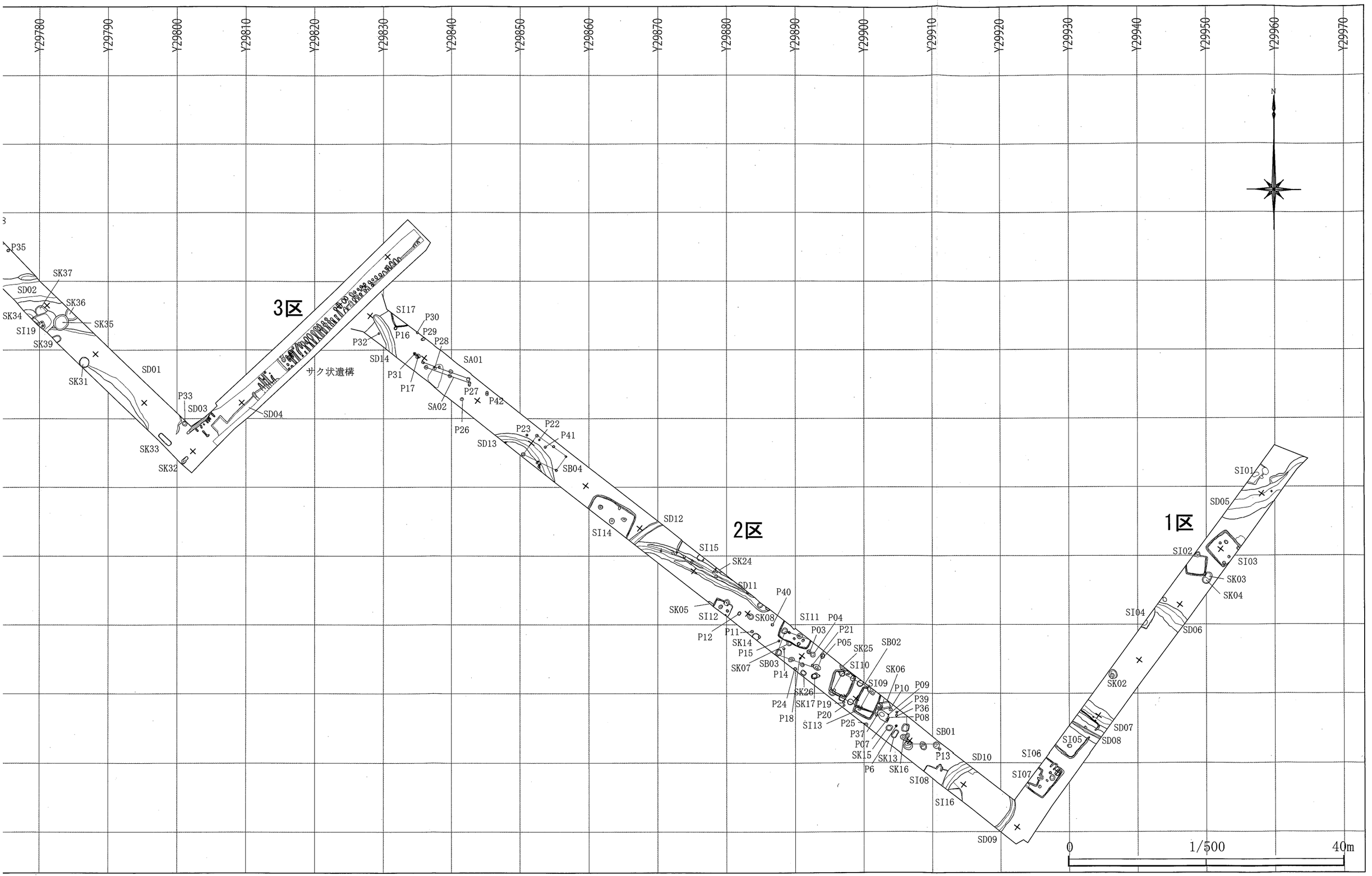
これらの遺物は、本調査で検出されたものと同様であるので、以下には、本調査の区域外となった28トレンチの埴輪から3点を図示した（第4図・第17表）。1と2は同一のハケメを施すもので、2区所在の14号墳の同工品Ⅰ類とも一致する。粘土紐の積み上げ間隔が1～1.5cmと狭い。突帯は上稜が高く、下面のナデ付けが甘い。3は両者と異なるハケメを持ち、底面には繊維状圧痕を残す。やや軟質の焼成を示している。28トレンチでは溝状遺構が確認されているので、これらの埴輪を伴う古墳の周溝である可能性がある。



第4図　試掘確認調査出土遺物

【注】

1　調査した土坑のうち、1区SK01はSI04の覆土と判断。2区SK09～12はSB01、同SK18・23はSB03、同SK19～22はSB02の柱穴に振り替えた（凡例参照）。2区SK27・28は風倒木と判断。4区SK38は同SK37の覆土上層にあり、別遺構と判断したが、平面プランが確認できなかった。以上、14遺構は欠番となっている。



第5図　調査区全体図　(折図1)

Y29760 Y29770 Y29780 Y29790 Y29800 Y29810 Y29820 Y29830 Y29840 Y29850 Y29860 Y29870 Y29880 Y29890 Y29900 Y29910 Y29920 Y29930 Y29940 Y29950

X12170 X12160 X12150 X12140 X12130 X12120 X12110 X12100 X12090 X12080 X12070 X12060

4区 3区 2区 1区

15Tr SK29 SI18 SK30 P35 P34 P36 SD02 SK37 SK36 SK34 SK35 SI19 SK39 SK31 SD01 SK33 SK32

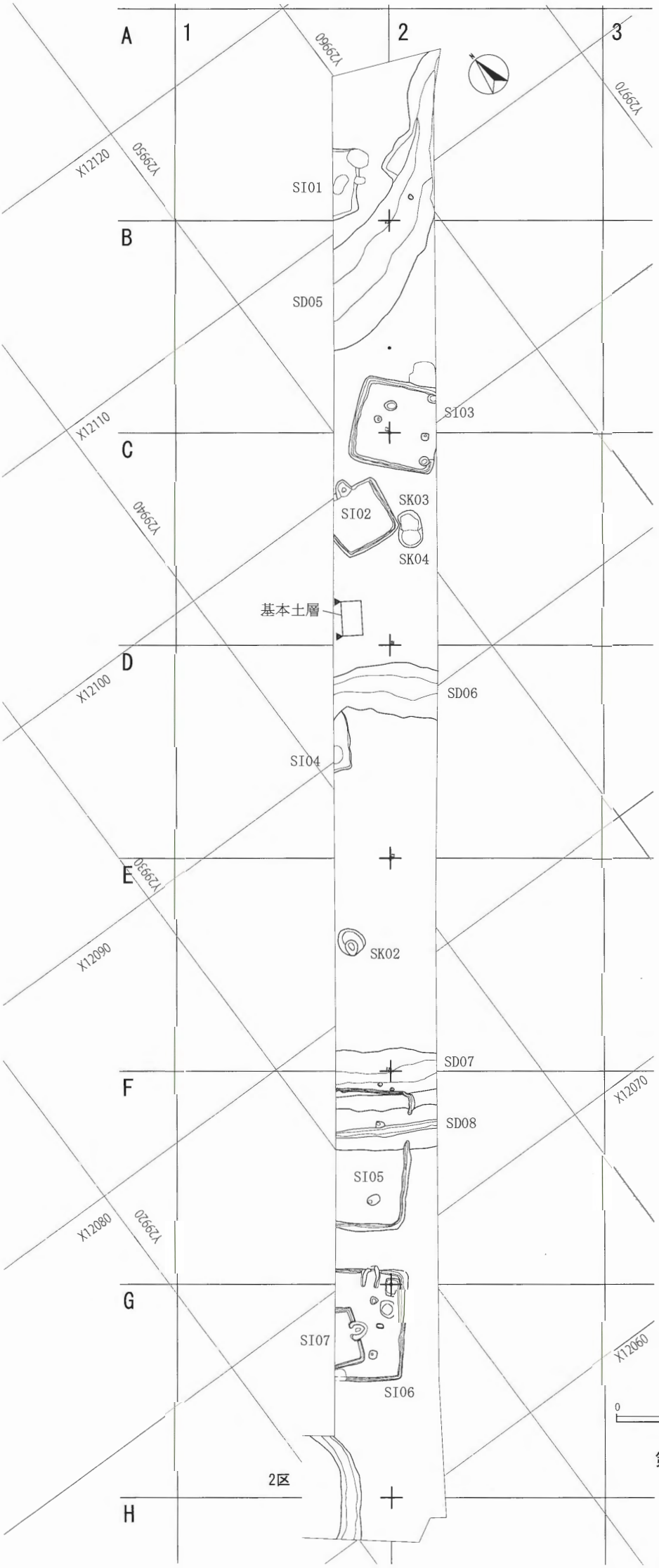
P33 SD03 SD04 サク状遺構

SI17 P30 P16 P29 P28 P32 SD14 SA01 P31 P17 P27 P42 SA02 P26 P23 P22 P41 SD13 SB04

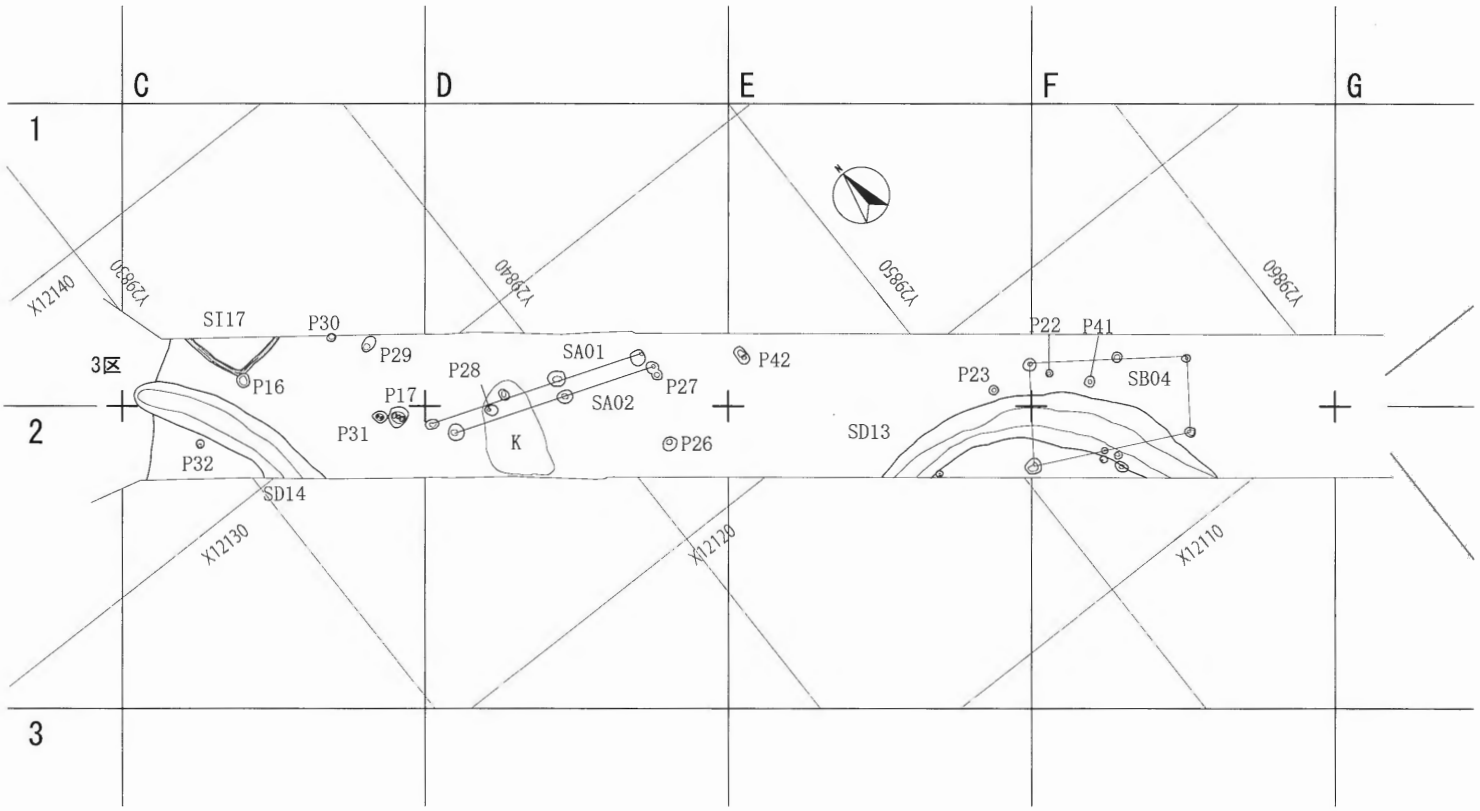
SD12 SI14 SI15 SK24 SD11 P40 SK05 SI12 SK08 SI11 P04 P12 P11 P03 P21 SK14 P05 SK25 SB02 P15 SK07 SB03 P14 SI10 SK06 SK26 SI09 P10 P09 P24 SK17 P19 P39 P36 P18 P20 SI13 P25 P08 P37 SB01 P07 SK15 SK13 P13 SD10 P6 SK16 SI08 SI16 SD09

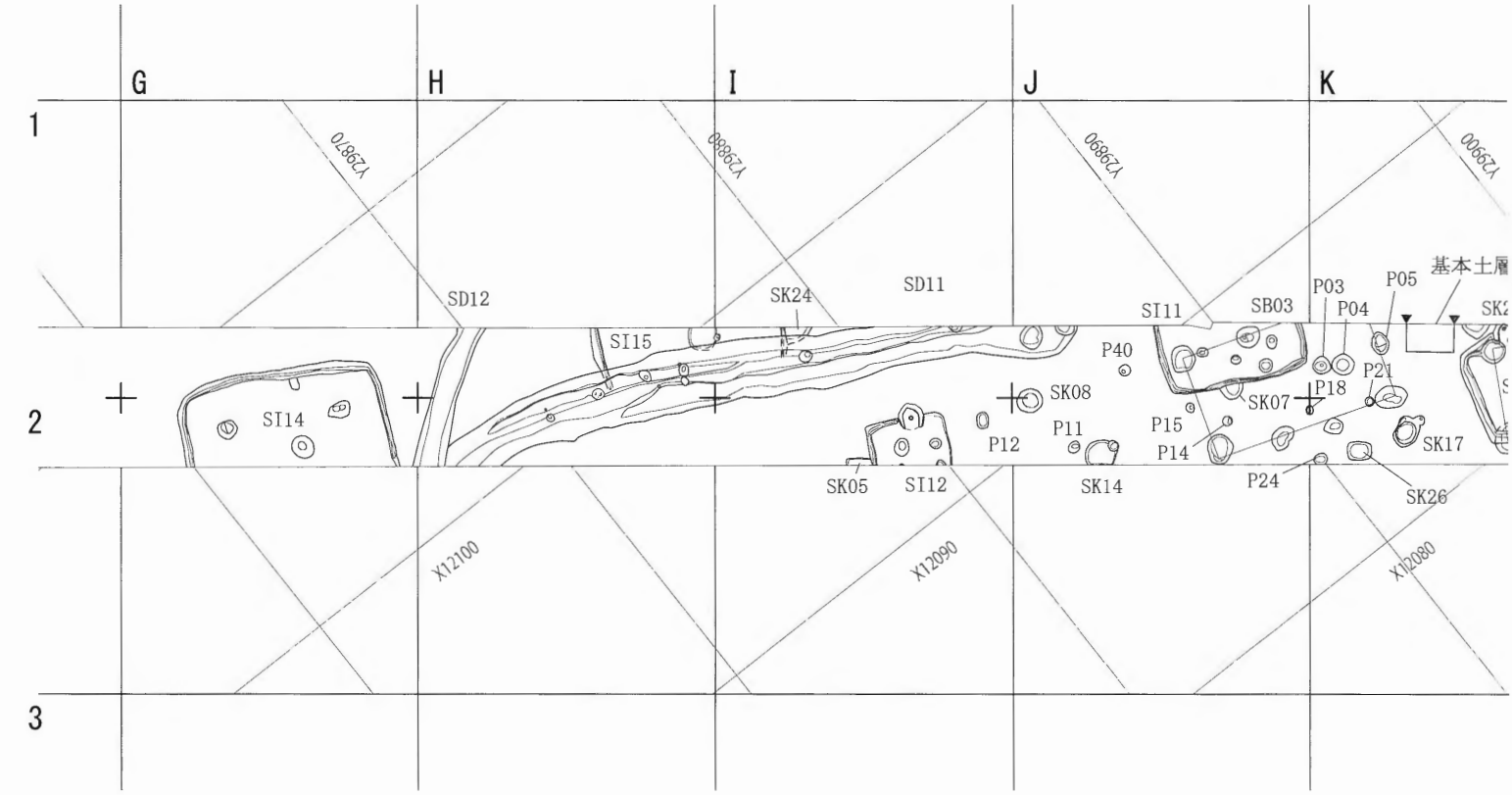
SD05 SI02 SK0 SK0 SI04 SD06 SK02 SD07 SD08 SI05 SI06 SI07

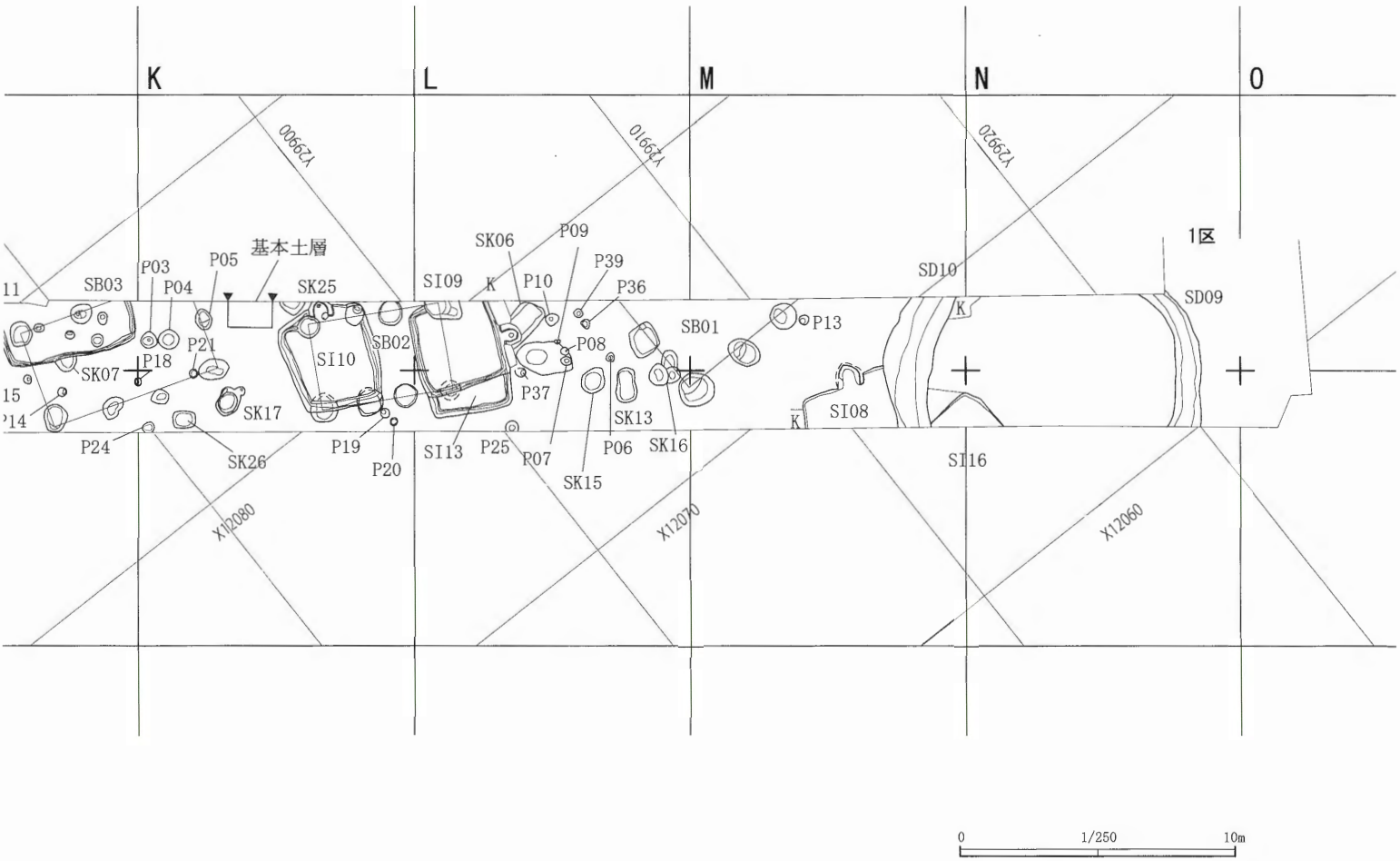
0 1/500


A
1
2
3
B
C
D
E
F
G
H
Y29960
Y29970
X12120
Y29950
SI01
SD05
SI03
X12110
SK03
SI02
SK04
Y29940
基本土層
X12100
SD06
SI04
Y29930
X12090
SK02
SD07
X12070
SD08
SI05
X12080
Y29920
SI07
SI06
X12060
2区
0
1/250
10m

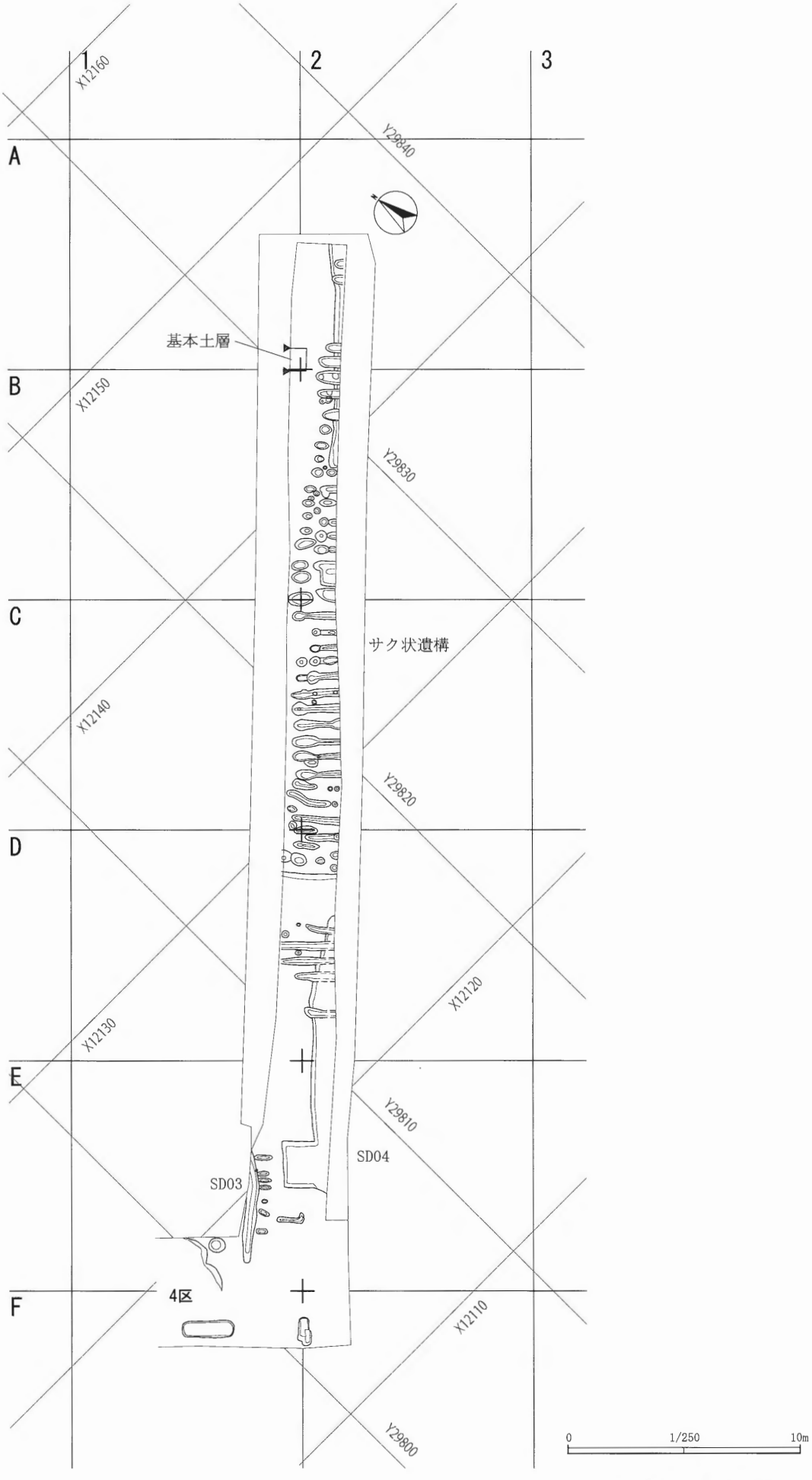
第６図　１区全体図


C
D
E
F
G
1
2
3
3区
X12140
Y29850
Y29840
Y29850
Y29860
SI17
P30
P29
P16
P17
P28
SA01
SA02
P27
P42
P22
P41
P23
SB04
P31
K
P26
SD13
P32
SD14
X12130
X12120
X12110

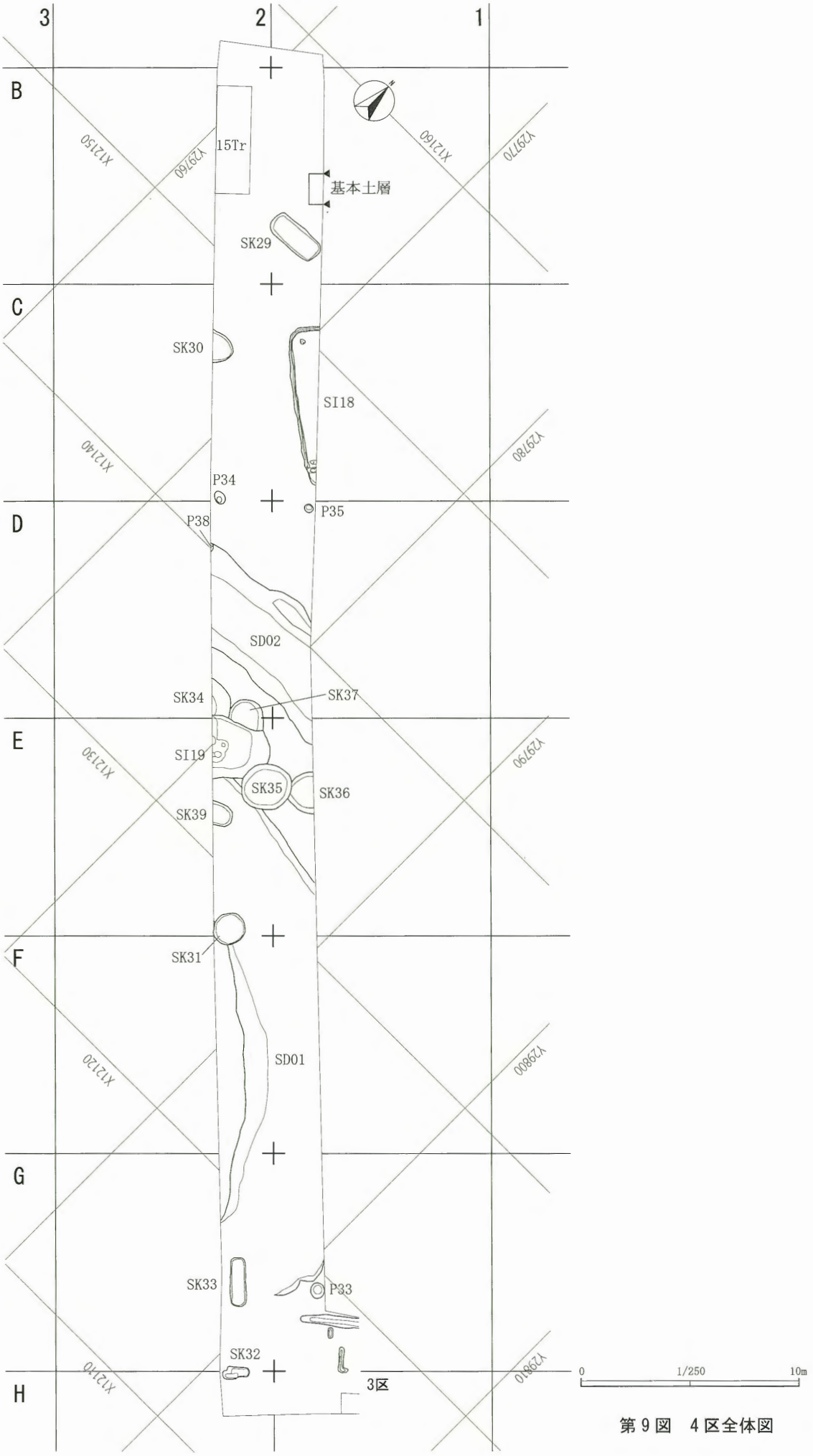

G
H
I
J
K
1
2
3
Y29870
Y29860
Y29890
Y29900
SD12
SK24
SD11
SI11
SB03
P03
P04
P05
基本土層
SI15
P40
SK08
SK07
P18
P21
SI14
P12
P11
P15
P14
SK17
SK05
SI12
SK14
P24
SK26
X12100
X12090
X12080


K
L
M
N
O
Y29900
Y29910
Y29920
1区
基本土層
SB03
P03
P04
P05
SK25
SI09
SK06
P09
P10
P39
P36
SD10
SD09
SB01
P13
P21
P18
SK07
SI10
SB02
P08
P37
SK13
SI08
SK17
P24
SK26
P19
P20
SI13
P25
P07
P06
SK16
SK15
SI16
X12080
X12070
X12060
0
1/250
10m

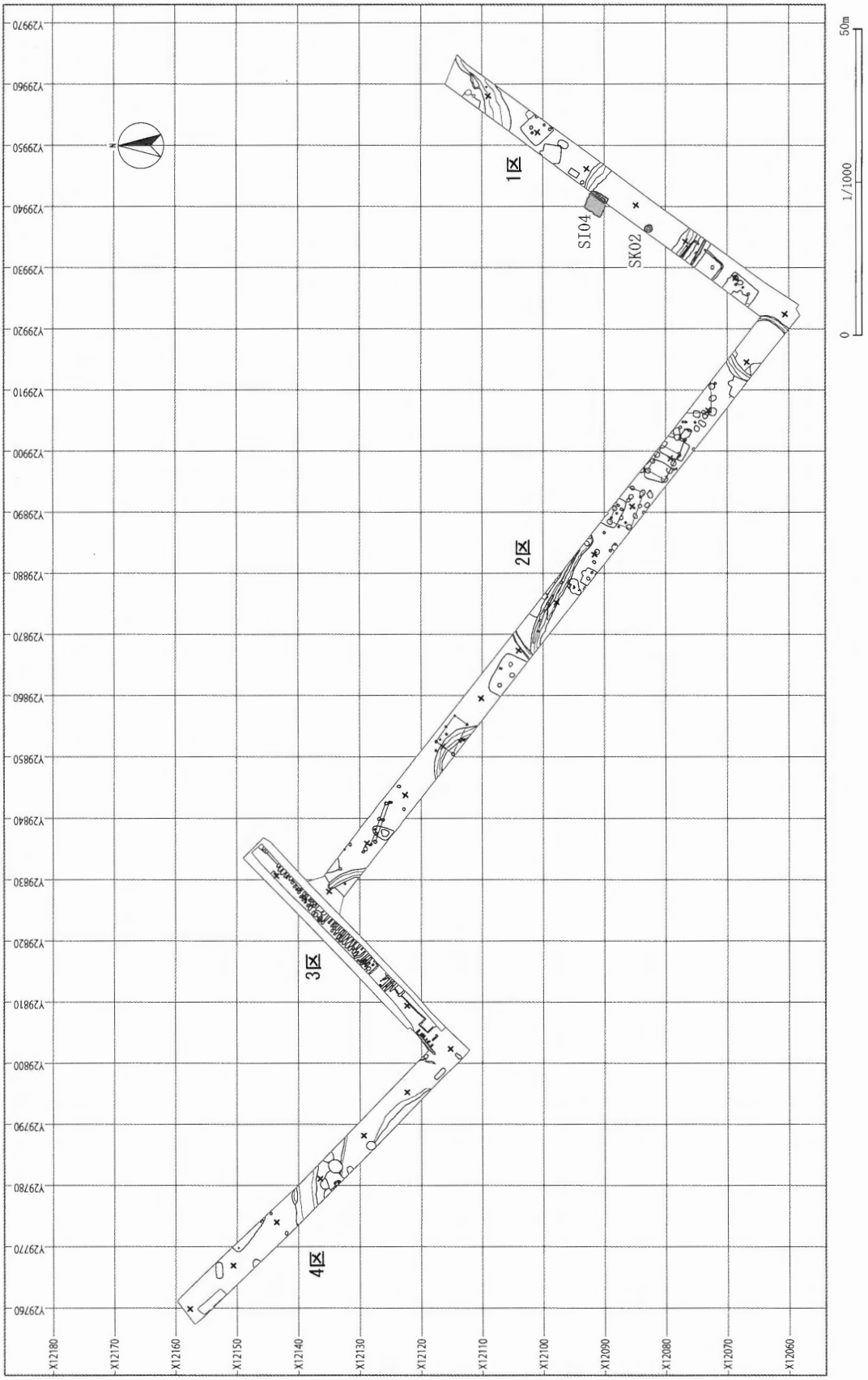
第７図　２区全体図


1
2
3
A
B
C
D
E
F
X12160
X12150
X12140
X12130
X12120
X12110
Y29840
Y29830
Y29820
Y29810
Y29800
基本土層
サク状遺構
SD03
SD04
4区
0
1/250
10m

第8図　3区全体図


3
2
1
B
C
D
E
F
G
H
15Tr
基本土層
SK29
SK30
SI18
P34
P35
P38
SD02
SK34
SK37
SI19
SK35
SK36
SK39
SK31
SD01
SK33
P33
SK32
3区
X12150
Y29760
X12160
Y29770
X12140
Y29780
X12130
Y29790
X12120
Y29800
X12110
Y29810
0
1/250
10m

第９図　４区全体図



第10図　縄文時代遺構分布図

第1項　住居跡

SI04（第11・12図・図版7・29）

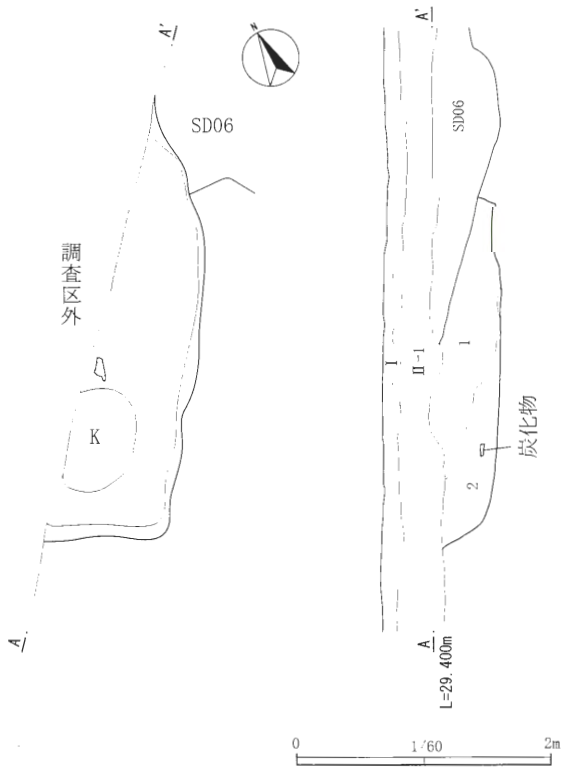
1区D-1Gに位置し、遺構の東壁際付近が検出され、南壁に寄った調査区壁際付近にある木根原因の攪乱と、遺構北壁を東西に走行するSD06が切っている。南北3.50m、東西現状0.75mの平面推定長方形で、深さは32cmとなっている。調査区内で炉は検出されていないので、北方向を主軸方向として扱うことにした。主軸方向N-29°-E。覆土は自然堆積で遺構中央部の床面付近に炭化材1点が存在する。床面は地山を直接削平したもので、全体に硬い。壁周溝や炉は検出されていない。

遺物は、覆土中から縄文土器1,555.3g、弥生土器51.0g、土師器17.2g、陶器6.0g、礫120.3gが出土した。縄文土器は早期から後期にわたるが、ほとんどは中期・阿玉台式である。01・02は大型深鉢の同一個体の口縁部及び胴部破片である。口縁は丸みを帯び緩やかに開く。口縁直下には1条の沈線が巡り、以下、地文は縦方向の粗い集合沈線が1本ずつ引かれる。胎土中には長石・石英・雲母を多量に含み肌理が粗い。器色は外面暗黒褐色、内面は橙色。03は薄手の土器で、器面には細かな集合沈線により斜格子文様が描かれる。内外面共に灰褐色を呈し、胎土中には石英・長石を多く含む。04は口縁部の細片である。斜行する沈線が描かれる。胎土は03に似ている。05は縦方向磨消帯を設け、区画内には細かな平行沈線が斜方向に充填される。胎土・焼成は04・05と類似している。早期・三戸式段階と判断した。

06～10は同一個体の破片である。06では胴部に断面蒲鉾型の隆帯がめぐり、胴部下半との境を画する。上半部には沈線による文様が描かれる。下半は無文。07は突起部分の破片である。三角形に突出するもので、06の隆帯上に貼り付けられるものの可能性が高い。やはり上部には、沈線による文様が描かれる。08・09は格子目状に沈線が描かれる胴部上半の破片である。10は縦方向の条線を地文にし、細い沈線による格子目文様が描かれる。いずれも胎土中に砂粒を多く含み、雲母の混入が目立つ。色調は外面淡橙色、内面は灰褐色を呈する。中期・阿玉台式と判断される。

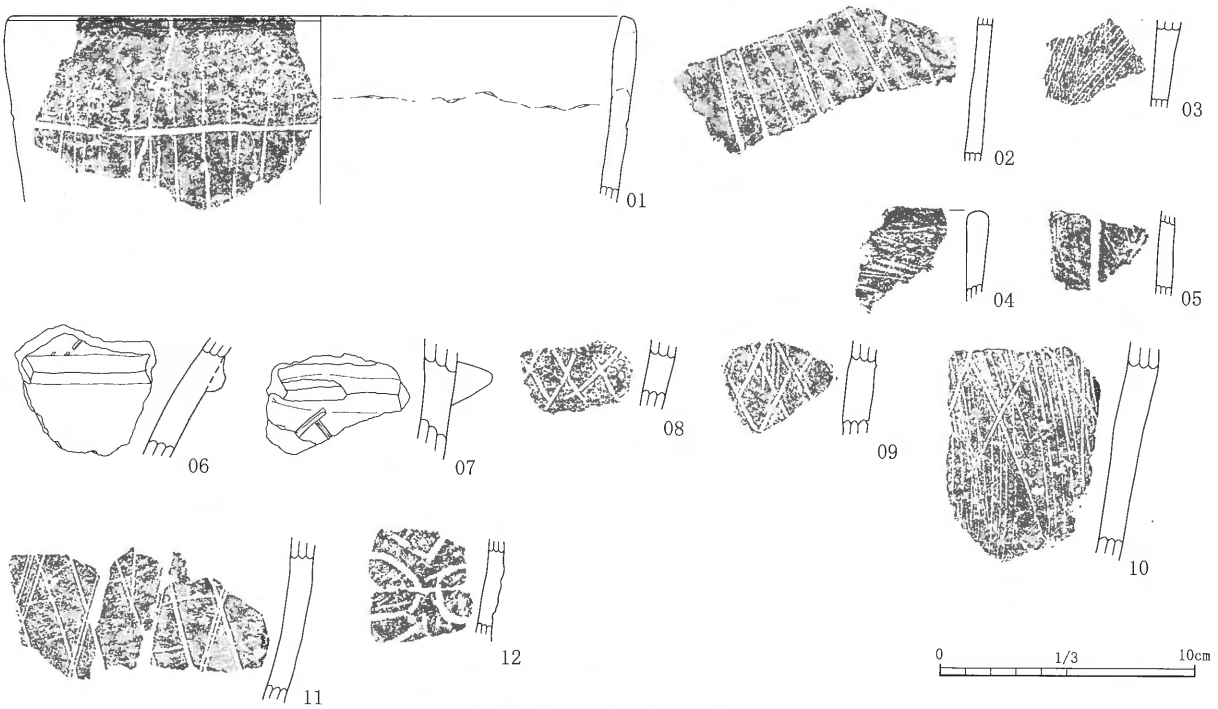
11は細い半截竹管により格子目状の文様が描かれる胴部辺である。器面は淡い褐色を呈するが、破断面は黒色で、焼成によるものであろう。後期・堀之内式か。

12は胴部の破片で沈線による4弁の花弁状の区画が設けられ、内面に縄文が充填される。器色は外面暗橙色、内面は暗灰褐色。後期か、型式不明。



SI04
1　黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり強　VIブロック・粒子φ2mm少量
　焼土ブロック・粒子φ2mm少量
2　黒褐色土　7.5YR3/1　粘性中　しまり強　VIブロック・粒子φ2mm少量
　焼土ブロック・粒子φ2mm少量

第11図　SI04



第 12 図　SI04 出土遺物

第２項　土坑（貝層含む）

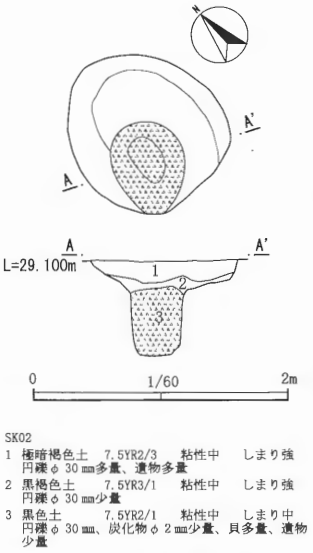
SK02（第 13 ～ 15 図・第 2 表・図版 7・29・47）

1 区 E-1G に位置する地点貝塚である。長軸方向 N-1°-W。長径 128cm、短径 115cm の平面円形をなしたテラスが深さ 25cm となったところで、長径 75cm、短径 58cm、深さ 75cm の平面円形、断面は柱状の掘り込みとなる。極暗褐色土から黒色土に至る 3 層からなり、第 3 層（黒色土）において、貝殻が充填されたような形状で出土している。

出土遺物には縄文土器 1013.7g、弥生土器 133.4g、土師器 371.4g、礫 614.9g がある。覆土中、特に第 1・2 層から多く出土している。

01 は深鉢の胴部上半の破片であろう。外面には浅い条痕が施文され、上端部に絡条体圧痕が施される。内面は横方向の条痕。胎土中には繊維を混入するが、全体に焼きは堅い。白色粒子の混入が目立つ。02 は内外面共に条痕文が斜め方向に施文されるもので、胎土中の繊維混入量は多く、やや薄手で脆い。03 は胎土中に繊維を混入する深鉢胴部の破片で、器面には RL の縄文が縦方向に回転施文される。01 ～ 03 は広義の早期・茅山式土器であり、01 の条痕文土器に絡条体圧痕が施文されること、並びに縄文の施文が見られる点から、茅山最終末段階と判断した。子母口式の可能性もあるが、縄文を比較的多用することから、前者と判断している。内面は浅い条痕か。

04・05 は同一個体の破片である。胎土中には多量の繊維を混入するも、やや硬質である。内面に条痕の施文は観察されない。04 の器面には、RL の縄文による施文方向を変えて羽状の構成を行う。上端部には隆帯を貼付、隆帯上には刺突列による刻みが施される。器色は外面暗褐色、内面は灰橙色。05 は貼り付け帯部分の細片である。06 は厚手で 04・05 に類似するが、やや節が細かい RL の縄文が縦方向に施文される。色調は外面暗褐色、内面は灰褐色を呈する。礫の混入は少ない。07 は繊維を多量に混入するも硬質。やや薄手で LR の縄文が施文される。8 は外面に浅い条痕が施文された後に、縄文が部分的に施文される胴部下半の資料である。繊維を多量に混入し、やや脆い。器色は外面橙色、内面は暗灰褐色。これらの資料は茅山式上層最終末段階から前期・花積下層式段階にわたる資料と判断した。



SK02
1　極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり強　円礫φ30㎜多量、遺物多量
2　黒褐色土　7.5YR3/1　粘性中　しまり強　円礫φ30㎜少量
3　黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　円礫φ30㎜、炭化物φ2㎜少量、貝多量、遺物少量

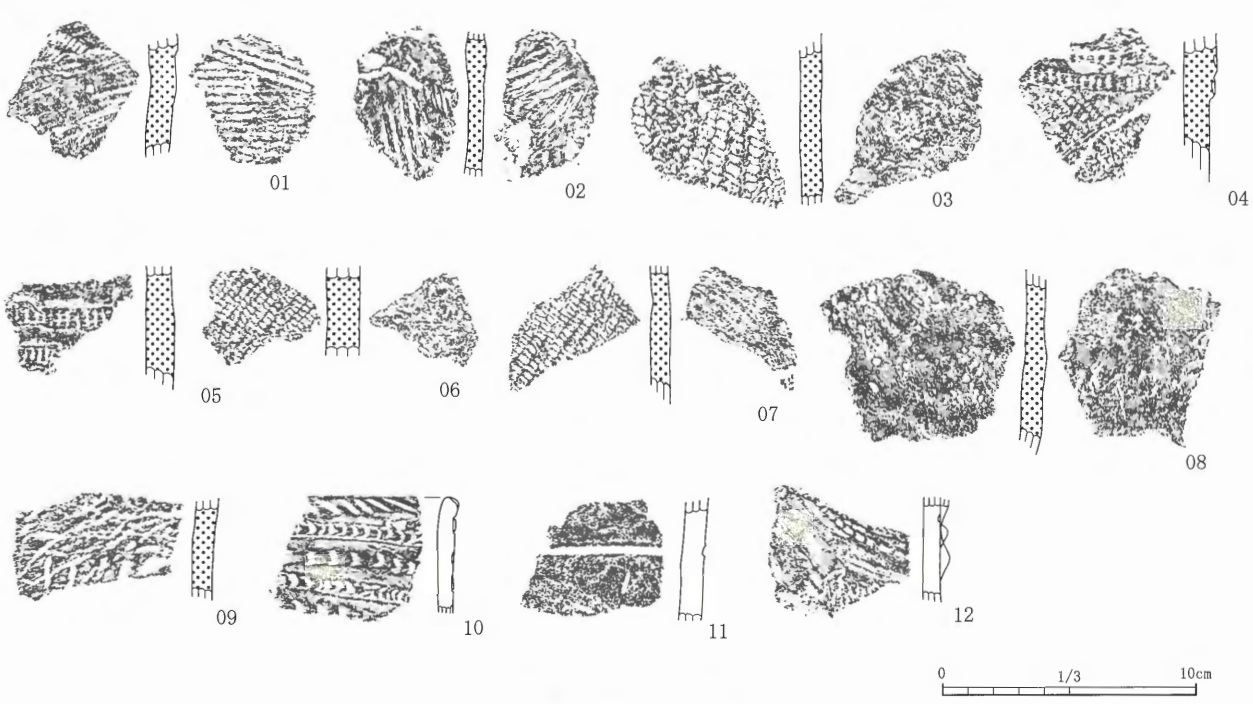
第13図　SK02

09は胎土中に繊維を混入する土器で、器面に網目状の撚糸文が観察される。胎土は内外面共に淡橙色を呈し、断面は中心部が黒く、サンドイッチ状を呈している。

10は波状を呈する口縁部の波底部の破片である。口唇部には刻目を有し、口辺部にはC字とD字の爪形文列が交互に施文される。胎土中には細かな砂をやや多く含み、外面灰褐色、内面は淡橙色を呈する。前期・浮島1式、もしくは諸磯b式と判断される。

11は胴部に横位の沈線が1条引かれる。胎土中に砂礫を多量に含むもので、内外面共に淡褐色を呈する。SI04の01～05と同一個体の可能性がある。

12は断面蒲鉾状の隆帯による窓枠状の区画帯部を作り、内部に隆帯に沿って2条の角押文が施文される。中期・阿玉台Ⅱ式。



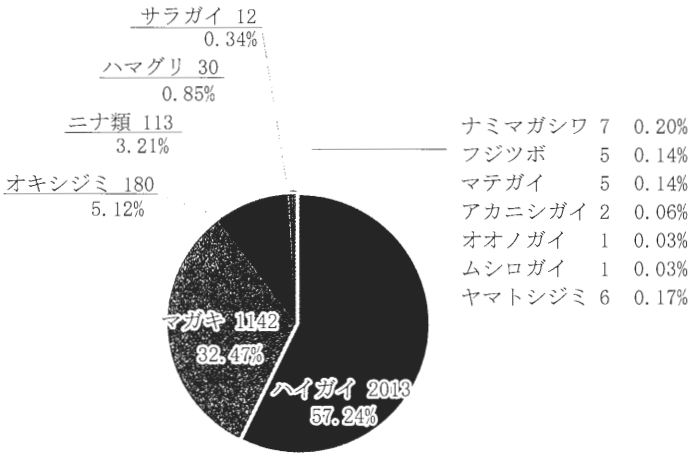
第14図　SK02出土遺物

貝　類　分類ではハイガイが最も多く、次いでマガキ、オキシジミがまとまって出土しており、少量ではあるがサラガイ、マテガイ、ムシロガイ、オオノガイ、アカニシが出土している。サルボウ、アサリは検出されていない。これらの組成から判断される該期の自然環境は、比較的鹹水域に近い状況にあり、ハマグリの適量出土からも汽水域にはやや離れると判断される。しかしながら、マガキやオキシジミの生息域から見ても、内湾地域の貝組成と判断できる。

これらの状況は、本遺跡の東側に近接する赤弥堂遺跡東地区（大賀ほか2009）並びに西地区（同2011）で検出された前期関山式期の地点貝塚の組成とほぼ一致しており、本遺構は出土遺物及び貝組成からやや幅を持たせて、海進期の縄文時代早期末葉～前期中葉と判断される。出土土器のうち、前期末葉～中期の資料は上層の混在資料と判断するべきであろう。

第２表　SK02 貝類組成

	左	右	最少個体数
ハイガイ	2013	1893	2013
ハマグリ	30	30	30
オキシジミ	174	180	180
サラガイ	12	11	12
マガキ	身 1142	蓋 439	1142
ヤマトシジミ	6	1	6
ナミマガシワ	—	—	7
マテガイ	—	—	5
ニナ類	—	—	113
ムシロガイ	—	—	1
フジツボ	—	—	5
オオノガイ	1	1	1
アカニシガイ	—	—	2



第 15 図　SK02 貝類組成

第３項　遺構外出土遺物

土　器（第 16・17 図・図版 29・30）

早　期　01 は口縁が内湾気味に立ち、口唇直下に段を有す。内外面共によく磨かれ無文である。撚糸文系土器の最終末～無文系土器群の東山式の可能性がある。02 ～ 05 は砂礫を多く含む土器で、細い集合沈線による格子目文様が描かれる。三戸式と判断した。06・07 は胎土中に繊維を混入する土器で、内外面に条痕が施文される広義の茅山式土器である。08・09 は茅山式最終末～下吉井式段階の遺物である。08 には縄文が施文された上に絡条体圧痕が施文される。09 は内面に条痕が施文され、外面には RL と LR の縄文が羽状に施文される。いずれにも繊維の混入が顕著である。10 は広義の茅山式土器の底部資料である。尖底に近い底部であるが先端部に小形の平坦部が見られるもので、鵜ヶ島台式土器と判断される。

前　期　11 ～ 17 は胎土中に繊維を混入する黒浜式土器の一群である。11 は直前段反撚の縄文が施文され、円管の刺突列が垂下する。12 は波状の平行沈線が横方向に施文される口縁部の破片である。植房式の可能性がある。13 は羽状の縄文が施文される。14 は直前段反撚の縄文が羽状を構成する。15 は単節 RL の縄文施文。16・17 は同一個体であろうか、無節の縄文 R が施文される。18・19 は口唇直下に C 字の爪形列が巡るもので、浮島 1 式若しくは諸磯 a 式土器であろう。20 は半截竹管による刺突列が横方向に密に巡るもので、浮線状の貼付文の上には刻みが施される。十三菩提式と判断した。

中　期　21 は隆帯により窓枠状の区画を設け、内部に細い角押列を斜方向に充填する。阿玉台Ⅰｂ式。22 は区画帯に沿って細かな角押列が巡り、内部に同様の角押列が斜方向に施文される。やはり阿玉台Ⅰｂ式である。22 に比べ薄手で別個体。23 は胴部下半の破片。断面三角形の隆帯が弧状に巡る。阿玉台Ⅰｂ式。24 は、断面三角形の隆帯による窓枠状の区画帯に沿って 2 条の角押文が施文される。阿玉台Ⅰｂ～Ⅱ式。25 は細い隆帯により弧状の文様が描かれ、内部に平行沈線、外面には有節沈線が巡る。阿玉台Ⅰｂ～Ⅱ式。26 は断面が丸みを帯びた隆帯が Y 字状に垂下し、隆帯に沿って幅広のキャタピラ状角押文が施文される。勝坂式でも藤内 3 段階であろう。27 は口縁部に渦巻状の隆帯が付される。加曽利ＥⅢ式古段階。28 は幅広の磨消懸垂文が垂下する。加曽利ＥⅢ式。

後　期　29・30・31 は沈線による曲線状の区画帯の中に刺突列を加えるもので、称名寺 2 式。32 は太い沈線による弧状の平行線が描かれる。地文は単節 RL。後期前半の資料であろう。33 は大型の深鉢口縁部である。

口縁はやや直線的に開く。器面には細く尖った条線が斜方向に描かれる。胎土は砂粒を多量に含んでおり、内面の磨きが顕著である。34は33同様の器形で、口縁直下にやや太い沈線により幾何学文が描かれる。内面の磨きは施されていない。33・34は後期初頭のものと判断した。35・36・37は細い沈線による格子目文が描かれる。焼成が甘く、器面は淡橙色を呈するものの、破断面は黒褐色を呈する。33～37は堀之内式と判断した。38は紐線文土器である。口唇直下に紐線の貼付が施され、紐線上には指により押さえが施される。外面は縄文地文に横方向の沈線が描かれ、内面には口唇直下に沈線が1条巡る。加曽利B式と判断した。39も紐線文土器である。38に比べ薄手である。口唇直下に細い紐線の貼付が施され、紐線上には指により押さえが施される。外面はLRの縄文地文に斜方向の沈線が描かれる。内面には口唇直下に沈線が1条巡る。やはり加曽利B式と判断した。40は小形の精製土器である。横位に巡る4本の沈線がノの字形の文様によって切られる。加曽利B2式。41・42は薄手で内面がよく研磨される深鉢胴部の破片である。41では縄文RLのみ。42では縄文の地文に斜行沈線が施文される。いずれも加曽利B式土器と判断される。

土製品（第17図・図版30）

43～46は土器片錘である。43は胴部破片を横長の楕円形に整形し、長軸側の両端部にV字の紐掛の刻みが施される。器面にはわずかに縄目が観察されるものの、形式は不明である。44は43同様、楕円形を呈し、長軸側に刻みが施される。器面は剥落している。45はやや円形に近い小形の土器片錘である。器面は無文。阿玉台式土器に見られる小形のものであろうか。46は楕円形を呈する。深鉢の胴部破片で、やや薄手である。刻みは長軸両端部と短軸側の片側のみに削られるもので、3方向に紐掛を有する特異な形状である。渡辺　誠氏の分類（渡辺1984）では該当するものはない。

47は土製円盤である。薄手の土器片を素材として、周辺を打ち欠いて円形に整形するが、紐掛の刻みは施されない。器面には平行沈線が施文されるものであり、後期の資料であろうか。

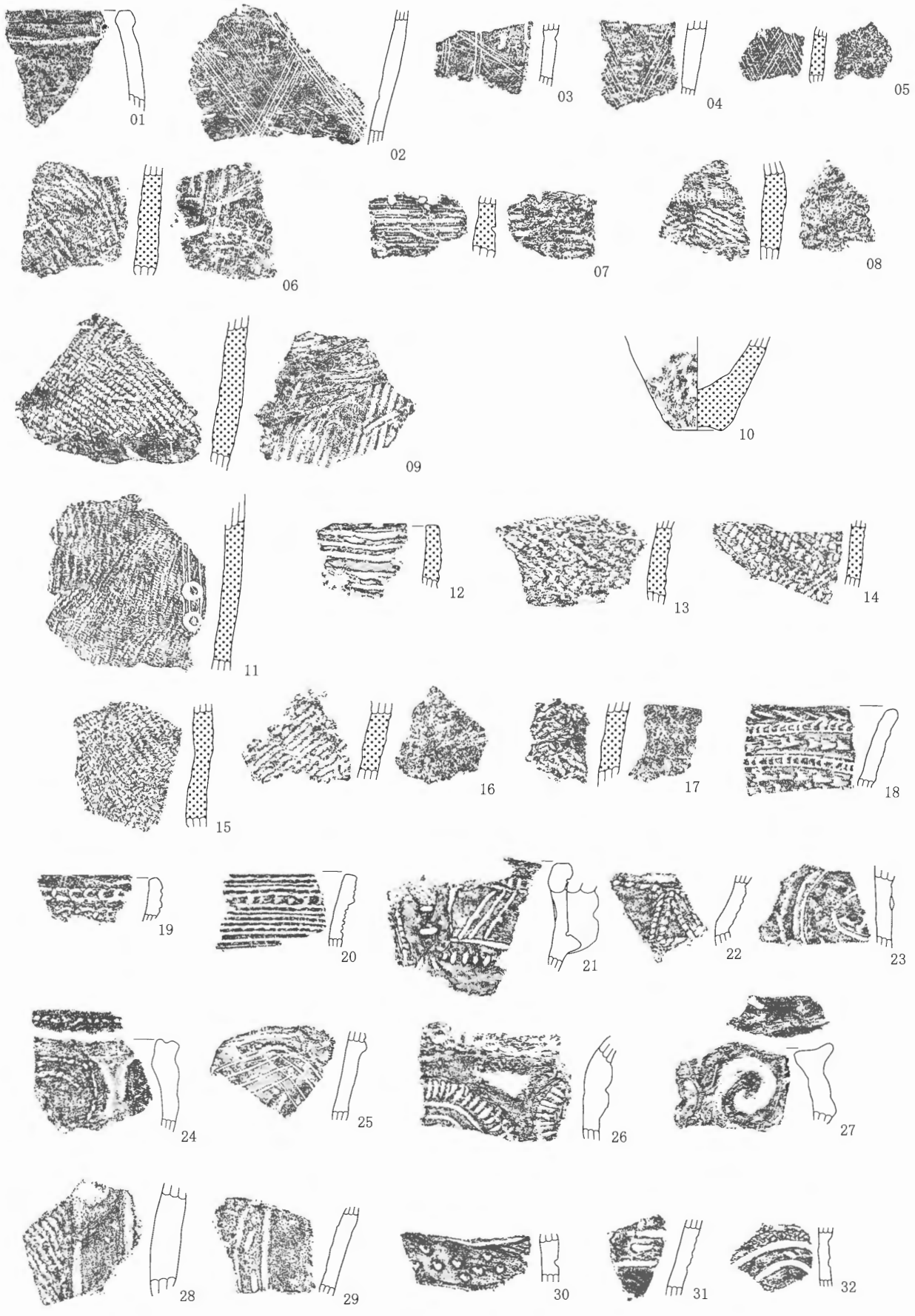
石　器（第18図・図版30）

01は方形の剥片である。腹面には節理に沿った剥離が見られる。素材は黒色緻密ガラス質安山岩。02はやや縦長の剥片である。腹面には一部表皮を残し、他方からの剥離面が残され、ポイントフレーク状を呈する。材質は珪質頁岩である。03は横長の薄片で、左側端部は折損している。また、剥離時に節理面からの剥落が観察される。材質はチャート。04は縦長の石刃。右側縁に表皮を残す。左側縁に細かな使用痕が残されている。材質は珪質頁岩。

05は打製石斧である。扁平で三角形の自然礫の周縁に剥離を加え、小形の打製石斧に作り出している。両面ともに表皮を残す。材質は凝灰岩。

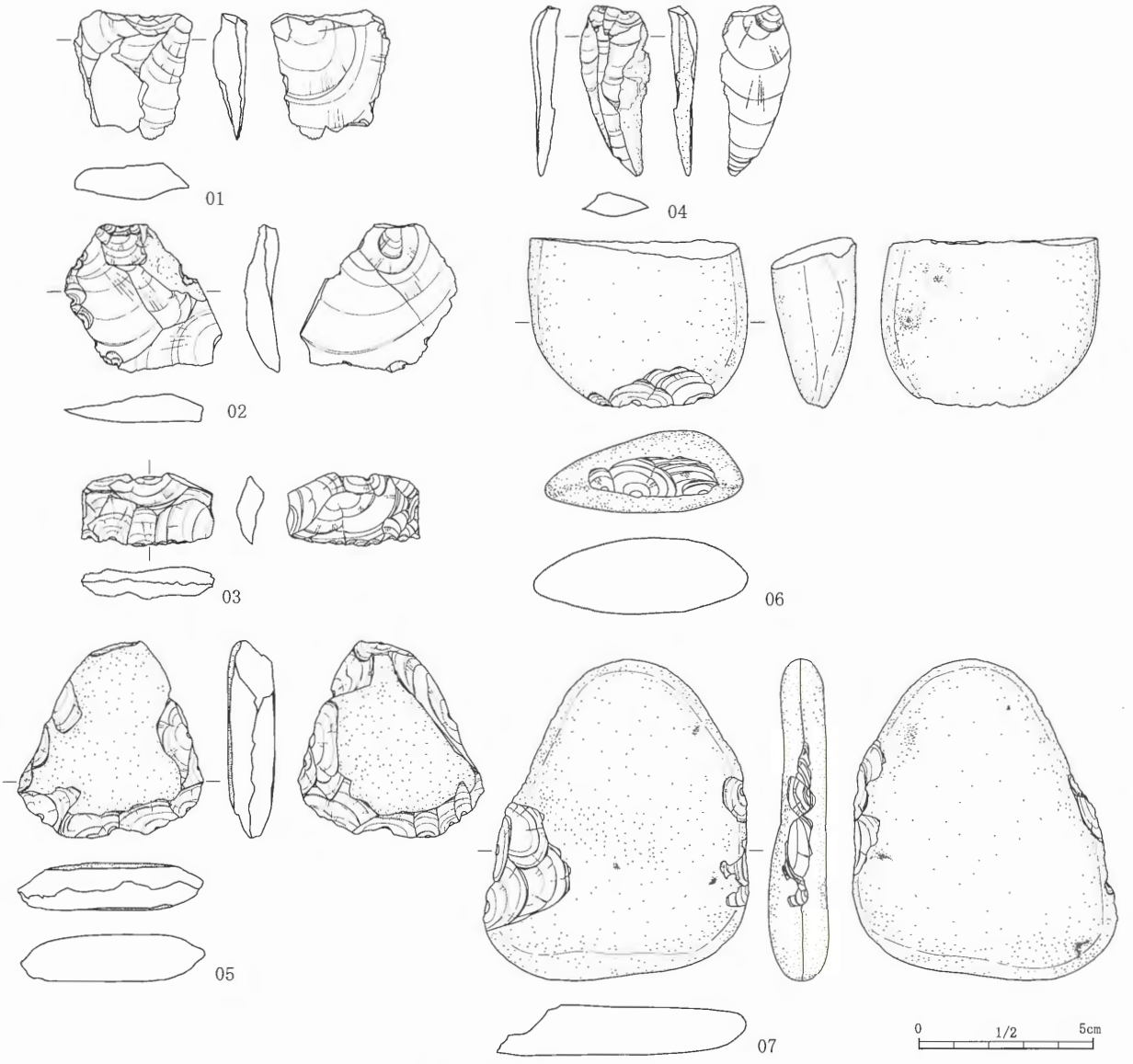
06は楕円形の自然礫の端部に、一方向から剥離を加えて刃部を作り出す礫器である。基部側が欠損したためか剥離は周縁には及ばず、使用痕も見られない。材質は凝灰岩。

07は丸みを帯びた三角形の扁平な自然礫を利用するもので、両側縁部に打撃によるノッチを加えている。石錘の可能性がある。材質は凝灰岩。

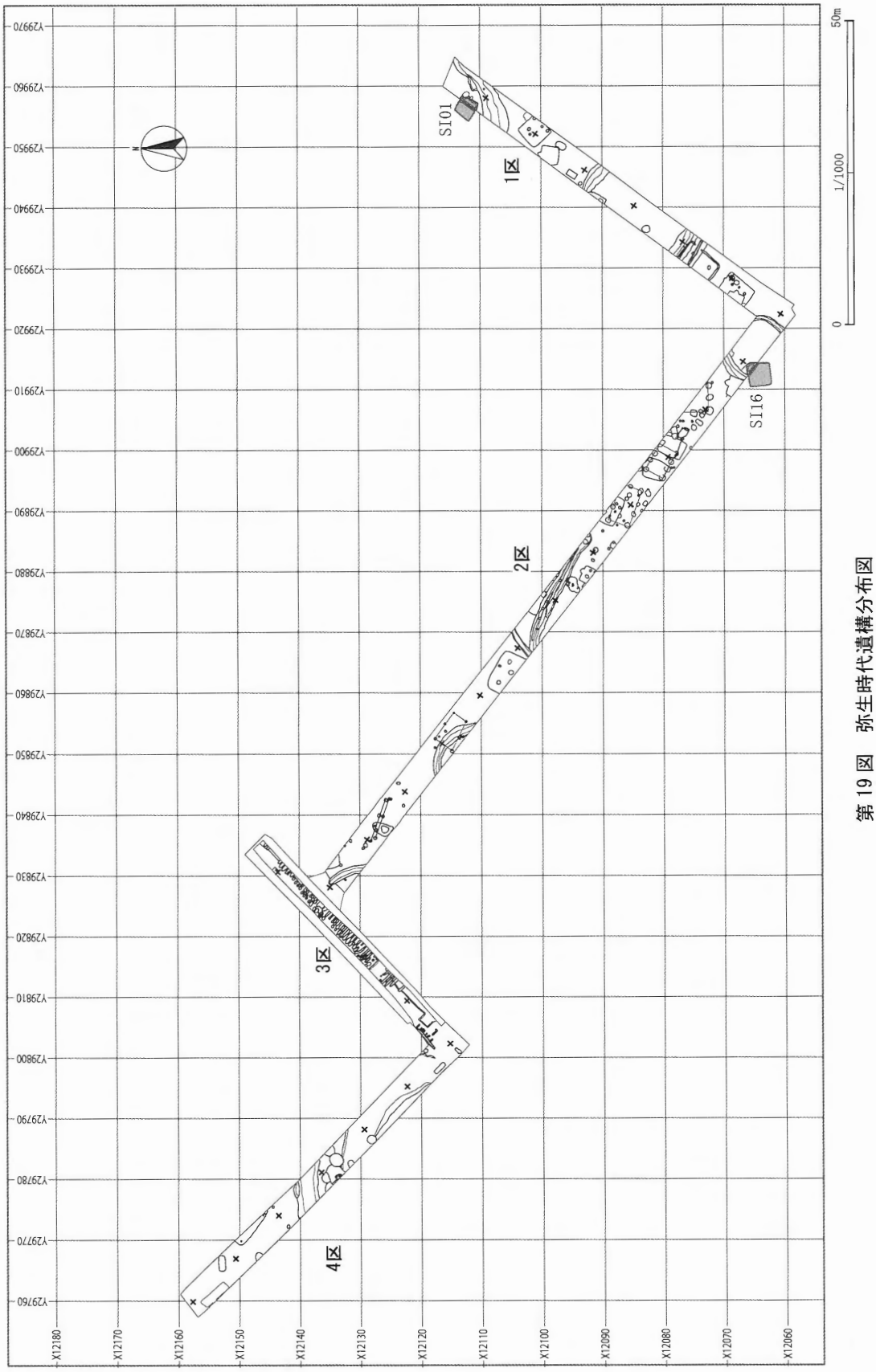


第 16 図　遺構外出土遺物（縄文・土器）

第17図　遺構外出土遺物（縄文・土器・土製品）



第18図　遺構外出土遺物（縄文・石器）



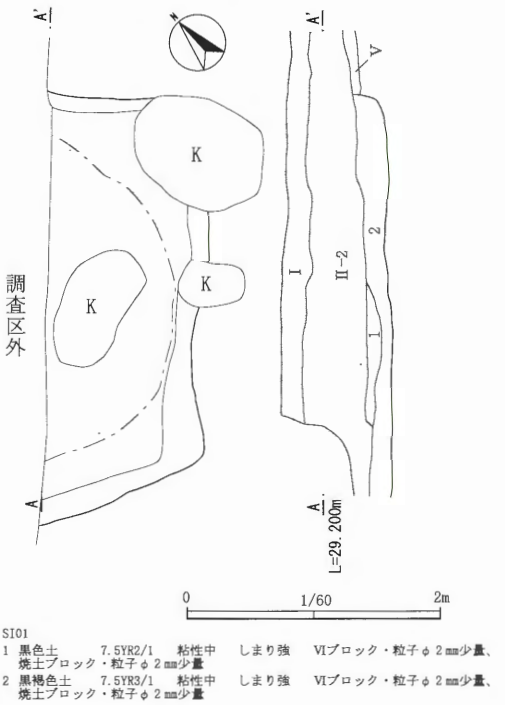
第19図　弥生時代遺構分布図

第1項　住居跡

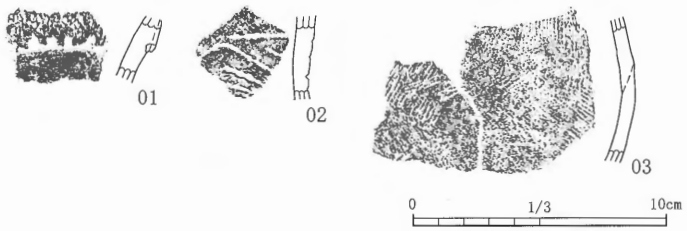
SI01（第20・21図・図版8・31）

1区A-1Gに位置する。調査区からは、遺構の東壁際付近が検出され、西側の大半が調査区外になっている。3つの木根が遺構を壊している。規模は南北3.45m、東西現状1.20mの推定長方形で、深さは20cmである。調査範囲内では炉が検出されておらず北を主軸方向として扱う。主軸方向N-44°-E。覆土は黒色土・黒褐色土の2層からなるが著しい攪乱を受けているため明瞭ではなく、残存状況からレンズ状堆積と考えられる。硬化面の範囲は縁辺を除いた床面全体を覆っている。調査範囲内から柱穴・周溝・炉は検出されなかった。

遺物は弥生土器123.4gが出土した。01は壺の口縁部、折り返し部の破片である。口唇部は欠損する。折り返し部にはRLの縄文が施文される。また、同下端には円管状の刺突列が並ぶ。十王台1式直前の資料と判断される。02は壺の胴部破片。沈線による三角形を意識した幾何学文様が描かれる。胴上半部の破片であろう。胎土中には細かな砂が多く含まれ、焼成は普通。中期の土器であろうか。03は甕の胴下半部の破片。上半部との接合部分で、やや下膨れの形状を呈するものであろう。外面は全体に細かなハケメが施される。内面はナデ。胎土は砂粒を多く含み、薄手。弥生時代最終末から古墳時代前期の土器と判断される。



第20図　SI01



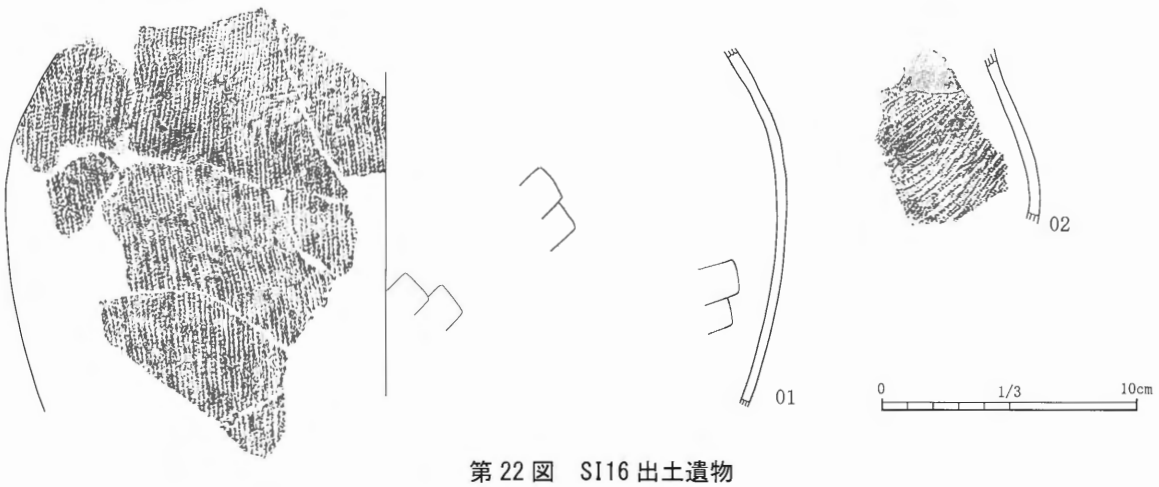
第21図　SI01出土遺物

SI16（第22・74図・図版8・31）

2区M･N-2Gに位置し、調査区内においては北東隅部のみが検出され、遺構の大半は南側の調査区外となっている。15号墳に切られている。東西1.75m、南北1.65mの推定長方形で深さ26cmとなる。覆土は黒色土1層からなっている。炉が検出されていないため北方向を主軸とした。主軸方向N-4°-W。床は地山を直接掘削し構築したものである。

遺物は図示した弥生土器2点、123.9gのみで、床面上で検出された。01・02はともに甕の胴部破片である。01は胴部上半でやや強く屈曲する。外面には付加条第1種の縄文が全面に施文する。02も胴部上半のやや強く屈曲する破片。外面には、やはり付加条第1種の縄文が施文される。

出土遺物から、本遺構は後期前半と判断した。



第22図　SI16出土遺物

第2項　遺構外出土遺物

土　器（第23図・図版31）

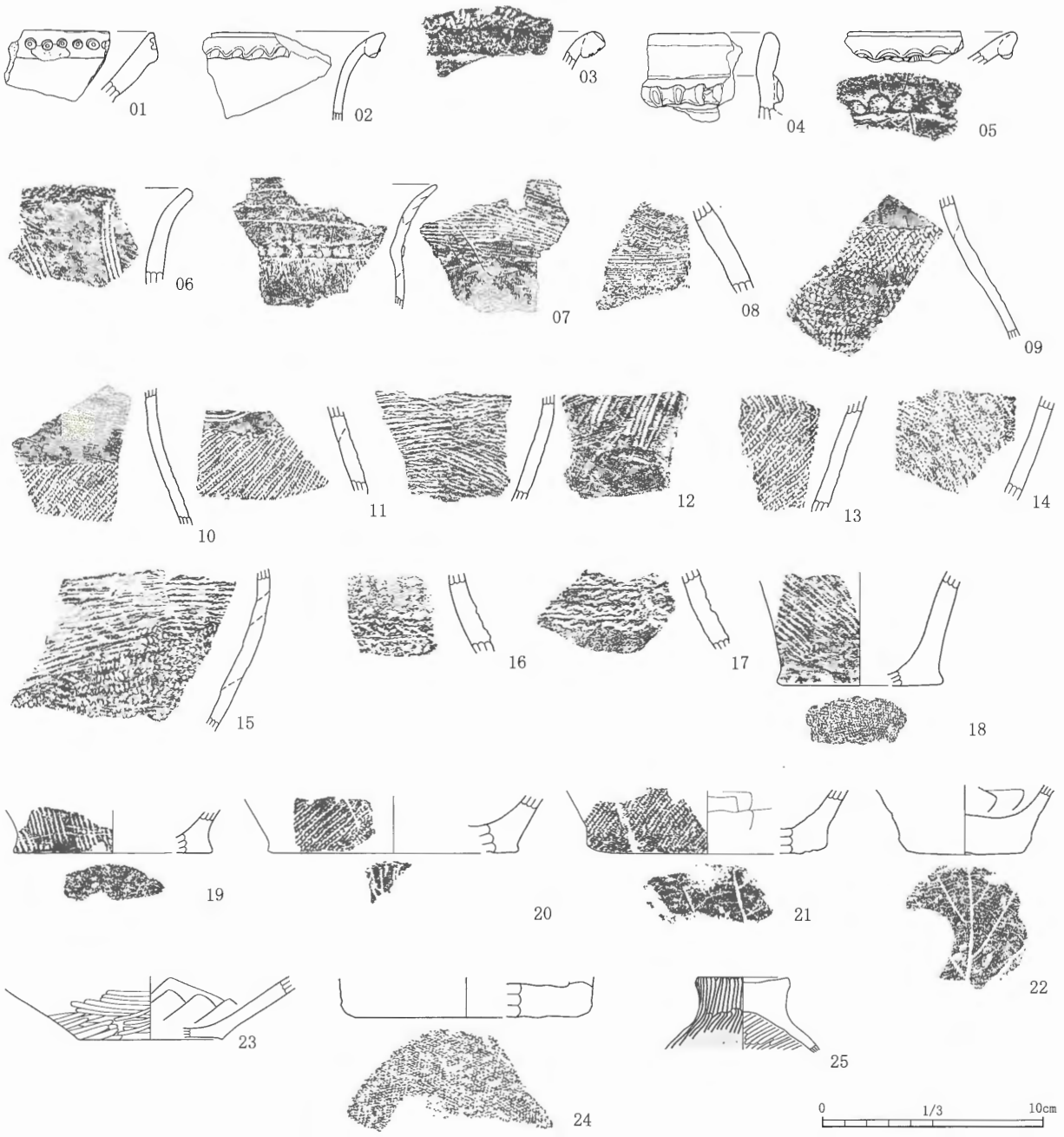
01～06は口縁部の破片である。01は外反して開く口唇部に円管の刺突列が並ぶ。02は外反する口縁で口縁部は折り返され、折り返し部には太い刻みが施される。03は02同様に口縁部が折り返されるもので、口縁には細かな竹串状の工具による刺突が施される。また、口唇部にはLRの細縄文が施文される。04は直立気味になる口縁部の破片。口縁やや下位に隆帯が巡り、隆帯上には刻みが施される。05は口縁部で折り返される。口縁部には刻みが施され、直下に2本1単位の縦位平行沈線区画と斜格子文によるスリット状のヘラ描き文様が描かれる。06は緩やかに外反する口縁で、口縁から胴部にかけ3条1単位の沈線が描かれる。口唇部には細縄文が施文される。07は頸部付近の破片。薄手で焼成も良く、口縁部には輪積痕が意識的に残され、屈曲部には指による連続刺突が施される。外面胴部下半及び内面口縁部付近にはハケメが観察される。08は壺の胴部上半の破片である。上から、横線文・波状文・横線文・波状文の櫛描き文が確認できる。

09～17は胴部の破片である。09では胴部上半にLRの縄文が施文され、頸部は無文。沈線は描かれない。10は09と同様。11は09・10と同様であるが縄文は付加条第1種となる。12は不完全な撚り戻しによる縄文を乱雑に施文する。13は付加条第1種の縄文を2種類用いて羽状縄文を施文する。14は器面の剥落が激しく不明瞭であるが、付加条第1種の縄文が施文される。15は上半で太いハケ、下半は付加条第1種の縄文が施文され、内面は磨きが観察される。16・17は胴部から頸部の括れ部分の破片で、Z字状の結節縄文が複数段横方向に施文される。

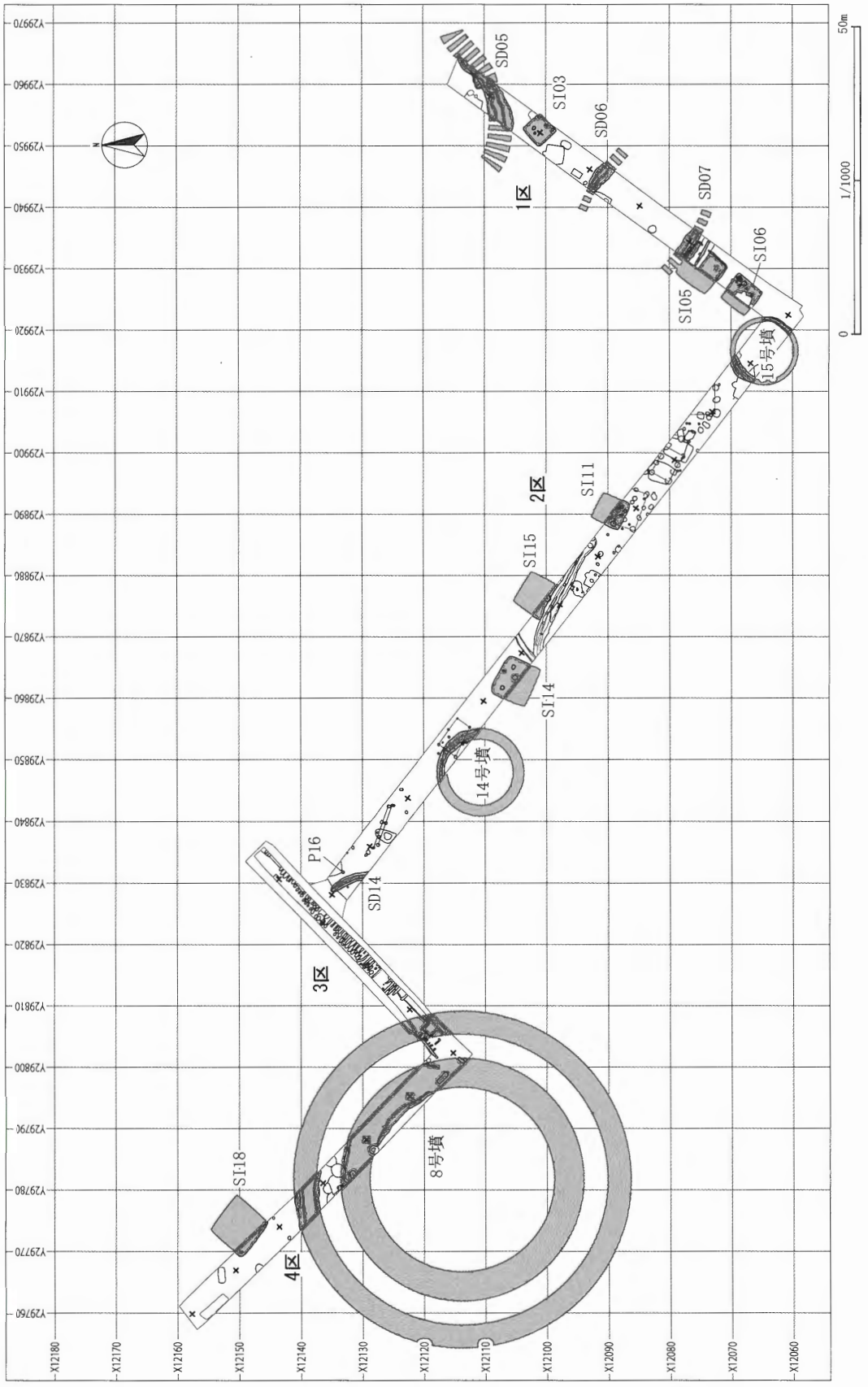
18～22は底部の破片である。下端部がやや突出する。18は外面に付加条第1種の縄文が施文される。底部には布目圧痕がある。19も同様であるが、付加条縄文はやや縦方向に施文される。底部は無文。20は斜め方向の付加条第1種が施文され、底部には木葉痕。21は20と同様で、やや径が大きい。底部は木葉痕。22は無文で底部に木葉痕。23は薄手の底部で、胴部は大きく球形に開く。内・外ともに無文。24は径の大きな底部。胴部下端は無文。底部には布目圧痕がある。

25は蓋の摘み部分である。壺の底部を伏せたような形状で上端部は緩やかに窪む。頂部は円筒状にやや高さを持った後、体部は緩やかに内湾して開く。内外面共にナデで、赤彩が施される。

これら、遺構外出土の弥生土器は、11が大崎台式直前の中期末葉、05・06は大崎台1式で後期初頭、07・08は後期末葉の十王台1式に比定されるもので、古式土師器に供伴する可能性がある。付加条第1種の縄文を施文する土器は後期全般に見られ、明確に分類できない。東中根式に見られる突起部を有する資料は見られない。全体に、十王台式と判断できる土器が見られないことから、後期の古い段階にその中心があるものと判断される。



第 23 図　遺構外出土遺物（弥生）



第 24 図　古墳時代遺構分布図

第１項　住居跡

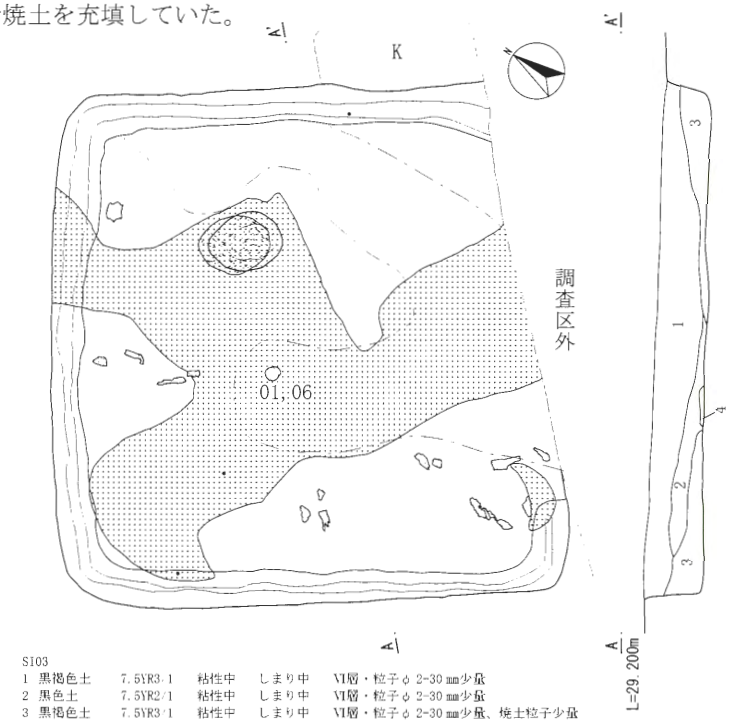
SI03（第 25・26 図・第 3 表・図版 9・32）

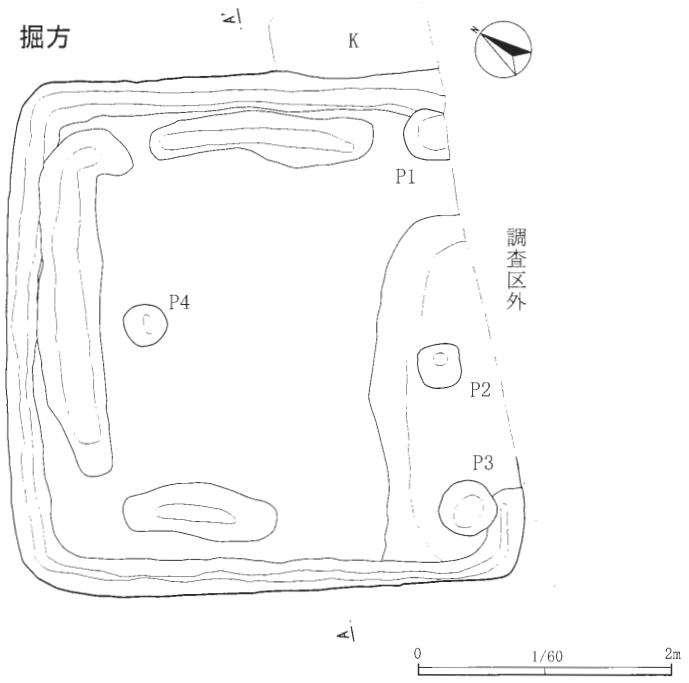
１区 B-1･2、C-1･2G に位置し、調査区外となっている東壁付近を除いて、遺構の大半が検出された。南北を長軸とする攪乱に北壁が壊されている。南北 4.05 m、東西 4.10 mの平面正方形で、深さは南壁際で 47cm を測る。主軸方向 N-37°-W。北壁際を除いた床面全体に焼土及び炭化材が分布しており、このうち焼土は中央部に、炭化材はその縁辺にまとまっている。覆土は 4 層に分層され、炭化材層が第 3 層、焼土が第 4 層である。焼土の厚みは 5cm 前後で床面直上に堆積している。焼失家屋と考えられる。周溝は、幅 18 ～ 36cm、深さ 5cm 前後を測り、調査区内においては壁際をほぼ全周している。北西隅に寄った床面には、長軸 60cm、短軸 43cm の平面楕円形で深さ 11cm をした地床炉があり、覆土は単層で焼土を充填していた。

遺構西半分の床面が硬化し、床下には、幅 30 ～ 50cm、深さ 15cm 前後をした掘方溝が断続的に壁際を巡っていた。ピットは P1 ～ 4 の平面円形ピット 4 基が検出されているのだが、主柱穴は検出されなかった。P1 は東側が調査区外であるが、長径現状 45cm、短径 38 cmの推定楕円形で深さ 54cm を測る。P2 は長径 40cm、短径 35 cmの推定円形で深さ 61cm。P3 は長径 45cm、短径 42 cmの平面円形で深さ 11cm。P4 は長径 35cm、短径 32 cmの平面円形で深さ 38cm を測る。このうち P2 の底面は硬化していた。

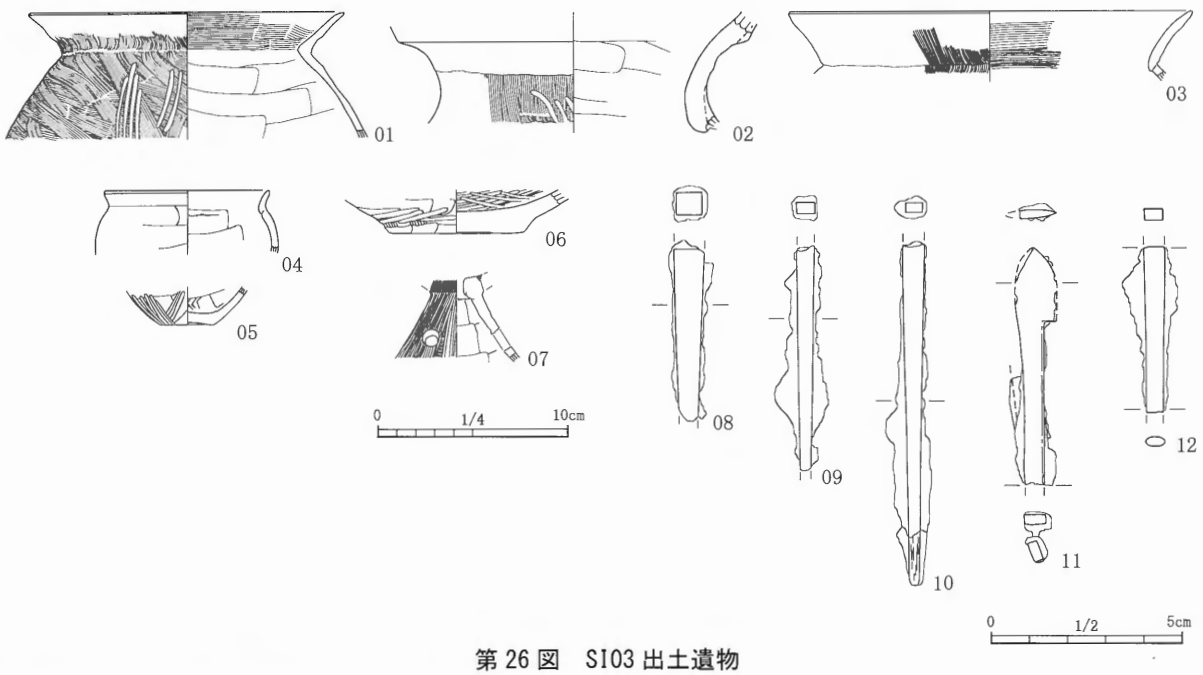
遺物は縄文土器 1,091.1g、弥生土器 375.9g、土師器（古墳時代前期）1,379.5g、鉄製品 40.7g、礫（被熱破砕）465.0g、炭化物 232.0g を検出した。1 の土師器甕は床面上で検出、他は覆土中からの出土である。

これらの遺物から、本遺構は古墳時代前期と判断される。鉄製品のうち 09 ～ 12 は長頸鏃で、6 世紀以降の所産と判断されることから、北東部の攪乱（あるいは土坑か）に由来するものと考えられる。





第 25 図　SI03



第 26 図　SI03 出土遺物

第３表　SI03 出土遺物観察表

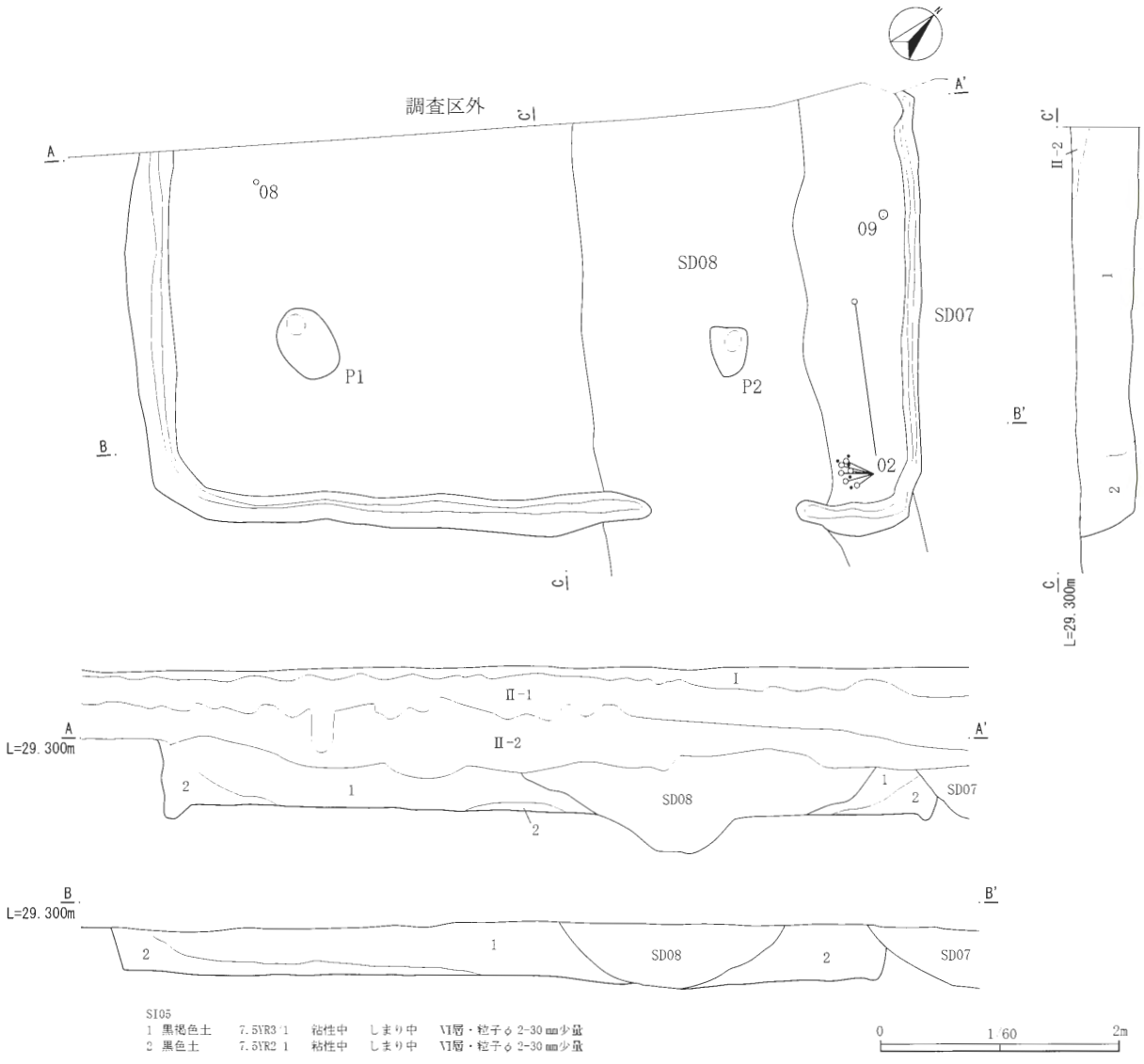
番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	No.４ユカ・一括	土師器	台付甕ヵ	113.1	16.6	(6.7)	—	胴部は球形ヵ。頸部で「く」の字に屈曲し口縁は僅かに外反して開く。胴下半部以下は欠損している。	外面及び口縁の内側はハケ整形。口唇部は内外共にヨコナデ。内面胴部は横方向のヘラナデ。	白色粒子やや多い。	内面 10YR 7/3 にぶい黄橙 外面 10YR 7/3 にぶい黄橙	良好	口縁部～胴部上半	
02	一括	土師器	壺	44.3	—	<6.3>	—	有段口縁の頸部資料である。胴部及び口縁部の接合部分から破損している。頸部は緩やかに外反して開く。	外面頸部は縦方向のハケ整形を行い、口縁部直下でヨコナデされる。内面は横方向のヘラナデ。	小～中礫多い。	内面 10YR 7/3 にぶい黄橙 外面 2.5Y 7/3 浅黄	良好 二次焼成アリ	頸部破片	
03	一括	土師器	甕	12.9	21.2	<3.7>	—	頸部で「く」の字に屈曲し、口縁は薄く外反気味に開く。	外面頸部から口縁部下半はハケ整形の後ヨコナデ。内面はヨコナデ。	白色粒子やや多い。	内面 2.5Y 5/3 黄褐 外面 10YR 6/4 にぶい黄橙	良好 二次焼成アリ	口縁部破片	
04	一括	土師器	椀	6.3	(8.5)	<3.3>	—	胴部は球形ヵ。口縁は頸部で「く」の字に屈曲し短く開く。	全面ヨコナデ。	雲母やや多い。	内外面 5YR 4/6 赤褐	良好	口縁部破片	
05	一括	土師器	壺	19.9	—	<2.0>	2.7	底部はやや上げ底気味で体部は緩やかに内湾する。	外面はナデの後部分的なミガキ。内面はヘラナデ。	雲母やや多い。白色粒子少量。スコリア微量。	内面 5YR 5/6 明赤褐 外面 7.5YR 4/4 褐	良好	体部下端～底部	
06	No.４	土師器	甕	133.9	—	<2.3>	7.0	底部は平底で中央部分がやや窪む。円盤状に突出するもので胴部は大きく開く。	外面底部は多方向のヘラケズリの後部分的なミガキ。胴部はハケ整形の後にヘラケズリを行い部分的に磨かれる。内面はミガキ。	白色粒子少量。	内面 10YR 7/6 明黄褐 外面 10YR 3/1 黒褐	良好	底部	
07	一括	土師器	器台	40.1	—	<4.7>	—	受け部と脚部間は貫通孔が通り、受け部は接合部から欠損する。脚部はやや直線的に開くもので、円形の３孔が穿たれるものであろう。	外面はハケ整形の後に縦方向のミガキによりハケメを消している。受け部の剥落部分にハケメが観察され、ハケ整形を行った後に受け部の接合が行われ、その後にミガキを施す工程が観察される。脚裾部は欠損している。	白色粒子・赤色粒子微量。	内外面 7.5YR5/6 明褐	良好	脚柱部のみ	
08	一括	鉄製品	鉄鏃ヵ	7.7	残存長 <4.6>	厚さ 0.6	幅 0.9	断面方形で上端に向かいやや撥状に広がる。両端部は欠損している。	全体に錆有り。	—	—	—	—	６世紀以降の遺物と判断され本住居に伴う遺物ではない
09	一括	鉄製品	鉄鏃ヵ	12.3	残存長 <4.7>	厚さ 0.7	幅 0.10	断面方形で上端に向かいやや太くなる。両端共に欠損する。鏃の茎の可能性がある。	全体に錆有り。	—	—	—	—	６世紀以降の遺物と判断され本住居に伴う遺物ではない
10	一括	鉄製品	鉄鏃	9.6	残存長 <4.8>	厚さ 0.8	幅 0.11	断面はやや扁平な長方形で下端部は丸みを帯びる。両端共に欠損する。鏃の茎と判断される。	下端部に木質の付着がみられる。	—	—	—	—	６世紀以降の遺物と判断され本住居に伴う遺物ではない
11	一括	鉄製品	鉄鏃	5.9	残存長 <4.9>	厚さ 0.9	幅 0.12	２本の鏃が錆着している。上部の資料は篦被部から鏃身部にかけてで、下端は折損している。鏃身部は左側を欠損するものの、断面は薄い楕円形の鏃で、篦被部は長方形を呈する。下位に錆着する資料は鏃の茎部の断片であろうか、ほぼ同様の断面形状を呈する。	鏃身は丸味を帯びた五角形を呈し、やや剣身鏃に近い形状である。鏑は明瞭ではない。２点共に錆有り。	—	—	—	—	６世紀以降の遺物と判断され本住居に伴う遺物ではない
12	一括	鉄製品	鉄鏃ヵ	5.2	残存長 <4.10>	厚さ 0.10	幅 0.13	断面は長方形上端に向かいやや太くなる。鏃の茎部ヵ。	全体に錆有り。	—	—	—	—	６世紀以降の遺物と判断され本住居に伴う遺物ではない

SI05（第27・28図・第4・5表・図版9・10・32）

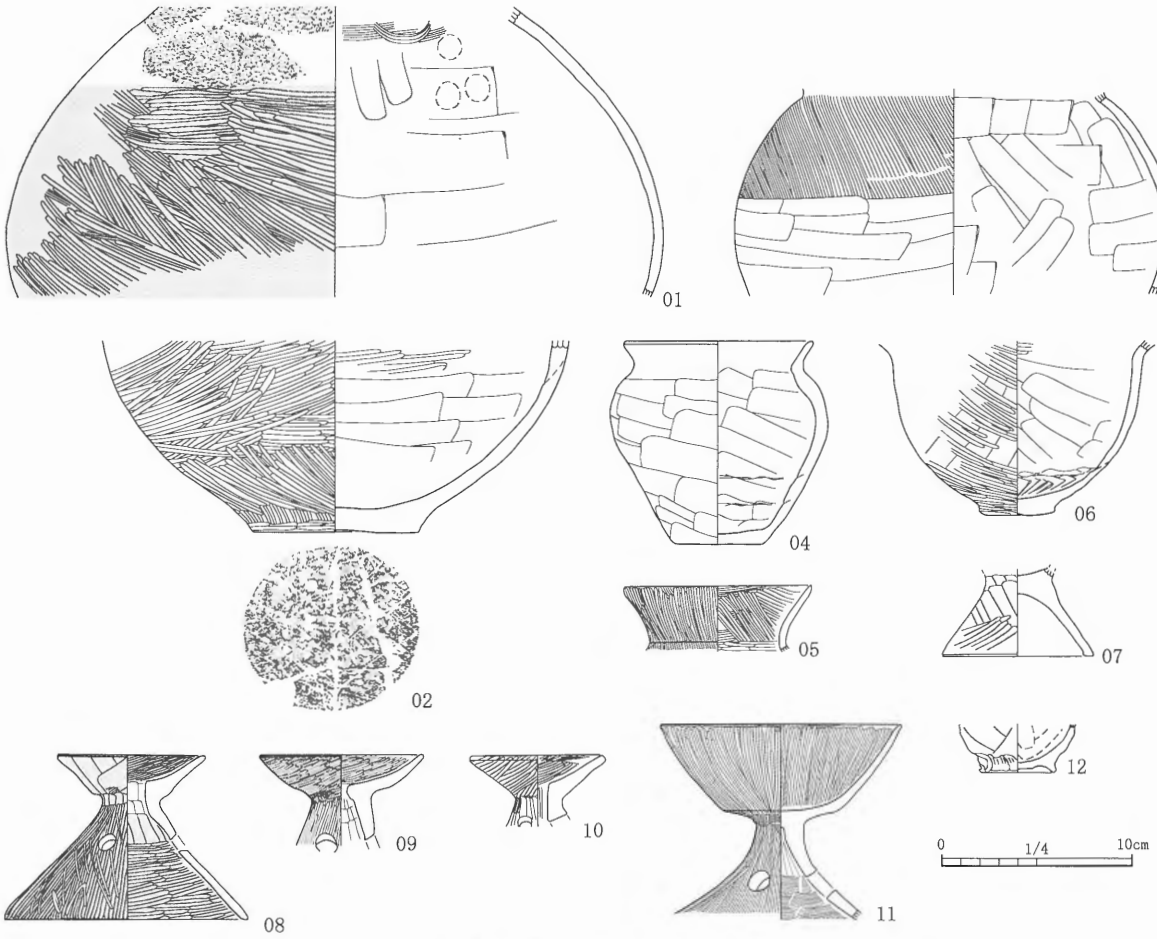
1区F-1・2Gに位置し、遺構の東側半分が検出され、西側は調査区外になっている。遺構の北壁付近を東西に走行するSD07・08によって切られている。南北6.55m、東西現状3.47mの平面推定長方形で、深さ50cmである。炉・カマドが検出されていないので主軸方向を北にあると仮定した。主軸方向N-45°-E。覆土は黒色土から黒褐色に至るレンズ状をなした2層に分層される。床面は概ね地山を直接掘削して構築され、全体に硬化している。壁際に幅13～40cm、深さ5cm前後の周溝が壁際を巡っており、現況から全周していたものと判断される。P1は長径62cm、短径45cmの楕円形で深さ64cm。P2は長径40cm、短径30cmの楕円形で深さ53cmとなり、主柱穴となるものと判断される。

遺物は縄文土器818.7g、弥生土器620.3g、土師器（古墳時代前期）5,279.1g、土製品（縄文土器片錘）12.2g、埴輪92.7g、礫（被熱破砕含む）2,360.0g、炭化物31.6gを検出した。土師器の出土量が多く、破片も大型のものが目立つ。主に覆土中からの出土であるが、02の土師器壺は北東隅、08の器台（ほぼ完形）は西側、09の器台は北東壁際のともに床面上で検出された。

これらの遺物から、本遺構は古墳時代前期と判断される。



第27図　SI05



第 28 図　SI05 出土遺物

第４表　SI05 出土遺物観察表（1）

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	SI05 一括 表土	土師器	壺	342.2	—	〈15.4〉	—	胴部中位から上半部にかけての資料。胴部は緩やかに内湾し、球形になる。	外面胴部上半部には付加条第２種の縄文が施文され、中位以下はハケによる整形の後、全面磨かれ、赤彩が施される。内面はヘラナデが行われるが上端部に一部ハケメ痕を残す。	白色粒子少量。	内面 10YR 7/4 にぶい黄橙 外面 10YR 6/3 にぶい黄橙	良好	体部大破片	網目状撚糸文 鋸町タイプ 胴部外面赤彩
02	SI05 No.3・5・6・7・9・10・12 表土	土師器	壺	550.5	—	〈10.0〉	8.7	胴部下半から底部にかけての資料。底部は平坦で僅かに上げ底状を呈し、胴部は緩やかに内湾して立つ。	上端部の断面に接合痕を残す。外面はハケ整形の後ミガキ。内面底部付近で剥落がみられるが、概ねヘラナデで一部にミガキが観察される。	白色粒子少量。スコリア微量。	内面 10YR 4/2 灰黄 外面 10YR 3/1 黒褐	良好 二次焼成 ｱﾘ	胴下半 1/5～底部	底部木葉痕
03	SI05	土師器	甕	164.4	—	〈10.8〉	—	球形を呈する胴部上半の資料。	上半部に縦方向のハケ整形を行った後に中位以下は横方向のヘラケズリが行われる。内面はヘラナデ。	白色粒子やや多い。白色針状物質微量。	内面 10YR 6/4 にぶい黄橙 外面 7.5YR 6/3 にぶい褐	良好 二次焼成 ｱﾘ	体部大破片	
04	SD08 No.1 SI05	土師器	小形甕	330.8	9.8	〈10.4〉	4.6	底部は平底。胴部は上半部に最大径を有し、口縁部で外反して短く開く。	外面はヘラケズリ。口縁部は内外面共にヨコナデ。内面はヘラナデ。	雲母・白色粒子やや多い。スコリア微量。	内面 2.5YR 4/2 暗灰黄 外面 10YR 7/4 にぶい黄橙	良好	胴下半～底部 2/3 欠損	
05	SI05	土師器	坩	17.8	(9.9)	〈3.5〉	—	口縁は緩やかに外反して開き、口唇部で僅かに受ける。	内外面共に細かなミガキ。	雲母少量。白色粒子・スコリア微量。小礫微量。	内面 7.5YR 6/4 にぶい橙 外面 10YR 5/3 にぶい黄	良好	口縁部 1/4	
06	SI05	土師器	鉢	118.7	—	〈9.0〉	4.0	底部は平底でやや円盤状に突出する。胴部は緩やかに内湾して立ち、頸部に最大径を有す。口縁は緩やかに外反して開き、口唇端部は欠損している。	外面胴部はヘラケズリの後粗いミガキ。胴部下半には接合痕が残される。内面はヘラナデ。	雲母微量。白色粒子多い。	内外面 7.5YR 6/6 橙	良好	体部 1/5～底部	
07	SI05	土師器	台付甕	78.4	—	〈4.5〉	7.9	脚はやや内湾気味に垂下し、端部は僅かながら内側に折り曲げられる。甕部は欠損している。	内外面共にナデ。外面の一部にミガキがみられる。甕底部はヘラナデ。	白色粒子多い。	内面 10YR 5/4 にぶい黄 外面 10YR 6/4 にぶい黄橙	良好 二次焼成 ｱﾘ	脚部のみ	
08	SI05 No.1 ユカ 一括	土師器	器台	213.2	7.8	12.8	8.45	受け部は下端に複合口縁に類似する段を有し、やや外反気味に開く。脚部は大きく直線的に開き下端部で僅かに内湾する。円孔は３孔穿たれている。正円で直径は７㎜。	受け部外面はナデ。内面はミガキ。頸部はヘラナデ。脚部は縦方向のミガキ。受け部との貫通孔はヘラにより抉られている。内面は、接合部直下で縦方向のヘラケズリ、中位以下は横方向のミガキ。	雲母・白色粒子微量。白色針状物質微量。	内外面 10YR 7/4 にぶい橙	良好 二次焼成 ｱﾘ	ほぼ完形	内外全面赤彩
09	SI05 No.2	土師器	器台	75.6	(8.5)	〈4.8〉	—	受け部は緩やかに内湾して開く。脚部はやや外反気味に開く。孔は３単位で外面から大きく円形に穿たれる。径は不明。	外面及び受け部内面は細かなミガキ。接合部分にはハケメが僅かに残る。脚内面は縦方向のヘラケズリ。	雲母・白色粒子・黒色粒子微量。	内外面 10YR 7/3 にぶい黄橙	良好	口縁部 3/1、脚部欠損	

第5表　SI05出土遺物観察表（2）

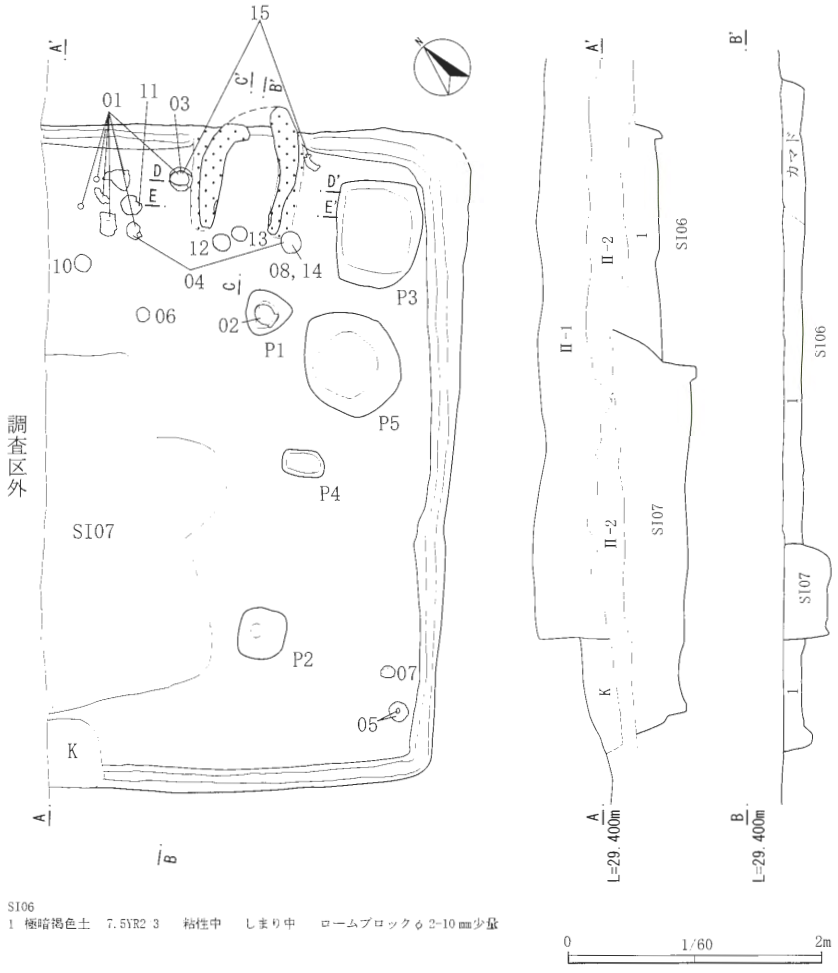
番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
10	SI05	土師器	器台	68.2	6.9	<3.7>	—	受け部はほぼ直線的に開く。口唇部は接合部直下で外反して、脚部は直線的に開く。口唇部はやや面取りされたように平坦になる。孔は3単位で外面から大きく円形に穿たれる。径は不明。	受け部内面及び外面はミガキ。脚内面はヘラケズリ。	白色粒子多い。	内外面 10YR 6/3 にぶい黄橙	良好	脚部欠損	
11	SD07	土師器	高坏	120.3	(12.5)	<10.0>	—	上塊部は椀型に近く、体部下端に稜を有す。体部はやや内湾気味に立つ。脚部は接合部で細く、裾に向かい外反気味に開く。孔は3単位で内面から穿たれる。	上塊部内外面及び外面はミガキ。内面脚部接合部付近はヘラケズリ。裾部はハケ整形が行われる。	白色粒子多い。	内外面 5YR 6/6 橙	良好	口縁～脚部 1/3	
12	SI05	土師器	手捏	13.0	—	<2.5>	4.0	底部はやや上げ底気味に作られる。体部は内湾して立ち、口縁部は欠損している。	外面底部付近に僅かにハケの痕跡が認められるが、指による整形が主となる。	雲母・白色粒子微量。	内外面 5YR 5/6 明赤褐	良好	底部1/2	

SI06（第29～31図・第6表・図版10・11・33）

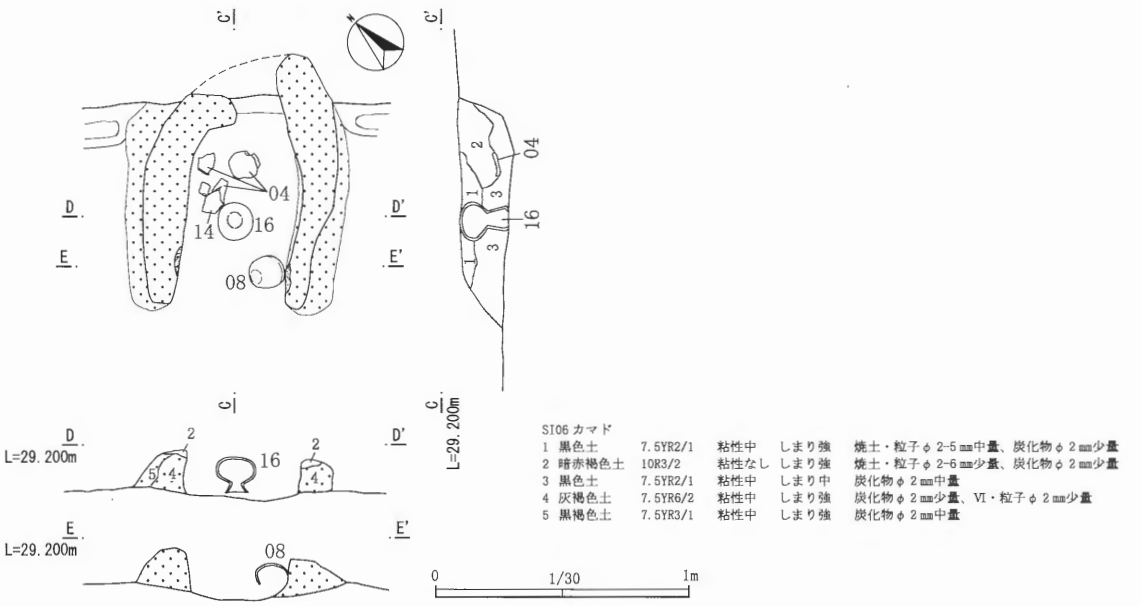
1区F-1・2,G-1・2Gに位置し、遺構の東側2/3ほどが検出され、残りは調査区外である。また調査区壁際でSI07に切られている。南北5.20m、東西現状3.25mの方形で深さは18cmである。主軸方向N-44°-E。覆土は極暗褐色土1層からなっている。床面は地山を直接掘削したもので、全体に硬い。周溝は壁際を巡っており、幅15～30cmで概ね20cm前後、深さ5cm前後を測り、調査区内では全周している。主柱穴は本来4基あるもの推定されるが、調査区内で検出されたものではP1とP2が該当すると考えられる。P1は長径38cm、短径35cmの平面円形で深さ20cm。P2は長径45cm、短軸37cmの平面楕円形で深さ52cmである。P3は長径73cm、短径60cmの平面隅丸長方形で深さ32cmを測り、形状、規模及びカマドの右側に位置することから貯蔵穴と考えられる。P4は長径89cm、短径78cmの平面円形で深さ13cm、P5は長径33cm、短径22cmの平面楕円形で深さ6cmを測る。カマドは北壁の東寄りに位置するものと思われ、壁をほとんど掘り込んでいない。規模は主軸方向100cm、直交軸方向85cmで、袖はほぼ平行に並んでいる。支脚は、燃焼部に倒置された状態で出土した土師器坩（16）が転用されたと判断される。

遺物は縄文土器406.1g、弥生土器6.5g、土師器（古墳時代後期）11,487.8g、礫（被熱破砕）158.8gを検出した。完形の坏・埦が8点検出され、カマド焚口、及び左脇の床面付近に集中する。カマド左脇には2点の甕の完形品もあり、主柱穴P1の覆土上層には完形（無破損）の甕がはまっている。甕は底部が抜かれ、坏・埦は二次焼成（底部外面に煤付着）を被るなど、やや特異な状況が認められる。覆土がやや堆積した状態で検出されていることから、主柱が抜かれ、本住居の廃絶に伴う廃棄遺物と推察される。

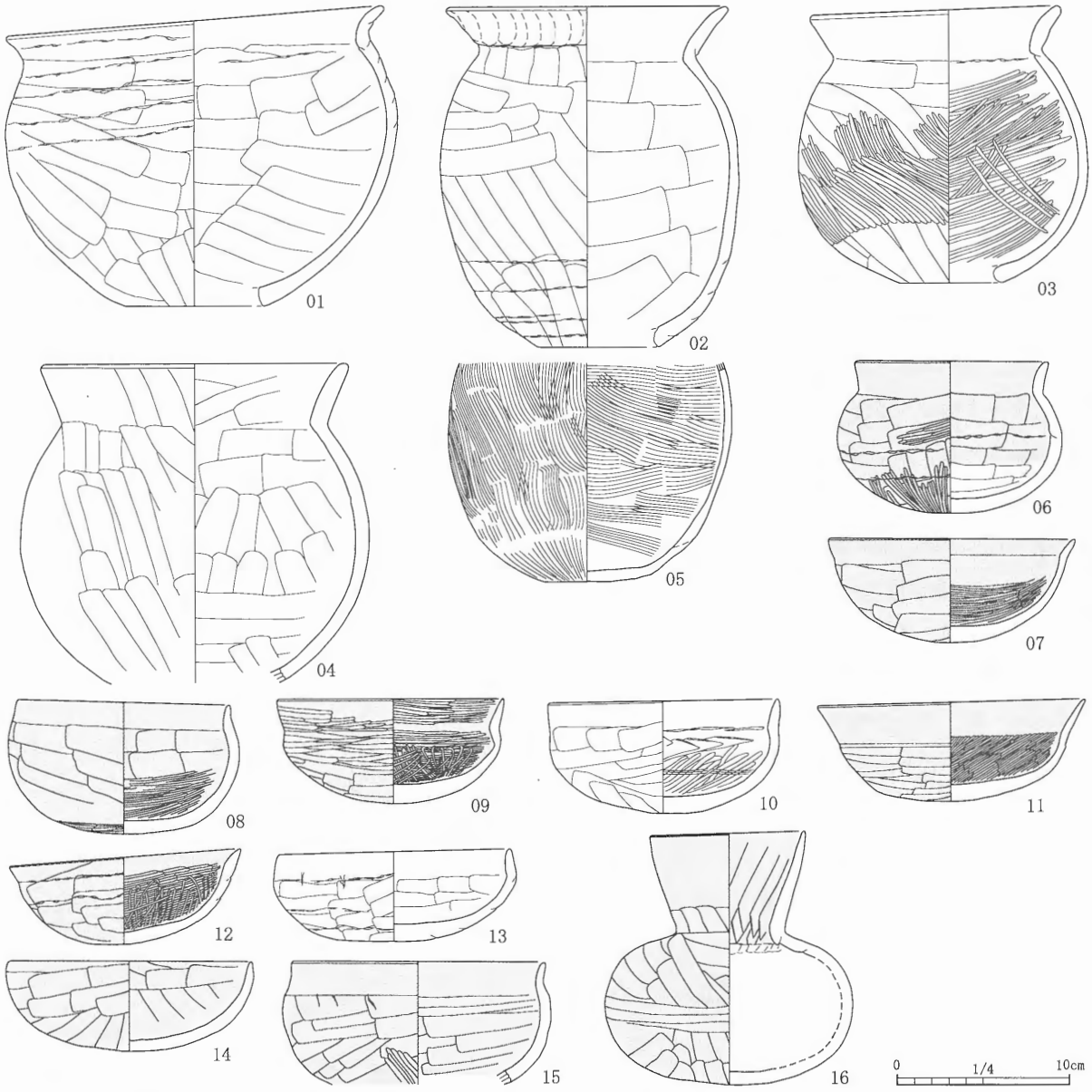
これらの遺物は5世紀末葉に位置づけられ、本遺構は古墳時代後期と判断される。



第29図　SI06



第 30 図　SI06 カマド



第 31 図　SI06 出土遺物

第６表　SI06 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	No.10・11・14・15・16・17・18	土師器	甕	1079.7	21.8	<16.8>	(8.0)	器高に対して口径が大きい鉢型の甕である。底部は平底で径が大きい。胴部はやや潰れた球形を呈し、口縁は緩やかに外反する。	内外面共口縁部はヨコナデ。胴部は外面ヘラケズリ。内面はヘラナデ内外面共に口縁～胴部上半にかけて輪積痕を残す。	雲母少量。白色粒子・小礫多い。	内面 7.5YR 4/1 褐灰 外面 10YR 6/3 にぶい黄橙	良好	口縁部一部、底部欠損	
02	No.21	土師器	甕	1203.4	16.0	<20.0>	(7.0)	胴部はやや長胴気味で、パイナップル型を呈する。底部は平底であろうか、欠損している。破断面を観察するとやや摩耗痕がみられることから、甕に転用された可能性がある。口縁は「く」の字に外反して開く。	口縁部は指による整状の圧痕列が施される。括れ部には口縁の折り返し痕が残る。外面胴部はヘラケズリ。内面はヘラナデ。外面胴部下半には輪積痕跡が残る。	白色粒子多い。	内面 10YR 6/3 にぶい黄橙 外面 5YR 4/6 赤褐	良好	口縁部一部、底部欠損	
03	No.10	土師器	甕	761.1	(14.2)	<15.8>	(5.8)	胴部はやや潰れた球形。底部は意識的に打ち欠かれ、破断面にケズリを施し、甕に転用する。口縁は「く」の字に屈曲して開く。口縁部は厚みがある。	外面胴部はヘラケズリの後胴中央部付近のみミガキが施される。口縁部は内外面共にヨコナデ。内面は粗いミガキ。	雲母少量。白色粒子やや多い。	内面 2.5YR 3/4 暗赤褐 外面 5YR 5/6 明赤褐	良好	口縁部一部、底部欠損	
04	カマド カマド04・06・07 No.07・14	土師器	甕	528.3	—	<12.6>	4.6	胴部は球形。口縁は「く」の字に屈曲し直線的に開く。	口縁部は折り返されて厚みを有す。口縁部～胴部に至るまで外面はヘラケズリ。内面はヘラナデ。	白色粒子微量。	内面 5YR 6/4 にぶい橙 外面 10YR 7/4 にぶい黄橙	良好	口縁部～頭部欠損	
05	No.01・02	土師器	甕	472.5	(17.4)	<18.8>	—	底部は丸みを帯びた平底で、胴部は内湾気味に立つ。上半から口縁にかけて欠損する。	外面は底部に至るまで粗いハケ整形の後にナデが施される。内面は粗いハケ整形。	白色粒子微量。	内面 5YR 4/4 にぶい赤褐 外面 5YR 5/4 にぶい赤褐	良好	口縁部欠損	
06	No.19	土師器	坩	441.4	(11.0)	9.05	丸底	底部は丸底で体部はやや潰れた球形に近く口縁部は屈曲して僅かに開いて立つ。	口縁は内外共にヨコナデ。外面体部はヘラケズリ後ヘラナデ。その後底部付近にミガキが施される。内外面に輪積痕がみられる。	雲母少量。白色粒子・小礫多い。	内面 7.5YR 5/3 にぶい褐 外面 7.5YR 6/4 にぶい橙	良好 二次焼成 ??	ほぼ完形	外面全面・内面口縁～胴上半部赤彩
07	No.03	土師器	坩	267.2	14.3	6.2	丸底	底部は丸底で体部は緩やかに内湾する。口縁部は内面に段を有し僅かながら外反気味に開く。	口縁部は内外面共にヨコナデ。外面体部はヘラケズリの後ヘラナデ。内面は見込み部分のみ磨かれる。	白色粒子多い。	内面 7.5YR 3/2 黒褐 外面 5YR 4/6 赤褐	良好 二次焼成 ??	ほぼ完形	内外全面赤彩
08	No.07 カマド01	土師器	坩	351.7	12.3	7.7	丸底	底部は丸底。体部は緩やかに内湾する。口縁はやや外反気味に立ち、薄くなる。	外面体部は剥落が激しいがヘラケズリの後にミガキが施されていたものと判断される。口縁部は内外共にヨコナデ。内面体部はヘラナデの後に見込み付近も磨かれる。	雲母少量。白色粒子多い。	内外面 5YR 5/6 明赤褐	良好 二次焼成 ??	ほぼ完形	内外全面赤彩
09	No.13	土師器	坩	223.0	13.2	6.1	丸底	底部は丸底で体部下半は内湾する。上半部で僅かながら屈曲して外反後直線的に開く。	外面体部はヘラケズリ。体部上半は横方向のミガキ。内面は口辺で横方向見込みでは縦方向のミガキが加わる。	雲母やや多い。白色粒子少量。スコリアややや多い。	内面 5YR 5/6 明赤褐 外面 5YR 5/4 にぶい赤褐	良好 二次焼成 ??	口縁部１３欠損	内外全面赤彩
10	No.20	土師器	坩	304.8	13.3	6.5	丸底	底部は丸底で体部下半は内湾する。上半部で僅かながら屈曲して外反後直線的に開く。	外面体部はヘラケズリ。口縁は内外ともにヨコナデ。内面は木口痕が多数観察され中位に３本１単位のハケメも観察される。底部から中位にかけて見込み部分には粗いミガキが施される。	雲母・スコリアやや多い。白色粒子少量。	内面 10YR 7/4 にぶい黄橙 外面 7.5YR 6/4 にぶい橙	良好 二次焼成 ??	ほぼ完形	
11	No.12	土師器	坩	233.3	15.4	5.75	丸底	やや大振りの坩。底部は丸底で体部は内湾気味に立ち、口辺部で緩やかに外反して開く。口辺と体部の境には僅かな段を有す。	外面体部は横方向のヘラによるミガキ。口辺は内外共にヨコナデ。見込み部分は細かなミガキ。	雲母・白色粒子やや多い。スコリア・小礫微量。	内外面 5YR 5/6 明赤褐	良好	口縁部１４欠損	内外全面赤彩
12	No.09	土師器	坩	216.6	13.3	5.0	丸底	底部は丸底。体部は緩やかに内湾する。口縁はやや外反気味に立つ。	外面体部はヘラケズリ。部分的にミガキの可能性もある。口辺は内外面共にヨコナデ。内面は横後縦方向の細かなミガキ。外面に輪積痕を残す。	雲母少量。白色粒子多い。スコリア微量。	内外面 7.5YR 6/4 にぶい橙	良好 二次焼成 ??	ほぼ完形	内外全面赤彩
13	No.08	土師器	坩	262.5	13.4	5.2	丸底	底部は丸底。体部は内湾し口縁は僅かに屈曲して内傾する。	外面体部は下半で粗いヘラケズリ。上半ではナデ。口縁は内外面共にヨコナデで、内面体部はヘラナデ。外面体部に輪積痕を残す。	雲母多い。白色粒子・小礫ややや多い。	内外面 5YR 4/6 赤褐	良好	ほぼ完形	
14	No.07 カマド03	土師器	坩	198.4	14.1	5.2	丸底	底部は丸底。体部は緩やかに内湾し口縁は内湾気味に立つ。	外面底部から体部下半はヘラケズリ。上半から内面口縁部はナデ。内面身込み部分は剥落している。	雲母少量。白色粒子多い。	内外面 5YR 5/8 明赤褐	良好 二次焼成 ??	１３欠損	内外全面赤彩
15	No.06・10	土師器	坩	131.6	(14.7)	<7.2>	—	底部は欠損しているが丸底であろう。体部は緩やかに内湾してやや張みがある。口辺は外反して緩やかに開く。	外面体部はヘラナデの後部分的にミガキ。口縁は内外面共ヨコナデ。内面はヘラナデ。	雲母やや多い。白色粒子少量。	内外面 5YR 5/6 明赤褐	良好 二次焼成 ??	口縁部～体部１３	内外全面赤彩
16	カマド02	土師器	坩	651.9	8.9	14.3	丸底	底部は丸底で胴部は潰れた球形で横に大きく張り出す。頭部は屈曲して直線的に開き気味に立つ。	外面は本来ミガキが施されていたものと想定されるが二次焼成により剥落している。ミガキ以前のナデ整形の痕跡が観察される。内面はヘラナデの痕跡がみられる。二次焼成により外面の赤彩は消滅している。	雲母微量。白色粒子・黒色粒子少量。小礫多い。	内面 2.5YR 4/6 赤褐 外面 10YR 6/4 にぶい黄橙	良好 二次焼成 ??	完形	外面全面・内面口縁部赤彩

SI11（第 32・33 図・第７表・図版 11・34）

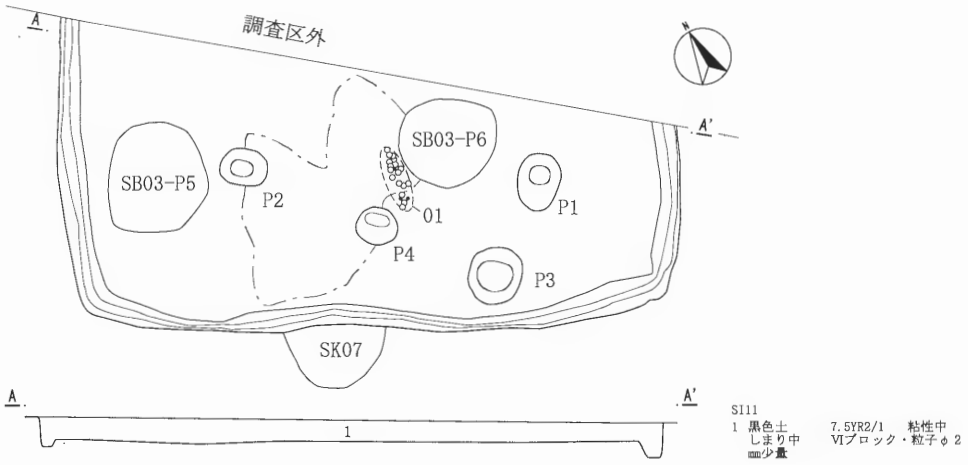
２区 J-1G に位置し、遺構の南壁際付近が検出されたが、大半は調査区外である。SK07・SB03-P5・６に切られている。東西 4.80 m、南北現状 2.35 mの推定長方形で深さ 20cm である。主軸方向 N-34°-E。床は貼床が施され、硬化面は P1 と P2 の間から南壁の間を範囲としている。遺構内にはピット４基が検出されている。P1 は長径 48cm、短径 38cm の平面楕円形で深さ 51cm。P2 は長径 40cm、短径 29cm の平面楕円形で深さ 114cm。P3 は長径 48cm、短径 41cm の平面円形で深さ 20cm。P4 は長径 32cm、短径 30cm の平面円形で深さ 35cm を測る。P1・2 は配置から主柱穴、P4 は入口ピット（梯子穴）、P3 は貯蔵穴と判断される。

周溝は、壁際を幅８～ 26cm、深さ３～ 12cm で穿たれており、全周していたものと推定される。調査区からは

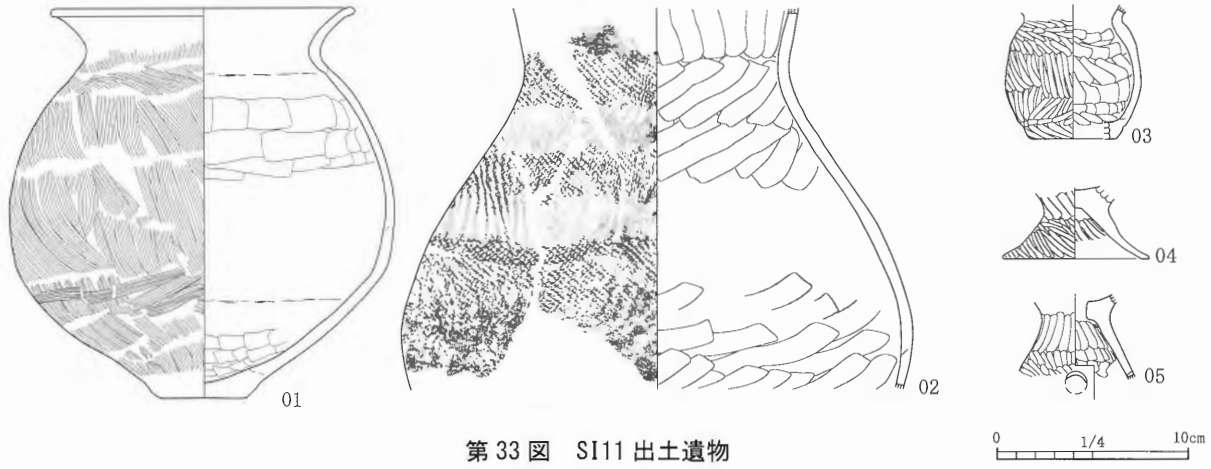
炉は検出されなかった。

遺物は縄文土器 357.3g、弥生土器 709.9g、土師器（古墳時代前期）1,511.9g、須恵器（平安時代）377.6g、埴輪 56.3g、礫（被熱破砕）65.0g を検出した。須恵器は 9 世紀前半のもので、重複する SB03 関連の混在と判断される。01 の土師器甕はほぼ完形で、中央部床面上で潰れた状態で出土。一部、SB03 の柱穴 P6 に壊されている。他は覆土中から床面にかけて検出された。

これらの遺物から、本遺構は古墳時代前期と判断される。



第 32 図　SI11



第 33 図　SI11 出土遺物

第 7 表　SI11 出土遺物観察表

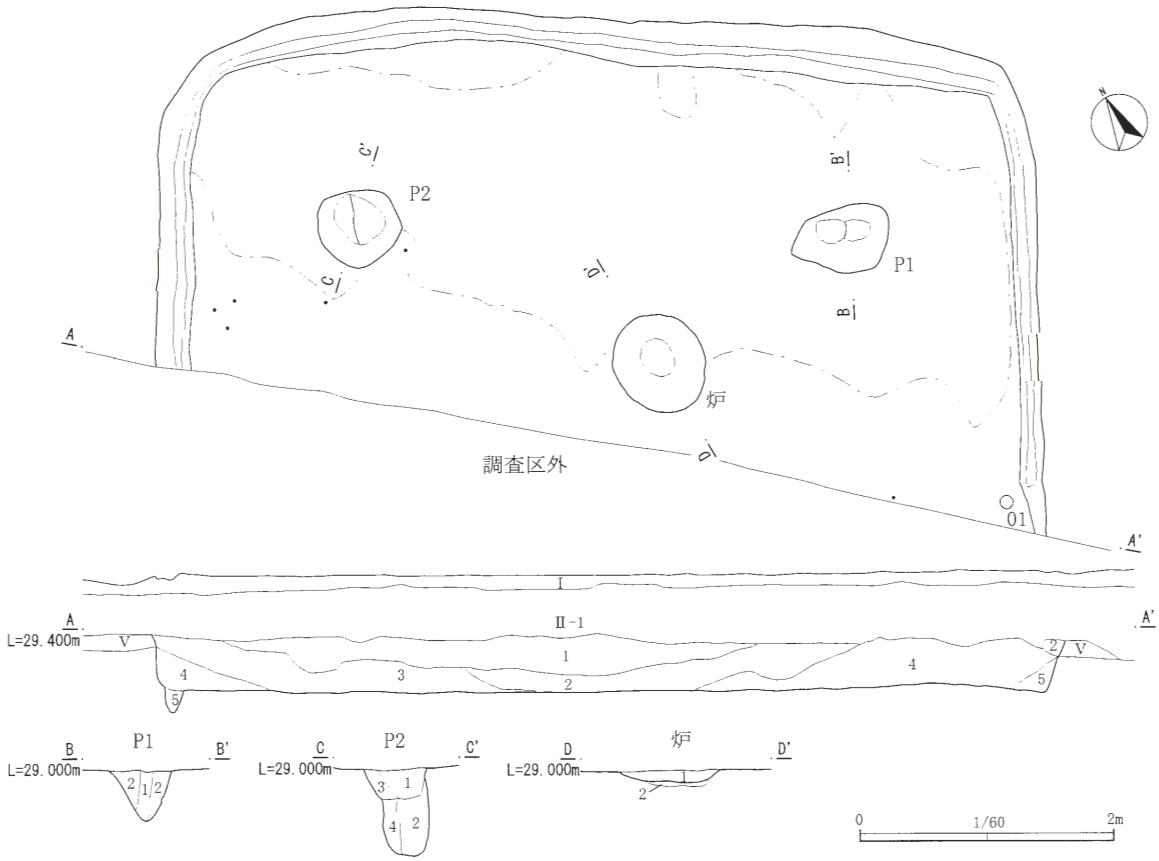
番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
1	No.01・03・04・05・06・07・08・09・10・11・13・14・15・16・17・18・19・22 一括	土師器	甕	955.5	15.4	20.6	4.5	底部は円盤状にやや突出する平底。胴部は球形を呈し、口縁は「く」の字に外反し、口唇部はやや面取りされる。	外面底部はヘラナデ。胴部はハケ整形。口縁部は内外共にナデ。内面はヘラナデが行われ、胴部下半に接合痕が観察される。	白色粒子少量。スコリア微量。	内外面 7.5YR 6/4 にぶい橙	良好 二次焼成ｱﾘ	一部欠損	
2	一括	弥生	壺	528.3	—	〈20.1〉	—	胴部は球形でやや下膨れか。頸部は大きく外反して開く。口縁部及び底部は欠損している。	外面胴部は 3 段に亘り帯状の単節 RL 縄文が施文され、帯状施文の間は磨かれる。内面はヘラナデが行われ部分的に剥落がみられる。	白色粒子多い。	内面 10YR 7/6 明黄褐 外面 5YR 6/6 橙	良好	頸部～体部上端	
3	一括	土師器	坩	56.0	—	〈7.1〉	(4.4)	底部は平底でやや広い。胴部はややパイナップル状を呈し、口縁部は緩やかに外反して開く。口縁部は欠損する。整形痕から坩とした。	外面はミガキ。内面はヘラナデ。	雲母少量。白色粒子やや多い。	内面 5YR 4/6 赤褐 外面 7.5YR 6/6 橙	良好	体部 1/2	
4	一括	土師器	高坏	61.8	—	〈3.7〉	7.7	脚部は短く、緩やかに外反して開く。接合部分から上半は折損している。	外面はミガキ。脚内面は指ナデ。	白色粒子やや多い。スコリア微量。	内外面 7.5YR 7/6 橙	良好	脚柱部一部欠損	
5	一括	土師器	器台	60.2	—	〈4.6〉	—	脚部は直線的に開く。裾部及び受け部は欠損している。貫通孔は直径 12 mmを測る。脚側面に円孔が穿たれている。孔径、孔の数は不明。	脚外面はミガキ。内面はヘラナデ。	白色粒子やや多い。黒色粒子少量。	内外面 5YR 5/6 明赤褐	良好	脚部上端部	

SI14（第34・35図・第8表・図版11・34）

2区G-1・2Gに位置し、遺構の北半分が検出され、南半分は調査区外になっている。南北現状3.60m、東西6.85mの推定長方形で、深さは25～42cmを測る。主軸方向N-30°-E。覆土は暗褐色土から極暗褐色土に至る5層のレンズ状堆積である。床面は貼床を施し、炉付近から北壁際にかけて硬化している。調査区内では幅19～40cmの周溝が遺構の壁際を巡っていることから、調査区外でも続いて全周しているものと判断される。主柱穴はP1・2の2基が存在する。P1は長径70cm、短径40cmの平面楕円形で深さ63cm。覆土は黒色土を基調に2層が存在し、第1層が柱根となり、柱幅8cmを測る。P2は長径65cm、短径59cmの平面円形で深さ67cmを測る。覆土は黒色土から極暗褐色土に至る4層となっており、第1・2層が柱根となり柱幅は25cmを測る。炉は主柱穴P1・2の中間からやや住居中央に寄ったところに位置している。規模と形状は長径80cm、短径69cm、深さ11cmを測り、覆土は第1層の黒色土で、第2層は被熱したために明赤褐色土となった地山Ⅵ層と判断される。

遺物は縄文土器136.9g、弥生土器35.6g、土師器（古墳時代前期）1,166.5g、埴輪39.9g、礫（被熱破砕）25.7gを検出した。01の土師器椀は南側壁際の床面上で検出したが、第5層の三角堆積に含まれる。他は覆土中から出土した。

これらの遺物から、本遺構は古墳時代前期と判断される。



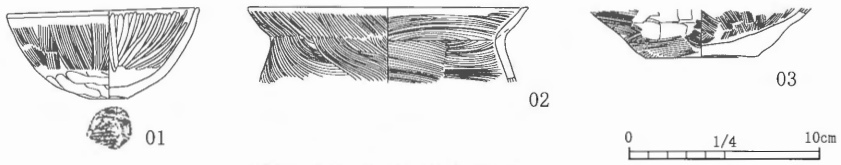
第34図　SI14

SI14
1 暗褐色土　7.5YR3/4　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ2-30㎜主体
2 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ2㎜少量
3 暗褐色土　7.5YR3/4　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ2-30㎜主体
4 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ2㎜少量、炭化物・粒子φ2㎜主体
5 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ2㎜少量

SI14-炉
1 黒色土　粘性中　しまり弱　Ⅵブロック・粒子φ2㎜少量、炭化物・粒子φ2㎜主体
2 明赤褐色土　粘性なし　しまり強

SI14-P1
1 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり弱　Ⅵブロック・粒子φ2-10㎜少量、炭化物・粒子φ2㎜中量
2 黒褐色土　7.5YR3/1　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ2-10㎜中量、炭化物・粒子φ2㎜少量

SI14-P2
1 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり弱　Ⅵブロック・粒子φ2-10㎜少量、炭化物・粒子φ2㎜中量
2 黒褐色土　7.5YR3/1　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ2-10㎜主体、炭化物・粒子φ2㎜中量
3 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ2-10㎜少量、炭化物・粒子φ2㎜少量
4 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ2-10㎜中量



第 35 図　SI14 出土遺物

第 8 表　SI14 出土遺物観察表

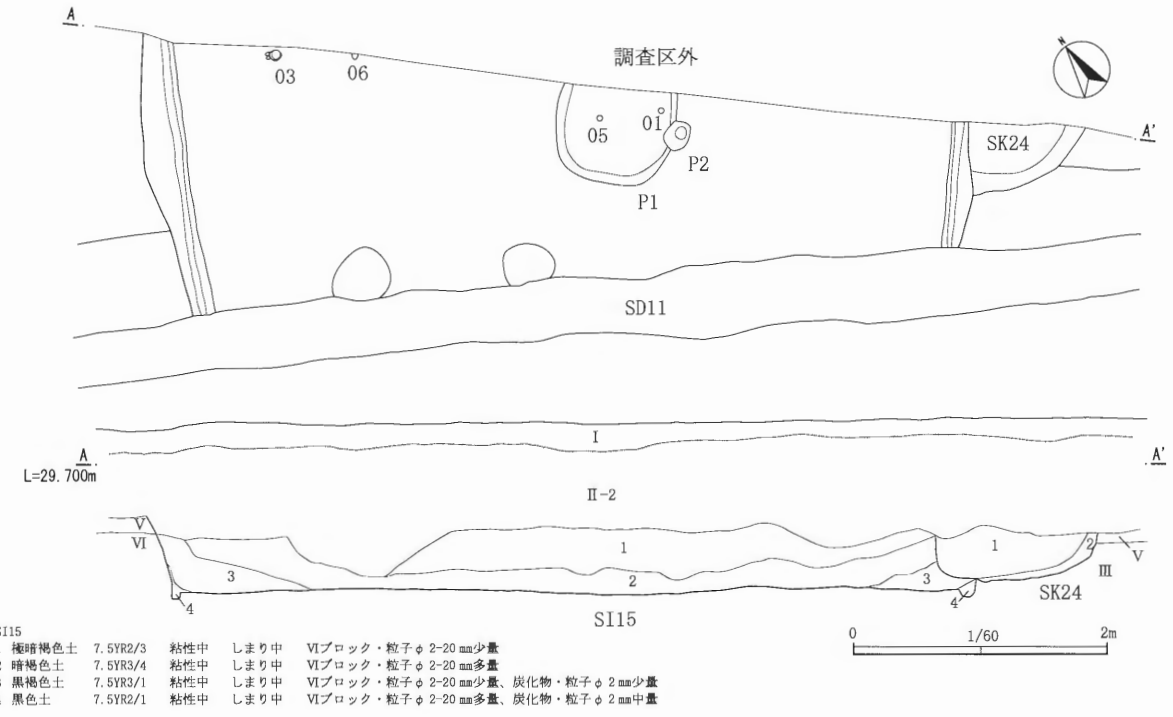
番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	No. 01	土師器	埦	116.7	10.5	4.65	2.2	底部は小形の平底で、体部は緩やかに内湾して立つ。	外面体部はヘラケズリを行った後に、下端を残し上半部はハケ整形を行う。口唇部はヨコナデ。内面はミガキ。底部はケズリによって上げ底状になる。	白色粒子・小礫やや多い。	内外面 7.5YR 6/4 にぶい橙	良好	ほぼ完形	
02	一括	土師器	甕	26.0	(14.2)	<3.95>	—	胴部は欠損する。頸部で「く」の字に屈曲し口縁はやや受けて開く。口唇端部の形状は不安定、明確な面を作らない。	内外面共にハケ整形。口縁部のヨコナデは認められない。	白色粒子多い。小礫少量。	内外面 10YR 5/4 にぶい黄褐	良好	口縁部破片	
03	一括	土師器	甕	63.7	—	<2.5>	6.2	底部は平底。胴部は大きく開いて立つ。上半から口縁部は欠損。	内外面共にハケ整形。底部にもハケメあり。外面胴部には部分的にナデによりハケメが消される。	白色粒子やや多い。スコリア少量。	内外面 7.5YR 6/4 にぶい橙	良好	裾部～底部 1/2	

SI15（第 36・37 図・第 9 表・図版 12・34）

2 区 H-1･2, I-2G に位置し、遺構の南側が検出されているが、調査区壁際で SK24 に、また遺構の南壁を SD11 に切られている。南北現状 2.15 m、東西 6.10 mの推定長方形で深さ 45cm を測る。調査区内で炉・カマドが検出されなかったので、主軸方向を北として扱うことにした。主軸方向 N-33°-E。土層は極暗褐色土から黒色土に至る 4 層からなるレンズ状堆積である。床面は全体に硬化しており、貼床が存在する。周溝は遺存している東西の壁際で検出され、幅 14 ～ 34cm、深さ 5cm 前後を測る。調査区壁際の床下から土坑とピットが 1 基ずつ検出されている。P1（土坑）は、遺構の北側が調査区外となっているが、長径現状 97cm、短径 77cm の推定楕円形と判断される。P2 は長径 25cm、短径 20cm、深さ 10cm で P1 を切っている。

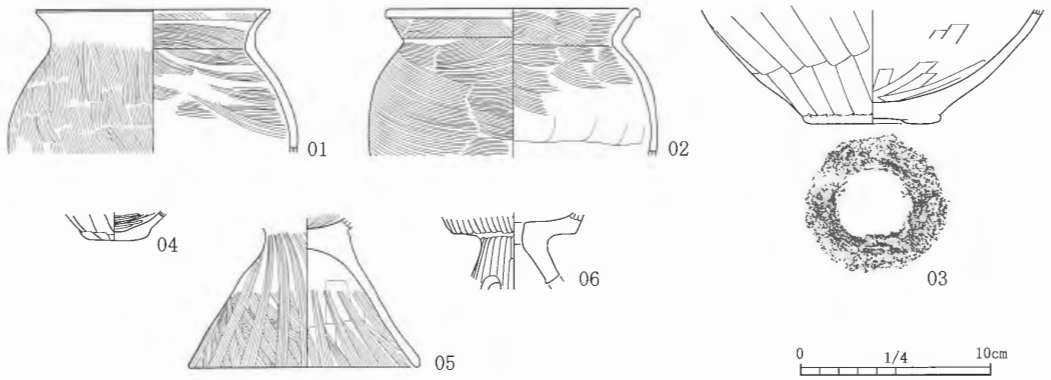
遺物は縄文土器 94.9g、土師器（古墳時代前期）1,371.4g、須恵器（平安時代）1 点･9.2g、礫（被熱破砕）5.6g を検出した。須恵器は 9 世紀前半の無台坏で、SD11 由来のものと判断できる。03 の土師器甕と 06 の同器台は調査区壁際の床面上で検出、甕 01 と高坏 05 は P1 覆土から出土したものである。

これらの遺物から、本遺構は古墳時代前期と判断される。



SI15
1　極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子φ 2-20 mm少量
2　暗褐色土　7.5YR3/4　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子φ 2-20 mm多量
3　黒褐色土　7.5YR3/1　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子φ 2-20 mm少量、炭化物・粒子φ 2 mm少量
4　黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子φ 2-20 mm多量、炭化物・粒子φ 2 mm中量

第 36 図　SI15



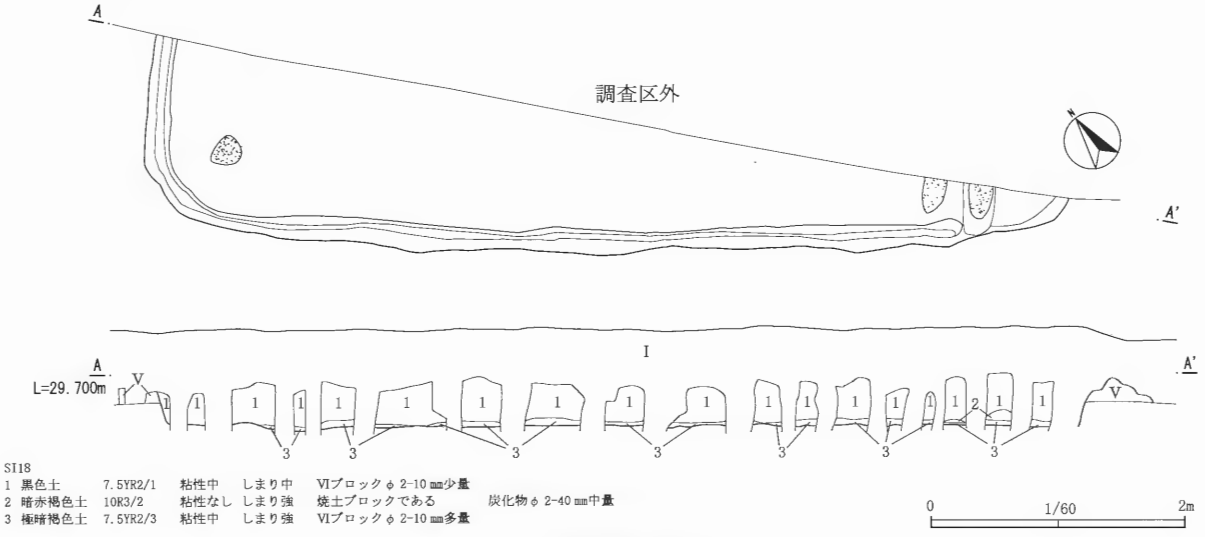
第37図　SI15出土遺物

第9表　SI15出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	No.04	土師器	甕	85.6	(12.8)	〈7.6〉	—	胴部は球形ぁ。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部はやや外反する。胴下半から底部にかけて欠損する。	外面胴部は縦方向のハケ。口縁部はヨコナデ。内面口縁部から胴部にかけて横方向のハケ整形。	白色粒子多い。	内面 10YR 6/4 にぶい黄橙 外面 5YR 5/6 明赤褐	良好	口縁部～体部上端	
02	一括	土師器	甕	69.1	(13.7)	〈7.9〉	—	胴部はやや直線的に立ち、肩部で内湾して頸部に至る。頸部は「く」の字に外反して口唇部は面取られる。	口唇部はヨコナデ。外面胴部から頸部にかけてやや細かなハケ整形。内面は上半で横方向のハケ整形。下半はヘラナデ。	白色粒子やや多い。赤色パミス少量。	内面 10YR 6/4 にぶい黄橙 外面 10YR 2/1 黒	良好 二次焼成ｱﾘ	口縁部～体部上端	
03	No.01	土師器	甕	256.3	—	〈6.0〉	7.1	底部は平底で、中央部分が輪台状に窪む。胴部は球形を呈する。胴上半から口縁は欠損。	外面胴部は縦方向のヘラナデ。内面は斜め方向のヘラナデ。	白色粒子多量。	内面 10YR 5/4 にぶい黄橙 外面 10YR 6/6 明黄褐	良好	胴部下半～底部	
04	一括	土師器	小形壺	22.4	—	〈1.5〉	3.5	底部は平底。体部は外反気味に開く。胴上半より口縁は欠損。	外面はヘラナデ。内面はミガキ。	白色粒子やや多い。スコリア微量。	内面 7.5YR 6/6 橙 外面 7.5YR 6/4 にぶい橙	良好	体部裾部～底部	
05	No.03	土師器	高坏	192.1	—	〈7.7〉	11.7	脚部はやや外反気味に開く。上塊部は欠損している。	脚内外面共にハケ整形。上塊部にもハケが観察される。	白色粒子多い。小礫含む。	内面 5YR 5/6 明赤褐 外面 7.5YR 6/4 にぶい橙	良好	脚柱部 1/3 欠損	
06	No.02	土師器	器台	101.8	—	〈3.8〉	—	接合部分の資料。受け部は水平に開いた後、屈曲して立つ。脚部は緩やかに外反して開く。脚柱部には中央付近に円孔が穿たれる。単位は不明。受け部との貫通孔は径7～10㎜で上端が広くなる。	脚外面及び受け部下端はミガキ。脚内面はナデ。	白色粒子少量。黒色粒子・スコリア微量。	内面 7.5YR 6/4 にぶい橙 外面 7.5YR 6/6 橙	良好	接合部分のみ	

SI18（第38図・図版12）

4区C-1Gに位置し、遺構の南壁際付近が検出されている。南北に走行する複数のトレンチャーにより遺構が著しく破損している。調査区外に炉があると仮定して主軸方向を北とした。主軸方向N-42°-E。南北現状1.30m、東西7.30mの推定平面長方形で深さ20cm。覆土は、黒色土・暗赤褐色土（焼土・炭化物）・極暗褐色土の3層からなる。焼土及び炭化物からなる第2層は厚さ10cm前後で、南側コーナーに堆積していた。調査区内で検出された壁際の床面では、硬化したところはみられない。深さ10cm弱の貼床が存在した。周溝は幅12～20cm、深さ10cm弱で壁際を巡り、両端は北側の調査区外に続いている。



SI18
1　黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　Ⅵブロックφ2-10㎜少量
2　暗赤褐色土　10R3/2　粘性なし　しまり強　焼土ブロックである　炭化物φ2-40㎜中量
3　極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり強　Ⅵブロックφ2-10㎜多量

第38図　SI18

遺物は弥生土器29.3g、土師器(古墳時代前期)42.3gを検出した。確認面からの深さが浅く、トレンチャーによって半分ほどが切られているので、遺物も細片が少量出土したに過ぎない。弥生土器としたものは十王台式土器で、肩部に下向きの連弧文（2本1単位)、櫛描き波状文の下位に無文部分があるもの、極めて薄手のものなどが見られる。土師器には口縁端部が丸い甕が認められる。

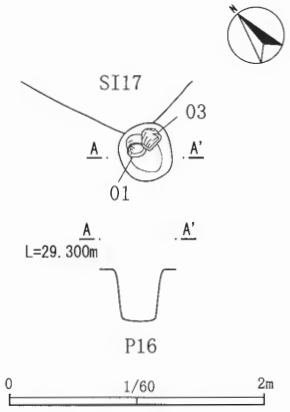
これらの遺物から、本遺構は古墳時代前期と判断される。

第2項　ピット

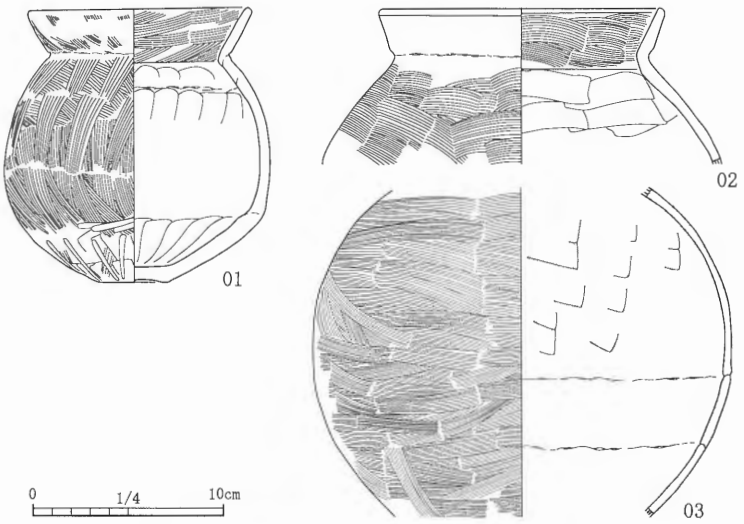
P16（第39・40図・第10表・図版12・34)

2区C-1Gに位置し、SI17に切られる。直径42cm、深さ42cmの平面円形で、断面は筒形の柱穴状を呈する。覆土は黒色土を基調とする。中には土師器の甕01～03が埋まっていた。01は無傷の完形品で、口縁を上にやや傾いた状態で、覆土のほぼ中位に位置する。02・03は成整形・ハケメ・状態から同一個体と見られる。確認面直下、01の上に位置し、03の胴部大破片は横倒しの状態であるが、覆土中の状態や破片の検出状況を見ると、埋没時から破片状態であったものと考えられる。これらの土器は古墳時代前期に位置づけられるものである。

南側にはほぼ同時期の溝SD14が存在するが、具体的な関連を指摘することは難しい。



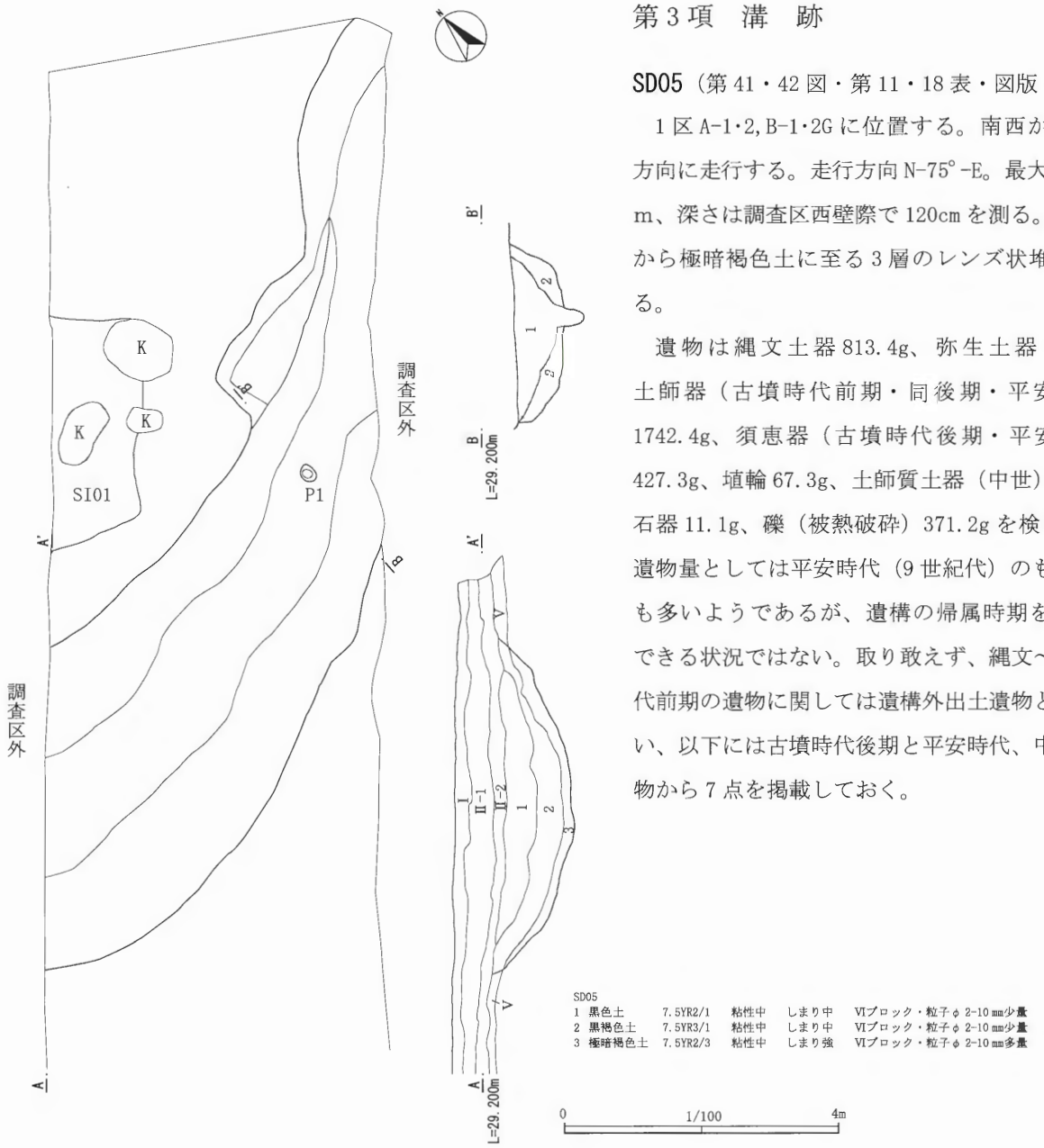
第39図　P16



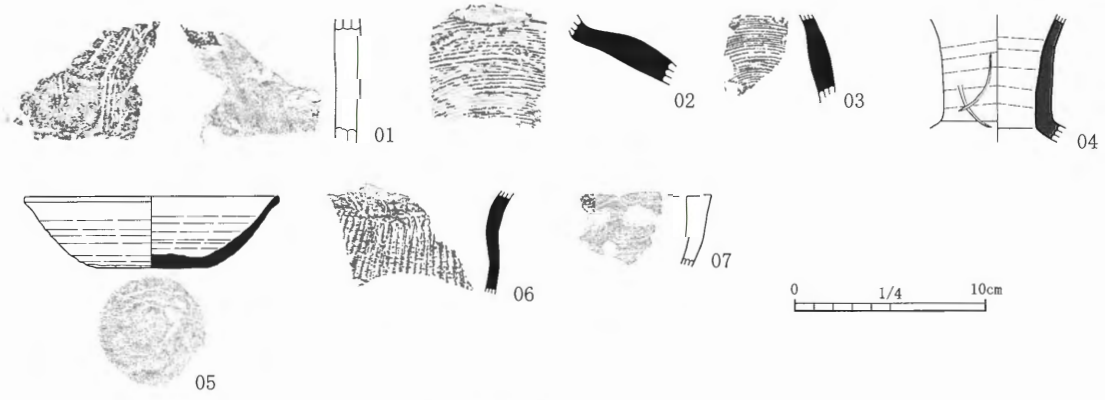
第40図　P16出土遺物

第10表　P16出土遺物

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	No.01	土師器	甕	594.9	10.8	14.2	3.7	底部は僅かながら輪台状に窪む。胴部は下半で大きく開いた後、下端で屈曲して上半は球形になる。頸部は「く」の字に屈曲してやや受け気味に開く。	外面胴部はハケ整形。下端部はミガキが行われ、ハケ整形は部分的に観察される。口縁部は内外共にハケ整形の後ナデ。内面胴部はヘラナデ。屈曲部の内面には接合痕がみられ接合部の上位と下位では内面の整形が異なっている。	雲母・白色粒子やや多い。	内外面 7.5YR 6/6 橙	良好	完形	
02	一括	土師器	甕	155.8	(14.6)	(8.0)	—	ほぼ球形の胴部。口縁及び底部は欠損している。	外面は全面に横方向の細かなハケ整形。内面はヘラナデ。胴部中位と下位に接合痕を残す。	雲母少量。白色粒子・小礫多い。	内面 5YR 5/8 明赤褐 外面 5YR 5/6 明赤褐	良好	口縁部～体部上端1/3	03と同一個体と見られる。
03	No.02 一括	土師器	甕	390.3	—	(17.0	—	胴部は球形ぁ、頸部は屈曲して「く」の字に外反して開く。口縁は折り返して、頸部直上に段を持つ。	外面胴部は横方向のハケ整形。口縁部はナデ。内面口縁部は横ハケ。胴部はヘラナデ。	雲母・白色粒子・小礫やや多い。	内面 7.5YR 6/6 橙 外面 7.5YR 4/2 灰褐	良好	体部大破片	02と同一個体と見られる。



第41図　SD05



第42図　SD05出土遺物

第3項　溝　跡

SD05（第41・42図・第11・18表・図版12・34）

1区A-1・2,B-1・2Gに位置する。南西から北東方向に走行する。走行方向N-75°-E。最大幅3.35m、深さは調査区西壁際で120cmを測る。黒色土から極暗褐色土に至る3層のレンズ状堆積である。

遺物は縄文土器813.4g、弥生土器334.4g、土師器（古墳時代前期・同後期・平安時代）1742.4g、須恵器（古墳時代後期・平安時代）427.3g、埴輪67.3g、土師質土器（中世）19.1g、石器11.1g、礫（被熱破砕）371.2gを検出した。遺物量としては平安時代（9世紀代）のものが最も多いようであるが、遺構の帰属時期を明確にできる状況ではない。取り敢えず、縄文～古墳時代前期の遺物に関しては遺構外出土遺物として扱い、以下には古墳時代後期と平安時代、中世の遺物から7点を掲載しておく。

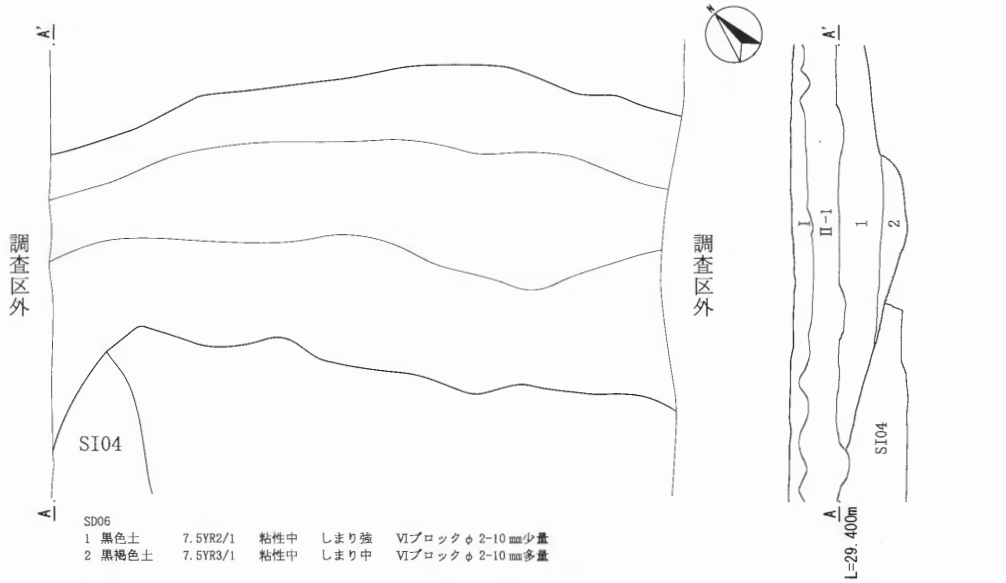
第 11 表　SD05 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	第 18 表に記載													
02	1 層	須恵器	提瓶	75.4	—	—	—	胴部は内湾し、頸部で僅かに立ち上がる。	同心円状の擦き目。	白色粒子少量。	内外面 2.5Y 6/1 黄灰	良好	体部破片	
03	一括	須恵器	提瓶	18.1	—	—	—	内湾する胴部破片。	同心円状の擦き目。	白色粒子少量。	内面 2.5Y 6/1 黄灰 外面 2.5Y 5/1 黄灰	良好	体部破片	
04	一括	須恵器	提瓶	92.6	—	〈6.55〉	—	頸部は「く」の字に屈曲して筒状に立つ。口縁部は緩やかに外反するが端部は欠損している。	内外面ロクロ整形。胴部内面は垂直方向のロクロ目。	白色粒子やや多い。	内外面 2.5Y 6/1 黄灰	良好	口縁部・胴部欠損	外面頸部ヘラ記号「〆」
05	1 層	須恵器	無台坏	78.8	(13.2)	〈3.65〉	5.8	底部は平底。体部は下端部で丸みを帯び、やや内湾気味に開く。口唇直下で僅かに外反肥厚する。	底部は回転ヘラ起こしの後ヘラ整形される。体部下端は手持ちヘラケズリ。赤彩が施されていた可能性がある。外面体部には煤が付着する。	白色粒子・小礫やや多い。	内面 10YR 5/1 褐灰 外面 10YR 5/2 灰黄褐	良好 二次焼成ｱﾘ	体部破片	
06	一括	須恵器	甕	24.9	—	—	—	頸部付近の破片。胴部は内湾し頸部でやや外反する。	外面には擬格子叩きが施され、内面は当具痕がみられる。頸部付近は内外共にヨコナデ。	雲母多い。白色粒子少量。	内面 2.5Y 4/2 暗灰黄 外面 2.5Y 5/2 暗灰黄	良好	体部破片	
07	一括	土師質土器	焙烙	19.1	—	—	—	焙烙の口縁部破片である。口唇部は平坦に面取りされ、体部はやや内湾する。	内外面共にナデ整形を行う。外面は黒化している。	雲母多い。	内面 7.5YR 6/4 にぶい橙 外面 10YR 3/1 黒褐	良好	口縁部破片	

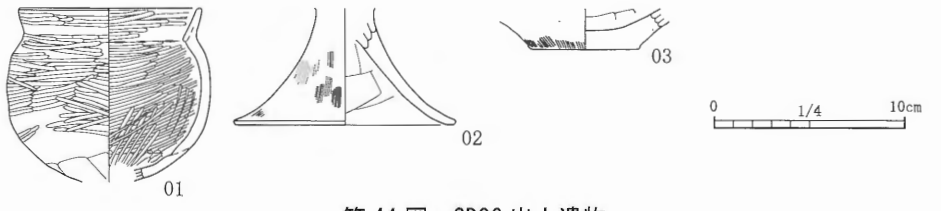
SD06（第 43・44 図・第 12 表・図版 12・35）

1 区 D-1・2G に位置し、SI04 を切り、東西に走行する。走行方向 N-49°-W。最大幅は調査区東壁際付近で 2.40 m、深さは調査区西壁際で 54cm を測る。黒色土・黒褐色土の 2 層からなる弱いレンズ状堆積である。

遺物は縄文土器 354.7g、土師器（古墳時代前期）613.9g、須恵器（平安時代）1 点・64.4g、礫（被熱破砕）82.7g を検出した。須恵器は 9 世紀代の甕胴部破片で、混入物と考えられる。後述の SD07 と覆土は類似しており、これらの遺物から、本遺構は古墳時代前～中期と判断される。



第 43 図　SD06



第 44 図　SD06 出土遺物

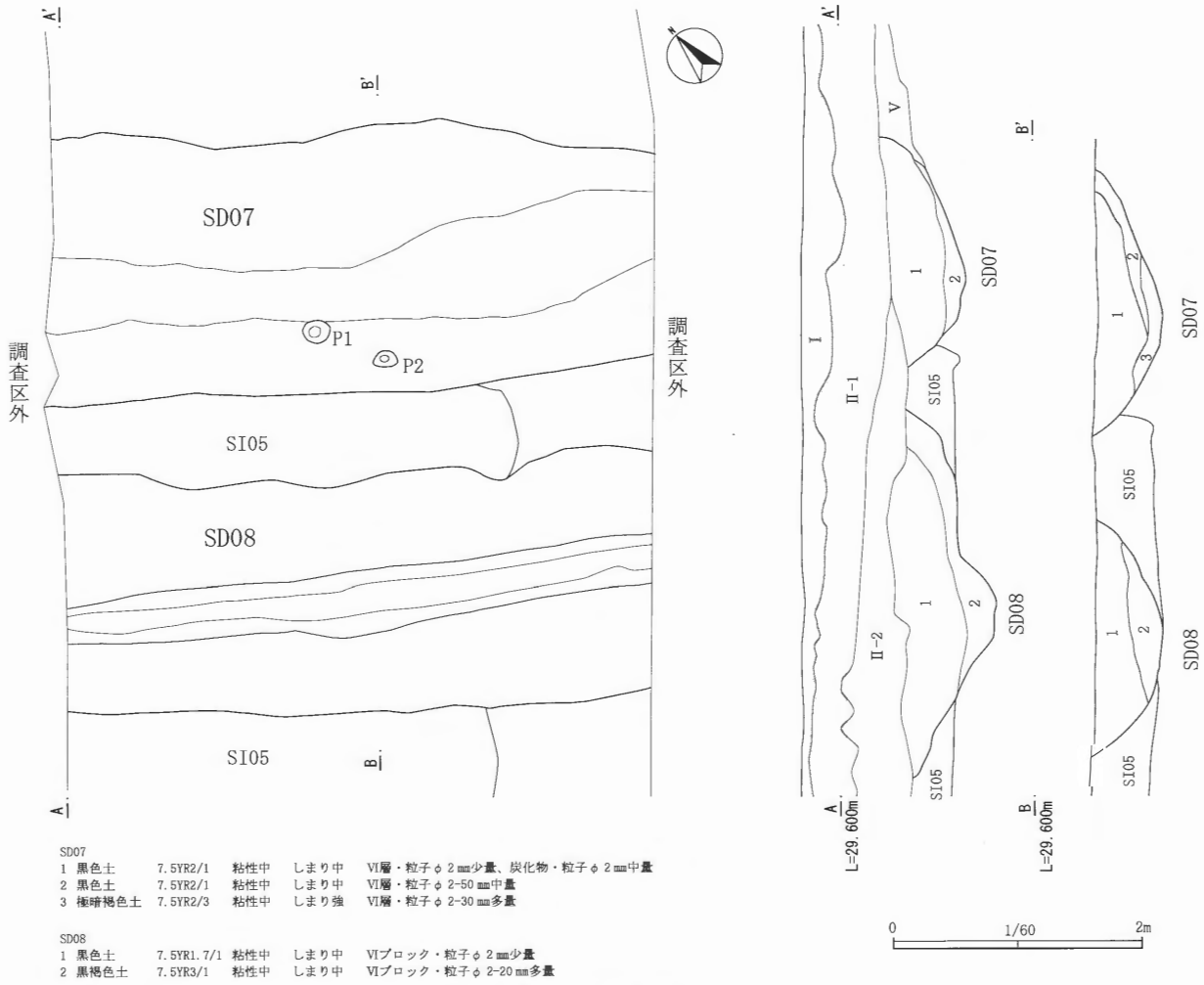
第 12 表　SD06 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	一括	土師器	小形甕	69.8	9.5	〈9.2〉	—	底部は欠損する。整形の状況より台付甕の可能性がある。胴部は球形を呈し、口縁は屈曲して「く」の字に折れやや受ける。	外面胴部より口縁部にかけてはミガキ。外面底部付近に縦方向のヘラケズリ。内面は全面にミガキが施され、木口痕が残る。胴部下端に接合痕が観察される。	雲母・白色粒子・スコリアやや多い。	内面 7.5YR 6/6 橙 外面 5YR 6/6 橙	良好	口縁部 1/8～体部 1/3	
02	一括	土師器	高坏	64.2	—	〈6.0〉	11.6	脚部のみで上塊部は欠損する。脚部は裾に向かい緩やかに外反して開く。	外面脚部は剥落が激しく観察が困難であるが僅かにハケメが観察される。内面はヘラナデ。	雲母多い。スコリアやや多い。	内外面 10YR 6/4 にぶい黄橙	良好	裾部 1/4	
03	一括	土師器	甕	75.5	—	〈2.2〉	5.8	底部は平底で胴部は大きく開いて立つ。	底部はナデ後ミガキ。外面胴部はヘラケズリの後にハケ整形。	白色粒子やや多い。小礫微量。	内面 10YR 4/3 にぶい黄褐 外面 7.5YR 6/4 にぶい橙	良好	体部下端～底部	

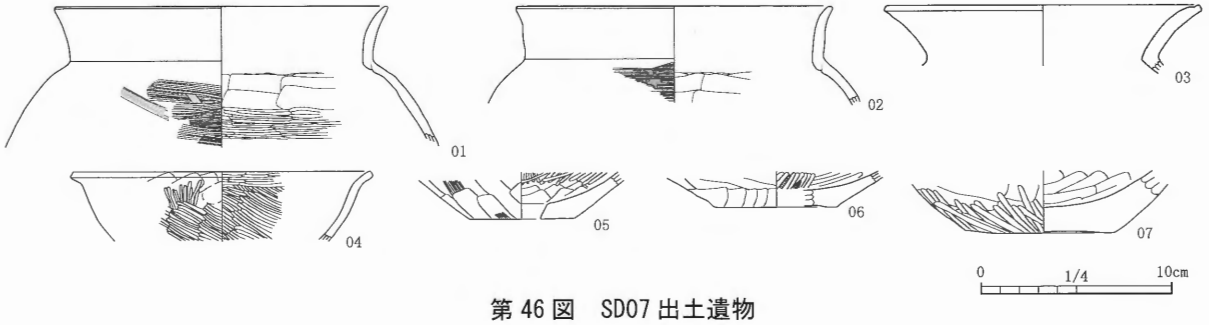
SD07（第45・46図・第13表・図版12・35）

1区E-1・2,F-1・2Gに位置し、SI05北壁を切り、東西に走行する。走行方向N-52°-W。最大幅は3.05ｍ、深さは調査区西壁際で70cmを測る。覆土は黒色土から極暗褐色土の3層からなる弱いレンズ状堆積である。

遺物は縄文土器230.3g、弥生土器13.9g、土師器（平安時代2点、他は古墳時代前期）1,299.6g、須恵器（平安時代）4点・182.3g、土製品（縄文土器片錘）1点・5.3g、礫（被熱破砕）436.4gを検出した。須恵器は9世紀代の甕胴部と底部破片である。主体は古墳時代前期の土師器にあり、平安時代の溝跡（SD08・11）と比べて該期の遺物量が極めて少ない。これらの出土傾向と、前述のSD06と類似する覆土の状況から、本遺構は古墳時代前～中期と判断される。



第45図　SD07・08



第46図　SD07出土遺物

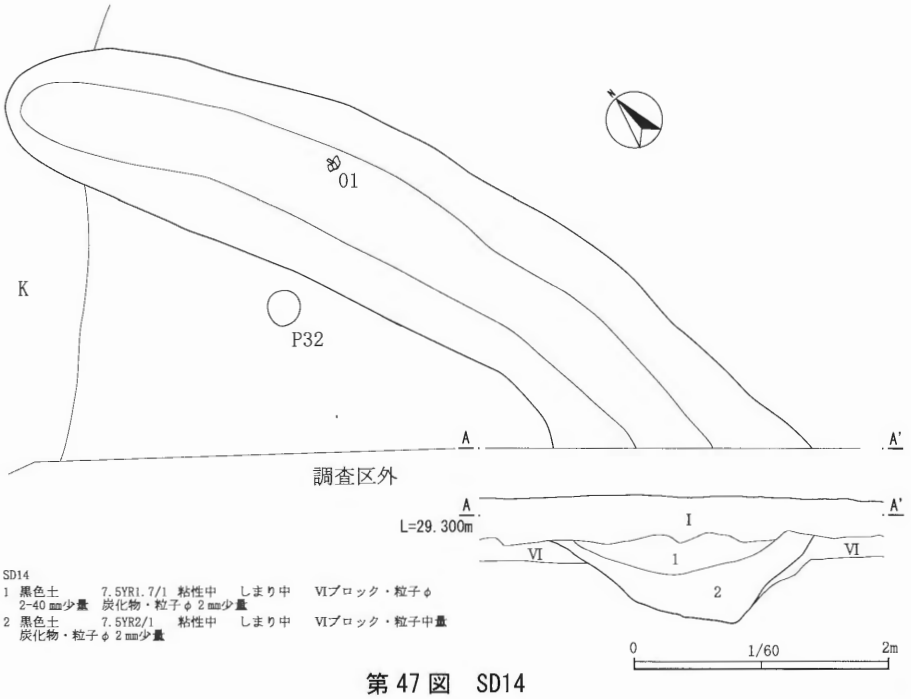
第 13 表　SD07 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	一括	土師器	甕	54.8	(17.2)	〈7.4〉	—	胴部は球形か。頸部で「く」の字に屈曲し、口縁は緩やかに外湾して開く。	外面胴部はハケ整形。口縁部は内外面共にヨコナデ。内面胴部は横方向のヘラナデの後ヨコミガキ。	スコリア多い。黒色粒子少量。白色粒子・雲母微量。	内外面 10YR 7/4 にぶい黄橙	良好	口縁部～胴部上位 1/6	
02	一括	土師器	甕	35.2	(16.4)	〈5.1〉	—	胴部は球形か。頸部で「く」の字に屈曲し、口縁は直立気味に立ち上がって、口唇部は僅かに外反する。	外面胴部はハケ整形。口縁部は内外ともにヨコナデ。内面胴部は横方向のヘラナデ。	スコリア・黒色粒子やや多い。白色粒子・雲母少量。	内面 2.5YR 7/3 浅黄 外面 10YR 6/4 にぶい黄橙	良好	口縁部 1/6	
03	一括	土師器	甕	17.8	(16.3)	〈3.1〉	—	頸部の締りが強い。頸部で「く」の字に屈曲し、口縁は緩やかに大きく外湾して開く。口唇部内面は強いヨコナデによって段面を形成する。	口縁部は内外面共にヨコナデ。	雲母・黒色粒子・白色粒子やや多い。スコリア・白色針状物質微量。	内面 10YR 6/4 にぶい黄橙 外面 10YR 6/3 にぶい黄橙	良好	口縁部破片	
04	一括	土師器	埦	10.8	(15.6)	〈3.6〉	—	体部は内湾して大きく開き、口縁部は屈曲して外反する。	内外面共にミガキ。口唇部は面取りが行われている。	雲母・白色粒子・黒色粒子少量。スコリア・白色針状物質微量。	内面 10YR 6/4 にぶい黄橙 外面 10YR 5/3 にぶい黄褐	良好	口縁部～体部破片	
05	一括	土師器	甑	42.4	—	〈2.4〉	(5.5)	底部は平底。胴部は大きく開く。底部中央に円形の焼成前穿孔がある。	外面胴部下端は右下がりのケズリ。一部にハケメがみられる。内面はヘラナデの後ミガキ。	小礫（長石・石英）・黒色粒子・雲母やや多い。スコリア少量。	内外面 10YR 6/4 にぶい黄橙	良好	胴部下端～底部 1/4	
06	一括	土師器	壺	35.4	—	〈1.8〉	(6.4)	底部外周は僅かに輪台状を呈する。胴部は浅く大きく開く。	外面ヘラナデ、内面ハケの後ミガキ。	白色粒子・雲母少量。スコリア・白色針状物質微量。	内面 10YR 5/2 灰黄褐 外面 10YR 7/4 にぶい黄橙	良好	底部 1/3	
07	一括	土師器	壺	298.9	—	〈3.2〉	7.8	厚手・大形の底部。胴部は内湾して大きく開く。	外面胴部・底部共ミガキ様のヘラナデ。内面はヘラナデ。	小礫（長石・石英等）・雲母・スコリア多い。	内外面 10YR 6/4 黄橙	良好	底部完形	

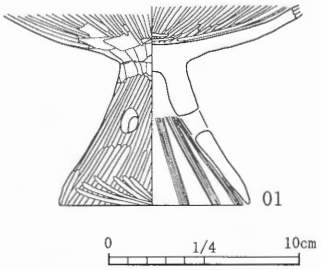
SD14（第 47・48 図・第 14 表・図版 12・35）

２区 C-2G に位置する。北端は攪乱により削平され、南端は調査区外となっている。走行方向 N-22°-W。幅 1.23 ～ 1.32 m、深さ 45 ～ 50cm で南北に走行する。覆土は黒色土２層からなるレンズ状堆積である。

遺物は弥生土器 12.4g、土師器（古墳時代前期）304.5g、埴輪 33.4g を検出した。01 は溝底からやや浮いた位置で検出されている。本遺構は古墳時代前期と判断される。



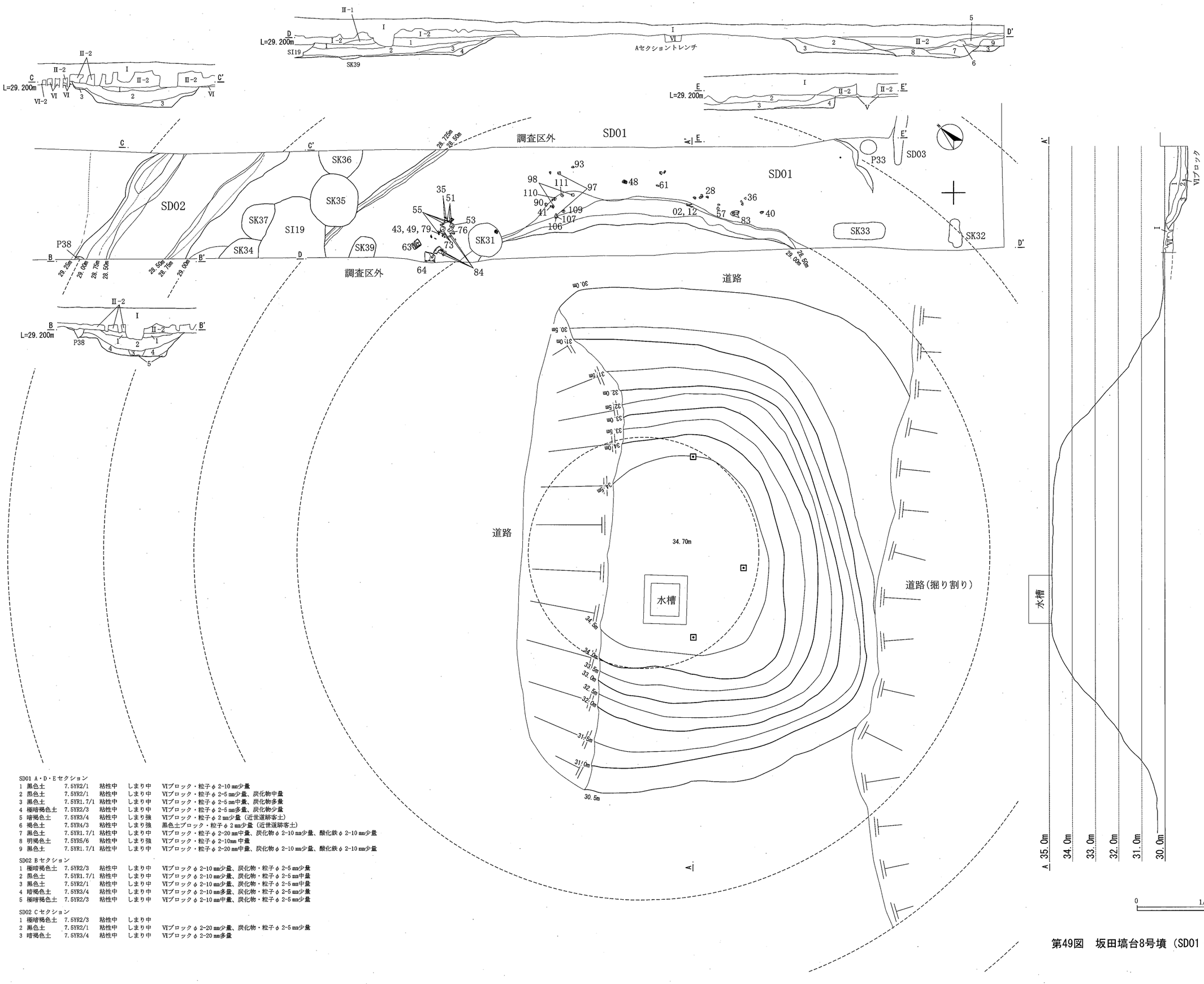
第 47 図　SD14



第 48 図　SD14 出土遺物

第 14 表　SD14 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	No.01	土師器	高坏	244.7	—	10.2	10.0	上塊は大きく内湾して開く。脚部は接合部で「く」の字に屈曲し緩やかにラッパ状に開く。孔は３孔でほぼ正円で等間隔に穿たれる。孔径は 14 mmと大きい。	接合部はソケット状の粘土が詰め込まれる。上塊は内外面共にミガキ。脚部は外面は縦方向のミガキ。内面はハケ整形。	白色粒子多い。小礫少量。	内外面 N 4/ 灰	良好	体部下端～底部 1/2	混入品カ



SD01 A・D・Eセクション

1	黒色土	7.5YR2/1	粘性中	しまり中	VIブロック・粒子φ 2-10 mm少量
2	黒色土	7.5YR2/1	粘性中	しまり中	VIブロック・粒子φ 2-5 mm少量、炭化物中量
3	黒色土	7.5YR1.7/1	粘性中	しまり中	VIブロック・粒子φ 2-5 mm中量、炭化物多量
4	極暗褐色土	7.5YR2/3	粘性中	しまり中	VIブロック・粒子φ 2-5 mm多量、炭化物少量
5	暗褐色土	7.5YR3/4	粘性中	しまり強	VIブロック・粒子φ 2 mm少量（近世道跡客土）
6	褐色土	7.5YR4/3	粘性中	しまり強	黒色土ブロック・粒子φ 2 mm少量（近世道跡客土）
7	黒色土	7.5YR1.7/1	粘性中	しまり中	VIブロック・粒子φ 2-20 mm中量、炭化物φ 2-10 mm少量、酸化鉄φ 2-10 mm少量
8	明褐色土	7.5YR5/6	粘性中	しまり強	VIブロック・粒子φ 2-10mm 中量
9	黒色土	7.5YR1.7/1	粘性中	しまり中	VIブロック・粒子φ 2-20 mm中量、炭化物φ 2-10 mm少量、酸化鉄φ 2-10 mm少量

SD02 Bセクション

1	極暗褐色土	7.5YR2/3	粘性中	しまり中	VIブロックφ 2-10 mm少量、炭化物・粒子φ 2-5 mm少量
2	黒色土	7.5YR1.7/1	粘性中	しまり中	VIブロックφ 2-10 mm少量、炭化物・粒子φ 2-5 mm中量
3	黒色土	7.5YR2/1	粘性中	しまり中	VIブロックφ 2-10 mm少量、炭化物・粒子φ 2-5 mm中量
4	暗褐色土	7.5YR3/4	粘性中	しまり中	VIブロックφ 2-10 mm多量、炭化物・粒子φ 2-5 mm少量
5	極暗褐色土	7.5YR2/3	粘性中	しまり中	VIブロックφ 2-10 mm中量、炭化物・粒子φ 2-5 mm少量

SD02 Cセクション

1	極暗褐色土	7.5YR2/3	粘性中	しまり中	
2	黒色土	7.5YR2/1	粘性中	しまり中	VIブロックφ 2-20 mm少量、炭化物・粒子φ 2-5 mm少量
3	暗褐色土	7.5YR3/4	粘性中	しまり中	VIブロックφ 2-20 mm多量

0 1/150 6m

第49図　坂田塙台8号墳（SD01・02）　（折図2）

第4項　古　墳

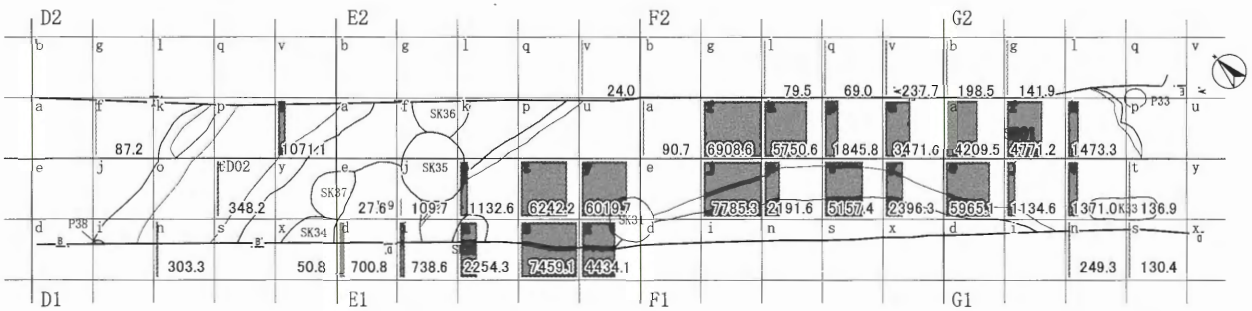
8号墳（SD01・02）（第49～60図・第15・19～21表・図版13・35～40）

周知の古墳（坂田塙台8号墳、旧 坂田8号墳〔岩崎1986〕・上坂田3号墳）である。調査区（4区）は墳丘北東側をかすめる形で位置し、遺構の大半は調査区外で、南側に隣接したところに墳丘が遺存している。墳丘側面の傾斜部は全体に土砂を削り取られた跡があり、墳丘は本来の形状からかなり規模を狭め、特に西側の消失が著しい。墳丘の平面形態は、調査区内で確認された墳丘裾部と周溝の形状と周辺の状況から円墳と考えられるが、調査区外（西～南側）に削平された前方部あるいは造出し部が埋没している可能性は排除できない。現時点では円墳としておく。ちなみに地権者によると、墳丘部が削られたのは大正時代の筑波鉄道の路線建設に伴う土砂採取によるもので、その際、石棺構築材と考えられる石材が多数掘り起こされたという証言があった。

第49図で見るように、表面を山砂で覆われた残存墳丘墳頂部の直径は現状で8.5ｍであった。調査区内では墳丘裾部と二重の周溝が確認された。内側周溝（SD01）は幅4.5ｍ、深さ0.6ｍ、中堤幅3.9ｍ、外側周溝（SD02）は幅4.1ｍ、深さ1.2ｍを測る。これによって、墳丘直径（周溝下端）30ｍ、内側周溝の外径39ｍ、外側周溝の外径55ｍの規模となる。また、周溝底部から残存墳丘部までの比高は6.2ｍとなる。墳丘の構築法は、裾部は地山削り出し（掘り込み）であるが、ほとんどは盛土（残存墳丘）と理解される。調査区内では墳丘構築前の旧表土や盛土部分は確認できなかった。裾部の斜面傾斜角は32°ほどであるが、墳丘構造が無段築であるか有段築成であるのかは、土取りの改変が著しくて現状の外観からは窺い知ることができない。また、確認し得た裾部上面や中堤上面も削平されているものと考えられ、埴輪埋設の掘方は確認されていない。

確認した遺構は、調査区内においては4区E･F･G-1･2Gに位置している。重複は周溝内外でSI19及びSK31～37、サク状遺構に切られており、SK39を切る。内･外側周溝ともに東側は攪乱（旧耕作と道）を受けて不明瞭となっている。周溝の覆土は黒色土から極暗褐色土に至る3層からなるレンズ状堆積である。

遺物はSD01とSD02の覆土中から検出されたものである。SD01からは縄文土器276.4g、弥生土器305.4g、古墳時代土師器1,883.9g、同須恵器34.5g、埴輪106,573.4g、奈良・平安時代土師器599.5g、同須恵器224.2g、近世土器33.0g、現代陶器50.6g、現代瓦212.2g、石器6.7g、絹雲母片岩406.0g、礫3,379.2gが出土、SD02からは縄文土器305.5g、弥生土器109.1g、古墳時代土師器656.3g、同須恵器119.4g、埴輪7,155.9g、奈良・平安時代土師器130.7g、同須恵器78.8g、近世陶器20.4g、現代陶器9.6g、石器0.5g、絹雲母片岩105.4g、礫705.4gが出土している。墳丘を含めて削平を受けているので、厳密な埋没時期は判断できないが、長期間にわたる出土遺物は、古墳の周溝として開口していた遺構の特性を示していよう。土師器・須恵器は細片ばかりで、主体となる時期や古墳に伴うものを判断することが困難な状況である。比較的大型の破片は図示した須恵器甕や、遺構外出土遺物に掲載した第65図01・02の古墳時代前期の土師器壺である。また、赤彩の土師器破片もあり、



＊小グリッドは1辺2ｍ。
＊ゴシック体数字は各小グリッドごとの埴輪出土量（単位g）。
＊網かけは各出土量を相対的にグラフ化して表現したもの。

第50図　8号墳調査区小グリッド及び埴輪出土分布図

土師器は古墳時代前期から後期初頭にわたるものが認められる。

本古墳に伴う遺物の主体は多量の埴輪である。出土状況（第50図）は、SD01では墳丘寄りに偏り、溝底からかなり高い位置で検出されている。ほとんどが第1層に含まれ、第2層の堆積後に墳丘側から崩落したものと考えられる。平面的な分布は、北西から南東までの墳丘寄りに、多少の濃淡を見せながらほぼ万遍なく広がっており、本来の円筒埴輪の設置箇所（墳丘テラス）からの自然崩落・堆積と判断できる。一方、SD01の外側は分布が薄いか皆無であり、北西側（E1-d・i・j・n・o）の分布は後世の遺構分布と重なり、これらの構築によって移動したものと見なせる。さらに、SD02では内側（墳丘側）に偏っており、SD01外側の分布状況と合わせて、中堤の外側に埴輪列があったものと考えたい。出土量から、墳丘上に比べてかなり疎らな配列であったと想定される。また、口縁部・底部破片の出土量が少なく、自然崩壊による原位置での口縁部落下、底部の残存（その後、墳丘もろとも削平・移動）の状況を表していると考えられ、63・64の様な大破片から2、3cm大の細片までさまざまであるが、そこに意図的な抜き取りや破砕行為を想定する積極的な根拠は見出せない。

埴　輪　円筒埴輪のみで総重量113,729.3g（SD01とSD02の合計）、形象埴輪は1片も検出されていない。これらには、いわゆる普通円筒埴輪のほかに朝顔形埴輪が含まれる。後者の識別は、口縁部～肩部形状の確認以外は前者との判別が容易ではない。したがって、明らかなもの以外は円筒埴輪として記述をする。また、すべてが破片資料で、底部から口縁部まで接合・復元できた個体はない。したがって、出土状況や接合結果による個体識別は困難な資料状況であり、図示したものは同一個体の破片を含んでいる可能性が十分にある。

資料から認識される製作法（注1）は一様ではなく、各属性の組み合わせをもとにA～G類の7つの同工品を認定した。認定（分類）作業に当っては、製作者の癖が如実に反映されている「突帯の成・整形手法と形状」を第一の手掛かりとして、これに対応する「外面調整手法」「ハケメ」「内面調整（成形）手法」の組み合わせを確認して各類型を設定した。突帯部分が残らない口縁部・底部などの他の部位については、後者の調整手法とハケメが一致するものを同一類型とした。結果、突帯間隔設定技法を用いたA～F類と、いわゆる「断続ナデ」による突帯貼付を行ったG類に大別でき、前者を「Ⅰ群」、後者を「Ⅱ群」とした。両者の出土量はⅠ群112,153.1g（全体の98.6%）、Ⅱ群1,576.2g（同1.4%）である。胎土は全類型とも基本的に同じで、白雲母の細片を多量に含有する。これの由来と考えられる絹雲母片岩(筑波石)の砕片も認められる。他の含有鉱物には長石・石英があり、その他、赤色粒子（スコリア）が目立つ。個体によって、若干の違いが認められるのは黄褐色粒子の含有量である。この含有物は鉱物でも岩石でもなく、不純物を含み、「土器状」である。周辺の胎土と同等の硬度を持っている。

成形についても、全類型とも粘土紐積み上げ（紐づくり）によって祖形成形をしている。確認できたものでは、基部は粘土帯を用いており、底部から粘土積み上げのものはない。

また、焼成・発色（色調）に関しても類型による違いはなく、相対的に軟質の焼き上がりのものとやや硬質のものがあり、前者が大半を占めている。前者は暗めの発色（赤褐色）を呈するものが多い。後者は明るい発色（橙色、明褐色）で、断面に還元色を呈する。黒斑は確認できず、窖窯による酸化雰囲気での焼成である。

個別の資料は実測図と観察表を参照されたい。以下には各類型の属性をまとめていく。なお、提示した実測図はすべて反転実測によるものである。

(1)　Ⅰ群

A類（1 ～ 36）

成形・器面調整　基部粘土帯は幅（高さ）5 ～ 6 ㎝、粘土帯成形時の作業台（板目）圧痕を残すものがある(35)。粘土紐積み上げ間隔は 2 ～ 3cm、胴部器壁厚は 10 ～ 15 ㎜を測る。資料の残存状態が悪く、乾燥単位の把握は不明瞭である。しかし、外面調整が上下段で連続しないことや、断面・破損面の観察から、乾燥単位は一段ごとであり、乾燥単位面は概ね突帯付近に想定できる。

外面調整（注 2）はタテハケ（1 次）であるが、2 次ヨコハケを加えるものがある（24 ～ 26)。このヨコハケは連続的なもので、「B 種ヨコハケ」に分類される。25 から段間（やや上寄り）を 1 周で充足するもので、器面の凹凸によって若干波打つものの、比較的安定した水平走行を示している。25 には 2 か所（間隔約 6cm)、26 には 1 か所の静止痕が認められ、右に 15°程傾いている。これらの特徴は、一瀬和夫分類（一瀬 1988）の「Bd 種」に該当する。タテハケは上下の段で連続しないので、一段ごとに施し、突帯調整のヨコナデに切られる。ただし、第 4 段と朝顔形の肩部・口縁下半部のタテハケは下位の突帯のヨコナデを切るかたちで、ハケメの開始点の当たりが観察される。したがって、成形・調整・突帯貼付の手順は、一段ごとに粘土紐の積み上げ・成形・外面タテハケ調整→第 4 段まで成形→第 3 段タテハケ調整→第 3 突帯貼付→第 4 段タテハケ調整と考えられる。第 1・2 突帯の貼り付けは各段の調整後か、複数突帯が同時に行われるのかは不明瞭であるが、突帯の剥落するものの存在と、調整・突帯貼付の手順を考えると、3 条の突帯は同時に貼り付け行為をしたものと見ておきたい。

突帯の貼り付けに際しては、突帯間隔の設定、つまり割り付けを行う。突帯の剥離面には、いずれもタテハケを切る凹線（幅 3㎜、断面方形、2 条一組）が確認でき、また、突帯の上面や上方の器表面に断面 L 字形の工具の擦痕が観察できるものがある（25・27・33)。この凹線は突帯間隔設定技法の器面痕跡（鐘方 1997・辻川 2003）と判断できるもので、走行はやや蛇行する部分もあるが、突帯の上稜の高さに位置している。後者の擦痕もやはり、同技法に伴う痕跡と思われる。ただ、すべての突帯の上面に確認できる訳ではなく、確認できないものはヨコナデによって消されたためと考えたい。これらの痕跡は、鐘方正樹氏が想定する工具を用いた行為によるものと同じで、凹線と擦痕は対となる痕跡と判断される。上記の凹線の蛇行も、下位の突帯の蛇行に対応するものと考えることができる。また、同様の凹線が口縁端部の 0.5 ～ 1.5cm 下に周回する個体がかなりあり、口縁部調整のヨコナデが被ることから不明瞭なものもある。断面方形の形状から同じ工具で付けられたものと思われるが、凹線はほぼ 1 条で、第 3 突帯や第 4 段外面に上記の擦痕が確認できるものがない。これを、口縁部高を揃えるための印と指摘する意見もあるが、口縁部資料が不十分なために判断できない。

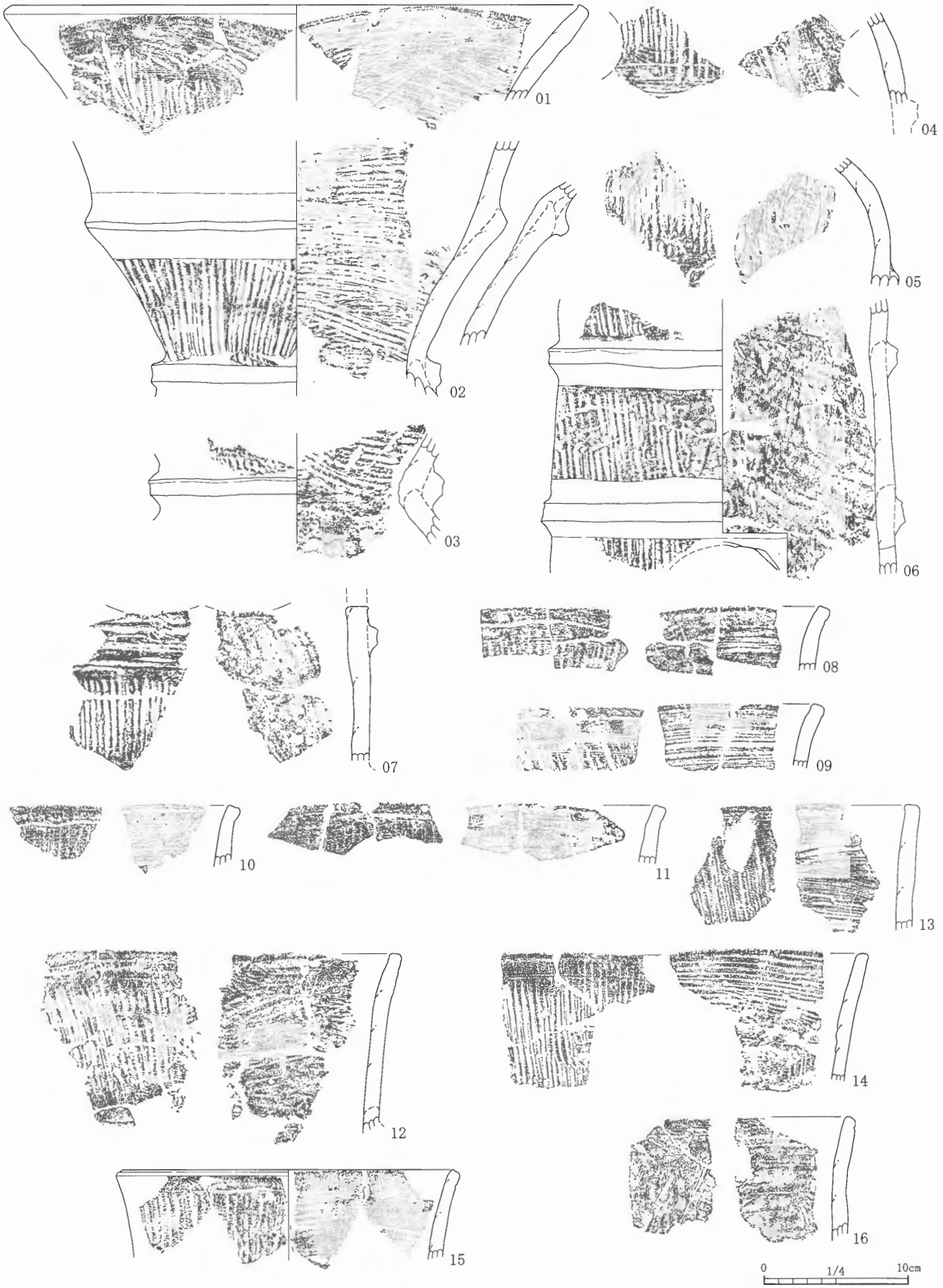
内面は左上がりの指ナデ成形ののち、口縁部（第 4 段または同段上半部）にのみ手動的なヨコハケ調整を施す。底部は自重による歪みをそのまま残している。底面には断面円形の棒状圧痕が認められるが、作業台・敷物等の具体的な状況を把握するには至っていない。

朝顔形埴輪についても基本的に同様な製作手順を踏むものと考えられる。口縁部の成形に際しては、頸部と口縁下半部に乾燥単位面があり、02 は下半部の擬口縁をそのまま突帯状の外形に成形している部分と、突帯を改めて貼付している部分が共存している。外面はタテハケ、口縁端部付近に左上がりのハケを施し、口縁部内面には手動的なヨコハケを施している。頸部の突帯剥離面には凹線は認められない。

形態・法量　全体形が判明する個体はないが、他の類型との比較から、3 突帯 4 段構成と見てよいだろう。大小の規格差はなく、口径 22.3cm（平均)、底径 21.4cm を測り、底部から口縁部まで直線的に開く逆台形に復元される。各段の高さ（注 3）は、底部（第 1 段、35）11.1cm、胴部（段不明、06）10.5cm であり、口縁部（第 4 段）は 11 ～ 12.0cm と推定される。

朝顔形埴輪の胴部は内傾し、裾広がりの形態を示す。小美玉市の玉里権現山古墳例(小林編 2000)と同様である。

A類



第51図　8号墳出土埴輪A類（1）

＊実線の粘土紐接合線（断面）は、突帯の剥落によって確認できたものを示す（以降、同じ）。

第52図　8号墳出土埴輪A類（2）

胴径は24.2cm。肩部には緩やかな丸味を持ち、口縁部は大きく滑らかに外湾する。

口縁部形状　すべて直線的に外傾する。端部調整のヨコナデはそれほど入念ではなく、ナデ幅は２～３cmと比較的広い。内面がやや窪むものの、端部は面を作るものと丸くなるものがあり、形状は不安定である。19はナデ幅が狭く、端部が窪み、本類型ではないかも知れない。朝顔形埴輪の１も同様で、端部形状は直線的で丸く納めている。

突帯形状　幅約2.5cm、高さ約1cmの重厚感のある大きさで、断面Ｍ字形に近い形状を示す。上面と下面のヨコナデが最終的に加えられ、上下の稜は丸味を帯びて端面に粘土が被る、独特な形状を呈している。前述のとおり、貼り付けに当っては、突帯間隔の設定が行われる。

透かし孔　確認できたものは、すべて円形と推定されるものである。切り抜きはすべて右回りで、無調整である。第２・３段に互い違いに配置するものと推定される。また、朝顔形埴輪の肩部にも穿孔する（04）。

ヘラ記号　19の口縁部外面に２本線の斜線が記されている。「×」字を呈するものであろうか。

Ｂ類（37～49）

本類型に分類し得た資料数が少なく、属性の把握が十分ではない。朝顔形埴輪は認識できなかった。

成形・器面調整　基部粘土帯は幅約6.5cm、49には内面に、粘土板成形時の掌紋圧痕が確認できる。粘土紐積み上げ間隔は約3cm。胴部器壁厚は９～13㎜と薄手であり、本類型の特徴である。乾燥単位は、外面調整が上下段で連続しないことからも、Ａ類と同じく一段ごとと考えられる。

外面調整はタテハケのみ。タテハケは突帯ヨコナデに切られ、Ａ類に認められた第４段のタテハケと突帯ヨコナデの前後関係については確認できない。また、現状で突帯の剥落は確認できない。ヨコナデが強く丁寧で、低い形状が原因であるとも思われる。ただ、破損面に間隔設定の凹線がわずかに確認できるものがあり（未掲載）、突帯上面の擦痕を残すものがある（44・45）ので、本類型も突帯間隔の設定が行われているものと見てよい。

内面は、ヨコナデあるいはヨコハケののちにタテナデを強く施す特徴的なもので、板状の工具（ハケメを表すものあり）を用いたと考えられる資料もある。口縁部のヨコハケはない。底部は内面下端に手動的なヨコケズリが加えられている。本類型とＦ類にのみ見られる。右下がり方向で、これに伴う粘土のはみ出しが底面側に観察されるので、倒立して行ったものと解釈される。外面下端と底面は無調整で、底面には棒状物あるいは植物の茎・繊維状の圧痕が認められる。

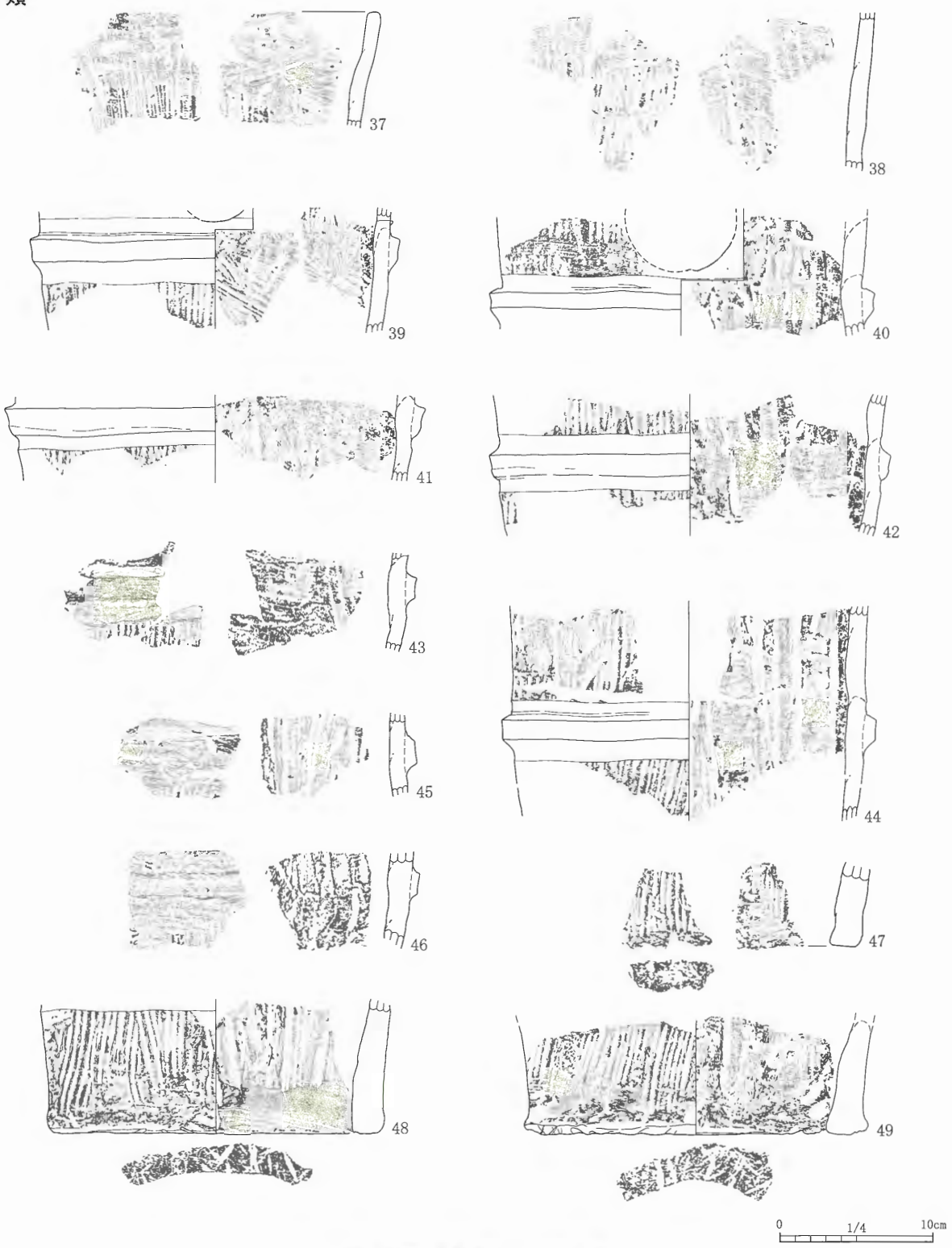
形態・法量　全形どころか、突帯間隔も把握できない。また、内外面の調整も、底部から口縁部に至るまで同一であるので、底部を除いて各破片の位置すらも明確にし得ない。かろうじて、48の上端に突帯のヨコナデが掛っているので、底部高が10cmほどになることがわかる。また、胴径23.6cm（平均）、底径22.0cmを測ることからも、Ａ類と同じ規格であろうことが推定され、やはり、３突帯４段構成と想像される。

口縁部形状　直線的に外傾するものと見られ、Ａ類同様、端部調整は甘く、形状も不安定である。ナデの方向も水平ではなく、斜行しており、幅４～5cmと広い。突帯整形の入念さと比べると対照的である。37の端部形状は断面矩形を志向し、内面は窪まない。

突帯形状　幅約2cm、高さ約0.5cmと扁平で、断面方形・台形を呈し、端面がやや窪む。上下面と端面を同時に最終的なナデを施すものと見られ、上下の稜は基本的にはっきりしている。

透かし孔　確認できるものが少ないが、円形で、右回りに切り抜き、無調整である。

B類



第53図　8号墳出土埴輪B類

C類（50 ～ 62）

成形・器面調整　基部粘土帯は幅5 ～ 7cm。粘土紐積み上げ間隔は2 ～ 3cm。胴部器壁厚は10 ～ 12㎜。4段分が確認できる51を見ても、乾燥単位は明瞭ではない。ただ、外面のタテハケは複数段に及ぶものはなく、やはり一段ごとに乾燥を行いつつ、外面調整を施したものと考えられる。

外面調整はタテハケのみ。58・59では突帯ヨコナデを上位段のタテハケが切っており、59の上段は透かし孔が伴い、下段の器壁厚から中間段（2・3段）であることがわかる。すると、第2突帯の貼付段階が外面調整（積み上げ）の間に行われており、各突帯の貼り付けが一度ではないことになる。突帯の剥落がほとんど認められないことも、この手順を裏付けるだろうか。しかし、59の内傾する形状から、この破片上段が朝顔形埴輪の肩部に当たる可能性もある。わずかな破損資料に、間隔設定の凹線を推定できるものもある（未掲載）が、突帯上面の擦痕は明確にできない。他類型と比べて精美な突帯形状・走行と51の突帯間隔を見れば、割り付けは行われたものと考えられる。

内面は粘土紐積み上げののちにタテ指ナデを施したのみである。51の観察から、ナデのストロークは複数段にまたがるものではない。第1段や第4段は積み上げ痕跡が明瞭に残り、このナデがいわゆる「調整用」のナデではなく、「整形用」のもの（赤塚1979）であることは明白である。口縁部（第4段）にはヨコハケを加えるようである。

底部外面下端にはヨコ板ナデが加えられる。ただ、62のナデは部分的で痕跡も不安定であり、51には認められないので、突帯間隔設定工具の擦痕である可能性もある。底面には棒状･繊維状の圧痕が残り、無調整である。

赤彩の可能性を示すもの（50）がある。

形態・法量　51は口縁部を欠くものの、全体的な形態が確認できる。わずかに外傾する寸胴形、3突帯4段構成と考えられる。胴径26.0cm（平均）、底径21.0cm（平均）。52は下段が内傾するので、円筒部内傾の朝顔形埴輪の可能性もある。51から、各段の高さは、底部11.8cm、第2・3段とも10.0cmであり、底部は突帯間隔よりも高く設定されていたことになる。

口縁部形状　本類型資料が見出せず、不明。

突帯形状　幅約2cm､端面幅1cm未満､高さ約0.8cmの細身。下稜がやや低く､端面が上寄りの断面台形を呈し、全体的に形状・走行は安定している。最終的に上下面を強くなでることによって、上下のナデ面は深めで、上下稜は際立っている。

透かし孔　円形。切り抜きは右回り、無調整である。第2・3段に互い違いに配置するものと見てよい。

C類

*51の第1～3段と第4段の外面拓本は
実際の上下位置関係に対応していない。

第54図　8号墳出土埴輪C類

D類（63 ～ 82）

成形・器面調整　基部粘土帯は幅約6.5cm、粘土帯成形時の作業台（板目）圧痕を残すものがある（81）。粘土紐積み上げ間隔は1.5 ～ 2cmと他類型と比べて狭い（粘土紐が細い）。胴部器壁厚は10 ～ 12㎜。乾燥単位面は各突帯位置のやや上位の3か所確認でき、外面のタテハケも対応する。概ね、一段ごとに乾燥・外面調整を反復したものと思われる。

外面調整はタテハケのみ。64では第3突帯のヨコナデを第4段のタテハケが切っており、ハケメの開始点の当たりが観察される。A類と同様の手順で成形～器面調整を行っているものと考えられる。第1・2突帯とタテハケの関係は、上位段のハケメ開始点の上に突帯が貼付されているものと判断できること、突帯の剥落が確認できること、一段ごとの調整・突帯貼付とすると第2・3突帯の貼付が同時になるという手順の不均衡が生じることなどを考え合わせると、やはり、3条の突帯は同時に貼り付けられたものと思われる。突帯の剥離面には間隔設定の凹線（断面方形）がもれなく確認できる。ほとんどは2条一組であり、2条のうち上位の凹線がかすれるものがあることから、表面上、1条しか見えないものも同一の工具で行っているものと考えてよいだろう。突帯の上面に設定工具の擦痕が確認できるものはない。80の底部外端から0.5cm上に、幅4mm程の横方向の擦痕があり、同工具の擦痕の可能性がある。

内面はヨコナデ成形で、ナデ痕跡は平坦であることから、板（ヘラ）状工具を用いたものと思われる。ただ、積み上げ痕を多く残す個体が多い。第4段はそののち手動的なヨコハケ調整を施す。底部は自重による歪みをそのまま残している。底面には棒状・繊維状の圧痕が残り、無調整である。82には縄の圧痕が見られる。

形態・法量　63・64は今回出土埴輪の内で最も残りが良いが、第1段（底部）を欠く。3突帯4段構成と見てよいだろう。口径36.1cm（平均）、底径22.9cm、底部から口縁部まで直線的に開く逆台形で、第4段（口縁部）上半は緩やかに外湾している。各段の高さは、底部（第1段、80）12.8cm、第2段（64）11.0cm、第3段は63で9.5cm、64で10.0cm、口縁部（第4段）は63で13.5cm、64で13.0cmを測る。各段とも一致しないが、第2・3段は10cm前後で近似しており、底部と口縁部は13cm前後と高くなっている。

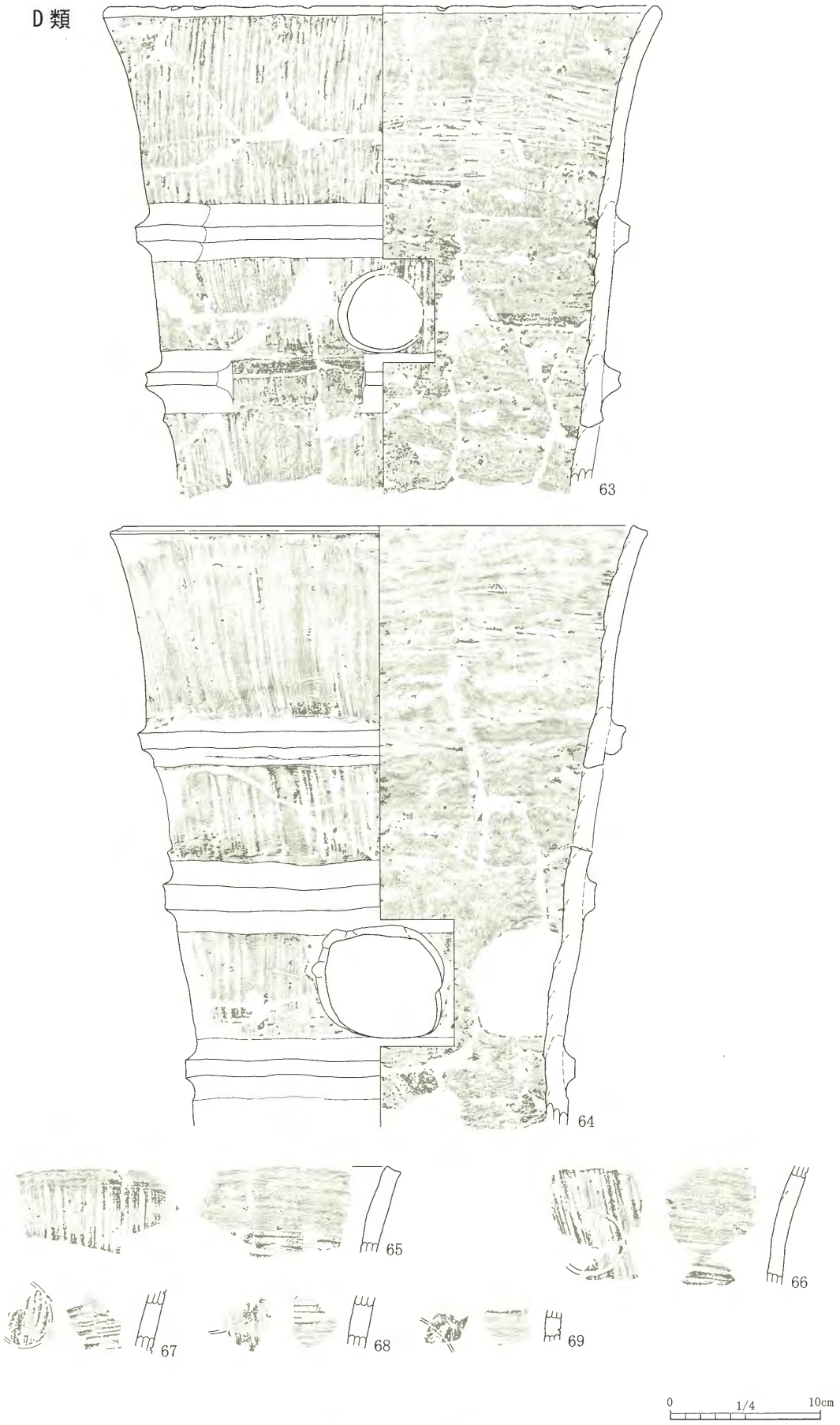
口縁部形状　直線的に外傾する。端部調整は基本的に甘く、ヨコナデの幅や口縁部形状も個体によってバラツキが大きい。65は内外面のナデが比較的強く、端部が窪むなど、整った形状を見せているが、64はナデが弱く、端面形状は不安定である。63は丸くなっている。内面のヨコナデの幅は広く、5 ～ 7cm、64ではヘラ状工具の当たり痕が認められることから、内面には工具を用いていると思われる。

突帯形状　幅約2.5cm、高さ約1cm、端面がやや窪む、比較的整った台形を示す部分がある一方で、下面のナデ付けがあいまいで、形状も不安定な部分が共存している（64）。端部の整形が安定しない状況は、口縁部の状況と同調している。

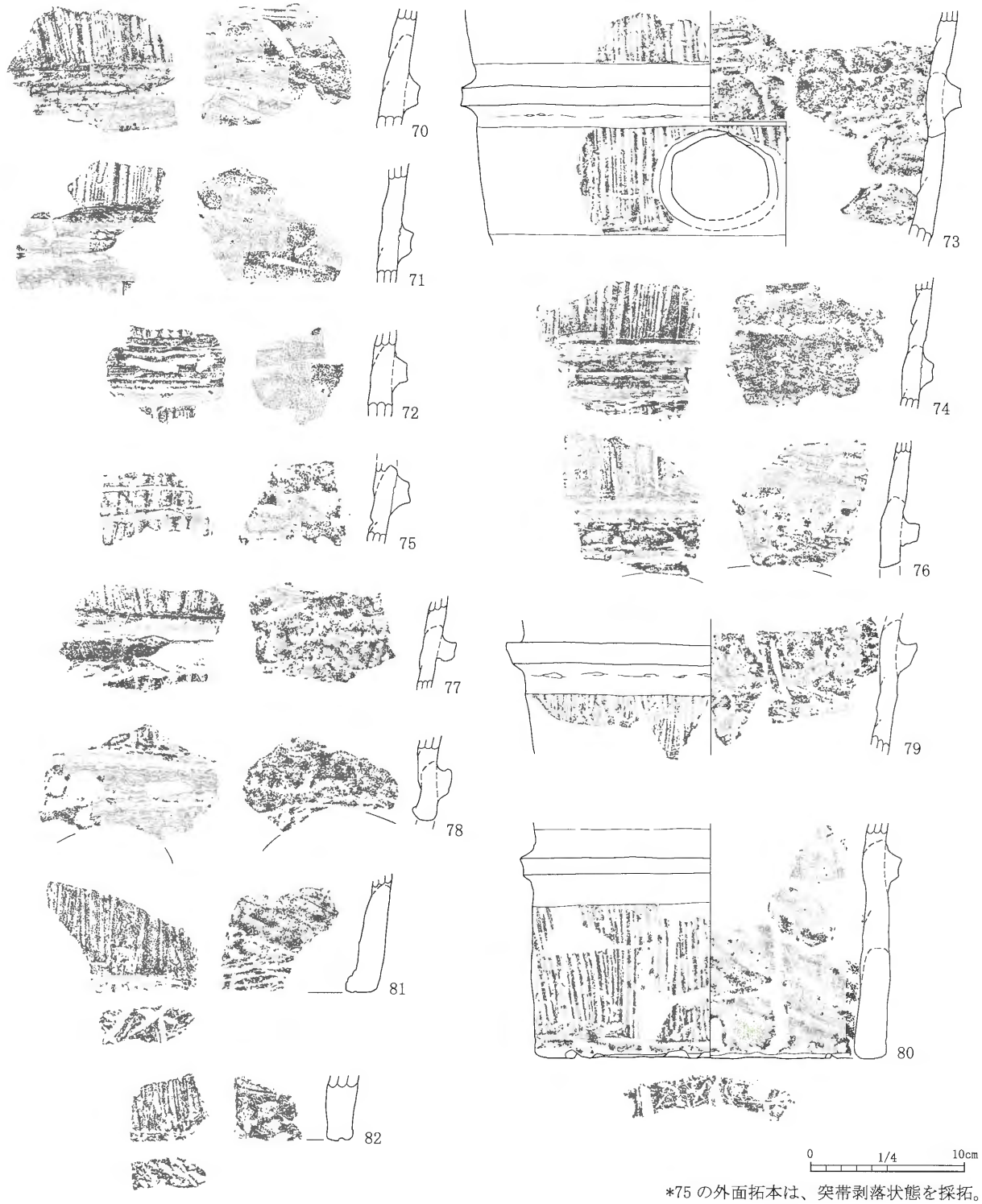
透かし孔　円形。切り抜きはすべて右回りで、無調整である。第2・3段に互い違いに配置する。78の透かし孔上部は歪みが著しく、持ち運びの際の指掛けの痕跡を示している。

ヘラ記号　口縁部外面に「左上開きのC」字形の線刻が認められる。右利き、上から右回りで記されたものと考えられる。

D類



第55図　8号墳出土埴輪D類（1）



*75 の外面拓本は、突帯剥落状態を採拓。

第 56 図　8 号墳出土埴輪 D 類（2）

E類（83 ～ 99）

成形・器面調整　基部粘土帯は幅約7cm。粘土紐積み上げ間隔は3 ～ 4cmと広く、D類の倍（粘土紐が幅広）である。胴部器壁厚は10 ～ 12㎜。乾燥単位面は突帯付近であるが、84は第4段（口縁部）の中位に認められる。口縁部（第4段）高が16cmと高いことに起因するものであろう。外面のハケメは各段で連続せず、乾燥単位に対応している。突帯は乾燥後の積み上げに伴う粘土の盛り上がり（突帯上面の直上辺り）と、上位段のハケメの上に貼付し、剥落はほとんど認められない。また、ハケメはいずれの段においても突帯のヨコナデに切られている。このことから、成形・調整→乾燥→上位段成形・調整→突帯貼付→乾燥→上位段成形・調整の工程を反復するものと想定できる。突帯の剥離面には間隔設定の凹線（断面方形）が確認できる（2条か）。また、上面の付け根が直角に折れるものがあるが、擦過痕跡が確認できないので、設定工具の擦痕ではなく、突帯整形過程の形状を示すものと思われる。

外面調整は左上がりのナナメハケを基本とする。いわゆる1次調整である。第1段はタテハケで、上位段ほど左方向の傾斜が大きくなる。第4段（口縁部）の上半部（84・85）や、朝顔形埴輪の口縁部の一部（83）に、第1 ～ 3段とは異なった細かいハケメが施されているが、同一ハケ工具の表裏（両端）が使用されたものと思われる。底部下端は幅1 ～ 1.5cmのヨコナデが施されている。

内面は底部（第1段）から第4段に至るまで左上がりの指ナデ成形である。積み上げ痕跡を多く残している。口縁部（第4段）は下端を残して手動的なヨコハケを施す。底部下端と底面は無調整で、底面には丸棒状・繊維状の圧痕が見られる。

朝顔形埴輪については口縁部の上段しか判明していない。下段と上段の間で乾燥単位面があり、下段の上端はやや内湾してヨコナデによって上端面がやや窪む。いわゆる擬口縁状となっている。器壁の厚さ、内外面調整の手順の違い・境界が上段の中位にあり、破損状況からも乾燥単位面が存在する可能性がある。

また、口縁部外面に赤彩の痕跡を残すものがある。

形態・法量　底部から第3段にかけて直線的にわずかに開き、口縁部が緩やかに開く形態が想定できる。3突帯4段構成と考えられる。口径36.9cm（平均）、底径19.8cm（平均）を測る。各段の高さは、底部（第1段、98）12.6cm、第2段10.0cm（97）、口縁部（第4段）13.0cm（85）、16.0cm（84）で、D類とほぼ同じ値を示しており、第2・3段の中間段はそれぞれ約10cm、底部と口縁部は高く作られている。朝顔形埴輪の口縁部上段は大きく外湾し、深い形態を呈している。

口縁部形状　端部調整の前に、内面には幅5 ～ 6cmほどのヨコナデが加えられる。端部調整のヨコナデは1.5 ～ 2cm幅で強く施され、端部の上・内外面が窪むもの（84・86）と、上・外端部が丸くなるもの（84の一部・85）がある。両者は84で共存するが、全体としては前者の形状を志向するものと思われる。朝顔形埴輪も強いヨコナデによって端部は窪み、外端部は折り返し状に拡張する。外面のヨコナデは幅が一定で、境界が明瞭であることから、板状の工具を使用している可能性がある。

突帯形状　幅2 ～ 2.5cm、高さ1 ～ 1.2cmで、上稜が突出し、端面が窪むM字状を呈する。上下・端面を同時にナデ付け、特に端面のナデは強い。これによって、上下稜は際立っている。

透かし孔　全形を確認できるものはないが、90と97から横長の楕円形と推定される。他の破片の形状も、この推定を支持するものと見られる。口縁端部・突帯などの細部調整の精度から考えて、意図的な形状と判断される。また、切り抜き面は外傾・内傾の2面構成で、ナデが施されている。

ヘラ記号　口縁部外面に「×」形のヘラ描きが確認できる。

F類（100 ～ 105）

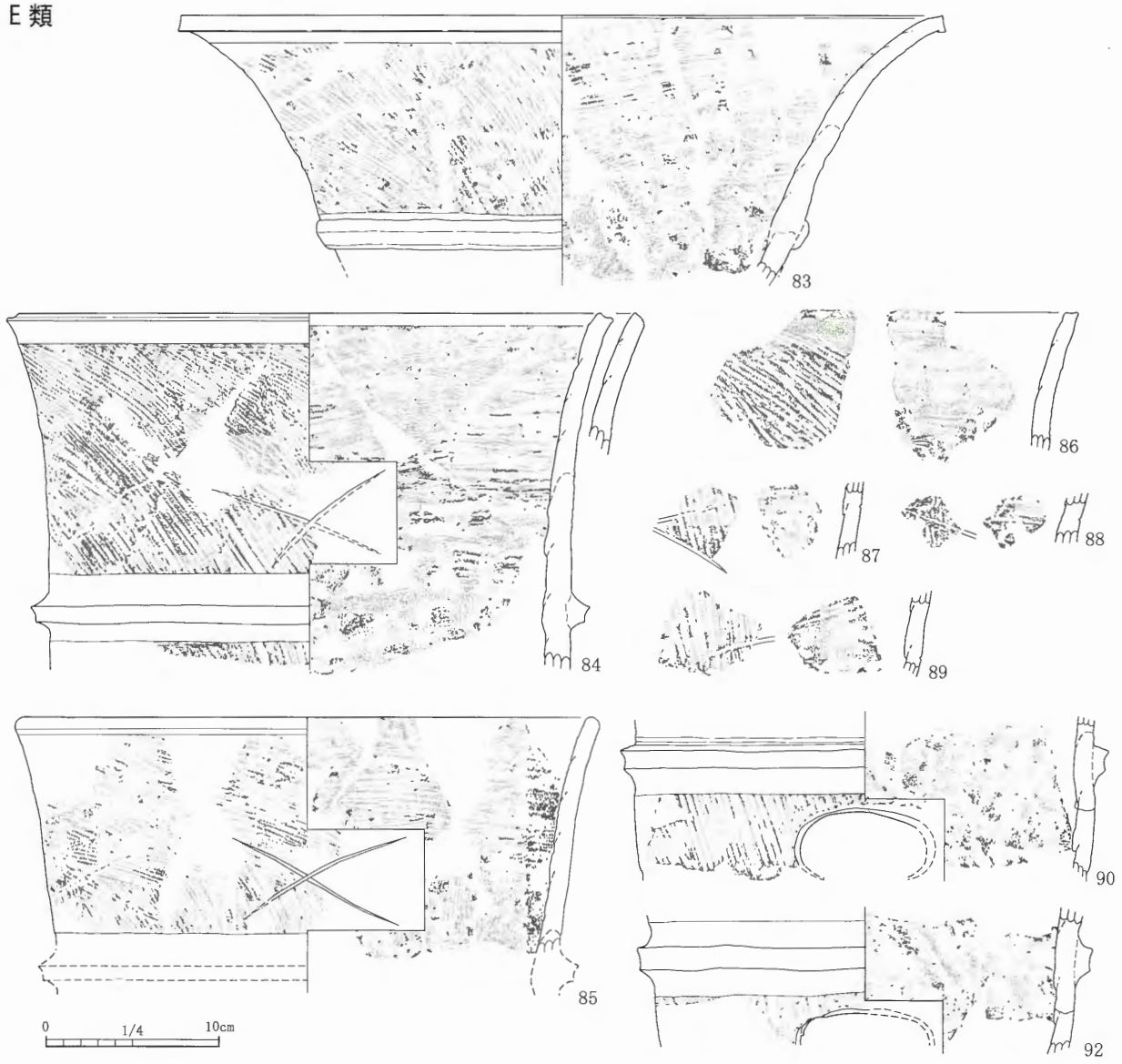
外面ナデ調整のものである。8点・707.2gを確認できたに過ぎないので、以下に示す属性も限定的なものとなる。

成形・器面調整　基部粘土帯は104から、幅6cmほどであろうか。粘土紐積み上げ間隔は2 ～ 3cm。胴部器壁厚は10 ～ 13㎜、乾燥単位は明確ではない。外面調整は平坦な単位が明瞭に確認でき、1㎜以下の間隔の細密な条線を伴う、タテ方向の調整痕跡を示す。いわゆる「タテ板ナデ」と表現されるものである。行為的には工具を用いた器面調整としてハケ調整と同じである。100を見る限り、上下段では連続しないようである。突帯のヨコナデに切られる。内面はタテ指ナデ成形で、積み上げ痕跡も比較的丁寧にナデ消されている。内面底部下端には、タテ指ナデを切って、幅1.5 ～ 4cmの手動的なヨコケズリ（右→左方向）が加えられている。外面・底面は無調整である。底面には丸棒・繊維状の圧痕が認められる。

形態・法量　全形は把握できないが、直線的に外傾し、胴径23.2cmを測る。他類と同様の形態をとるものと思われる。

突帯形状　幅2 ～ 2.5cm、高さ0.8 ～ 1cm、上稜がやや突出する断面台形を呈する。最終的に上下面のヨコナデを施すために、上下稜は際立つ形状を示している。

E類



第57図　8号墳出土埴輪E類（1）

第58図　8号墳出土埴輪E類（2）・F類

(2) Ⅱ群

G類（106 ～ 113）

成形・器面調整　底部資料が確認できないため、基部成形は不明。粘土紐積み上げ間隔は3 ～ 3.5cmとやや広い。胴部器壁厚は10 ～ 14㎜。乾燥単位面は突帯付近にある。外面のハケ調整は一段ごとで、突帯の上位に開始の当たりが確認でき、上位の突帯のヨコナデに切られている。突帯の剥落は確認できない。

外面調整は左上がりのナナメハケ（1次）である。口縁（第4段）下半部には幅約0.8cmのヨコ方向の工具擦過痕が認められる。109を見ると、波状を意図しているようであるが、その行為は106を見ても不明瞭な部分もあり、確実性に欠けている。痕跡は2条以上の条線を伴っているのでハケメ状であるが、これも不鮮明である。ともかく、器面調整ではないので、文様的意図を有するものの可能性がある。かすみがうら市の富士見塚1号墳（杉山ほか2006）を始めとして、霞ヶ浦北西部・高浜入り地域に特有の波状文を施す円筒埴輪（伝田2001、本田2002）と同類のものと考えられる。

内面はタテ指ナデ成形ののち、左上がりのハケ調整。第3段以下はまばらで、第4段は密に施されている。積み上げ痕跡は残るものの、他類に比べ指ナデが丁寧である。

形態・法量　他類と同様、3突帯4段構成と想定しているが、第2段以下は確認できていない。口径26.3cm、胴径22.5㎝（平均）を測る。直線的に開く形態で、口縁部の外反は認められない。突帯貼付部分は内湾しており、貼付行為によるゆがみと考えられる。各段の高さは、第3段（111）10.0cm、口縁部（第4段、106）12.0cm。全形は不明であるが、D・E類と同様の間隔を示している。

口縁部形状　いわゆる直向口縁で、屈曲は見られない。端部調整は幅1cm前後と狭く、内面には折り返し状に粘土が被る。端部にはしっかりとした平坦面が作られている。

突帯形状　幅2 ～ 2.5cm、高さ0.5 ～ 0.8cmの扁平な断面方形を呈する。下面には規則的な凹凸があり、いわゆる「断続ナデ」によって貼り付けられたもの（中島1992）と見られる。ヨコナデ調整が丁寧にも関わらず、「整形」が十分でないためか、あるいは省略しているために、下面が器面から浮いている部分が散見される。112は4区一括取り上げで、断面三角形に近いが、ハケメパターンが一致するので本類型に含めた。

透かし孔　円形を呈する。切り抜きは右回りで無調整。残存状況から、小さめの円孔あるいは縦長の形状と思われる。

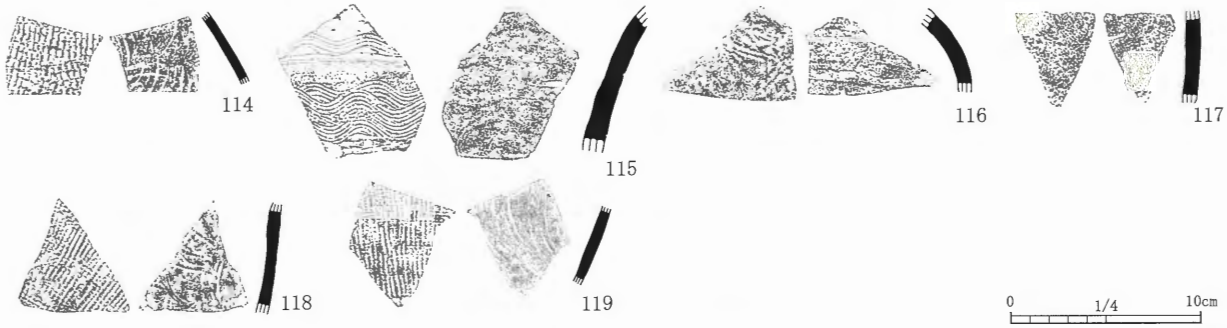
須恵器　古墳時代の甕の破片を図示した。114・118・119の甕胴部破片は、外面擬格子叩きののち間隔の開いたヨコナデが施される。内面は浅い当て具痕で、不十分ではあるがナデ消しが行われているものである。

絹雲母片岩　いずれも板状を呈する14 ～ 16cm大の小破片である（写真図版40-120 ～ 124）。石質には、硬質で砂っぽいものと軟質で肌理が細かいものの二者がある。前者は筑波地域寄りの産出、後者は石岡地域寄りの産出と見られる。

前記の地元の伝承と、8号墳との関連を積極的に評価すれば、これらの石材は埋葬施設（石棺等）の構築材の可能性が指摘できる。

G類

第59図　8号墳出土埴輪G類



第60図　8号墳出土遺物

第15表　8号墳出土遺物観察表

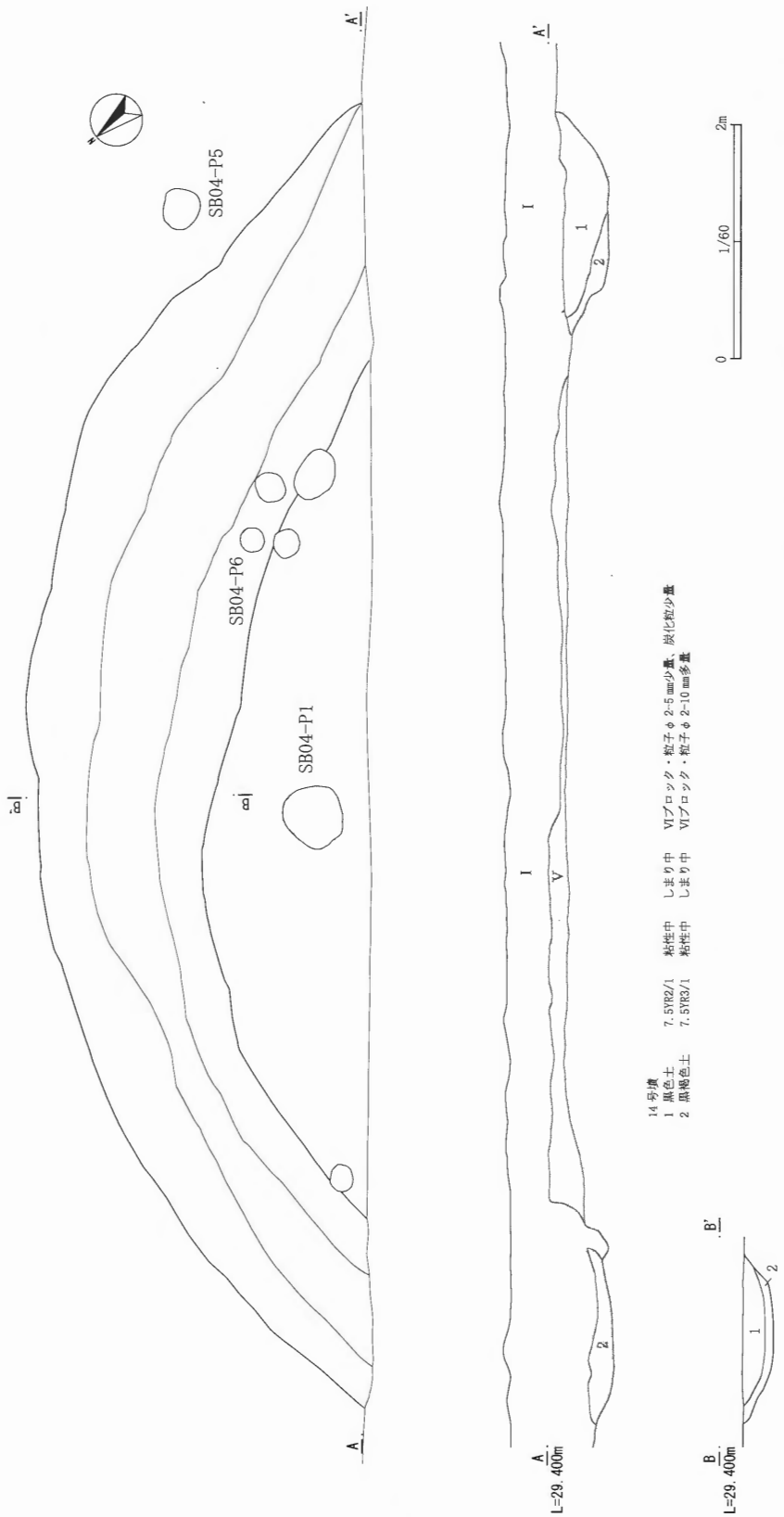
番号	遺構名	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
114	8号墳	SD01一括	須恵器	甕	75.3	—	—	—	外面は擬格子叩き。自然釉が被る。内面は青海波当具痕。	外面は擬格子叩き。自然釉が被る。内面は青海波当具痕。	精良。白色粒子微量。	内面 7.5Y 7/1 灰白 外面 7.5Y 6/1 灰	良好	胴部破片	東海産カ
115	8号墳	SD02	須恵器	甕	75.4	—	—	—	頸部の破片。頸部は厚手で大きく外反して開く。口縁部は欠損している。	外面は沈線による区画を行った後、2段に櫛描波状文が施文される。8本1単位。内面はロクロナデ。	白色粒子多量。	内面 7.5Y 6/1 灰 外面 7.5Y 4/1 灰	良好	頸部全周する	東海産カ
116	8号墳	SD02D1- t	須恵器	甕	25.4	—	—	—	強く内湾する胴部破片。瓶の肩部カ。	外面の整形痕は自然釉により観察できない。内面は横方向のヘラナデ。	精良。白色粒子微量。	内面 7.5Y 4/2 灰オリーブ 外面 5Y 6/2 灰オリーブ	良好	胴部破片	東海産カ
117	8号墳	SD02D2-u	須恵器	甕	15.2	—	—	—	緩やかに内湾する胴部破片。23と同一個体カ。	外面の整形痕は自然釉により観察できない。内面は横方向のヘラナデ。	精良。白色粒子微量。	内面 7.5Y 4/2 灰オリーブ 外面 5Y 6/2 灰オリーブ	良好	胴部破片	東海産カ
118	8号墳	SD02	須恵器	甕	22.6	—	—	—	胴部中位以下の破片。薄手。	外面は擬格子叩きが施され、自然釉が被る。内面は青海波当具痕の後、ナデ。	精良。やや軟質。白色粒子微量。	内面 5Y4/1 灰 外面 5Y 5/2 灰オリーブ	良好	胴部破片	東海産カ
119	8号墳	SD02	須恵器	甕	21.4	—	—	—	胴部の破片。薄手。	外面は細かな擬格子叩き。自然釉は被らない。内面は青海波当具の後ナデ。	精良。やや軟質。白色粒子微量。	内面 5Y4/1 灰 外面 5Y 5/2 灰オリーブ	良好	胴部破片	東海産カ
120・121	SD01	G1-e・SD01	石棺材	–	扁平な片岩。硬質で砂っぽい。長さ14.34cm・重さ321.6gと同6.72cm・同85.5gの2片。大破片の上面は赤色に熱変している。										絹雲母片岩 筑波寄りの産出カ
122・123	SD01	G2-f・SD01	石棺材	–	扁平な片岩。軟質で肌理が細かい。長さ6.06cm・重さ106.6gと同8.17cm・同73.0gの2片。										絹雲母片岩 石岡寄りの産出カ
124	SD02	SD02	石棺材	–	扁平な片岩。硬質で砂っぽい。長さ8.39cm・重さ105.4g。										絹雲母片岩 筑波寄りの産出カ

14号墳（SD13）（第61・62図・第23表・図版14・40）

2区E-1･2,F-1･2Gに位置している円墳で、調査区内では削平された墳丘・周溝の北側が検出されている。遺構の大部分を占める南側は調査区外となる。SB04に切られている。古墳の規模は残存部から推定して、墳丘外縁までの直径約10m、周溝外縁までの直径約13m。周溝の幅は13.5～1.90m、深さ30～60cmで概ね40cm前後を測る。覆土は黒色土・黒褐色土の2層からなるレンズ状堆積である。

遺物は縄文土器174.6g、弥生土器7.8g、土師器（古墳時代前期主体）508.3g、須恵器（平安時代）20.2g、埴輪129.0g、礫12.4gを検出した。また、本古墳の周溝SD13に該当する試掘確認調査23トレンチのSD-1からは、埴輪が1,823.8g検出されている。古墳時代中・後期の土師器は、赤彩の坏小片が3点確認できるのみである。

埴　輪　同工品H類とI類の2類型が確認できた。I類は試掘調査28トレンチにおいても検出されている。胎土は白雲母を多量に含む、8号墳と類似するものと考えられる。



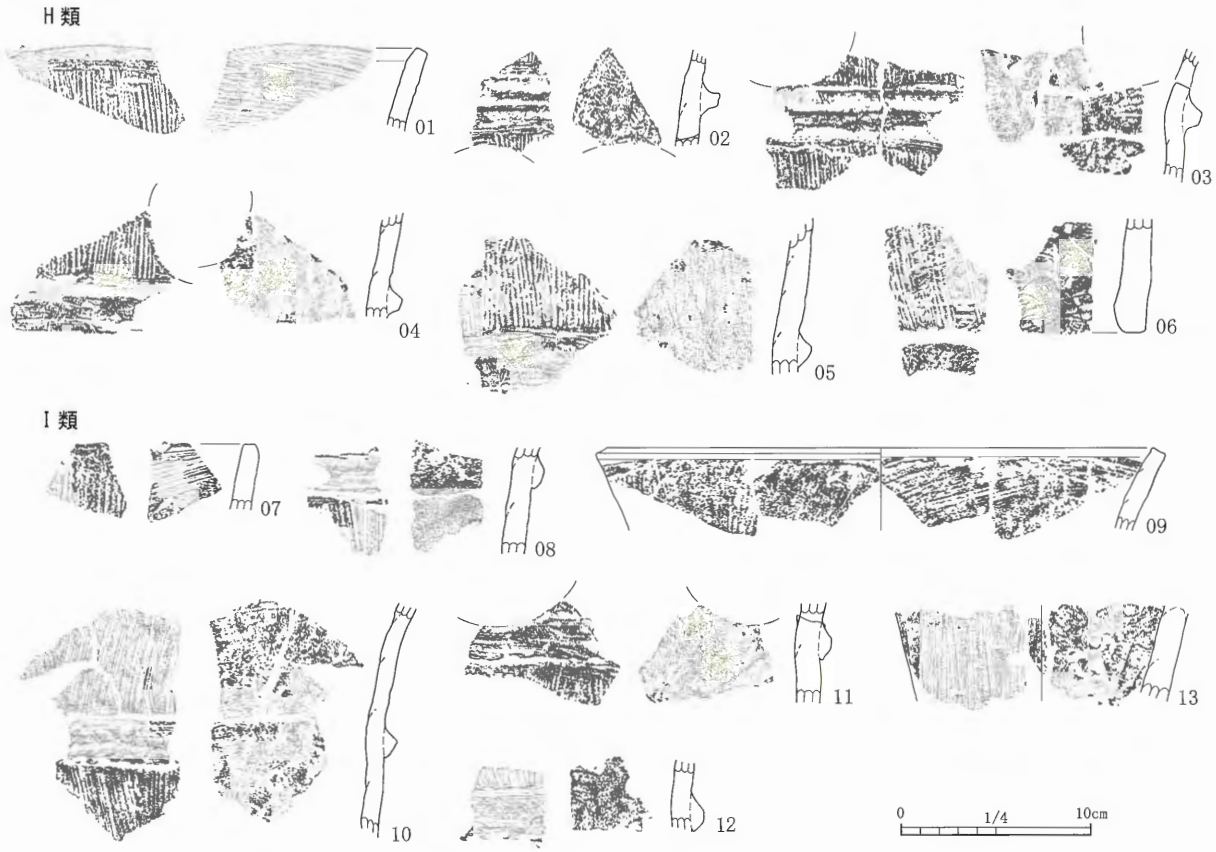
第61図　14号墳

H類（01 ～ 06）

粘土紐積み上げ成形。基部粘土帯は幅 5.5cm、積み上げ間隔は 2cm 前後。胴部器壁厚は 8 ～ 13 ㎜を測る。乾燥単位は不明。外面はタテハケ調整。内面は丁寧なタテ指ナデが施され、積み上げ痕跡はほとんど見られない。口縁部内面は左上がりのハケメを施す。底面には明瞭な圧痕はなく、形状の歪みもない。明確な底部調整は認められないが、整った形状を示している。口縁部は単純に外傾する形状で、端部には丁寧なヨコナデが加えられるが、匙面（凹面）を形成するほどではない。突帯は幅 2cm、高さ 1cm の細身で、上稜が高い断面台形を呈している。形状・走行ともに安定している。05 は丸味のある断面三角形を呈し、ハケメパターンは一致するものの、凹凸がやや異なる。透かし孔は円形、右回り切り抜き後、ナデを加えている。全体の形態は、底部から直線的に外傾してやや開く、胴部径 20cm 前後の円筒形と見られる。

I類（07 ～ 13）

粘土紐積み上げ成形。基部不明、積み上げ間隔は約 3cm。胴部器壁厚は 10 ～ 14 ㎜を測る。乾燥単位不明。外面タテハケ調整で、口縁部は右上がりのハケとなる。内面は右上がりの指ナデ（積み上げ痕跡ほとんど残らない）で、口縁部は右上がりのハケメが施される。後述の突帯のナデ付けも左から右へ行われていることから、本類型は「左利き」の製作者によるものと判断できる。口縁部は単純に外傾し、端部調整はナデ幅が狭く、基本的に端面を形成するものの安定しない。突帯は幅 1.7 ～ 2cm、高さ 0.8cm、下稜が不明瞭で下面のナデ付けが甘い断面三角形を呈する。下面には規則的な凹凸が認められ、突帯下の器表面には右下がりの爪圧痕が並ぶ。「断続ナデ」による貼り付けを示し、左手の人差し指と親指で挟んで左から右へ行われ、爪圧痕は左手人差し指のものである。透かし孔は円形、切り取り方向は不明瞭、無調整である。全形はやはり、底部から直線的に外傾してやや開く、口径 30cm、底径 12cm 程の円筒形と見られる。

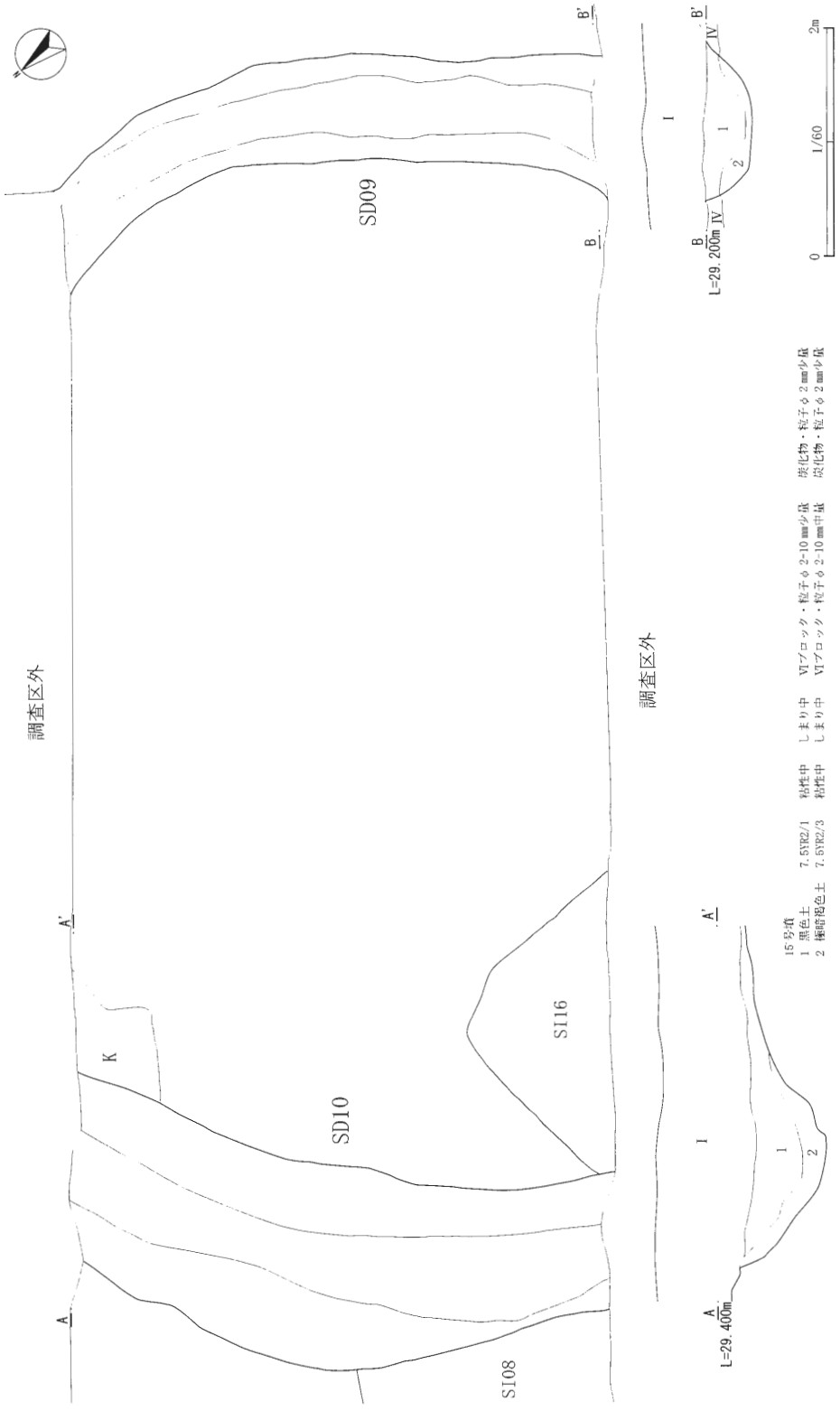


第 62 図　14 号墳出土遺物

15号墳（SD09・10）（第63・64図・第24表・図版14・40）

2区M-1・2,N-1・2Gに位置している円墳で、調査区内では削平された墳丘中央と東西の周溝が検出されている。SI08を切り、SI16に切られている。古墳の規模は残存部から推定して、墳丘外縁までの直径8.88ｍ、周溝外縁までの直径11.76ｍ、周溝は幅0.70～1.50m、深さ34～74cmを測る。覆土は黒色土から極暗褐色土の2層からなるレンズ状堆積である。

遺物は、SD09から弥生土器30.6g、礫4.3g、SD10から縄文土器406.9g、弥生土器40.1g、土師器（平安時代主体）1,370.1g、須恵器1,047.3g、埴輪716.3gを検出した。埴輪の出土量が少なく、SD09からは出土していない。局部的な使用、樹立を示している可能性がある。しかし、本古墳を切るSI08の覆土から275.8gの埴輪が検出されており、包含層位や後世の削平（9世紀代の整地の可能性など）の度合いも考慮しなければならないだろう。平安時代（9世紀代）の土師器はSI08由来と考えられ、古墳時代前期のものが15点ほど、中・後期の赤彩の坏破片が5点ある。須恵器は8世紀後半～9世紀代のもののみである。



第63図　15号墳

埴　輪　確認できる部位、資料数の少なさから、十分に同工品を設定するには至らないが、ハケメを手掛かりに分類を行う。14号墳のH類とハケメパターンが一致するJ類、K類とL類のほか、8号墳のA類とハケメが正逆の関係にある06・07（A'類）の4類型が確認された。06・07はハケメと、黄色粒子（粘土状）を含む胎土の特徴、内面調整の左上指ナデが同類と一致することから、8号墳の埴輪と見てよい。何らかの理由で本古墳の周溝に埋没したのであろう。すると、本古墳に伴うのは、J・K・L類の3類型となる。K類は1・4区（遺構外）、L類は2区（同）でも検出されている。

J類（01・02）

外面タテハケ、内面タテ指ナデで、口縁部内面にはヨコハケを施す。粘土紐積み上げ間隔は1.5cm程度か。積み上げ痕跡を少し残している。突帯は幅2cm、高さ1cm、最終的に上・端面をナデて上稜が高い台形を呈する。下面には規則的な凹凸が残り、「断続ナデ」貼付であることがわかる。01の口縁部内面には右上がりのヘラ記号がある。

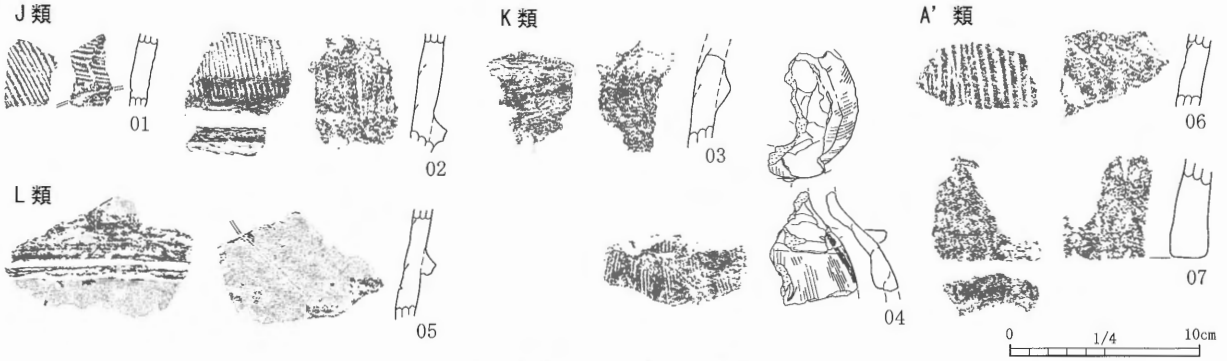
K類（03・04）

外面タテハケ、内面タテ指ナデ。突帯は幅2cm、高さ0.7cm、丸味を帯びた断面三角形を呈する。透かし孔は遺構外1区09を参考にすれば円形、切り取り面は無調整である。粘土紐の積み上げ間隔は2cm程度か。

04はハケメが一致することから、本類型に含めた。袋状の形状から、人物埴輪の頭部である可能性が高い。頂部が窄まる特徴的な形状を示し、上部に突帯状の貼り付け、側部に円弧状の貼り付け痕跡と見られるものがある。突帯状の貼り付けは、外面ナデ調整であることから被り物の表現、円弧状の痕跡は顔面作出表現などが想定される。頭頂部が丸くならずに、窄まるものとして、「細長い頭部」を特徴とする「市之台型」人物埴輪（稲村1999）がある。当類型は胎土に雲母片を含む「筑波山系の埴輪」に括られる（石橋2004）。しかし、本例を具体的に復元できる類例を見出すことはできていない。外面（突帯状の貼り付け前）タテハケ調整、内面は無調整で粘土紐積み上げ痕跡が明瞭である。還元・硬質焼成である。

L類（05）

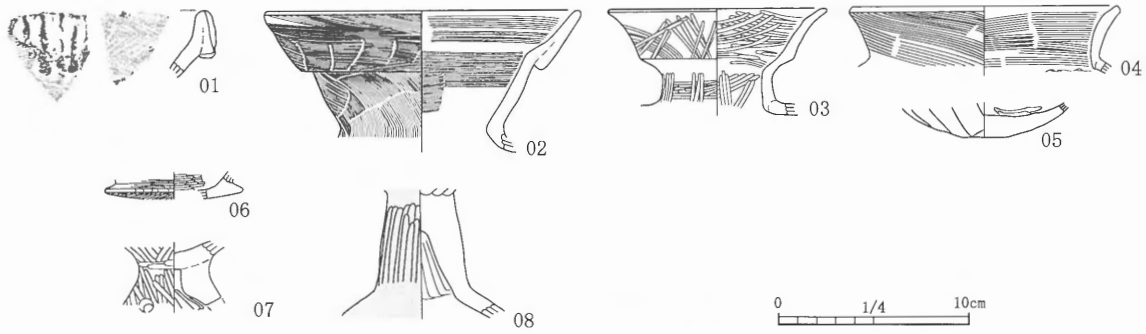
外面タテ板ナデ調整、硬質焼成を特徴とする。胎土には他類型と同様に白雲母片を多量に含んでいる。粘土紐の積み上げ間隔は2cm程度か。内面は丁寧な左上指ナデが施されている。突帯は幅1.2～1.7cm、高さ0.8cm、上稜が高い断面台形を呈する。最終的に上・端面をナデて整形、端面は強く窪んでいる。下面のナデ付けは甘く、規則的な凹凸が残り、「断続ナデ」による貼り付けであることがわかる。口縁部内面には左上がりのヘラ記号がある。遺構外2区14を参考にすると、透かし孔の切り取り面は無調整である。



第64図　15号墳出土遺物

第５項　遺構外出土遺物

古墳時代前～中期の土師器と後期の埴輪が確認できる。土師器については、個別の詳細は観察表を参照されたい。



第 65 図　遺構外出土遺物（古墳 1）

第 16 表　遺構外出土遺物観察表（古墳）

番号	地区名	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	4 区	SD01-G2-a	土師器	壺	13.5	—	〈3.6〉	—	折り返し口縁。口縁部には棒状の貼付が施される。	口縁はヨコナデの後に棒状貼付。内面は沈線による矢羽状の文様が描かれる。	雲母微量。白色粒子少量。	内外面 5YR 6/6 橙	良好	口縁部破片	4 世紀
02	4 区	SD01-E1-1	土師器	壺	112.0	(16.2)	〈7.3〉	—	頸部で「く」の字に折り返した後頸部は直線的に開く。口縁は幅広で折り返す。折り返し口縁。	外面胴部はハケ。頸部は斜め方向の細かなハケ。口縁部は横方向の細かなハケ。内面はハケの後ナデが行われる。	白色粒子少量。	内外面 10YR 7/4 にぶい黄橙	良好	口縁部 1/4～体部上端	4 世紀
03	1 区	SD05	土師器	壺	30.2	(11.5)	〈5.6〉	—	口縁は頸部に「く」の字に折れ頸部は外反気味に開く。口縁は段を有した後更に外反して開く二重口縁となる。	内外面共にナデ。	白色粒子・赤色粒子・雲母少量含む。	内面 10YR 5/3 にぶい黄褐 外面 10YR 7/3 にぶい黄橙	良好	口縁部～頸部破片	4 世紀
04	1 区	SD05	土師器	甕	14.9	(13.8)	〈3.6〉	—	口縁は「く」の字に屈曲して開く。口唇端部は面取りされる。	外面はハケの後下位はヨコナデ。その他は内外面共にハケ整形。	白色粒子・黒色粒子微量混入。	内面 10YR 7/4 にぶい黄橙 外面 10YR 8/4 黄橙	良好	口縁部破片	4 世紀
05	1 区	SD05	土師器	坩	55.6	—	〈1.8〉	3.4	底部は小さなやや上げ底気味の平底。体部は緩やかに内湾して大きく開く。	内面ナデ。外面ヘラケズリの後ナデ。	白色粒子少量。雲母多量。	内面 10YR 5/4 にぶい黄橙 外面 10YR 5/8 黄褐	良好	底部～胴部下半	5 世紀
06	1 区	SI02	土師器	器台	7.1	—	〈1.4〉	—	受け部下段はほぼ水平に開き、端部は丸い。同上段は外反して開く。	内外面共に横方向のミガキ。	白色粒子・石英少量。輝石または角閃石・白色針状物質微量。	内外面 7.5YR5/4 にぶい褐	良好	受け部破片	4 世紀
07	1 区	SD05	土師器	高坏	65.1	—	〈3.6〉	—	受け部及び裾部は欠損する。接合部は緩やかに外反して裾部になる。内面にソケット状の接合痕がみえる。	外面は縦方向のミガキ。脚内面はヘラナデ。	赤色粒子少量。	内面 10YR 8/4 浅黄橙 外面 10YR 6/6 明黄褐	良好	接合部のみ	5 世紀
08	1 区	SD05-01	土師器	高坏	140.3	—	〈6.6〉	—	受け部は接合部分より欠損している。脚部は上半でエンタシス状に膨らみを持ち、裾部で屈曲して開く。破損で孔は観察できない。	外面脚柱部は縦方向のミガキ。裾部はナデ。内面はヘラナデ。	白色粒子少量。雲母多量。	内面 10YR 5/3 にぶい黄褐 外面 10YR 5/8 黄褐	良好	脚柱部のみ	5 世紀 外面赤彩

埴　輪（第 66 図・第 25 表・図版 40）

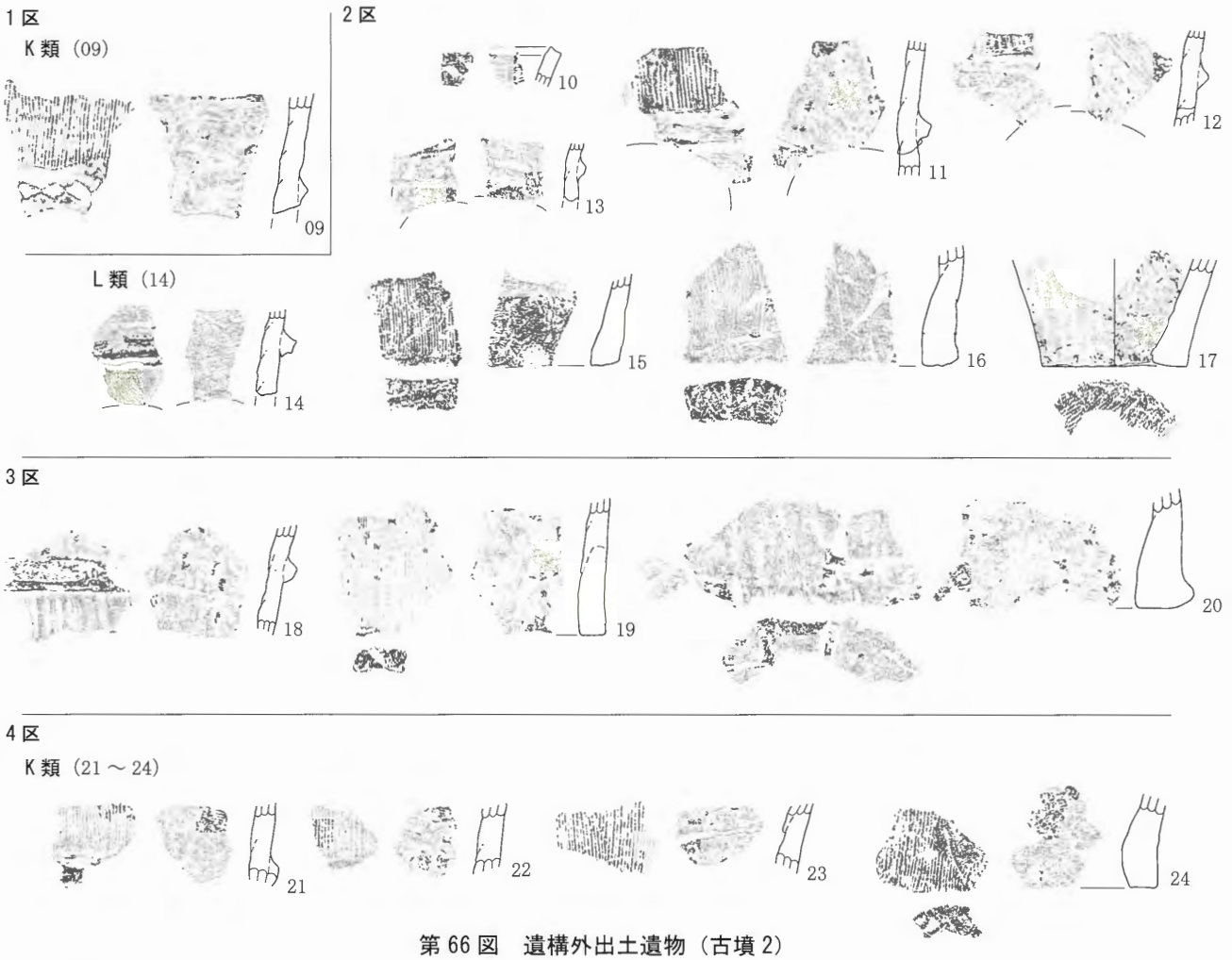
1　区　09 は 15 号墳の同工品 K 類。15 号墳の項を参照。

2　区　14 が 15 号墳の同工品 L 類であるほかは、異なるハケメ・属性を有するものである。10 ～ 13・15・16 はすべて外面タテハケ調整である。10 は、口縁端面をしっかり作るもので、端部内面には匙面が形成される。11 は、断面台形、幅 1.7cm、高さ 0.8cm と華奢な突帯を持つ胴部で、最終的に上・端面をナデて上稜が高い形状を示す。ナデ付けは丁寧である。破片左側の突帯の歪みは、製品の移動の際に透かし孔に手を掛けたことによるものである。胴部器壁厚は 9 ～ 12 ㎜と薄手で、粘土紐の積み上げ間隔は 1.5 ～ 2cm と狭い。内面の指ナデは積み上げ痕を残すものの、比較的丁寧である。透かし孔の切り取り面は無調整。磨滅が著しいが、11 と SD05-01 は同一のハケメの可能性がある。12 は、突帯下面に凹凸があることから「断続ナデ」貼付によるもので、上下面の丁寧なヨコナデによって断面三角形に仕上げられる。内面にナナメハケが見られることから、上段は口縁部と考えられる。透かし孔の切り取り面はナデてある。13 は、胴部器壁厚 0.7 ～ 0.8 ㎜と薄いのが特徴で、突帯は幅 1.3cm、高さ 0.5cm と小さい断面台形（上稜高い）を呈する。損耗が著しく、その他の属性は不明瞭である。15 は、器壁厚 11 ～ 16 ㎜の底部で、基部粘土帯幅 5cm を測る。底面に繊維状圧痕が残る。16 は器壁厚 8 ～ 20 ㎜のやや厚手の底部で、基部粘土帯幅 6cm を測る。底面に繊維状圧痕を示す。17 は形状・法量から形象埴輪と考えられ、四足動物の脚部の可能性がある。胎土は白色の長石と海綿骨針を含み、今回の調査で出土した埴輪の中で、唯一、白雲母片を含まないものである。外傾する細い円筒形を呈し、底面には板目圧痕を残す。内外面下端

にはナデ付けなどの痕跡はなく、別の部材が貼り付けられていた状況ではない。外面は板状工具によるタテナデである。

3　区　20が器表面の磨滅のためにやや判然としないものの、ハケメは互いに一致しない。18は、間隔の広い追柾目のハケメを示す。突帯は下面のナデ付けが甘く、やや凹凸があるので「断続ナデ」による貼り付けの可能性がある。上稜が高い断面台形を呈する。粘土紐積み上げ間隔は2cmほどで、内面にはやや積み上げ痕跡を残している。19は、復元径14cm程の底部破片。器壁厚11～15㎜、薄手の作り。基部粘土帯は幅4cm程、粘土紐積み上げ間隔は2cm。やや積み上げ痕を残す。外面のハケ調整は丁寧である。20は、器壁厚16～33㎜を測る肉厚な底部破片で、基部粘土帯幅6.5cm、底面には丸棒状の圧痕が残る。3点とも白雲母を多量に含む、8号墳の埴輪と類似する胎土であるが、製作手法は異なり、また三者三様である。それぞれ同工品は確認できず、8・14・15号墳や他に想定されるものとは異なる古墳の存在が推定される。

4　区　4点とも15号墳の同工品K類とハケメが一致する。器壁厚11～14㎜、粘土紐の積み上げ間隔は1.5～2cmと狭い。残存する底面は平滑であるが、基本的に底部調整は行われていない。突帯は上稜が高く、下稜が丸味を帯びた幅狭の形状と見られる。



第66図　遺構外出土遺物（古墳2）

【注】

1　本書で取り扱う円筒埴輪の製作法については、次の文献を基礎とする。赤塚1979、川西1978・1988、犬木1995、埋蔵文化財研究会2003。

2　器面調整の「1次」「2次」は、川西宏幸氏が規定する（川西1978）突帯の貼り付け前後による区分ではなく、単なる「下地」「仕上げ」に換言できるものとする。赤塚次郎氏の言う（赤塚1979）、製作行為全体に位置づけた「整形用」「調整用」との対応については、十分に検討できていない。したがって、本書で用いる「調整」は、両者を包含した概念となる。

3　本古墳出土埴輪の各段の高さの計測は、辻川哲朗氏の定義（辻川2003）に従って設定された突帯間隔を反映させるため、凹線の位置が概ね対応する各突帯の上稜と、工具の下端が接する各突帯の上面付け根を計測ラインとする。したがって、第1段（底部）は底外端部から第1突帯上稜まで、第2・3段は下位突帯上面から上位突帯上稜まで、第4段（口縁部）は第3突帯上面から口縁外端部とする。

第17表　埴輪属性表（試掘確認調査）

番号	調査区	遺構	注記	分類	器種	部位	残存（円周）	法量 計測位置	法量 直径	器壁厚	重量	胎土（含有物）	成形・器面調整 外面	成形・器面調整 内面	ハケメ	突帯痕跡	透かし孔	焼成	色調	備考
01	試掘確認調査 28トレンチ		坂畑08.C.28Tr	I	円筒	胴部				11～12	27.5	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	タテ指ナデ	6	-	-	酸化	5YR4/6 赤褐	
02	試掘確認調査 28トレンチ		坂畑08.C.28Tr	I	円筒	胴部				11～13	28.0	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	指押え	6	-	-	酸化	7.5YR5/6 明褐	
03	試掘確認調査 28トレンチ		坂畑08.C.28Tr	-	円筒	底部				12～14	59.8	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	左上ハケ	-	-	-	酸化	10YR6/6 明黄褐	

第18表　埴輪属性表（SD05）

番号	調査区	遺構	注記	分類	器種	部位	残存（円周）	法量 計測位置	法量 直径	器壁厚	重量	胎土（含有物）	成形・器面調整 外面	成形・器面調整 内面	ハケメ	突帯痕跡	透かし孔	焼成	色調	備考
01	1区	SD05	SD05	-	円筒	胴部				13～14	67.3	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	タテ指ナデ	-	-	-	酸化	7.5YR5/6 明褐	

第19表　埴輪属性表（8号墳）

番号	調査区	遺構	注記	分類	器種	部位	残存（円周）	法量 計測位置	法量 直径	器壁厚	重量	胎土（含有物）	成形・器面調整 外面	成形・器面調整 内面	ハケメ	突帯痕跡	透かし孔	焼成	色調	備考
01	4区	8号墳	E1-d・y	A	朝顔	口縁部	1/8	口縁部	39.6	10～14	211.4	白雲（多）、黒雲、片、長、英、赤	タテハケ→ 口縁左上ハケ→ ヨコナデ	左上ハケ→ 口縁ヨコハケ→ ヨコナデ・下半左上指ナデ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
02	4区	8号墳	SD01No16・ E1-y・4区	A	朝顔	口縁～頸部	1/3	口縁部	21.5	12～15	1045.1	白雲（多）、黒雲、片、長、英、赤	頸突帯ヨコナデ→ 口縁下半タテハケ	ヨコハケ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
03	4区	8号墳	SD01	A	朝顔	頸～肩部	1/5	胴部	20.0	14～15	215.9	白雲（多）、片、長、英、赤	頸突帯ヨコナデ→ 口縁下半タテハケ	口縁ヨコハケ、肩ヨコナデ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
04	4区	8号墳	G2-u	A	朝顔	肩部				6～8	74.1	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	左上指ナデ	1	-	右・無	酸化	5YR5/4 にぶい赤褐	
05	4区	8号墳	E1-g	A	朝顔	肩部				11～13	86.0	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	タテナデ	1	-	-	酸化	5YR5/4 にぶい赤褐	
06	4区	8号墳	E1-d	A	朝顔	肩～胴部	1/4	胴部	24.2	11～14	505.4	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ （突帯ヨコナデ→ 肩タテハケ）	肩ヨコナデ、胴左上指ナデ	1	-	-	酸化	5YR6/6 橙	第4段高10.5cm 胴部に縦位の粘土貼付・ナデあり。補修痕ヵ
07	4区	8号墳	G2-u	A	朝顔	胴部				11～15	175.2	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	左上指ナデ	1	-	右・無	酸化	5YR5/6 明赤褐	
08	4区	8号墳	F2-f	A	円筒	口縁部				10～11	65.5	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ→ 口縁ヨコナデ	ヨコハケ→ 口縁ヨコナデ	1	口端外回線	-	酸化	5YR6/8 橙	
09	4区	8号墳	G2-u	A	円筒	口縁部				9～10	70.6	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ→ 口縁ヨコナデ	ヨコハケ→ 口縁ヨコナデ	1	口端外回線	-	酸化	5YR5/4 にぶい赤褐	
10	4区	8号墳	F2-f	A	円筒	口縁部				9～11	36.2	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ→ 口縁ヨコナデ	ヨコハケ→ 口縁ヨコナデ	1	口端外回線	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
11	4区	8号墳	F2-f	A	円筒	口縁部				9～12	62.9	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ→ 口縁ヨコナデ	ヨコハケ→ 口縁ヨコナデ	1	口端外回線	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
12	4区	8号墳	SD01No16	A	円筒	口縁部				9～11	202.4	白雲（多）、黒雲、片、長、英、赤、黄	タテハケ→ 口縁ヨコナデ	ヨコハケ→ 口縁ヨコナデ	1	口端外回線ヵ （口縁ヨコナデで不明瞭）	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
13	4区	8号墳	G1-r	A	円筒	口縁部				10～12	75.8	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ→ 口縁ヨコナデ	ヨコハケ→ 口縁ヨコナデ	1	-	-	酸化	5YR5/8 明赤褐	
14	4区	8号墳	SI19	A	円筒	口縁部				9～10	125.8	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ→ 口縁ヨコナデ	下半ナデ・タテハケ→ 口縁ヨコハケ→ 口縁ヨコナデ	1	口端外回線2条ヵ	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
15	4区	8号墳	E1-y	A	円筒	口縁部	1/4	口縁部	23.1	8～10	134.5	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ→ 口縁ヨコナデ	ヨコハケ→ 口縁ヨコナデ	1	口端外回線	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
16	4区	8号墳	4区	A	円筒	口縁部				8～11	84.0	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ→ 右上ナデ→ 口縁ヨコナデ	下半ナデ→ 口縁ヨコハケ→ 口縁ヨコナデ	1	口端外回線ヵ。	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
17	4区	8号墳	F2-k	A	円筒	口縁部				9～12	79.8	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ→ 口縁ヨコナデ	ヨコハケ→ 口縁ヨコナデ	1	口端外回線 （口縁ヨコナデに切られる）	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
18	4区	8号墳	SD02	A	円筒	口縁部				9～13	89.7	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ→ 口縁ヨコナデ	ヨコハケ→ 口縁ヨコナデ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
19	4区	8号墳	F2-k	Aヵ	円筒	口縁部				10～12	80.8	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ→ 口縁ヨコナデ	ヨコハケ→ 口縁ヨコナデ	1	口端外回線	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	外面ヘラ記号「×ヵ」
20	4区	8号墳	F2-f	A	円筒	4・3段	1/4	胴部	25.8	11～12	214.5	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	3段タテナデ→ 4段ヨコハケ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
21	4区	8号墳	B5	A	円筒	4・3段				10～12	155.6	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	3段左上指ナデ→ 4段ヨコハケ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
22	4区	8号墳	G2-u	A	円筒	4・3段				9～13	180.8	白雲（多）、黒雲、片、長、英、赤、黄	タテハケ	3段左上指ナデ→ 4段ヨコハケ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
23	4区	8号墳	F2-u	A	円筒	4・3段				9～11	57.3	白雲（多）、黒雲、片、長、英、赤	タテハケ	3段ナデ→ 4段ヨコハケ	1	凹線2条	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	

第 20 表　埴輪属性表（8 号墳）

番号	調査区	遺構	注記	分類	器種	部位	残存（円周）	法量		器壁厚	重量	胎土（含有物）	成形・器面調整		ハケメ	突帯痕跡	透かし孔	焼成	色調	備考
								計測位置	直径				外面	内面						
24	4区	8号墳	G2-f	A	円筒	4・3段				11～12	75.5	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ→ヨコハケヵ	4段ヨコハケ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
25	4区	8号墳	F2-f・SD01	A	円筒	3or2段	1/5	胴部	24.4	12～14	165.1	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ→B種ヨコハケ	左上指ナデ	1	設定工具擦痕	右・無	酸化	5YR5/6 明赤褐	
26	4区	8号墳	SD01	A	円筒	3or2段				11～12	78.0	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ→B種ヨコハケ	左上指ナデ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
27	4区	8号墳	SD01	A	円筒	3・2段				11～13	166.2	白雲（多）、長、英、赤	タテハケ	左上指ナデ	1	設定工具擦痕	右・無	酸化	5YR5/6 明赤褐	
28	4区	8号墳	SD01No21	A	円筒	3・2段				12～13	145.3	白雲（多）、長、英、赤	タテハケ	左上指ナデ	1	-	右・無	酸化	5YR5/6 明赤褐	
29	4区	8号墳	SD02	A	円筒	4段				10～11	69.6	白雲（多）、片、長、英、赤	突帯ヨコナデ→タテハケ	左上指ナデ→ヨコハケ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	外面有目圧痕（ハケを切る）
30	4区	8号墳	G2-u	A	円筒	3・4段				11～13	11.6	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	3段タテハケ→突帯ヨコナデ→4段タテハケ	左上指ナデ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
31	4区	8号墳	坂畑08.C.17Tr	A	円筒	3・2段				12～15	196.7	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	左上指ナデ	1	凹線2条	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
32	4区	8号墳	SD01	A	円筒	3・2段				13～18	259.8	白雲（多）、長、英、赤、黄	タテハケ	タテナデ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
33	4区	8号墳	F1-j	A	円筒	3・2段	1/4	胴部	21.1	12～14	240.2	白雲（多）、長、英、赤	タテハケ	左上指ナデ	1	設定工具擦痕	右・無	酸化	5YR5/6 明赤褐	
34	4区	8号墳	SD01	A	円筒	3or2段				10～14	48.3	白雲（多）、長、英、赤	タテハケ	左上指ナデ	1	凹線2条	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
35	4区	8号墳	SD01No49・SD01	A	円筒	底部	1/5	底部	21.4	12～26	532.3	白雲（多）、黒雲、長、英、赤	タテハケ	左上指ナデ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	第1段高 11.1cm，底部粘土帯内面板目圧痕
36	4区	8号墳	SD01No28	A	円筒	底部				17～19	226.5	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	左上指ナデ	1	-	-	酸化、断面還元	5YR5/6 明赤褐	
37	4区	8号墳	F1-j	B	円筒	口縁部				9～10	93.6	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ→口縁ヨコナデ	ヨコナデ→タテハケ→口縁ヨコナデ	1	-	-	酸化	7.5YR5/6 明褐	
38	4区	8号墳	F1-j	B	円筒	4段				10～12	94.1	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ→口縁ヨコナデ	タテ板ナデ→口縁ヨコナデ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
39	4区	8号墳	E1-y・SD02	Bヵ	円筒	3・2段	1/8	胴部	22.9	9～10	136.1	白雲（多）、長、英、赤	タテハケ	左上ハケ	1	設定工具擦痕	右・無	酸化	5YR6/8 橙	
40	4区	8号墳	SD01No29	B	円筒	3・2段	1/4	胴部	23.4	12～13	193.5	白雲（多）、黒雲、長、英、赤	タテハケ	タテ指ナデ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
41	4区	8号墳	SD01No6	B	円筒	3～1段	1/6			10～11	134.7	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	ヨコナデ→タテ指ナデ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
42	4区	8号墳	F1-j SD02	B	円筒	3～1段	1/5	胴部	24.6	8～11	192.0	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	ヨコハケ→タテ指ナデ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
43	4区	8号墳	SD01No51	B	円筒	3～1段				9～11	81.0	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	ヨコハケ→タテ板ナデ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
44	4区	8号墳	E1-y	B	円筒	3～1段	1/6	胴部	23.3	9～13	288.3	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	左上ナデ？→タテ板ナデ	1	設定工具擦痕	-	酸化、断面還元	5YR6/8 橙	
45	4区	8号墳	E1-t	B	円筒	3～1段				10～11	86.4	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	ヨコナデ？→タテ板ナデ	1	設定工具擦痕	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
46	4区	8号墳	G1-o	B	円筒	3～1段				13～15	114.9	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	ヨコナデ？→タテ板ナデ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
47	4区	8号墳	SD02 D2-f	B	円筒	底部				18～19	58.1	白雲（多）、長、英、赤	タテハケ	タテハケ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	底部粘土帯内面板目圧痕
48	4区	8号墳	SD01No52	B	円筒	底部	1/5	底部	22.0	14～21	296.5	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	タテハケ→底ヨコケズリ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
49	4区	8号墳	SD01No51	B	円筒	底部	1/5	底部	22.5	14～27	235.6	白雲（多）、黒雲、長、英、赤	タテハケ	タテハケ→底ヨコケズリ	1	-	-	酸化、断面還元	5YR6/8 橙	底部粘土帯内面掌ｍ紋圧痕
50	4区	8号墳	F1-t	C	朝顔	口縁部				9～11	80.9	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	左上ハケ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	外面赤彩ヵ
51	4区	8号墳	SD01No41・48・E1-t	C	円筒	4・3・2段・底部	1/6	底部	24.0	11～21	1146.9	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	タテ指ナデ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	第1段高 11.8、第2・3段各 10.0cm
52	4区	8号墳	E1-y	C	円筒	4・3段	1/5	胴部	25.5	11～12	198.9	白雲（多）、長、英、赤	タテハケ	タテ指ナデ→左上ハケ	1	-	右・無	酸化	5YR5/6 明赤褐	
53	4区	8号墳	SD01No46	C	円筒	3・2段	1/6	胴部	29.3	10～12	253.7	白雲（多）、片、長、英、赤、黄（多）、チャ	タテハケ	タテ指ナデ	1	-	右・無	酸化	5YR5/6 明赤褐	
54	4区	8号墳	F2-f・F2-k	C	円筒	4・3段				10～12	98.3	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	ヨコハケ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
55	4区	8号墳	SD01No48・50・51	C	円筒	3・2段	1/4	胴部	24.5	10～12	404.8	白雲（多）、片、長、英、赤、黄（多）、チャ	タテハケ	タテ指ナデ	1	-	右・無	酸化	5YR5/6 明赤褐	
56	4区	8号墳	E1-s・E1-t・E1-y	C	円筒	3・2段	1/5	胴部	24.5	10～12	270.6	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	タテ指ナデ	1	-	右・無	酸化	7.5YR5/6 明褐	
57	4区	8号墳	SD01No23	C	円筒	3・2段				10～12	182.2	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	タテ指ナデ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
58	4区	8号墳	F1-o	C	円筒	3・2段				11～12	115.6	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	タテ指ナデ	1	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
59	4区	8号墳	E1-x	C	円筒	3・2段				11～12	64.8	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	タテ指ナデ	1	-	右・無	酸化	5YR5/6 明赤褐	
60	4区	8号墳	F2-t	C	円筒	底部	1/6	底部	19.9	16～21	208.5	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	タテ指ナデ	1	底外端に設定工具擦痕	-	酸化、断面還元	5YR6/8 橙	
61	4区	8号墳	SD01No53	C	円筒	底部	1/4	底部	18.4	17～23	373.8	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	左上指ナデ→タテ指ナデ	1	底外端に設定工具擦痕	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	

第21表　埴輪属性表（8号墳）

番号	調査区	遺構	注記	分類	器種	部位	残存（円周）	法量		器壁厚	重量	胎土（含有物）	成形・器面調整		ハケメ	突帯痕跡	透かし孔	焼成	色調	備考
								計測位置	直径				外面	内面						
62	4区	8号墳	SD01	C	円筒	底部	1/4	底部	20.4	17～21	437.2		タテハケ	タテ指ナデ	1	底外端に設定工具擦痕	－	酸化	5YR5/6 明赤褐	
63	4区	8号墳	SD01No56	D	円筒	口縁部・3・2段	1/3	口縁部	36.4	9～14	2215.0	白雲（多）、片、長、英、赤、黄（多）	タテハケ→口縁ヨコナデ	ヨコ指ナデ→4段ヨコハケ→口縁ヨコナデ	2	凹線2条	右・無	酸化	5YR5/6 明赤褐	第3段高9.5、第4段13.5cm
64	4区	8号墳	SD01No57	D	円筒	口縁部・3・2・1段	1/2	口縁部	35.8	9～15	3500.0	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ→口縁ヨコナデ	ヨコ指ナデ→4段ヨコハケ→口縁ヨコナデ	2	－	右・無	酸化	5YR5/6 明赤褐	第2段高11.0、第3段高10.0、第4段13.0cm
65	4区	8号墳	F1-j・SD02	D	円筒	口縁部				11～13	106.3	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ→口縁ヨコナデ	ヨコハケ→口縁ヨコナデ	2	－	－	酸化	5YR5/6 明赤褐	
66	4区	8号墳	E1-y	D	円筒	4段				9～11	65.6	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	ヨコハケ→口縁ヨコナデ	2	－	－	酸化	5YR5/6 明赤褐	外面ヘラ記号「左上開きC」字形
67	4区	8号墳	F2-u	D	円筒	4段				11～12	19.9	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	ヨコハケ	2	－	－	酸化	5YR5/6 明赤褐	外面ヘラ記号「左上開きC」字形
68	4区	8号墳	F2-p	D	円筒	4段				12～13	19.0	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	ヨコハケ	2	－	－	酸化	5YR5/6 明赤褐	外面ヘラ記号
69	4区	8号墳	E1-o	D	円筒	4段				10～11	9.9	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	ヨコハケ→口縁ヨコナデ	2	－	－	酸化	5YR5/8 明赤褐	外面ヘラ記号「左上開きC」字形
70	4区	8号墳	F1-j	D	円筒	4・3段				12～16	191.6	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	ヨコ板ナデ→口縁ヨコハケ→口縁ヨコナデ	2	－	－	酸化、断面還元	5YR6/8 橙	
71	4区	8号墳	F1-y	D	円筒	4～2段				11～13	159.0	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	ヨコ板ナデ	2	凹線2条	－	酸化	5YR5/8 明赤褐	
72	4区	8号墳	F2-p	D	円筒	4～2段				13～16	94.2	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	ヨコ板ナデ	2	－	－	酸化	5YR5/8 明赤褐	
73	4区	8号墳	SD01No37・38・39・E1-s	D	円筒	4・3段	1/4	胴部	32.0	10～15	377.2	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	ヨコナデ→4段ヨコハケ	2	－	右・無	酸化	5YR5/8 明赤褐	段間10.0cm
74	4区	8号墳	F2-u	D	円筒	4～2段				9～11	180.1	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	ヨコ板ナデ	2	－	－	酸化	5YR5/8 明赤褐	
75	4区	8号墳	G1-e	D	円筒	4～2段				11～14	80.5	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	ヨコ板ナデ	2	凹線1条	－	酸化	5YR5/8 明赤褐	
76	4区	8号墳	SD01No44	D	円筒	4～2段				10～14	149.6	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	ヨコ板ナデ	2	－	－	酸化	5YR5/8 明赤褐	
77	4区	8号墳	E1-y	D	円筒	4～2段				9～11	137.9	白雲（多）、片、長、英、赤、黄（多）	タテハケ	ヨコナデ	2	－	－	酸化	5YR5/8 明赤褐	
78	4区	8号墳	SD01	D	円筒	4～2段				12～16	144.9	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	ヨコ板ナデ	2	－	右・無	酸化	5YR5/8 明赤褐	透かし孔に持運び時の指掛け圧痕あり
79	4区	8号墳	SD01No51・SD01	D	円筒	4～2段	1/6	胴部	24.7	10～12	187.0	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	タテハケ	ヨコ板ナデ	2	－	－	酸化	5YR5/8 明赤褐	
80	4区	8号墳	G2-f・G2-k	D	円筒	2段・底部	1/4	底部	22.9	13～21	483.9	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	ヨコ板ナデ	2	底外端に設定工具擦痕	－	酸化、断面還元	7.5YR5/6 明褐	第1段高12.8cm
81	4区	8号墳	E1-t	D	円筒	底部				12～20	132.1	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	ヨコ板ナデ	2	－	－	酸化	5YR5/8 明赤褐	底部粘土帯内面板目圧痕
82	4区	8号墳	F1-t	D	円筒	底部				16～20	65.0	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	ヨコ板ナデ	2	－	－	酸化	5YR5/8 明赤褐	
83	4区	8号墳	SD01No24・25・G1-e	E	朝顔	口縁部	1/4	口縁部	44.0	9～17	1972.2	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	左上ハケ→口縁ヨコナデ	ヨコハケ	3	－	－	酸化	5YR5/8 明赤褐	
84	4区	8号墳	SD01No30・31・32・E1-t・E1-y・SD01、SD01No42・43・E1-t	E	円筒	口縁部・3段	1/2	口縁部	33.6	10～15	1725.0	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ→口縁ヨコナデ	左上指ナデ→4段上半ヨコハケ→口縁ヨコナデ	3	－	－	酸化、断面やや還元（2.5Y6/4にぶい黄）	5YR5/8 明赤褐	第4段高16.0cm。口縁部外面ヘラ記号「×」
85	4区	8号墳	F1-j	E	円筒	口縁部	1/8	口縁部	33.0	10～12	395.8	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ→口縁ヨコナデ	左上指ナデ→上半ヨコハケ→口縁ヨコナデ	3	－	－	酸化	5YR5/8 明赤褐	第4段高13.0cm。口縁部外面ヘラ記号「×」
86	4区	8号墳	F1-o	E	円筒	口縁部				8～11	83.9	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	左上ハケ→口縁ヨコナデ	ヨコハケ→口縁ヨコナデ	3	－	－	酸化	5YR5/8 明赤褐	
87	4区	8号墳	E1-s	E	円筒	4段				9～11	24.1	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ	左上指ナデ→上半ヨコハケ	3	－	－	酸化	5YR5/8 明赤褐	口縁部外面ヘラ記号「×」
88	4区	8号墳	F2-p	E	円筒	4段				10～12	15.7	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ	左上指ナデ→ヨコハケ	3	－	－	酸化	5YR5/8 明赤褐	口縁部外面ヘラ記号「×」
89	4区	8号墳	SD01	E	円筒	4段				8～11	40.9	白雲（多）、片、長、英、赤、黄	左上ハケ	左上指ナデ→上半ヨコハケ	3	－	－	酸化	5YR5/8 明赤褐	口縁部外面ヘラ記号「×」カ
90	4区	8号墳	SD01No7・F1-j・F2-a	E	円筒	4～2段	1/4	胴部	26.4	9～12	233.2	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ	左上指ナデ	3	－	右・一部ナデ	酸化、断面還元	7.5YR6/8 橙	
91	4区	8号墳	SD01	E	円筒	4・3段カ				9～12	143.2	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ	左上指ナデ（ヨコハケ痕跡あり）	3	－	右・ナデ	酸化	5YR5/8 明赤褐	
92	4区	8号墳	F1-j・F2-f	E	円筒	4～2段	1/5	胴部	25.1	10～13	191.1	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ	左上指ナデ	3	－	右・一部ナデ	酸化、断面還元	5YR5/8 明赤褐	
93	4区	8号墳	SD01No14	E	円筒	4～1段				11～13	150.5	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ	左上指ナデ	3	－	右・一部ナデ	酸化	5YR5/8 明赤褐	
94	4区	8号墳	SD01	E	円筒	4～2段	1/6	胴部	24.4	11～13	170.6	白雲（多）、黒雲、片、長、英、赤	左上ハケ	左上指ナデ	3	－	－	酸化	5YR5/8 明赤褐	
95	4区	8号墳	SD01	E	円筒	4～1段				10～16	129.3	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ	左上指ナデ	3	凹線2条カ、設定工具擦痕	－	酸化	5YR5/6 明赤褐	

第 22 表　埴輪属性表（8 号墳）

番号	調査区	遺構	注記	分類	器種	部位	残存（円周）	法量		器壁厚	重量	胎土（含有物）	成形・器面調整		ハケメ	突帯痕跡	透かし孔	焼成	色調	備考
								計測位置	直径				外面	内面						
96	4区	8号墳	SD01	E	円筒	3or2段				11～12	83.4	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ	左上指ナデ	3	-	右・ナデ	酸化	5YR5/9 明赤褐	
97	4区	8号墳	SD01No3・13・F1-j	E	円筒	3・2・1段	1/4	胴部	25.4	10～14	577.2	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ	左上指ナデ	3	設定工具擬痕ヵ	右・一部ナデ	酸化、断面還元	7.5YR6/6 橙	第2段高 10.0cm
98	4区	8号墳	SD01No5・11・F1-j・SD02	E	円筒	2段・底部	1/2	底部	20.8	13～25	1420.9	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ→底ヨコナデヵ	左上指ナデ	3	-	右・ナデ	酸化、断面還元	7.5YR6/8 橙	第1段高 12.6cm
99	4区	8号墳	F2-u・SD01	E	円筒	底部	1/2	底部	18.7	14～21	487.6	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ→底ヨコナデヵ	左上指ナデ	3	-	-	酸化	5YR5/8 明赤褐	
100	4区	8号墳	E1-y	F	円筒	2・1段	1/5	胴部	23.2	11～17	236.2	白雲（多）、片、長、英、赤	タテ板ナデ	タテ指ナデ	-	-	-	酸化	5YR6/8 橙	
101	4区	8号墳	E1-y	F	円筒	4～1段				11～15	87.9	白雲（多）、片、長、英、赤	タテ板ナデ	タテ指ナデ	-	-	-	酸化、断面一部還元	5YR6/8 橙	
102	4区	8号墳	P33	F	円筒	4～1段				10～11	60.5	白雲（多）、片、長、英、赤	タテ板ナデ	タテ指ナデ	-	-	-	酸化	5YR6/8 橙	
103	4区	8号墳	SD02	F	円筒	4～1段				12～13	58.2	白雲（多）、片、長、英、赤	タテ板ナデ	タテ指ナデ	-	-	-	酸化	5YR6/8 橙	
104	4区	8号墳	SD02	F	円筒	底部				14～20	112.0	白雲（多）、片、長、英、赤	タテ板ナデ	タテ指ナデ→底ヨコケズリ	-	-	-	酸化	5YR6/8 橙	
105	4区	8号墳	E1-y	F	円筒	底部				19～23	80.8	白雲（多）、片、長、英、赤	タテ板ナデ	タテ指ナデ→底ヨコケズリ	-	-	-	酸化	5YR6/8 橙	
106	4区	8号墳	SD01No1・F1-j	G	円筒	口縁部	1/5	口縁部	26.3	11～15	229.4	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ→部分的ヨコ板ナデ・口縁ヨコナデ	タテ指ナデ→左上ハケ	4	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	第4段高 12.0cm
107	4区	8号墳	SD01No2	G	円筒	口縁部				13～14	69.7	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ→口縁ヨコナデ	左上ハケ→部分的タテハケ	4	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
108	4区	8号墳	SD02	G	円筒	口縁部				10～13	80.9	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ→口縁ヨコナデ	左上ハケ	4	-	-	酸化、断面還元	5YR5/6 明赤褐	
109	4区	8号墳	SD01No4・F2-f	G	円筒	4・3段ヵ	1/4	胴部	23.6	10～14	304.6	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ→4段波状ヨコ板ナデ1条	タテ指ナデ→左上ハケ	4	突帯下面凹凸	右・無	酸化、断面還元	5YR5/6 明赤褐	
110	4区	8号墳	SD01No9	G	円筒	4・3段ヵ	1/4	胴部	22.7	11～14	262.1	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ→4段部分的ヨコ板ナデ	タテ指ナデ→左上ハケ	4	突帯下面凹凸	右・無	酸化、断面還元	5YR5/6 明赤褐	
	4区	8号墳	SD01No10・F1-j・F2-f	G	円筒	4・3段ヵ	1/6	胴部	21.3	11～15	334.8	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ→4段部分的ヨコ板ナデ	タテ・ヨコ指ナデ→3段タテハケ→4段左上ハケ	4	突帯下面凹凸	-	酸化、断面還元	5YR5/6 明赤褐	第3段高 10.0cm
112	4区	8号墳	4区	G	円筒	4～1段				10～12	58.1	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ	左上指ナデ	4	突帯下面凹凸	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
113	4区	8号墳	SD01	G	円筒	3～1段				10～14	62.2	白雲（多）、片、長、英、赤	左上ハケ	タテ指ナデ（→タテハケ）	4	突帯下面凹凸	-	酸化、断面還元	5YR6/8 橙	

第 23 表　埴輪属性表（14 号墳）

番号	調査区	遺構	注記	分類	器種	部位	残存（円周）	法量		器壁厚	重量	胎土（含有物）	成形・器面調整		ハケメ	突帯痕跡	透かし孔	焼成	色調	備考
								計測位置	直径				外面	内面						
01	2区	14号墳	坂畑08.C.23Tr SD-1	H	円筒	口縁部				8～10	46.4	白雲（多）、長、英	タテハケ→口縁ヨコナデ	左上ハケ→口縁ヨコナデ	5	-	-	酸化	7.5YR4/6 褐	
02	2区	14号墳	坂畑08.C.23Tr SD-1	H	円筒	胴部				8～11	34.1	白雲（多）、長、英	タテハケ	左上ハケ→タテ指ナデ	5	-	右・ナデ	酸化	7.5YR4/6 褐	
03	2区	14号墳	坂畑08.C.23Tr SD-1	H	円筒	胴部				8～10	94.8	白雲（多）、長、英	タテハケ	タテ指ナデ	5	-	不明・ナデ	酸化	7.5YR4/6 褐	
04	2区	14号墳	坂畑08.C.23Tr	H	円筒	胴部				9～10	65.4	白雲（多）、長、英、赤	タテハケ	タテ指ナデ	5	-	右・ナデ	酸化	7.5YR4/6 褐	
05	2区	14号墳	SD13 No01	H	円筒	胴部				12～13	103.2	白雲（多）、長、英、赤	タテハケ	タテ指ナデ	5ヵ	-	-	酸化	7.5YR4/6 褐	
06	2区	14号墳	坂畑08.C.23Tr SD-1	H	円筒	底部				13～17	70.3	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	タテ指ナデ	5	-	-	酸化	7.5YR4/6 褐	
07	2区	14号墳	坂畑08.C.23Tr SD-1	I	円筒	口縁部				6～10	20.4	白雲（多）、長、英、赤	タテハケ→口縁ヨコナデ	右上ハケ→口縁ヨコナデ	6	-	-	酸化	7.5YR4/6 褐	
08	2区	14号墳	坂畑08.C.23Tr SD-1	I	円筒	胴部				12～13	44.0	白雲（多）、長、英、赤	タテハケ	右上指ナデ	6	突帯下右下り爪圧痕	-	酸化	7.5YR4/6 褐	
09	2区	14号墳	坂畑08.C.23Tr SD-1	I	円筒	口縁部	1/5	口縁部	28.7	8～10	74.0	白雲（多）、片、長、英、赤	右上ハケ→口縁ヨコナデ	右上ハケ→口縁ヨコナデ	6	-	-	酸化	7.5YR4/6 褐	
10	2区	14号墳	坂畑08.C.23Tr SD-1	I	円筒	口縁～胴部				8～9	122.4	白雲（多）、片、長、英、赤	胴タテハケ→口縁右上ハケ	右上指ナデ→右上ハケ	6	突帯下面凹凸、突帯下右下り爪圧痕	-	酸化	7.5YR4/6 褐	
11	2区	14号墳	坂畑08.C.23Tr	I	円筒	胴部				12～13	68.1	白雲（多）、長、英、赤	タテハケ	右上指ナデ	6	突帯下面凹凸、突帯下右下り爪圧痕	左ヵ・無	酸化	7.5YR4/6 褐	
12	2区	14号墳	坂畑08.C.23Tr SD-1	I	円筒	胴部				10～11	34.1	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	タテ指ナデ	6	突帯下面凹凸	-	酸化	7.5YR4/6 褐	
13	2区	14号墳	坂畑08.C.23Tr SD-1	I	円筒	胴部	1/3	胴部	15.4	13～14	102.6	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	右上指ナデ	6	-	-	酸化	7.5YR4/6 褐	

第24表　埴輪属性表（15号墳）

番号	調査区	遺構	注記	分類	器種	部位	残存（円周）	法量 計測位置	法量 直径	器壁厚	重量	胎土（含有物）	成形・器面調整 外面	成形・器面調整 内面	ハケメ	突帯痕跡	透かし孔	焼成	色調	備考
01	2区	15号墳	SD10	J	円筒	口縁部				9～11	13.8	白雲（多）、長、英、赤	タテハケ	左上指ナデ→ヨコハケ	5ヵ	-	-	酸化、断面還元	7.5YR5/6 明褐	内面ヘラ記号「×」カ
02	2区	15号墳	SD10	J	円筒	胴部				10～12	56.0	白雲（多）、長、英、赤	タテハケ	タテ指ナデ	5ヵ	突帯下面凹凸	-	酸化、断面還元	7.5YR5/6 明褐	
03	2区	15号墳	SD10	K	円筒	胴部				10～12	12.9	白雲（多）、黒雲、片、長、英、赤	タテハケ	タテ指ナデ	7カ	-	左カ・無	酸化、断面還元	5YR6/6 橙	
04	2区	15号墳	SD10	K	形象	人物頭部カ	1/2	下端	8.2	4～12	52.5	白雲（多）、長、英、赤	タテハケ、ナデ	指押え	7	-	-	還元	2.5Y3.3 暗オリーブ褐	
05	2区	15号墳	SI08	L	円筒	口縁～胴部				9～11	75.4	白雲（多）、長、英、赤	タテ板ナデ	左上指ナデ	-	突帯下面凹凸、突帯上爪圧痕カ	-	還元、内面酸化	5Y4/2 灰オリーブ	内面ヘラ記号「×」カ
06	2区	15号墳	SD10	A'	円筒	胴部				11～12	43.6	白雲（多）、黒雲、片、長、英、赤、黄	タテハケ	左上指ナデ	1'	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
07	2区	15号墳	SD10	A'	円筒	底部				15～20	61.4	白雲（多）、黒雲、片、長、英、赤、黄	磨滅	指ナデ	1'	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	

第25表　埴輪属性表（遺構外）

番号	調査区	遺構	注記	分類	器種	部位	残存（円周）	法量 計測位置	法量 直径	器壁厚	重量	胎土（含有物）	成形・器面調整 外面	成形・器面調整 内面	ハケメ	突帯痕跡	透かし孔	焼成	色調	備考
09	1区	遺構外	SI05 表土	K	円筒	胴部				11～13	92.7	白雲（多）、片、長、英	タテハケ	指押え	7	-	右・無	酸化	5YR5/4 にぶい赤褐	
10	2区	遺構外	2区	-	円筒	口縁部				7～8	5.5	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケカ→口縁ヨコナデ	ヨコハケ→口縁ヨコナデ	-	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
11	2区	遺構外	2区	-	円筒	胴部				9～12	69.5	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	左上指ナデ	-	-	右・無	酸化	7.5YR5/6 明褐	
12	2区	遺構外	2区	-	円筒	胴部				9～10	38.6	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	左上ハケ→タテ指ナデ	-	突帯下面凹凸	右・ナデ	酸化	7.5YR5/4 にぶい褐	
13	2区	遺構外	2区	-	円筒	胴部				7～8	20.1	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケカ	指ナデ	-	-	不明・ナデカ	酸化	5YR5/6 明赤褐	
14	2区	遺構外	2区	L	円筒	胴部				9～12	32.8	白雲（多）、片、長、英	タテ板ナデ	左上指ナデ	-	突帯下面凹凸	右・無	酸化、断面還元	5YR5/6 明赤褐	
15	2区	遺構外	SI11	-	円筒	底部				11～16	56.3	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	タテ指ナデ	-	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
16	2区	遺構外	2区	-	円筒	底部				8～20	90.6	白雲（多）、黒雲、片、長、英、赤	タテハケ	左上指ナデ	-	-	-	酸化	7.5YR5/4 にぶい褐	
17	2区	P17	P17	-	形象	動物脚部カ	1/3	底部	8.0	12～21	94.7	骨針、長	タテ板ナデ	ヨコ指ナデ	-	-	-	還元	2.5Y4/2 暗灰黄	底面板目圧痕
18	3区	遺構外	3区	-	円筒	胴部				11～12	61.0	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	左上指ナデ	-	-	-	酸化	5YR5/4 にぶい赤褐	
19	3区	遺構外	3区	-	円筒	底部				11～15	74.2	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	左上指ナデ	-	-	-	還元、内面酸化	2.5Y5/3 黄褐	
20	3区	遺構外	3区	-	円筒	底部				16～33	310.8	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケカ	左上指ナデ	-	-	-	酸化	5YR5/6 明赤褐	
21	4区	遺構外	4区	K	円筒	胴部				11～12	36.3	白雲（多）、片、長、英	タテハケ	タテ指ナデ、ヨコハケ	7	-	-	酸化	5YR5/4 にぶい赤褐	
22	4区	遺構外	4区	K	円筒	胴部				12～14	24.4	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	左七指ナデ	7	-	-	酸化、断面還元	5YR6/8 橙	
23	4区	遺構外	4区	K	円筒	胴部				11～13	32.7	白雲（多）、片、長、英、赤	タテハケ	タテ指ナデ	7	-	-	酸化、断面還元	5YR6/8 橙	
24	4区	遺構外	4区	K	円筒	底部				14～20	78.6	白雲（多）、片、長、英	タテハケ	左上指ナデ	7	-	-	還元、一部酸化	2.5Y6/4 にぶい黄	

＊「部位」口縁部：口縁端部が残る第4段破片、4段：口縁端部が残らない第4段破片、底部：底端部が残る第1段破片、1段：底端部が残らない第1段破片。

＊「法量」「直径」単位：cm、計測位置が胴部の場合は最大径。「器壁厚」単位：mm。

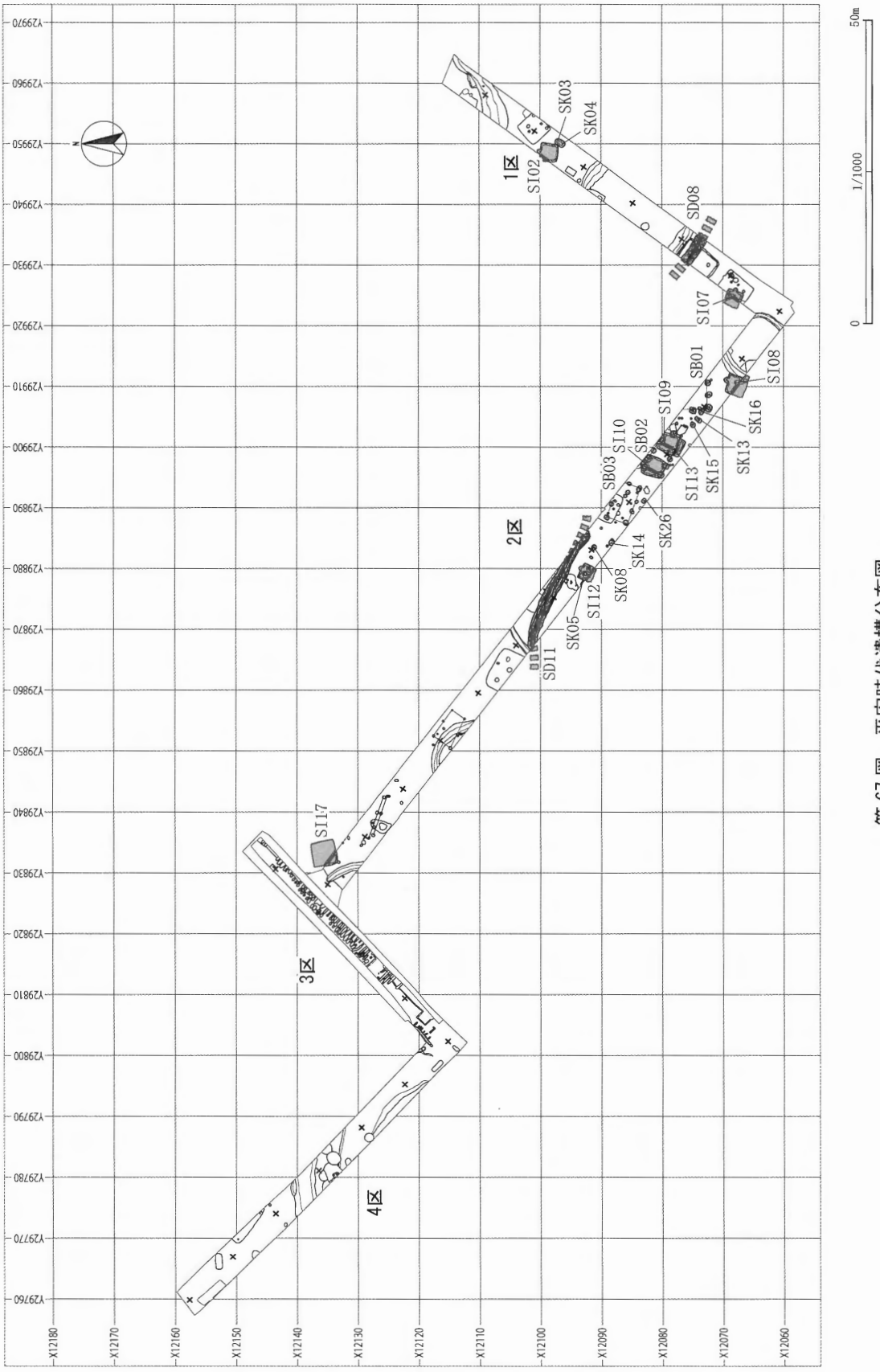
＊「重量」単位：g。

＊「含有物」白雲：白雲母、黒雲：黒雲母、片：絹雲母片岩破片、長：長石、英：石英、赤：赤色粒子（スコリア）、黄：2～6mm大の黄褐色粒子（土器状）、チャ：チャート。

＊「成形・器面調整」左上：左上がりの斜方向、右上：右上がりの斜方向。

＊「突帯痕跡」突帯間隔設定や貼り付けにかかわる痕跡。口端外凹線：口縁端部外面に凹線あり。凹線：突帯間隔設定工具で付けられた凹線。

＊「透かし孔」右・左：切り抜き方向（～回り）。：切り抜き後無調整、ナデ：同ナデ調整。



第67図　平安時代遺構分布図

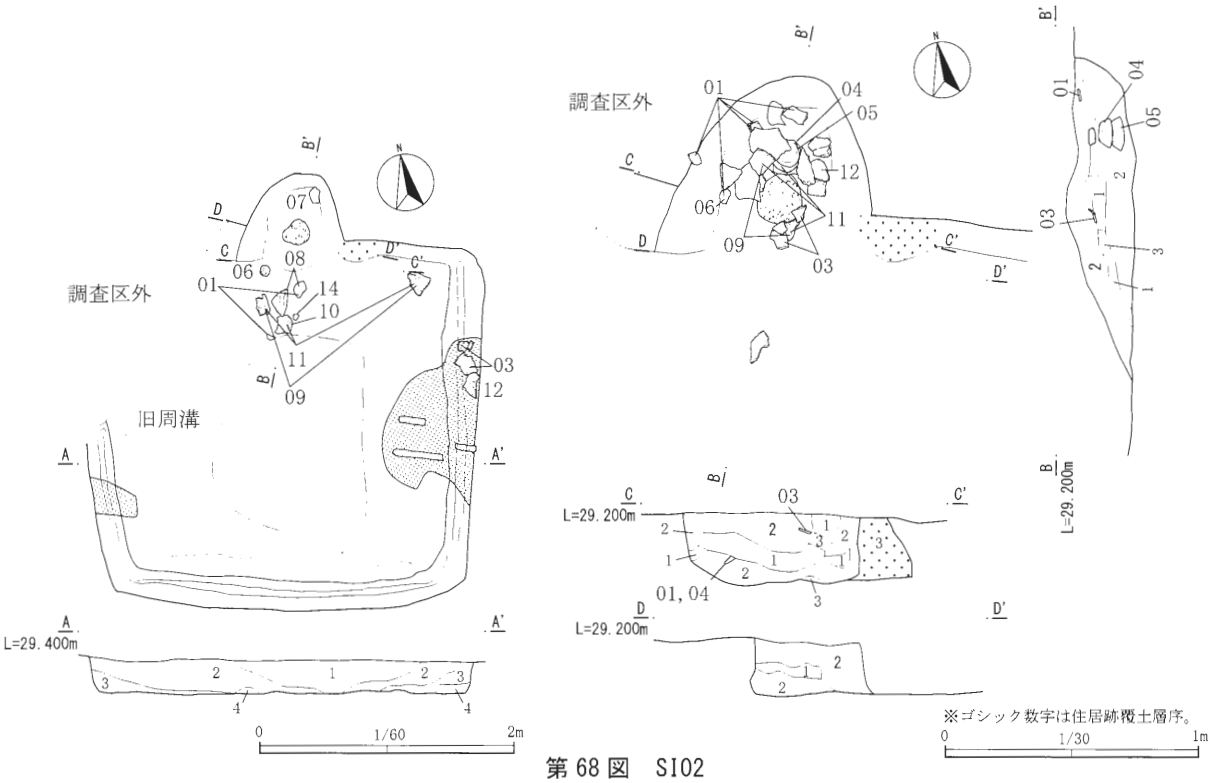
第１項　住居跡

SI02（第 68 ～ 70 図・第 26 表・図版 15・41）

１区 C-1・2G に位置し、遺構の大半が検出され、北西隅部が調査区外になっている。南北 2.92 m、東西 3.05 mの平面正方形で深さは 28cm である。主軸方向 N-15°-E。覆土は４層に分層されレンズ状堆積となっており、第４層は焼土層である。東西の壁際付近では、床面上に焼土及び炭化材が局部的に 0.4 ～ 1 mの範囲で堆積している。硬化面は床面の中央部から南壁際にかけて存在する。壁際には幅 20 ～ 25cm、深さ 5 ～ 12cm の周溝が北壁を除いて巡る。この周溝の下には切られている古い周溝が存在し、15cm ほどやや内側に巡っている。カマドは北壁中央部を 45cm 掘り込んで設置されており、両袖部は壊されていた。火床痕が燃焼部に存在する。カマド内の中央には、底面からやや浮いた位置に土師器有台埦（05）が伏せて置かれ、その上に山砂を挟んで土師器小形甕の底部（04）が伏せて重ねられていた。支脚として用いられたものと見られる。

遺物は縄文土器 384.0g、弥生土器 94.6g、土師器 3,488.4g、須恵器 2,016.2g、土製品（土器片錘ほか）14.2g、石器（縄文・剥片）6.0g、石製品（台石）1,908.2g、鉄製品 16.3g、炭 1,478.5g、礫 105.2g を検出した。カマド及びその周辺と、東壁際にまとまる。カマド付近の土器はすべて破片で、炭化材とともに、カマドの破壊・埋没（カマド覆土第１層・焼土、天井部ヵ）後に堆積した住居覆土第２層に含まれる。東壁際のものは焼土の上に載り、須恵器甕の底部大破片（12）と、土師器甕（03）が逆位でつぶれて壁に寄り掛かった状態で検出された。鉄鎌（14）の刃部破片はカマド前の遺物群の中で検出されている。

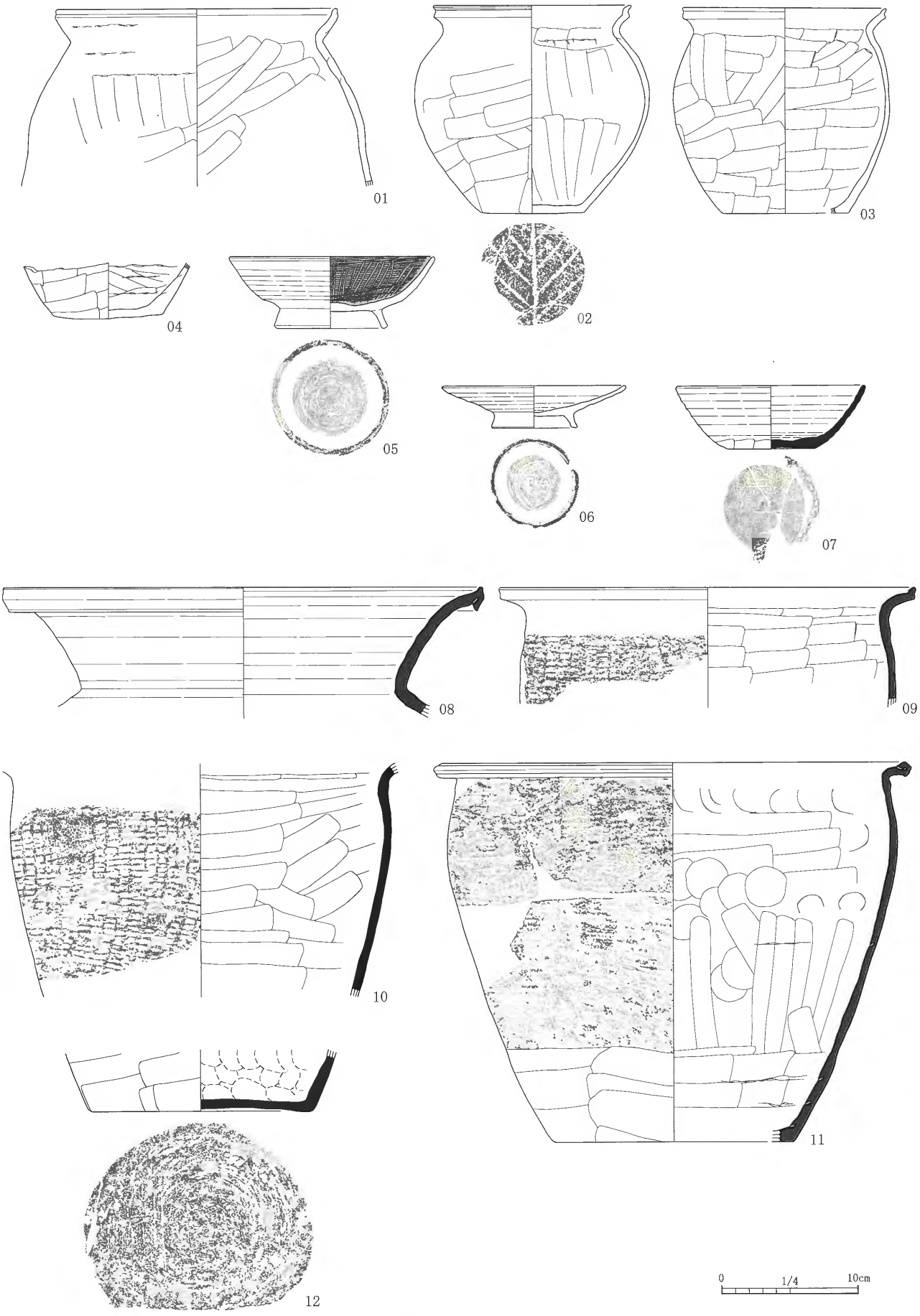
これらの遺物から、本遺構は平安時代（9 世紀後半）と判断される。



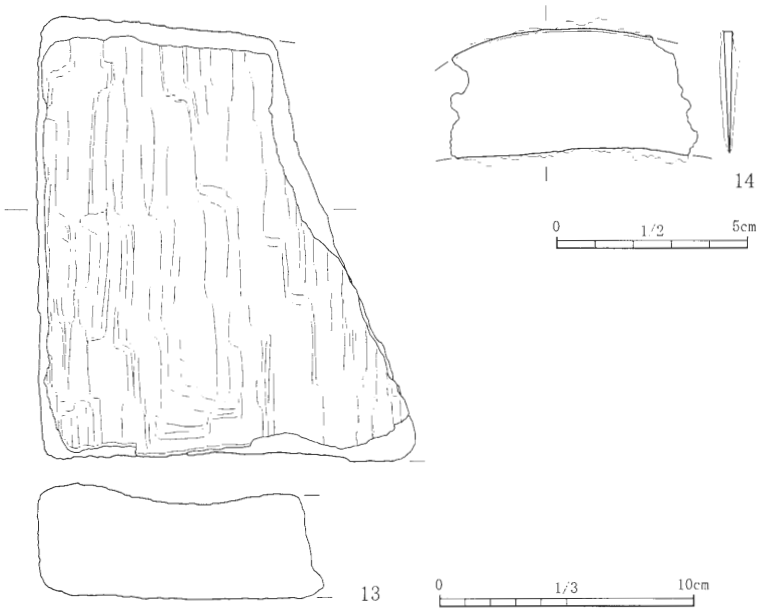
第 68 図　SI02

SI02
1 暗オリーブ褐色土　　粘性中　しまり中　VIブロック多量（φ 2-10 mm）、炭化物少量
2 黒色土　7.5YR2 1　粘性中　しまり中　VIブロック少量、炭化物少量
3 黒褐色土　7.5YR3 1　粘性中　しまり中　VIブロック少量、炭化物中量（φ 2-10 mm）、遺物多量
4 暗赤褐色土　10R3 2　粘性中　しまり中　VIブロック少量、焼土多量（φ 2-10 mm）、炭化物少量、遺物多量

SI02 カマド
1 暗赤褐色土　10R3 2　粘性なし　しまり強　焼土層状をなす
2 黒色土　7.5YR2 1　粘性中　しまり中　焼土・粒子φ 2 mm少量、炭化物・粒子φ 2 mm少量
3 灰褐色土　7.5YR6.2　粘性なし　しまり強　VIφ 2-10 mm・粒子中量



第69図　SI02出土遺物（1）



第 70 図　SI02 出土遺物（2）

第 26 表　SI02 出土遺物観察表

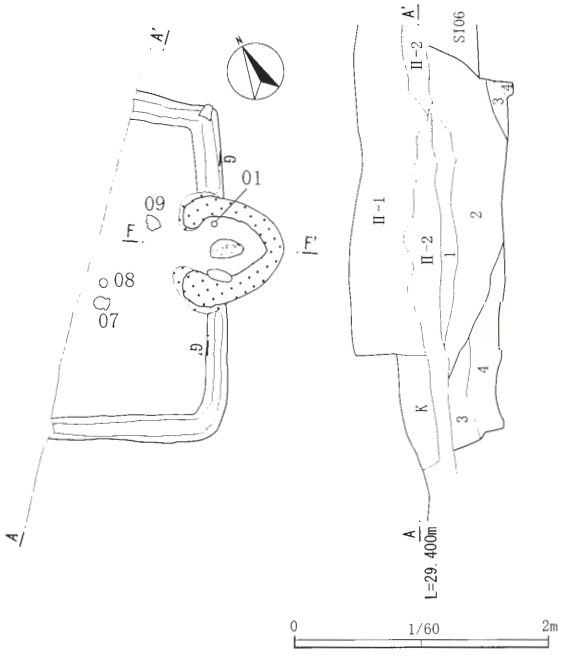
番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	No. 07・08・15・17・18・19	土師器	甕	215.4	(20.3)	〈13.3〉	—	胴部はやや縦長の球形ヵ。口縁部は「く」の字に外反し口唇部は摘み上げられる。	口縁部内外ヨコナデ。胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ。	雲母・白色粒子やや多い。スコリア少量。	内面 5YR 4 3 にぶい赤褐 外面 7.5YR 5 3 にぶい褐	良好	口縁部 1 4 ～肩部 1.3	常総型甕
02	一括	土師器	甕	212.5	14.3	15.25	7.5	底部は平底。胴部は球形を呈し頸部で緩やかに外反して開く。口唇部は摘み上げられる。	口縁部は内外面共にヨコナデ。外面胴部はヘラケズリの後ヘラナデ。内面はヘラナデ。	雲母・白色粒子やや多い。	内面 7.5YR 6 4 にぶい橙 外面 5YR 5 4 にぶい橙	良好 二次焼成 ｱﾘ	1 3	常総型甕 底部木葉痕
03	No. 02・04	土師器	甕	451.9	14.8	15.1	9.2	底部はやや幅の広い平底。胴部は球形を呈し頸部で緩やかに外反して開く。口唇部は摘み上げられる。	口縁部は内外面共にヨコナデ。外面胴部は縦方向のヘラケズリの後、横方向のヘラケズリの後ヘラナデ。内面はヘラナデ。底部に放射状の深い木口痕あり。	白色粒子少量。小礫やや多い。雲母多量。	内面 10YR 6 3 にぶい黄橙 外面 2.5YR 5 4 にぶい赤褐	良好 二次焼成 ｱﾘ	底部欠損	常総型甕
04	No. 05	土師器	甕	158.7	—	〈4.0〉	(7.9)	底部は幅広の平底。胴部下位でほぼ水平に打ち欠き、环状になる。破断面の加工はない。	外面胴部はヘラケズリ。内面はヘラナデ。底部は砂目痕。	長石・石英・雲母多い。	内外面 10YR 5 4 にぶい黄褐	良好	胴部下端～体部完形	常総型甕 口縁～胴部打ち欠き
05	No. 14	土師器	有台埦	237.0	14.8	5.3	7.7	体部は緩やかに内湾する。高台はやや高く、内湾気味に「ハ」の字に開く。内端接地。	底部は回転ヘラ切りの後高台が付される。外面はロクロナデ。内面は細かなミガキが施される。	雲母多い。白色粒子やや多い。	内面 10YR 1 2 黒 外面 10YR 6 3 にぶい黄橙	良好 二次焼成 ｱﾘ	口縁部～体部 1/4 欠損	内面黒色処理
06	No. 07 一括	土師器	有台皿	92.7	13.2	3.1	6.1	体部は直線的に開く。高台は直線的に「ハ」の字に開く。	高台は回転ヘラ切りの後に付される。体部は内外面共にロクロナデ。	雲母多い。白色粒子やや多い。	内面 7.5YR 6 4 にぶい橙 外面 10YR 6 4 にぶい黄橙	良好	口縁部 2 3 欠損	
07	一括	須恵器	無台坏	83.3	(13.7)	4.7	6.3	底部はやや上げ底気味の平底で、体部はやや内湾して立つ。	底部及び体部下端は手持ちヘラケズリ。体部は内外面共にロクロナデ。外面体部下端に不明刺突痕有り。	雲母多い。	内外面 2.5YR 6 2 灰黄	良好	口縁部 1/4 ～底部	
08	No. 11・12	須恵器	甕	423.0	(34.7)	(9.8)	—	大甕。頸部で「く」の字に屈曲し大きく外反して開く。口縁部は折り返される。胴部以下は欠損する。	頸部の屈曲する下端に僅かながら平行叩きの痕跡が残る。外面内面共にロクロ整形痕が残る。頸部の櫛描波状文は描かれない。	小礫多い。	内外面 2.5YR 6 2 灰黄	良好	口縁部 1/4	
09	No. 05・09	須恵器	甕	126.5	(29.0)	〈8.8〉	—	胴部はやや縦長の球形ヵ。口縁部は「く」字に外反し口唇部は摘み上げられる。胴部下半は欠損。	口縁部は内外面共にヨコナデ。外面胴部は格子目叩き。内面は横方向のヘラナデ。	雲母・白色粒子やや多い。小礫少量。	内外面 2.5YR 5 3 黄褐	良好	口縁部 1/4	
10	No. 13	須恵器	甕	212.3	—	〈17.0〉	—	胴部は緩やかに内湾気味に立ち、頸部で外反する。口唇部は欠損する。	頸部直下に僅かながらヨコナデが観察される。外面胴部は格子目叩き。内面は横方向のヘラナデ。	雲母やや多い。白色粒子少量。小礫少量。	内面 10YR 6 3 にぶい黄橙 外面 10YR 3 1 黒褐	良好	体部大破片	
11	No. 05・09・13	須恵器	甕	533.3	(34.0)	〈27.9〉	(17.5)	口径、底部径が広くやや浅めのバケツ型を呈する。底部は平底で胴部は緩やかに内湾する。口縁部は外反し口唇部は摘み上げられる。	口縁は内外面共にヨコナデ。外面胴部は格子目叩き。内面は当具痕を消すように底部付近・胴上半部では横方向のヘラナデが行われる。底部はヘラケズリ。	雲母少量。白色粒子多い。小礫やや多い。	内外面 10YR 6 3 にぶい黄橙	良好	1.4 ～底部欠損	
12	No. 01	須恵器	甕	325.2	—	〈4.5〉	16.2	底部はやや上げ底気味の平底。胴部は直線的に開いて立つ。胴上半以上は欠損する。	外面体部は横方向のヘラケズリ。底部は砂目で、部分的にヘラケズリが観察される。内面は当具痕。内面底部は剥落が激しい。	雲母少量。白色粒子やや多い。小礫やや多い。	内面 10YR 6 3 にぶい黄橙 外面 10YR 6 4 にぶい黄橙	良好	胴下半 1 4 ～底部 2/3	
13	一括	石製品	台石	1908.2	タテ 17.8	ヨコ 14.9	厚さ 4.6	板状の片岩を利用するもので、裏面は緩やかに窪んでいる。	方形に切り出した板状の石材で、一部欠損している。	—	—	—	一部欠損	被熱痕有り
14	No. 10	鉄製品	鎌	16.3	残存長 6.1	幅 3.2	厚さ 0.2	先端および着柄部分は欠損している。断面は三角形で下端は薄く尖る。	全体に錆が激しい。	—	—	—	—	

SI07（第71～73図・第27・28表・図版10・11・42）

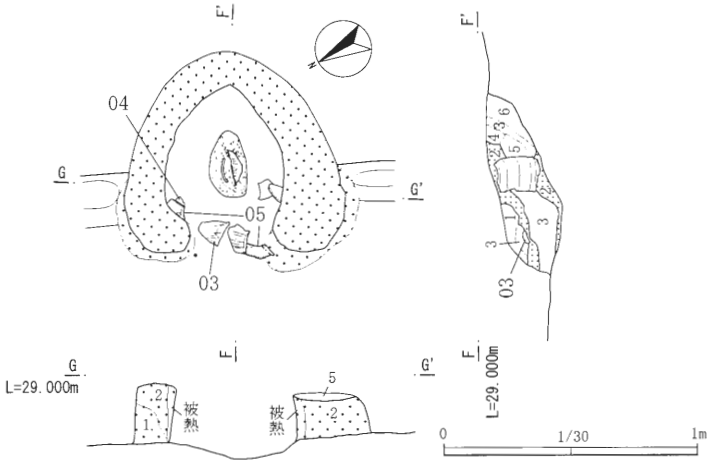
1区F-1・2,G-1・2Gに位置し、カマドのある遺構東壁付近が検出され、西側の大半が調査区外である。SI06を切っている。南北2.70m、東西1.30mの推定長方形で、深さは調査区壁面において55cmを測る。主軸方向N-65°-W。覆土は4層からなり、第1・2層が第3・4層を切った形状をしていることから、ゴミ捨て目的の土坑として転用した可能性が考えられる。床面は地山を直接掘削しており、全体に硬化していた。周溝は、幅20～22cmで深さ3～7cmを測り、調査区内で壁際を巡っていることから、調査区外も続いて全周しているものと判断される。カマドは東壁中央部を45cm掘り込んで付設されている。袖部は短く、壁からわずかに突出した形状をしている。著しく被熱した燃焼部、その中央底部（地山）に火床部が残存している。火床部の上に焼土を土台として、土師器甕の胴部大破片2片を立てている。この破片は被熱も著しく、内外面には粘土・焼土が全面に付着している。2片は同一個体と見られるが互いに接合せず、また他に接合する破片も検出されていない。19×14cm大の破片を素材に、支脚として据え付けたものと考えられる。焚口には土師器及び須恵器の甕の大破片が横たわるが、住居及びカマド覆土中で接合する破片が検出されるなど、焚口の構築材として懸架されたものではなく、カマドの埋没とともに堆積したものであろう。

遺物は縄文土器8.4g、弥生土器3.5g、土師器1,930.8g、須恵器2,275.2g、礫75.8gを検出した。カマド内の他に、カマド前面に完形またはほぼ完形の須恵器の坏・皿（07～09）が検出されている。

これらの遺物から、本遺構は平安時代（9世紀前半）と判断される。



第71図　SI07



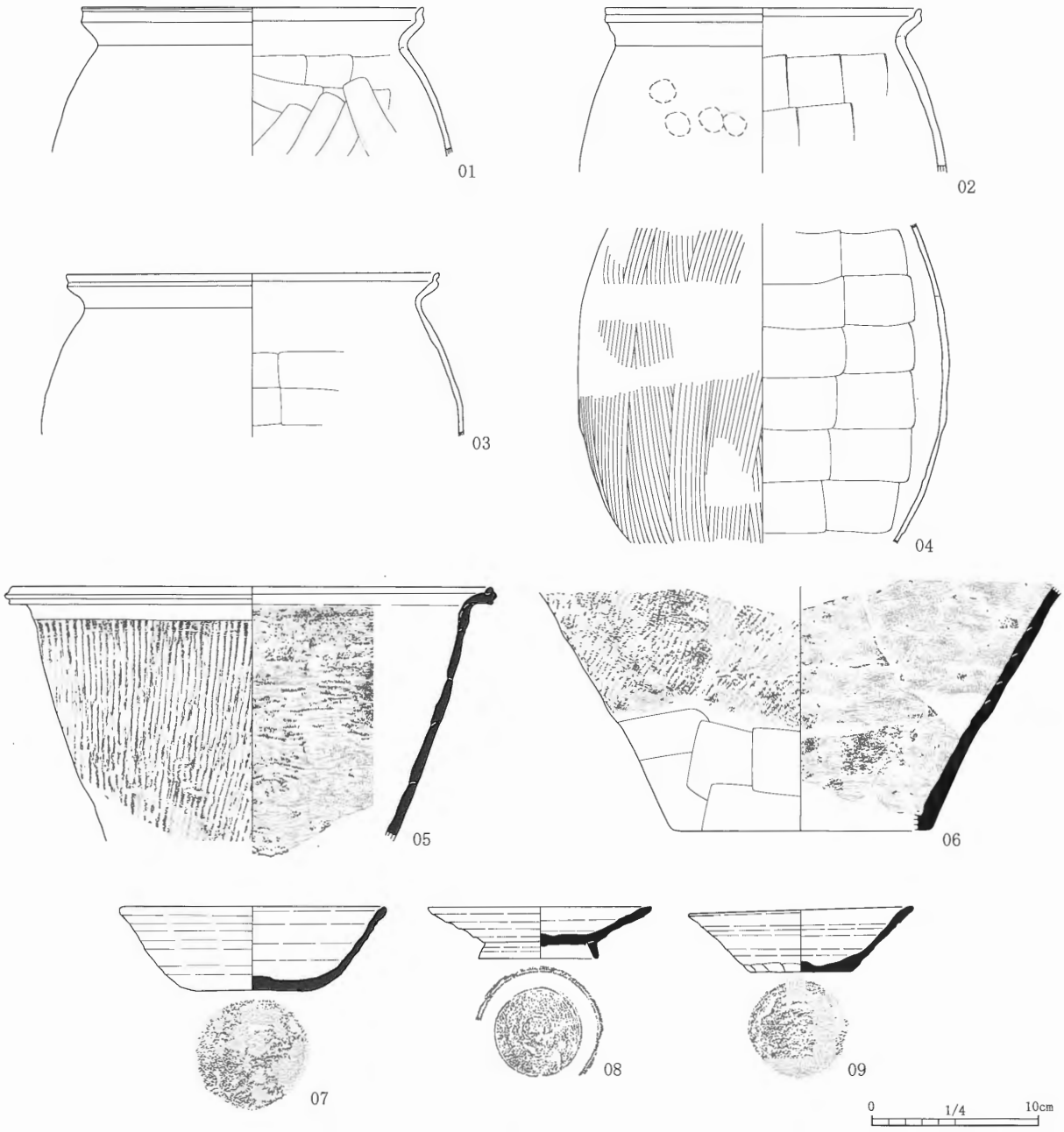
第72図　SI07カマド

SI07
1 暗褐色土　7.5YR3/4　粘性中　しまり中　ローム・ブロックφ2-10mm多量
2 黒褐色土　7.5YR3/1　粘性中　しまり中　ローム・ブロックφ2-10mm少量
3 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　ローム・ブロックφ2-10mm少量、焼土粒子少量
4 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり中　ローム・ブロックφ2-10mm少量

SI07 カマド
1 黒褐色土　7.5YR3/1　粘性中　しまり弱　焼土・粒子φ2-5mm少量、炭化物・粒子φ2mm少量、灰中量
2 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性なし　しまり弱　焼土・粒子φ2-5mm主体、炭化物・粒子φ2mm少量
3 赤褐色土　10R4/3　粘性弱　しまり弱　焼土・粒子φ2-5mm少量、炭化物・粒子φ2mm少量、灰多量
4 暗赤褐色土　10R3/2　粘性なし　しまり弱　焼土・粒子φ2-5mm少量、灰多量
5 灰褐色土　7.5YR6/2　粘性弱　しまり弱　焼土・粒子φ2-5mm少量、炭化物・粒子φ2mm少量、灰多量
6 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり弱　焼土・粒子φ2-5mm少量、炭化物・粒子φ2mm少量、灰多量

第27表　SI07出土遺物観察表（1）

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	No.02 カマド	土師器	甕	289.5	20.6	<8.7>	—	胴部は緩やかに内湾し頭部で「く」の字に屈曲する。口縁はやや受け気味に立ち、口唇部は摘み上げられる。薄手。	外面胴部及び口縁内外面はナデ。内面胴部はヘラナデ。	雲母・白色粒子多い。スコリア少量。	内外面 10YR 7/3 にぶい黄橙	良好	口縁部～体部上端2/3	常総型甕
02	カマド	土師器	甕	145.7	18.8	<9.7>	—	胴部は緩やかに内湾し頭部で「く」の字に屈曲する。口縁はやや受け気味に立ち、口唇部は摘み上げられる。薄手。	外面胴部及び口縁内外面はナデ。内面胴部はヘラナデ。	雲母少量。白色粒子やや多い。	内面 10YR 4/3 にぶい黄褐 外面 10YR 6/4 にぶい黄橙	良好	口縁部～体部上端1/3	常総型甕
03	カマド05 カマド一括	土師器	甕	127.3	22.4	<9.6>	—	胴部は球形か。頭部で緩やかに外反して開き口唇部は摘み上げられる。	外面胴部及び口縁内外面はナデ。外面胴部はナデ。内面胴部はヘラナデ。	雲母・白色粒子やや多い。黒色粒子少量。	内面 7.5YR 4/2 灰褐 外面 5YR 6/4 明赤褐	良好	口縁部～体部上端1/4	常総型甕



第 73 図　SI07 出土遺物

第 28 表　SI07 出土遺物観察表（2）

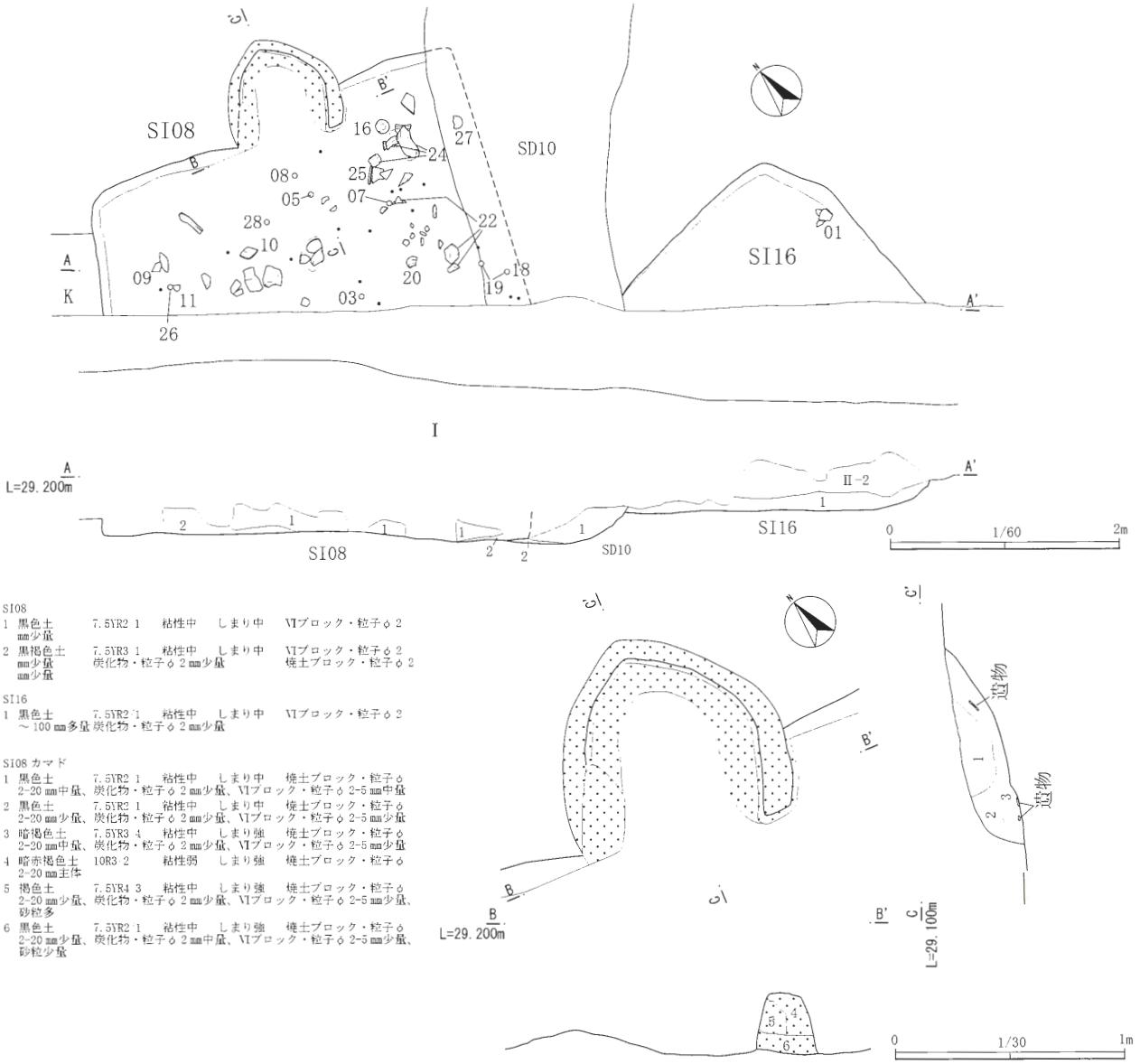
番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
04	カマド カマド08	土師器	甕	·210.7	—	〈18.3〉	—	胴部破片。やや長胴気味になり、内湾して立つ。	外面は縦方向の粗いミガキが施される。内面はヘラナデされるが当具痕状の窪みが観察される。	雲母少量。白色粒子微量。	内面 10YR 3/2 黒褐 外面 5YR 3/2 暗赤褐	良好	体部大破片	常総型甕
05	SI06 SI07 カマド カマド 06・07	須恵器	甕	1132.6	37.2	〈15.0〉	—	胴部は僅かに内湾しながらもかなり急角度に大きく開く。口縁部は屈曲して水平に開いた後稜を有し、口唇部は摘み上げられる。	外面は縦方向の平行叩き。口縁部は内外面共にナデ。内面胴部は当具痕を有す。輪積痕が等間隔に残る。	雲母やや多い。白色粒子少量混入。	内面 7.5YR 4/4 褐 外面 7.5YR 6/6 橙	良好	口縁部 1/5	
06	SI06	須恵器	甕	219.2	—	〈14.3〉	15.6	底部は平底ヵ。胴部は大きく外反気味に開く。	外面胴部は平行叩き。口縁内外面はヨコナデ。内面胴部は青海波の当具痕後ナデ。	雲母・白色粒子・スコリア少量。	内面 10YR 4/2 灰黄褐 外面 7.5YR 3/1 黒	良好	体部大破片	
07	No. 05	須恵器	無台坏	199.3	15.8	6.0	8.2	底部は平底。体部は緩やかに内湾し口辺で僅かに外反肥厚する。	内外面共にロクロ整形。底部は手持ちヘラケズリ。	雲母少量。白色粒子多い。小礫微量。	内外面 10YR 6/3 にぶい黄橙	良好	口縁部 1/4 欠損	
08	No. 06 カマド	須恵器	有台皿	125.7	13.4	3.0	7.0	高台は「ハ」の字に開く。体部は直線的に開く。	底部は回転ヘラ切り後無調整。高台は貼付高台で、貼り付け作業時に爪の痕が高台内側に残される。体部は内外共にナデ。	雲母やや多い。白色粒子少量。	内外面 2.5Y 6/2 灰黄	良好	口縁部 1/3 欠損	
09	No04 カマド	須恵器	無台坏	137.5	13.4	3.5	6.0	底部は平底。体部は僅かに外反気味に大きく開く。	体部は内外面共にロクロ整形。胴部下端及び底部は手持ちヘラケズリ。	雲母・白色粒子やや多い。	内面 2.5Y 7/3 浅黄 外面 10YR 4/1 褐灰	良好	ほぼ完形	新治産

SI08（第74～76図・第29・30表・図版15・16・42・43）

2区M-2Gに位置し、カマドのある遺構の北側が検出され、南側は調査区外となっている。15号墳の西側の周溝にあたるSD10を切っている。南北現状2.20ｍ、東西推定3.70ｍの推定長方形で、深さ24cmである。主軸方向N-23°-E。覆土は黒色土から黒褐色土の2層からなっている。床面は地山を直接掘削している。カマドは北壁中央部に付設され、長軸方向98cm、直交軸方向100cmを測る。燃焼部が83cm掘り込まれ、暗赤褐色土から黒色土で構築された右袖部が遺存している。

遺物は縄文土器152.0g、弥生土器50.2g、土師器7,528.2g、須恵器9,395.0g、灰釉陶器7.9g、近・現代陶器71.3g、土製品（30･鞴羽口）481.2g、埴輪275.8g、近世瓦24.9g、礫443.2g、炭0.5gを検出した。多量の土師器･須恵器は覆土全体にわたって出土しており、遺物収納用コンテナ2箱分に及ぶ。ほとんどが破片で、完形またはほぼ完形のものは16の須恵器坏と20の同皿があるに過ぎない。いずれも床面から5～10cm以上浮いた覆土中に散在し、本住居が廃絶した後に投棄されたと判断される。埴輪は、本住居が切る15号墳（SD10）由来のものと考えてよい。

これらの遺物は9世紀前半に位置づけられるもので、出土状況からも一時に投棄されたものと判断される。本来、本住居に伴うものではないが、本遺構の時期も平安時代（9世紀前半）に考えておきたい。

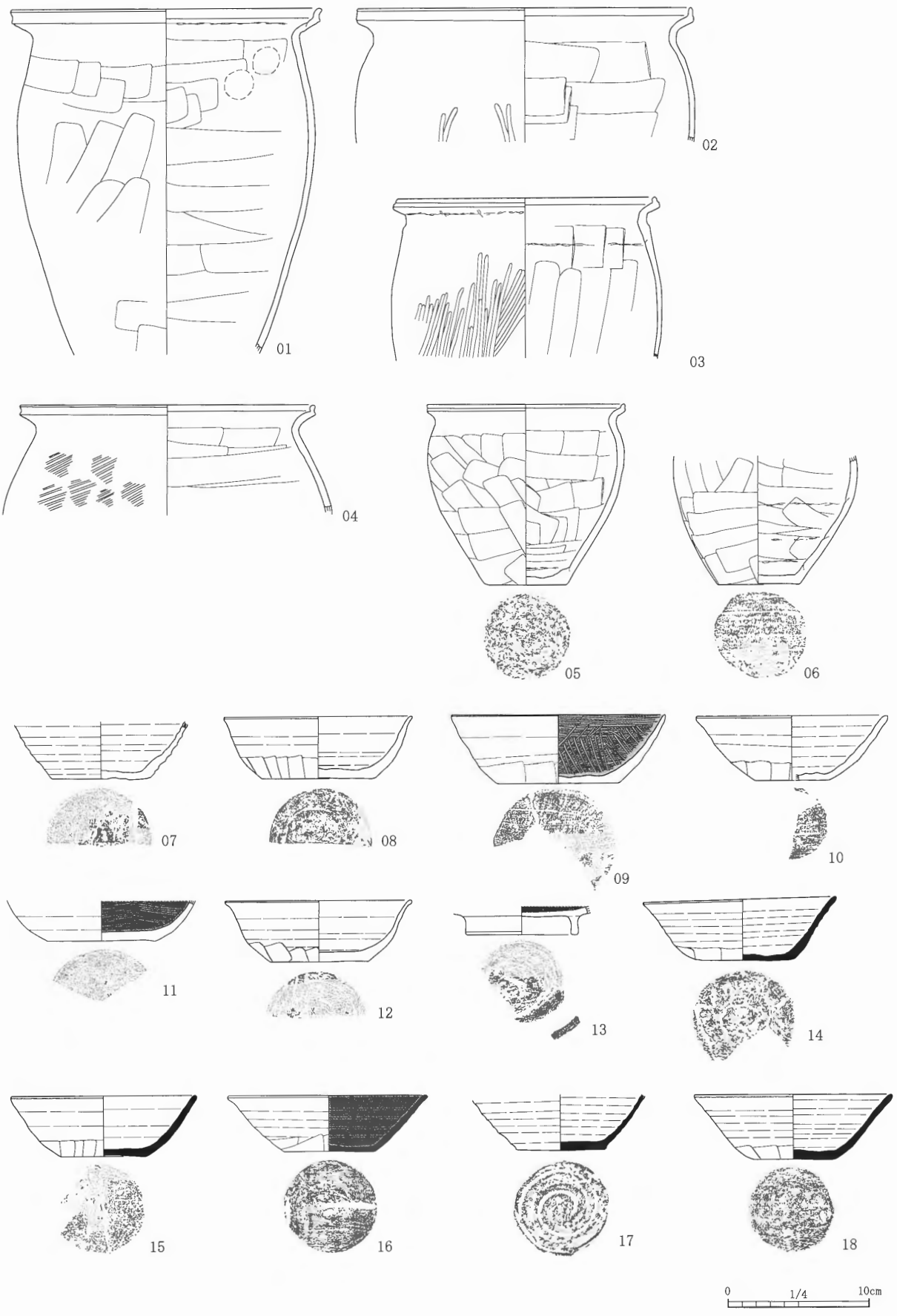


SI08
1 黒色土　7.5YR2 1　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子φ2mm少量
2 黒褐色土　7.5YR3 1　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子φ2mm少量　炭化物・粒子φ2mm少量　焼土ブロック・粒子φ2mm少量

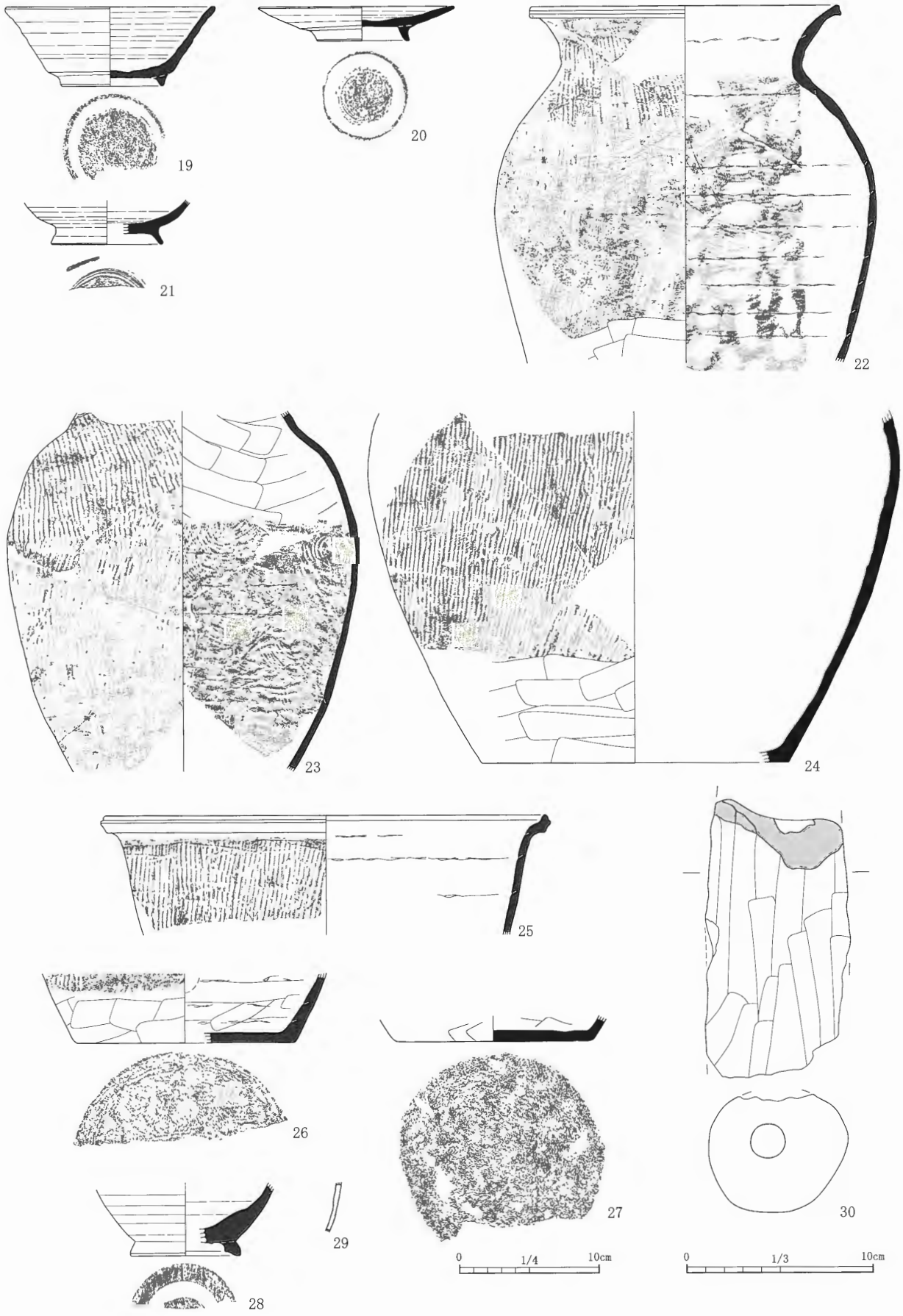
SI16
1 黒色土　7.5YR2 1　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子φ2～100mm多量　炭化物・粒子φ2mm少量

SI08 カマド
1 黒色土　7.5YR2 1　粘性中　しまり中　焼土ブロック・粒子φ2-20mm中量、炭化物・粒子φ2mm少量、VIブロック・粒子φ2-5mm中量
2 黒色土　7.5YR2 1　粘性中　しまり中　焼土ブロック・粒子φ2-20mm少量、炭化物・粒子φ2mm少量、VIブロック・粒子φ2-5mm少量
3 暗褐色土　7.5YR3 4　粘性中　しまり強　焼土ブロック・粒子φ2-20mm中量、炭化物・粒子φ2mm少量、VIブロック・粒子φ2-5mm少量
4 暗赤褐色土　10R3 2　粘性弱　しまり強　焼土ブロック・粒子φ2-20mm主体
5 褐色土　7.5YR4 3　粘性中　しまり強　焼土ブロック・粒子φ2-20mm少量、炭化物・粒子φ2mm少量、VIブロック・粒子φ2-5mm少量、砂粒多
6 黒色土　7.5YR2 1　粘性中　しまり強　焼土ブロック・粒子φ2-20mm少量、炭化物・粒子φ2mm中量、VIブロック・粒子φ2-5mm少量、砂粒少量

第74図　SI08



第75図　SI08出土遺物（1）



第76図　SI08出土遺物（2）

第 29 表　SI08 出土遺物観察表（1）

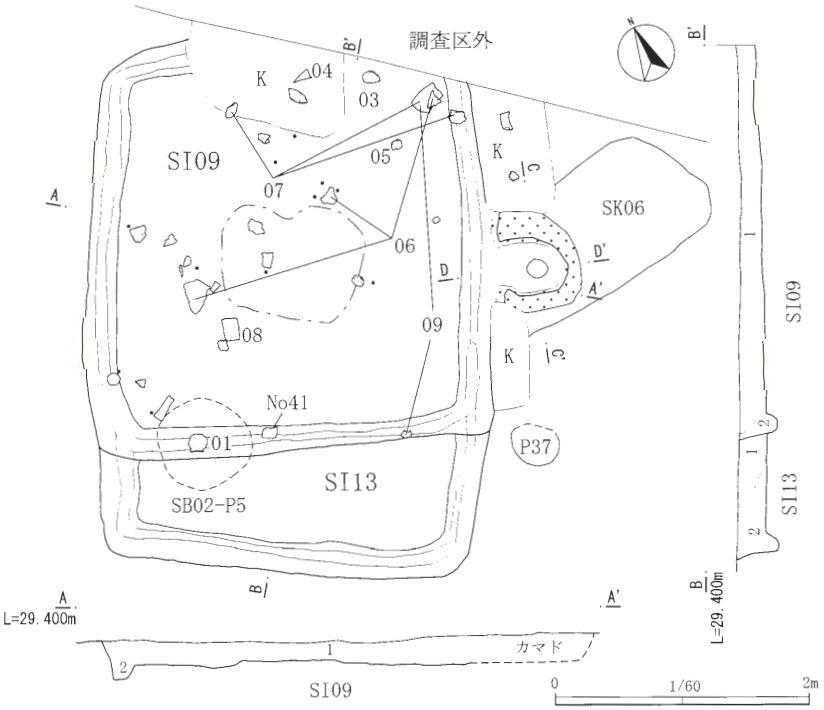
番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	カマド	土師器	甕	618.5	(21.8)	(24.0)	—	底部は欠損している。体部はやや長胴気味になる。口縁は「く」の字に屈曲した後、口唇部は摘み上げられる。	胴部下半はヘラケズリ。上半はヘラナデ。口縁は内外ともにヨコナデ。内面はヘラナデ。口縁内面に輪積痕が残る。	雲母少量、白色粒子・小礫多い	内外面 2.5YR 5/4 にぶい赤褐	良好	口縁 1/4～体部 1/2	常総型甕
02	一括	土師器	甕	103.7	(23.6)	(9.4)	—	胴中位以下は欠損している。胴部は緩やかに内湾してやや肩が張る。口縁は外反して口唇部は摘み上げられる。	口縁部は内外面共にヨコナデ。胴部下半は荒い縦方向のミガキ。上半はナデ。胴部内面はヘラナデ。	雲母やや多い、白色粒子少量	内面 10YR 6/3 にぶい黄橙 外面 7.5YR 6/4 にぶい橙	良好	口縁部 1/3	常総型甕
03	No.08 一括	土師器	甕	91.4	(18.0)	(11.3)	—	胴中位以下は欠損している。胴部は緩やかに内湾する。口縁は外反して口唇部は摘み上げられる。	外面胴部は中位以下を縦方向の粗いミガキ。口縁部は内外面共にヨコナデ。内面はヘラナデ。	雲母やや多い　白色粒子少量	内外面 7.5YR 6/4 にぶい橙	良好	口縁部 1/4	常総型甕
04	一括	土師器	甕	77.5	(20.7)	(7.6)	—	胴中位以下は欠損している。胴部は緩やかに内湾してやや肩が張る。口縁は外反して口唇部は摘み上げられる。	外面胴部は平行叩きを僅かに残す。口縁は内外面共にヨコナデ。内面の当具痕はナデにより消される。	雲母やや多い　白色粒子少量	内外面 5YR 6/4 にぶい橙	良好	口縁部 1/4	常総型甕
05	No.11	土師器	甕	231.2	(14.0)	(12.5)	5.8	底部は平底。体部は緩やかに内湾し最大径を上半部に有す。	外面底部及び胴部はヘラケズリ。口縁部は内外面共にヨコナデ。内面はヘラナデ。	白色粒子少量、小礫・雲母多量	内外面 5YR 5/8 明赤褐	良好	口縁部 1/3～底部	常総型甕
06	一括	土師器	甕	264.4	—	(9.0)	(5.9)	底部は平底。体部は緩やかに内湾し、やや長胴気味になる。胴上半から口縁部にかけて欠損する。	外面底部は砂目ヵ、胴部下半はヘラケズリ。胴中位以上はヘラケズリの後ナデ。内面はヘラナデ。底部付近にカマドの砂が付着する。	雲母・白色粒子・小礫多い	内面 7.5YR 6/6 橙 外面 10YR 6/4 にぶい黄橙	良好	口縁部欠損	常総型甕
07	No.50 一括	土師器	無台坏	75.7	—	(3.95)	7.0	底部は平底。体部はやや内湾気味に開く。	底部は回転ヘラ切りの後ナデ。体部は内外面共にロクロナデ。	雲母・白色粒子微量	内外面 2.5Y 5/3 黄褐	良好	体部下端～底部 1/2	
08	No.13	土師器	無台坏	86.1	(13.3)	4.3	8.0	底部は平底。体部は緩やかに内湾して立ち、口唇部で僅かに外反する。	外面底部は回転ヘラ切りの後ナデ。体部下端は手持ちヘラケズリ。胴中位から内面にかけてはロクロナデ。	雲母・小礫微量　白色粒子少量	内外面 7.5YR 5/4 にぶい褐	良好	1/3	
09	No.45 一括	土師器	無台坏	126.8	15.0	4.7	8.6	底部は平底で、体部は緩やかに内湾して立つ。	底部は一方向の手持ちヘラケズリ。胴部下端は手持ちヘラケズリ。体部はロクロナデ。内面は細かなミガキが施される。	白色粒子少量　小礫やや多い	内面 N 6/ 灰 外面 N 5/ 灰	良好	体部下端～底部 1/2	内面黒色処理
10	No.41	土師器	無台坏	94.3	13.4	4.4	(5.2)	底部はやや上げ底気味の平底。径が狭く口縁は内湾して立ち、口辺で緩やかに外反する。	底部は多方向のヘラケズリ。胴部下端は手持ちヘラケズリ。外面体部及び内面はロクロナデ。	雲母・スコリア微量　白色粒子・小礫やや多い	内面 7.5YR 6/4 にぶい橙 外面 10YR 6/4 にぶい黄橙	良好	口縁部 1/2～底部 1/3	
11	No.43	土師器	無台坏	64.1	—	2.8	(7.5)	底部は平底。体部は緩やかに内湾して立つ。口縁部は欠損している。	底部は回転ヘラケズリ。外面体部はロクロナデ。内面は細かなミガキが行われる。	雲母多い　白色粒子・黒色粒子微量　小礫やや多い	内面 10YR 1.7/1 黒 外面 10YR 5/4 にぶい黄褐	良好	体部下端～底部 1/4	内面黒色処理
12	一括	土師器	無台坏	80.1	(13.2)	4.2	7.0	底部は平底。体部は内湾して、口唇部は緩やかに外反し僅かに肥厚する。	底部は横方向のヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ。体部上半から内面はロクロナデ。	雲母少量　白色粒子・黒色粒子微量　小礫有り	内外面 5YR 5/6 明赤褐	良好	口縁部 1/8～底部 1/2	
13	一括	土師器	有台埦	54.5	—	2.0	7.8	高台は垂直に垂下する。胴部は横に大きく開く。	高台は回転ヘラケズリの後に付され、ロクロナデが行われる。内面はミガキが行われる。	雲母多量　白色粒子少量	内面 7.5YR 2/1 黒 外面 7.5YR 4/2 灰褐	良好	高台欠損、体部下端～底部	内面黒色処理
14	一括	須恵器	無台坏	86.9	13.6	4.25	7.1	底部は平底。体部は僅かながら外反気味に開く。	底部は一方向のヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ。体部上位から内面はロクロナデ。	雲母・白色粒子微量　小礫やや多い。	内外面 10YR 7/1 灰白	良好	3/4	新治産
15	一括	須恵器	無台坏	81.6	13.0	4.2	6.0	底部は平底。体部は内湾して開く。	底部は一方向のヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ。体部上位から内面はロクロナデ	白色粒子多量　雲母やや多い	内外面 7.5YR 6/1 灰褐	良好	2/3	新治産
16	No.03	須恵器	無台坏	121.3	14.0	4.1	6.4	底部は平底。体部は直線的に開き、口縁部で僅かに外反する。	底部は一方向のヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ。その他体部は内外面共にロクロナデ。	雲母・白色粒子・小礫少量　スコリア微量	内面 10YTR 4/1 褐灰 外面 2.5YR 6/2 灰黄	良好	ほぼ完形	新治産 内面黒色処理
17	No.10	須恵器	無台坏	74.4	—	3.8	6.3	底部は平底。体部は僅かに内湾して開く。口唇部は欠損する。	底部は回転ヘラ切り。体部は内外面共にロクロナデ。	白色粒子やや多い。スコリア・小礫少量	内外面 10YR 6/4 にぶい黄橙	還元不良	体部下端～底部	新治産
18	SD10No.03	須恵器	無台坏	138.6	14.0	4.5	5.8	底部は平底。体部は直線的に開く。	底部及び体部下端は手持ちヘラケズリ。体部は内外面共にロクロナデ。	白色粒子多い　小中礫有り	内外面 2.5Y 6/1 黄灰	良好	口縁部 1/2 欠損	
19	SD10No.02・03	須恵器	有台埦	118.2	(14.8)	5.7	7.1	高台は短く「ハ」の字に開くもので、三角形を呈する。体部は僅かに外反気味に開く。	底部は回転ヘラ切り無調整。高台は貼高台。体部は内外面共にロクロ整形。	白色粒子・小礫多い。	内外面 2.5Y 6/1 黄灰	良好	口縁部 1/3～底部 3/4	
20	No.30	須恵器	有台皿	136.0	13.9	2.4	6.5	高台はやや外反気味に反って「ハ」の字に付される。体部は直線的に開く。	高台は回転ヘラケズリの後に付される。高台・内外面共にロクロ整形。	雲母・白色粒子多い。小礫やや多い。	内外面 10YR 6/3 にぶい黄橙	還元不良 二次焼成ｱﾘ	口縁部 1/3 欠損	新治産
21	一括	須恵器	有台盤	37.1	—	3.1	(7.8)	高台は「ハ」の字に直線的に付される。内端接地。体部は緩やかに内湾する。	高台は回転ヘラケズリの後に付される。高台・内外面共にロクロ整形。	雲母多い。白色粒子微量。	内外面 2.5Y 7/2 灰黄	良好	体部下端～底部 1/12	新治産
22	No.24・26・29	須恵器	甕	839.2	21.8	(25.0)	—	底部は欠損する。胴部は球形を呈し、最大径を胴下半部に有する。頸部は外反して開き口唇部に至る。	外面胴部は平行叩き。口縁部は内外面共にヨコナデ。下半にヘラケズリ痕が見られ、内面は剥落が激しいものの、輪積痕跡が明瞭に残される。	雲母・白色粒子やや多い。	内外面 2.5Y 5/1 黄灰	良好	口縁部～体部 2/3	新治産
23	No.38・39・40	須恵器	甕	405.5	—	(25.0)	—	胴部はやや長胴気味で最大径は上半部に有す。口縁部及び底部は欠損している。	胴部下端はヘラケズリ、中位以上は平行叩き。内面胴部は青海波の当具痕。頸部直下ではヘラナデが施される。また内面のみ輪積痕がみられる。	雲母・白色粒子やや多い。	内面 10YR 6/2 灰黄褐 外面 10YR 3/1 黒褐	良好	体部大破片	新治産
24	No.18・19・20 一括	須恵器	甕	1214.1	—	(24.8)	(22.0)	胴部は直線的に開き口縁部は水平に開き段を有する。口唇部は摘み上げられる。	外面体部は平行叩き。口縁部は内外共にヨコナデ。内面は当具痕が残り、輪積痕が観察される。	雲母・白色粒子少量。	内面 10YR 3/1 黒褐 外面 10YR 6/2 灰黄褐	良好	体部下端 2/3	新治産
25	No.21 カマド	須恵器	甕	147.5	(31.4)	8.3	—	底径が広い甕。胴部は緩やかに内湾し最大径はやや上半に位置する。	外面胴部下半はヘラケズリ。胴部は平行叩き。底部は砂目ヵ、底部内面は剥落している。	雲母やや多い。白色粒子多い。	内面 10YR 5/3 にぶい黄褐 外面 2.5Y 5/1 黄灰	良好	口縁部 1/4	新治産
26	No.54	須恵器	甕	177.5	—	(4.9)	(15.5)	底部の資料、平底で径が大きい。胴部は直線的に開いて立つ。	外面底部下端は横方向のヘラケズリ。底部は周縁に砂目が観察される。内面はヘラナデされ、輪積痕が観察される。	雲母・白色粒子やや多い。小礫少量。	内面 2.5Y 5/3 黄褐 外面 2.5Y 6/2 黄灰	良好	裾部～底部 1/3	新治産
27	No.01	須恵器	甕	224.7	—	(1.8)	14.2	底部は平底。底径が広い。胴部は直線的に開いて立つ。	外面体部下端はヘラケズリ。底部は砂目の後ナデ。内面はヘラナデ。	雲母多い。白色粒子少量。	内面 2.5Y 6/2 灰黄 外面 10YR 4/3 にぶい黄褐	良好	体部端部～底部	新治産

第30表　SI08出土遺物観察表（2）

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	粘土	色調	焼成	残存	備考
28	No.15	須恵器	瓶	101.7	—	<5.1>	(7.75)	高台は「ハ」の字に開き外端接地。胴部下半は緩やかに内湾して立つ。胴上半から口縁部は欠損する。	底部から胴部下半は回転ヘラケズリ。高台はヘラケズリの後付され、ロクロ整形される。内面はロクロナデ。	白色粒子少量。	内面 2.5Y 4/1 黄灰 外面 5Y 4/1 灰	良好	据部～底部 1/3	東海形窯不明 火膨れ有
29	一括	灰釉陶器	瓶	7.9	—	—	—	胴部の細片。やや内湾気味になる。	外面に薄く灰釉が施釉される。内面ロクロ痕。	精良。	内面 2.5Y 6/2 灰黄 外面 2.5Y 5/2 暗灰褐	良好	体部破片	東海形窯不明
30	一括	土製品	輪羽口	481.2	タテ 14.7	ヨコ 7.7	孔径 1.85	筒状の土製品。両端部は欠損している。	外面はヘラによる整形。縦孔が貫通する。下端は熱により還元している。	精良。	10YR 6/4 にぶい黄橙	不良	一部残存	

SI09（第77～79図・第31表・図版16・17・44）

2区L-1・2Gに位置し、遺構の大半が検出され、北東隅は調査区外にかかっている。SI13・SB02を切っているが、カマド付近を2つの攪乱によって壊されている。主軸方向N-67°-W。規模・形状は南北3.25m、東西3.10mからなる平面正方形で、深さ14～18cmを測る。覆土は黒色土から極暗褐色土の2層からなるレンズ状堆積である。床面は全体に貼床が施されており、中央部に硬化面がある。周溝は幅15～25cmの深さ7cm前後で壁際をほぼ全周している。カマド前面の周溝は、重複するSI13のものと誤認したかも知れない。カマドは東壁に付設している。主軸方向84cm、直交軸方向73cmで袖部は遺存していない。カマドは極暗褐色土や黒色土で構築されている。東壁からの掘り込みは主軸方向の長さと同様、84cmを測る。カマド内中央の床面から約16cm上で、口縁部を打ち欠いた土師器小形甕が逆位で検出された。被熱痕跡はほとんどなく、底面には一面に粘土が付着している。

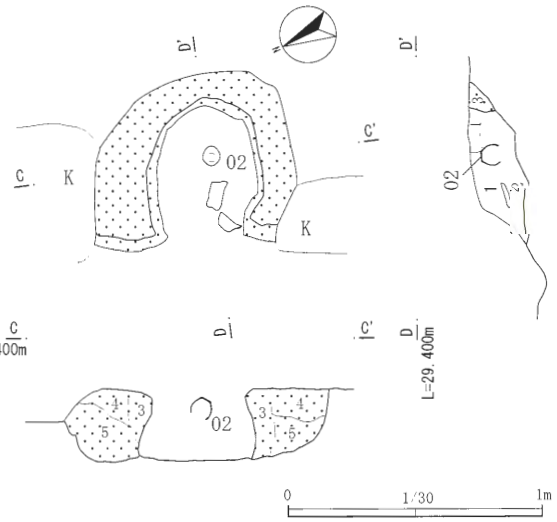


SI09
1 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子φ2mm中量、炭化物ブロック・粒子φ2mm少量、焼土ブロック・粒子φ2-5mm多量
2 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子φ2-5mm中量、焼土ブロック・粒子φ2mm少量
SI13
1 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子φ2mm粒子少量、焼土ブロック少量
2 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子φ2mm粒子少量

第77図　SI09・SI13

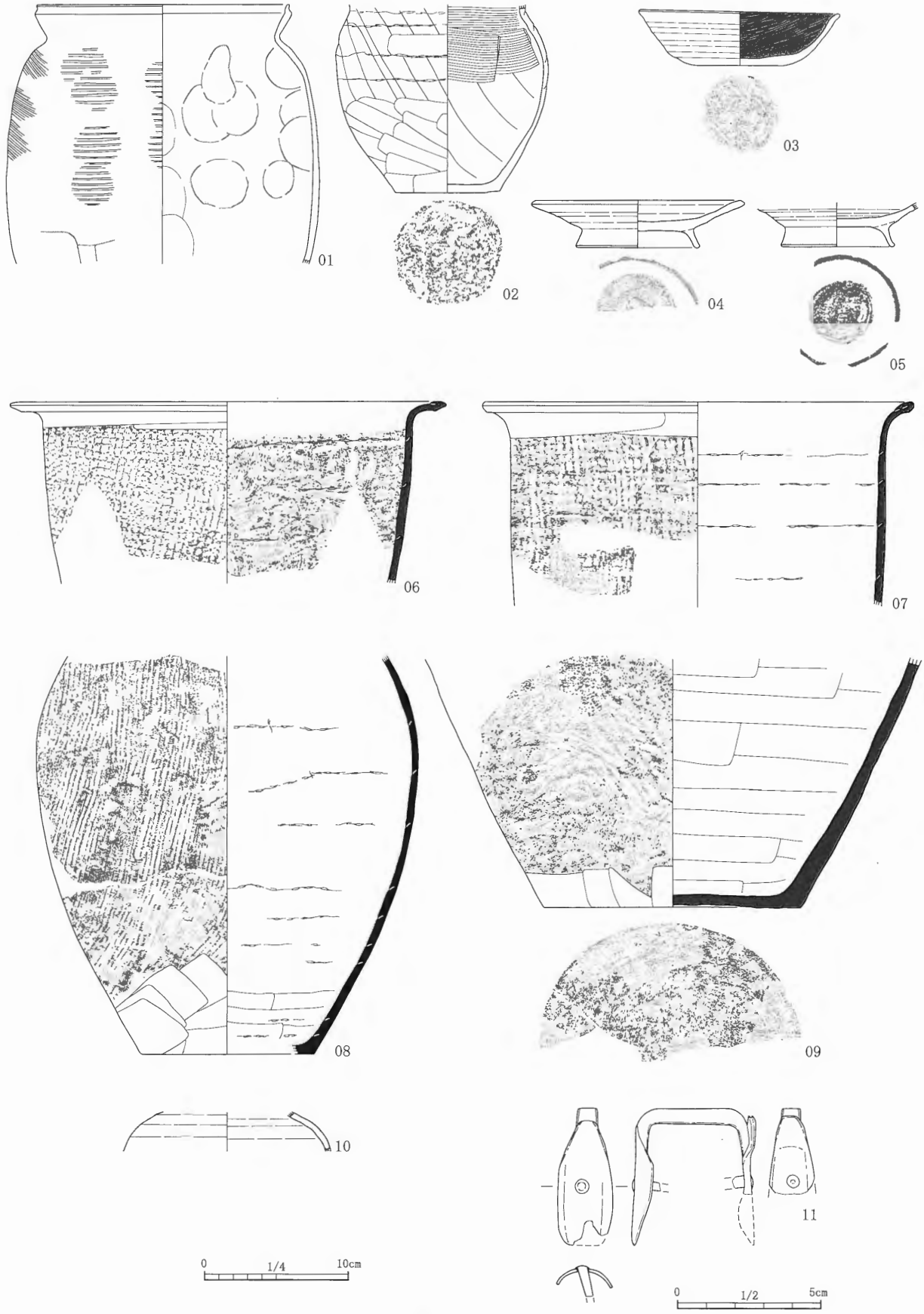
遺物は縄文土器762.6g、弥生土器143.4g、土師器5,211.3g、須恵器5,633.1g、灰釉陶器9.2g、土製品（縄文・土器片錘）8.9g、埴輪41.1g、石器（剥片）0.8g、鉄製品18.3g、礫499.6gを検出した。すべて破片で、床面から浮いた位置の覆土中に含まれる。吊金具状の鉄製品は覆土一括取り上げ。

これらの遺物から、本遺構は平安時代（9世紀後半）と判断される。



SI09 カマド
1 明赤褐色土　7.5Y3/2　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子φ2-10mm少量、焼土ブロック・粒子φ2-10mm多量、炭化物ブロック・粒子φ2mm少量
2 明赤褐色土　7.5Y3/2　粘性中　しまり強　焼土ブロック・粒子φ2-10mm多量
3 明赤褐色土　7.5Y3/2　粘性中　しまり強　焼土ブロック・粒子φ2-10mm主体
4 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり強　VIブロック・粒子φ2-10mm中量、焼土ブロック・粒子φ2-10mm少量
5 黒色土　7.5YR2/1　性中　しまり強　VIブロック・粒子φ2-10mm少量、焼土ブロック・粒子φ2-10mm少量、炭化物ブロック・粒子φ2mm少量

第78図　SI09カマド



第 79 図　SI09 出土遺物

第31表　SI09出土遺物観察表

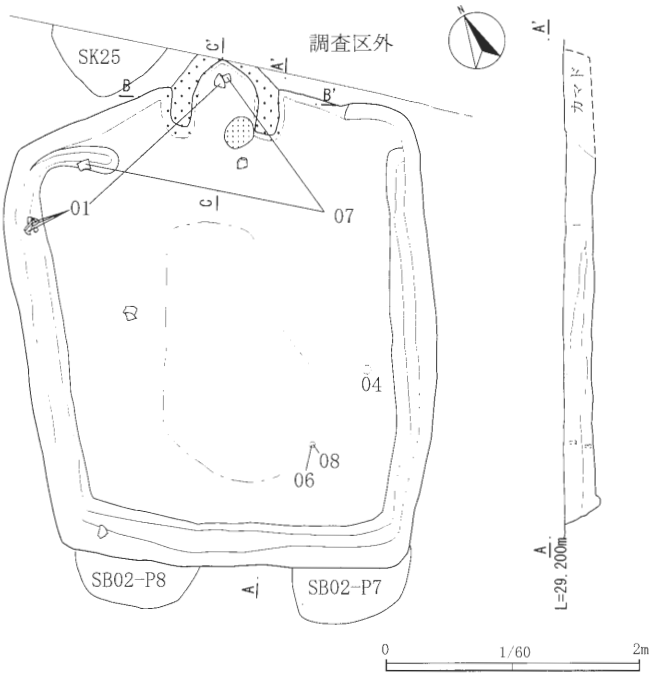
番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	No.34 一括	土師器	甕	168.7	(17.5)	<17.2>	—	胴部はやや長胴気味で、やや肩が張る。頸部で「く」の字に屈曲して口縁はやや短く開く。口唇部は摘み上げられる。	外面胴下半部は横方向のヘラケズリ。口縁部は内外面共にヨコナデ。内面は円形の当具痕が残されている。	雲母・白色粒子やや多い。黒色粒子少量。スコリア微量。	内面 7.5YR 5/4 にぶい褐 外面 7.5YR 6/4 にぶい橙	良好	口縁部～体部上部 1/8	常総型甕 新治産ヵ
02	カマド No.01	土師器	甕	344.2	—	<13.0>	7.3	底部は平底。胴部は球形を呈す。頸部は緩やかに外反する。口縁部は欠損している。	底部は砂目ヵ。胴部は縦方向のヘラケズリの後下半部は斜め方向のヘラケズリ。内面胴部上半は、木口状工具によるヨコナデ。下半はヘラナデ。外面に輪積痕を残す。	雲母・白色粒子・小礫多い。	内面 5YR 5/4 にぶい赤褐 外面 7.5YR 5/4 にぶい褐	良好	口縁部～体部 1/5 欠損	常総型甕
03	No.11	土師器	有台埦	136.6	13.8	3.7	6.1	平底を呈するが、高台の剥落痕が見られる。体部は内湾気味に立ち口唇直下で僅かに外反する。	底部は回転ヘラケズリの後高台が付される。外面はロクロナデ。内面は細かなミガキが行われる。	雲母・白色粒子多い。	内面 7.5YR 3/1 黒褐 外面 10YR 6/4 にぶい橙	良好	口縁部～体部 1/2 欠損	内面黒色処理
04	No.07	土師器	有台皿	74.8	(14.2)	3.2	(8.3)	高台はやや足高で、直線的に「ハ」の字に開く。体部は大きく外反気味に開く。	高台は回転ヘラケズリの後に付されるもので、高台部分から内面に至るまでロクロ整形。	雲母多い。白色粒子やや多い。スコリア少量。	内面 10YR 4/2 灰黄褐 外面 10YR 6/2 灰黄褐	良好	1/3	
05	No.12	土師器	有台皿	107.0	—	<3.0>	7.7	高台はやや足高で、直線的に「ハ」の字に開き、端部で僅かに外反する。体部は大きく外反気味に開く。口縁部は欠損している。	高台は回転ヘラケズリの後に付される。高台部及び内外面はロクロナデ。	雲母多い。白色粒子やや多い。	内外面 2.5Y 7/2 灰黄	良好	裾部～底部	
06	No.14・27・40	須恵器	甕	291.9	(29.0)	<12.55>	—	胴部は緩やかに内湾し口縁部は水平に開き端部は折り返し口縁状に折り曲げられる。	外面胴部は格子目叩き。内面は青海波の当具痕で部分的に輪積痕を残す。口縁部は内外面共にナデ。	白色粒子多い。	内外面 5Y 5/1 灰	良好	口縁部 1/16～体部上端 1/4	新治産
07	No.03・13・15	須恵器	甕	253.7	(29.5)	<13.9>	—	胴部は直立気味に立ち、口縁部は緩やかに開き端部は折り曲げられる。	外面胴部は格子目叩き。内面は青海波の当具痕で部分的に輪積痕を残す。口縁部は内外面共にナデ。	雲母・白色粒子やや多い。	内外面 10YR 6/3 黄橙	良好	口縁部～体部上端 1/4	新治産
08	No.32 一括	須恵器	甕	419.3	—	<27.0>	(12.0)	胴部はやや長胴気味。最大径は上半部に位置する。底部は平底で、口縁部は欠損している。	外面は平行叩き。胴下半部から底部はヘラケズリ。内面は青海波の当具痕。底部付近はヘラナデ。	雲母・白色粒子・小礫やや多い。	内面 7.5YR 5/4 にぶい褐 外面 7.5YR 6/6 橙	良好 二次焼成 ??	体部 1/4	
09	No.13・21	須恵器	甕	1098.2	—	<17.0>	17.8	底部の径は大きく、胴部は直線的に大きく開く。口縁部は欠損している。	外面底部はナデ。胴部下半はヘラケズリ。胴部は平行叩き。内面は当具痕の後ナデ。底部付近はヘラナデ。	白色粒子少量。小礫やや多い。	内面 N 6/ 灰 外面 N 5/ 灰	良好	体部下端～底部 1/2	常陸産ヵ
10	一括	灰釉陶器	瓶	9.2	—	<2.7>	—	緩やかに内湾する肩部の破片。	外面は灰釉が施され、内外面共にロクロ痕が明瞭。	黒色粒子・白色粒子微量。	内面 2.5Y 8/1 灰白 外面 10Y 6/2 オリーブ灰	良好	体部破片	尾張産
11	一括	鉄製品	吊金具	18.3	縦 5.0	幅 4.3	厚 1.9	「コ」の字形の金具で、リベット状の目釘で挟んだものを止める構造。馬具（鐙）の吊金具と類似する。	厚さ 1mm、断面U字形の鉄板を太さ 6mm、断面方形、コの字形の鉄棒で鍛接・連結する。目釘は太さ 3mm、断面方形。	—	—	—	両端欠損	一部復元的に図化

SI10（第80～82図・第32表・図版17・44）

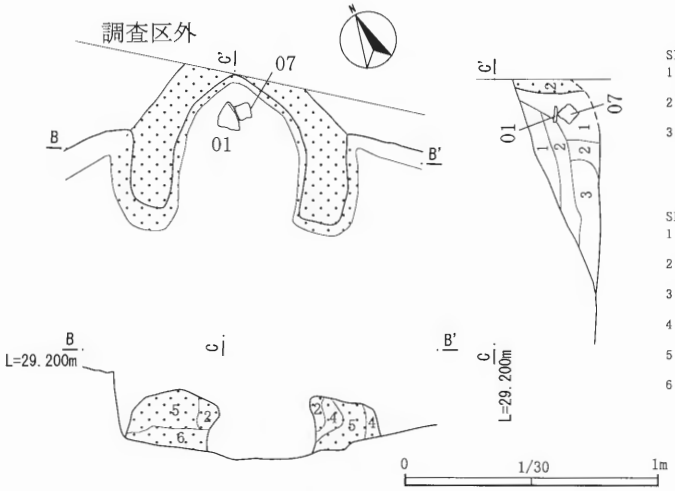
2区K-1・2Gに位置し、遺構は調査範囲にほぼ収まっているが、カマド尻は調査区外である。SB02 を切っている。南北3.40 m、東西3.22 mの平面正方形で、深さは28～35cmを測る。主軸方向N-25°-W。覆土は黒色土から暗褐色土の3層からなり、現状からレンズ状堆積と判断される。床面中央部に硬化面がある。壁周溝は幅28～36cm、深さは概ね5cm前後で北壁を除いて巡る。カマドは主軸方向63cm、直交軸方向93cmで、北壁中央部を30cm掘り込んで燃焼部にしている。褐色土から極暗褐色土で構築した両袖部が遺存する。カマド燃焼部の奥（土師器破片の下）には長方形の絹雲母片岩（09）が、小口面を上に長手面を正面にして立ててあった。表面の被熱・赤変は著しく、支脚として用いられたものと考えられる。

遺物は縄文土器885.5g、弥生土器78.0g、土師器2,578.8g、須恵器1,435.7g、灰釉陶器34.8g、石器4.4g、石製品1,441.4g、礫502.5gを検出した。床面上あるいは床面付近に、ほぼ完形の土師器皿（04）や同小形甕底部（06）などが散在するが、他はすべて破片資料である。

これらの遺物から、本遺構は平安時代（9世紀後半）と判断される。



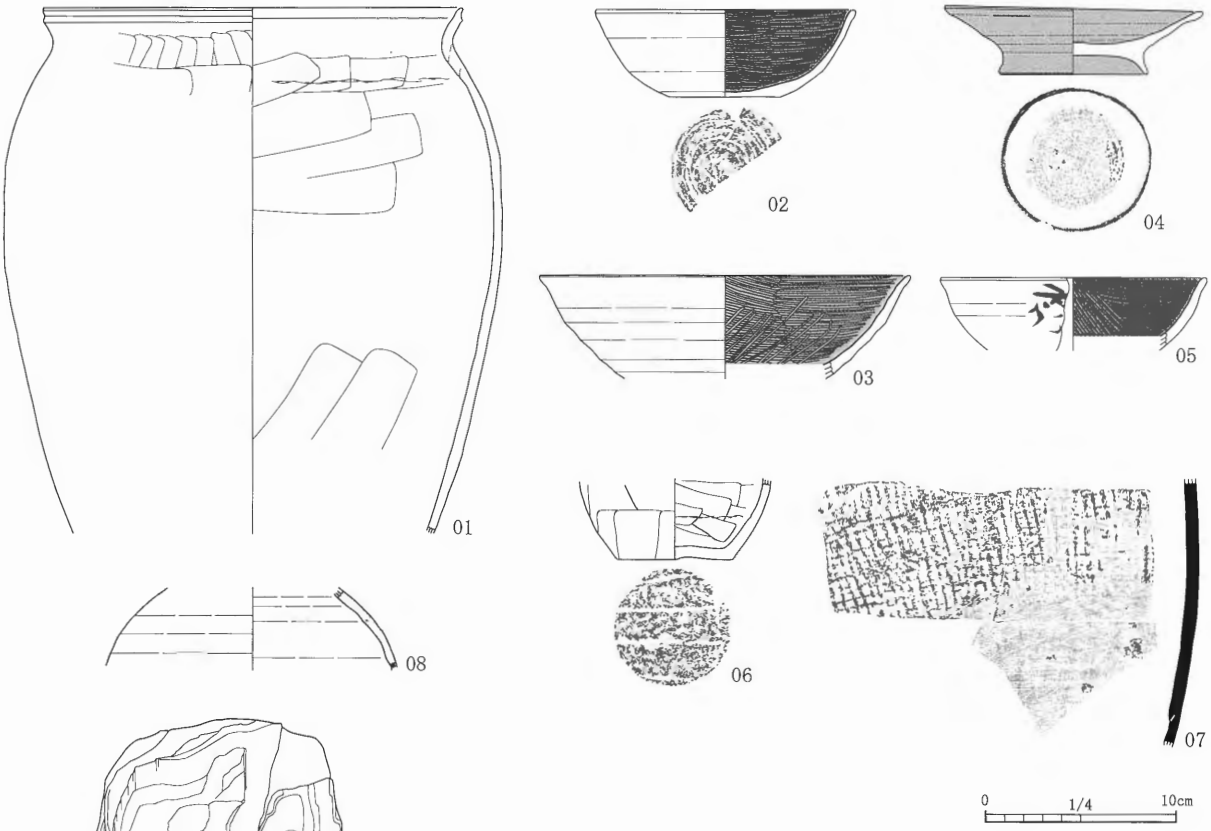
第80図　SI10

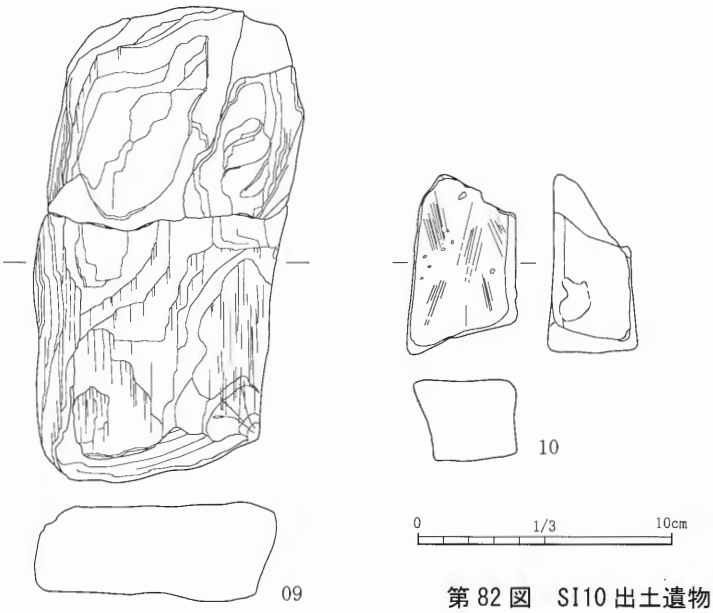


SI10
1　黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　Viブロック・粒子φ 2-5 mm少量、炭化物ブロック・粒子φ 2 mm少量
2　暗褐色土　7.5YR3/4　粘性中　しまり強　Viブロック・粒子粒子φ 2-60 mm主体、3層・粒子φ 2-5 mm
3　黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　Viブロック・粒子粒子φ 2 mm少量

SI10カマド
1　極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり中　Viブロック・粒子φ 2-10 mm少量　焼土ブロック・粒子φ 2-20 mm少量　炭化物・粒子φ 2 mm少量
2　暗赤褐色土　10R3/2　粘性中　しまり強　Viブロック・粒子φ 2-10 mm少量　焼土ブロック・粒子φ 2-20 mm多量
3　黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり弱　Viブロック・粒子φ 2-10 mm少量　焼土ブロック・粒子φ 2-20 mm少量　炭化物・粒子φ 2 mm少量
4　褐色土　7.5YR4/3　粘性強　しまり強　Viブロック・粒子φ 2-10 mm少量　焼土ブロック・粒子φ 2-20 mm少量　炭化物・粒子φ 2 mm少量
5　黒褐色土　7.5YR3/1　粘性強　しまり強　Viブロック・粒子φ 2-10 mm中量　焼土ブロック・粒子φ 2-20 mm中量　炭化物・粒子φ 2 mm多量 砂粒多量
6　極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり強　Viブロック・粒子φ 2-10 mm多量　焼土ブロック・粒子φ 2-20 mm少量　炭化物・粒子φ 2 mm少量 砂粒多量

第 81 図　SI10 カマド





第 82 図　SI10 出土遺物

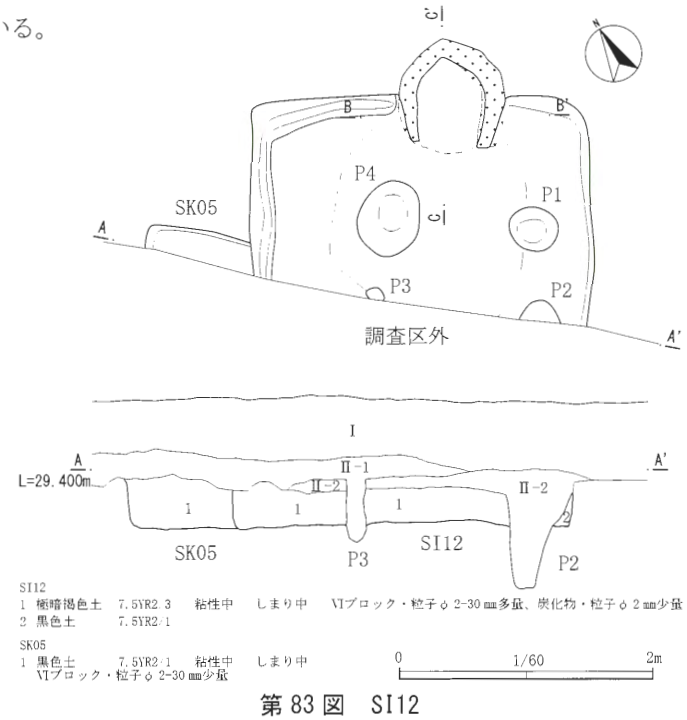
第32表　SI10出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	No.04・05・07 カマドNo.01 カマド	土師器	甕	442.5	(22.0)	<27.0>	—	胴部は長胴気味になり、最大径は胴上半部に有す。口縁は緩やかに外反して、口唇部は摘み上げられる。	外面は口縁部は内外共にヨコナデ。外面口縁直下は縦方向のヘラナデ。内面はヘラナデ。	雲母・白色粒子やや多い。	内面 10YR 5/3 にぶい黄褐 外面 7.5YR 5.4 にぶい褐	良好 二次焼成 ｱﾘ	口縁部～体部 1/3	常総型甕
02	一括	土師器	無台坏	74.8	(13.5)	4.6	5.7	底部は平底。体部は緩やかに内湾し口唇部は僅かに外反する。	底部及び体部下端はは回転ヘラケズリ、体部はロクロナデ。内面は横方向の細かなミガキが施される。	雲母・白色粒子多い。	内面 7.5YR 3 1 黒褐 外面 7.5YR 7.4 にぶい橙	良好	口縁部 1/3～底部 1/2	内面黒色処理
03	一括	土師器	無台坏	43.6	(19.3)	<5.3>	—	大振りの坏で底部は欠損している。体部は緩やかに内湾し、口唇部で僅かに外反して開く。	外面体部はロクロナデ。内面は細かなミガキが施される。	雲母少量。	内面 10YR 2.1 黒 外面 10YR 5 3 にぶい黄褐	良好 二次焼成 ｱﾘ	口縁部破片	内面黒色処理
04	No.11	土師器	有台皿	160.7	13.9	3.4	7.7	高台は大きく「ハ」の字に開く。体部は直線的に大きく開き、口唇部で肥厚する。	高台は回転ヘラケズリの後に付される。高台及び体部内面はロクロナデ。	雲母少量。白色粒子やや多い。	内外面 7.5YR 3.1 黒褐	良好	口縁部 1.3 欠損	内外全面黒色処理 黒色土器B類
05	一括	土師器	有台埦	11.8	(13.8)	<3.8>	—	底部を欠損するが、形状より脚を有すると判断される。体部は緩やかに内湾しやや撫みがある。口唇部は僅かに外反して開く。	内面は細かなミガキが施される。	雲母・白色粒子やや多い。	内面 7.5YR 3 1 黒褐 外面 5YR 5 6 明赤褐	良好	口縁部破片	内面黒色処理 墨書「口」
06	No.10	土師器	小形甕	103.3	—	<4.3>	6.0	底部は平底。胴中位より上半は欠損。胴部は緩やかに内湾し球形ヵ。	底部は板目。外面胴部はヘラケズリ。内面はヘラナデ。見込み部に指頭による圧痕がみられる。	雲母微量。白色粒子・小礫多い。	内面 5YR 5 8 明赤褐 外面 7.5YR 6 4 にぶい橙	良好	体部端部～底部	常総型甕
07	No.08 カマドNo. 2 一括	須恵器	甕	204.6	—	—	—	緩やかに内湾する胴部の破片。	外面上半は格子目叩き。下半はヘラケズリ。内面は当具痕が残る。	雲母・白色粒子少量。小礫有り。	内外面 10YR 7 1 灰白	良好	体部大破片	
08	No.10 一括	灰釉陶器	瓶	34.8	—	<4.5>	—	瓶の肩部破片である。なだらかであまり肩は張らない。	内外面共にロクロナデ。外面には灰釉が施釉される。	精良。	内面 2.5Y 7 1 灰白 外面 5Y 6 3 オリーブ黄	良好	体部破片	猿投（窯不明）
09	カマドシキャク	石製品	支脚	1320.9	タテ 18.3	ヨコ 9.6	厚 3.8	扁平でおおむね方形に加工された片岩。2片に折損している。	上面は熱による赤変が認められる。	—	—	—	—	細雲母片岩
10	一括	石製品	砥石	120.5	タテ 6.9	ヨコ 3.5	厚 3.2	断面方形、砥石面はやや平坦。鎌砥石。	提げ砥石であろう。4面に使用痕が認められる。孔部分は欠損している。	—	—	—	—	凝灰岩

SI12（第83～85図・第33表・図版17・18・45）

2区I-2Gに位置し、カマドのある遺構の北側が検出され、南側は調査区外となっている。SK05を切っている。南北が現状で1.80m、東西が2.66mの推定長方形、深さ34cmである。主軸方向N-29°-E。床面はカマド前から中央部にかけて硬化している。ピットはP1～4の4基が検出された。P1は長径45cm、短径35cmで深さ36cm。P2は残存部で長径34cm、短径16cmで深さ47cm。P3は残存部で長径13cm、短径8cmで深さ14cm。P4は長径63cm、短径52cmで深さ18cmである。土層から判断して、P1・P2は住居跡が埋没した後、穿たれた中・近世のものと判断される。周溝は幅15～25cmで、5cm前後の深さを保ち、カマドの左側である北壁際から西壁際まで穿たれている。カマドは主軸方向83cm、直交軸方向84cmを測る。北壁を50cm掘り込んで燃焼部にしている。褐色土から黒褐色土で構築した両袖部が遺存している。

遺物は、覆土中から縄文土器48.9g、土師器1,435.9g、須恵器887.3g、礫30.6gを検出した。カマド内では完形の土師器坏（01）とほぼ完形に復元された同坏（02）、須恵器小形甕（03）が検出された。坏02は体部破片2点のみがカマド内、他は住居覆土中から検出されている。この坏破片2点と小形甕（破片化、破片はすべてカマド内から検出）はカマド覆土第4層（焼土）に伴う形で埋没していた。完形の坏01は同第2・4層の上に正位で載っている。明らかにカマド廃絶（破壊）に伴う遺棄遺物である。坏02は内外面黒色処理であるが、カマド内出土の体部2破片は赤変し、内面は火爆ぜ・剥離している。坏01の下位で検

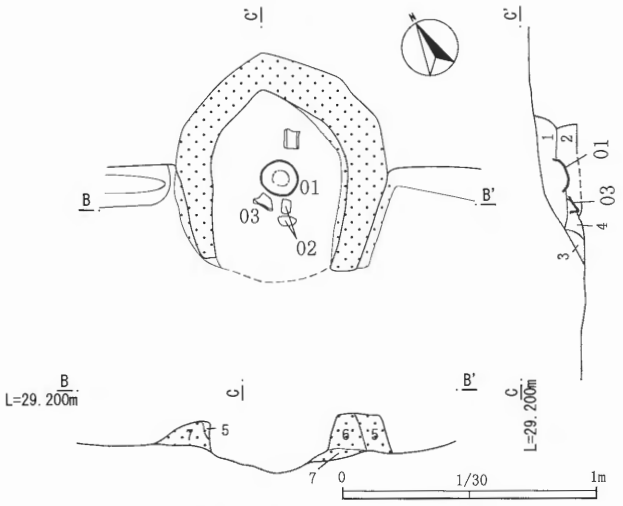


第83図　SI12

出された小形甕破片（03）は赤変（酸化）している。坏01の外面には被熱した粘土と煤が付着している。焼土の存在と合わせて、カマド廃絶に際して火を用いた行為がなされたことが想像される。

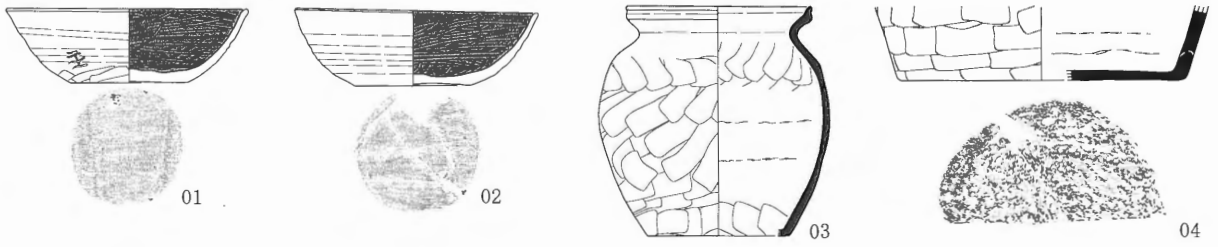
特筆すべきは坏01の「刻書」である。体部外面に焼成後の刻書がなされている。正位で「主」の字と判断したが「九字切り」の「四縦五横」の略である可能性もあるか。また、坏01は口縁部や見込み、底部外面が良く摩耗しており、日常、使用済みの什器であったと思われる。

これらの遺物から、本遺構は平安時代（9世紀前半）と判断される。



1 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　焼土ブロック・粒子φ2-20mm中量、炭化物・粒子φ2mm少量、Vlブロック・粒子φ2-5mm中量
2 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　焼土ブロック・粒子φ2-20mm少量、炭化物・粒子φ2mm少量、Vlブロック・粒子φ2-5mm少量
3 暗褐色土　7.5YR3/4　粘性中　しまり強　焼土ブロック・粒子φ2-20mm中量、炭化物・粒子φ2mm少量、Vlブロック・粒子φ2-5mm少量
4 暗赤褐色土　10R3/2　粘性弱　しまり強　焼土ブロック・粒子φ2-20mm主体
5 褐色土　7.5YR4/3　粘性中　しまり強　焼土ブロック・粒子φ2-20mm少量、炭化物・粒子φ2mm少量、Vlブロック・粒子φ2-5mm少量、砂粒多
6 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり強　焼土ブロック・粒子φ2-20mm少量、炭化物・粒子φ2mm中量、Vlブロック・粒子φ2-5mm少量、砂粒少
7 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性弱　しまり強　焼土ブロック・粒子φ2-20mm少量、炭化物・粒子φ2mm多量、Vlブロック・粒子φ2-5mm中量、砂粒中

第84図　SI12カマド



第85図　SI12出土遺物

第33表　SI12出土遺物観察表

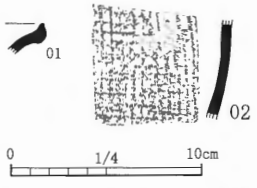
番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	カマドNo.01	土師器	無台坏	162.1	13.2	3.95	6.5	底部は平底。体部は緩やかに内湾して立ち、口唇直下で僅かに外反し肥厚する。	底部及び体部下端は手持ちヘラケズリ。外面胴部はロクロ整形。内面は磨かれる。	雲母多い。白色粒子少量。	内面 7.5YR 3/1 黒褐 外面 10YR 6/3 にぶい黄橙	良好 二次焼成アリ	完形	内面黒色処理 焼成後刻書「主」
02	カマドNo.04	土師器	無台坏	138.6	13.4	4.0	6.5	底部は平底体部は緩やかに内湾して立ち、口唇直下で僅かに外反し肥厚する。	底部及び体部下端は手持ちヘラケズリ。外面胴部はロクロ整形。内面は磨かれる。	雲母やや多い。白色粒子少量。スコリア微量。	内面 7.5YR 2/1 黒 外面 10YR 6/3 にぶい黄橙	良好	1/4欠損	内面黒色処理
03	カマドNo.03・カマド一括	須恵器	小形甕	210.2	10.1	〈12.1〉	(8.0)	底部は平底でやや径が広い。胴部は球形で胴部上半に最大径を有す。口縁部は緩やかに外反して口唇部で摘み上げられる。	外面胴部はヘラケズリ。口縁は内外面共にヨコナデ。内面は頸部付近にヘラナデが施される。内面胴部中央付近に輪積痕を残す。	雲母微量。白色粒子少量。	内外面 10YR 6/1 褐灰	良好	口縁部1/4欠損底部欠損	常総型甕ヵ
04	一括	須恵器	甕	130.7	—	〈3.9〉	(16.0)	底部はヘラケズリ。体部は直線的に立つ。	胴部下端はヘラケズリ。底部は砂目。	雲母多い。白色粒子少量。	内面 10YR 3/1 黒褐 外面 10YR 4/1 褐灰	良好	体部端部～底部1/4	

SI13（第77・86図・第34表・図版16・45）

2区L-2Gに位置し、調査区内に遺構全体が収まってはいるが、SB02を切りつつも、北側の大半をSI09に切られて消滅している。東・西方向にカマドの痕跡が認められないので、北カマドと推定される。主軸方向N-30°-E。南北現状1.20ｍ東西3.00ｍの平面長方形で深さ22～29cmを測る。覆土は黒色土から極暗褐色土の2層からなるレンズ状堆積である。床面全面に浅い貼床を施している。周溝は、幅20～32cm、深さ10cm前後を測り、遺存している壁際を巡っている。

遺物は土師器6.1g、須恵器61.9g、礫31.9gを検出した。いずれも小破片で、覆土中から検出されたものである。01の須恵器甕の口縁部は9世紀前半に位置づけられる。

これらの遺物から、本遺構は平安時代（9世紀前半）と判断される。



第86図　SI13出土遺物

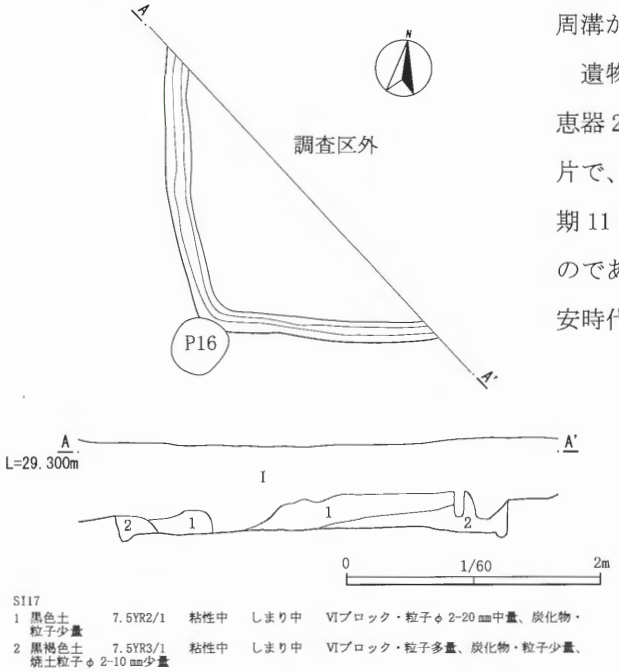
第 34 表　SI13 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	一括	須恵器	甕	6.6	—	—	—	口縁部は外反し口唇部は摘み上げられる。	口縁部は内外面共にヨコナデ。	雲母多い。白色粒子少量。	内面 10YR 5/3 にぶい黄褐 外面 10YR 5/2 灰黄褐	還元不良	口縁部破片	
02	一括	須恵器	甕	30.1	—	—	—	内湾する胴部破片。	外面は平行叩き。内面は当具痕。	雲母やや多い。白色粒子少量。	内外面 10YR 6/1 褐灰	良好	体部破片	

SI17（第 87・88 図・第 35 表・図版 18・45）

2 区 C-1G に位置し、南東隅部のみが検出され、P16 に切られている。南北 1.70 m、東西 2.25 mの推定長方形で深さ 20cm を測る。主軸方向 N-31°-E。覆土は黒色土・黒褐色土の 2 層からなり、中央部で大きく攪乱を受ける。床面は地山を直接掘削し全体に硬化している。周溝は、幅 16 ～ 20cm、深さ 5cm 前後を測り、隅部である壁際に周溝が巡り、調査区外に続いている。

遺物は縄文土器 16.3g、弥生土器 14.9g、土師器 187.6g、須恵器 274.4g、埴輪 64.8g、礫 15.1g を検出した。いずれも小破片で、覆土中から検出されたものである。土師器は古墳時代前期 11 点、平安時代 4 点であり、前者は重複する P16 由来のものである。図示した土師器埦、須恵器甕などから、本遺構は平安時代（9 世紀後半）に位置づけられるだろうか。



第 87 図　SI17

第 88 図　SI17 出土遺物

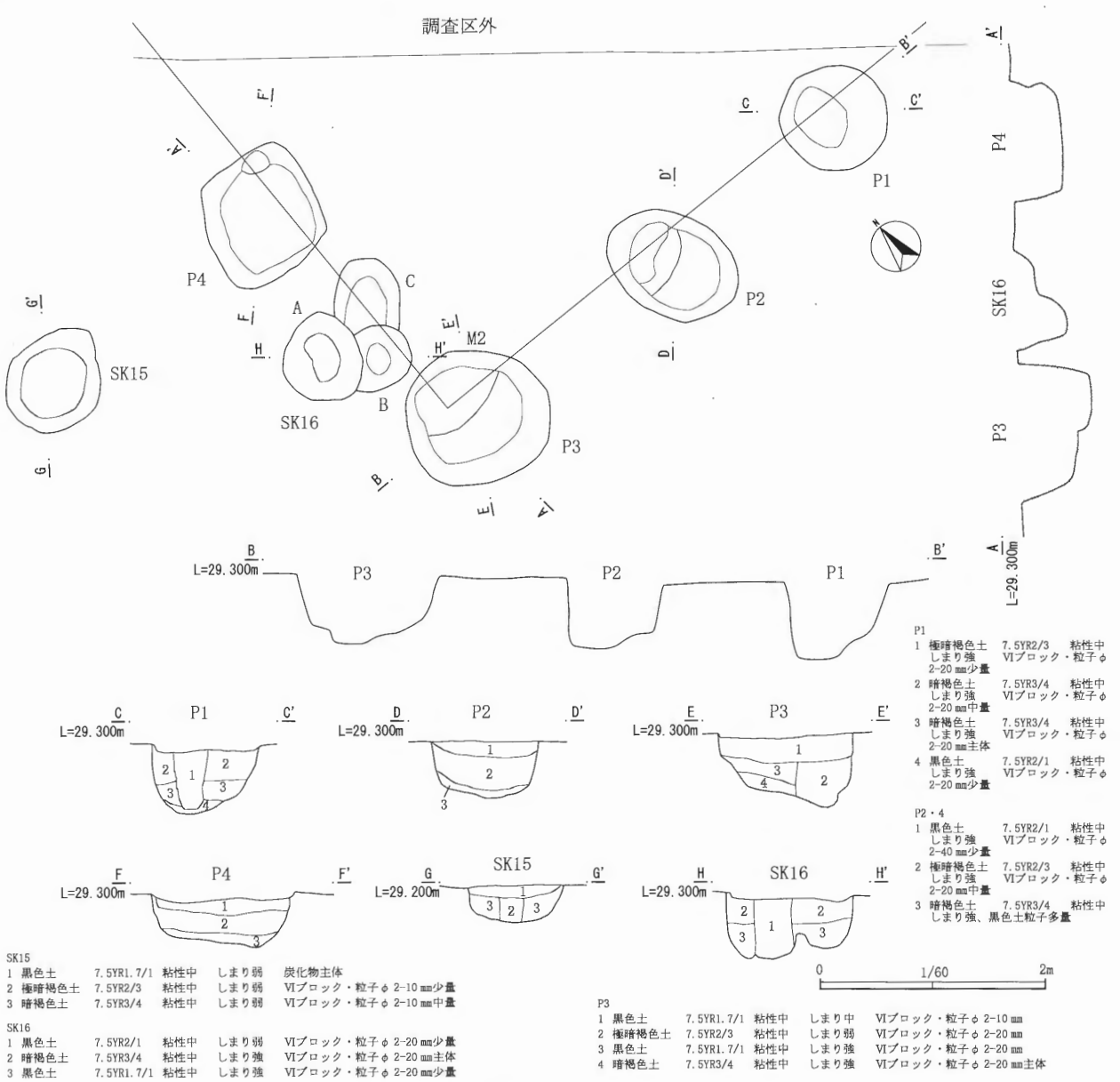
第 35 表　SI17 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	一括	須恵器	有台埦	87.8	—	〈2.7〉	(7.7)	高台は「ハ」の字に開き体部は内湾して立つ。口縁部は欠損している。	底部は回転ヘラ切りの後高台が付される。高台部分を含め内外面共にロクロ整形が行われる。	白色粒子多い。	内面 7.5YR 6/6 橙 外面 10YR 7/4 にぶい黄橙	良好	体部大破片	
02	一括	須恵器	甕	52.6	—	—	—	胴部下半の破片。直線的に開いて立つ。	外面は上半で擬格子叩き。下半は叩きの後にナデ。内面は当具痕後ナデ。	雲母多い。白色粒子やや多い。	内外面 10YR 6/4 にぶい黄橙	良好	体部破片	

第 2 項　掘立柱建物跡

SB01（第 89・90 図・第 36 表・図版 19・45）

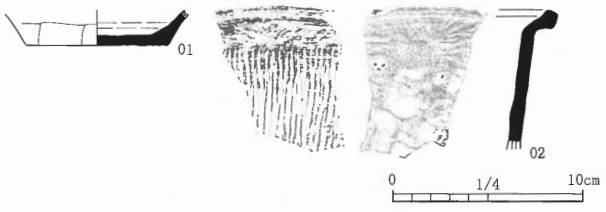
2 区 L-1・2, M-1・2G に位置し、遺構の南側が検出され、北側は調査区外である。調査区内においては柱穴 4 基を検出した。桁行方向をほぼ東西、N-88°-W に置く側柱建物と考えられる。梁行一間＝8 尺（2.40 m）、桁行一間＝端間 7 尺（2.10 m）、中間＝6.5 尺（1.95 m）（注 1）。各柱穴は円形を基調とする P1 ～ 3、方形を基調とする P4 が認められ、次の様相を示す。P1 は長径 95cm、短径 93cm、深さ 70cm。覆土は極暗褐色土から暗褐色土に至る 4 層からなり、極暗褐色土の第 1 層が柱痕跡で柱幅 32 cmを測る。掘方埋め土は下から、黒色土・ローム・暗褐色土の水平堆積を示す。P2 は長径 124cm、短径 90cm、深さ 62cm。覆土は底部の薄い暗褐色土の他はほぼ単一のロームブロック・炭化物混じりの黒色土である。P3 は長径 130cm、短径 122cm、深さ 64cm。覆土は黒色土から暗褐色土の 4 層からなる。第 2 層は柱痕跡。上に載る第 1 層は P2 の黒色土と類似する。第 3・4 層は構築時の掘方埋め土と思われる水平堆積である。P4 は長径 132cm、短径 114cm、深さ 44cm を測る。覆土は P2 と類似する。



第 89 図　SB01

P3・4 間にある SK16（後述）は西側に柱痕跡があり、覆土は P1 に類似することから、本建物の副え柱的なものと思われる。また、P4 の西方に柱痕跡を持つ SK15 があり、本遺構と関連する柱穴の可能性もある。

遺物は、P3 と P4 の覆土から検出している。P3 では縄文土器 21.6g、土師器 4.8g、須恵器 20.7g、礫 51.8g、P4 では縄文土器 34.8g、土師器 17.6g（古墳時代前期・平安時代各 1 点）、須恵器 50.6g、礫 3.2g がある。須恵器には体部下端・底面手持ちケズリの坏破片（01、P3 出土）と、甕の口縁部（02、P4 出土）がある。前者は 8 世紀後葉から 9 世紀前葉、後者は 9 世紀後半に位置づけられるか。P3・4 いずれも柱が抜き取られているので、本遺構の帰属時期を明確にできないが、9 世紀後半を下限として捉えておきたい。



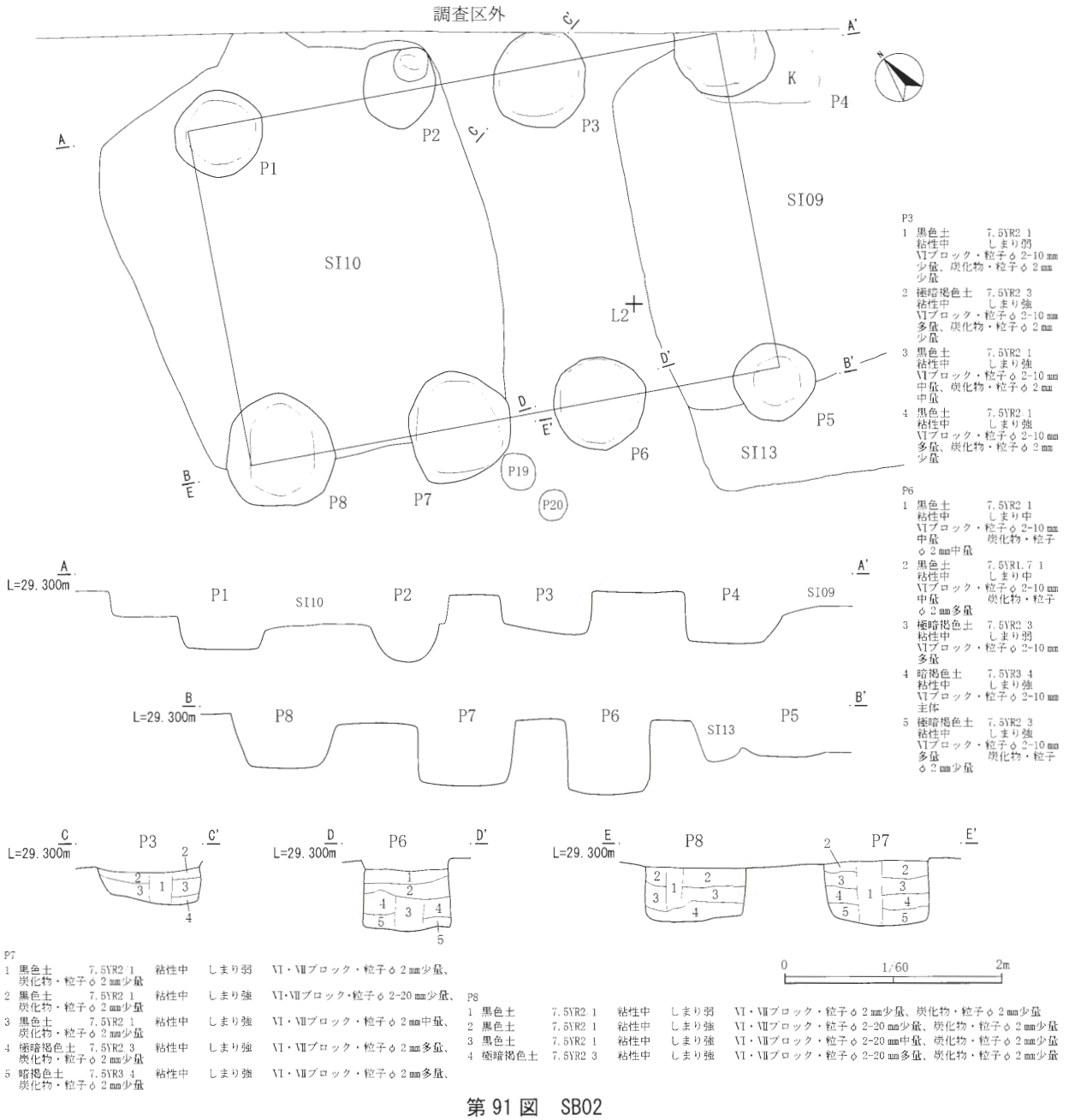
第 90 図　SB01 出土遺物

第 36 表　SB01 出土遺物

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	SK11	須恵器	無台坏	20.7	—	〈1.8〉	〈7.4〉	底部は平底。体部は僅かに外反気味に大きく開く。	体部は内外面共にロクロ整形。体部下端及び底部は手持ちヘラケズリ。	黒色粒子・スコリア・雲母やや多い。小礫（石英）微量。	内面 2.5YR 6/2 灰黄 外面 2.5YR 6/3 にぶい黄	良好	底部～体部下端 1/8	新治産
02	SK12	須恵器	甕	50.6	—	〈7.1〉	—	胴部は急角度に大きく開く。口縁部は屈曲して水平に開いた後稜を有し、口唇部は内側に折り返される。	外面は縦方向の平行叩き。口縁部は内外面共にヨコナデ。内面胴部は当具痕と指頭圧痕を有す。	雲母多い。長石・石英少量。スコリア微量。	内外面 5Y 4/1 灰	良好	口縁部破片	

SB02（第 91 図・図版 20）

２区 K-1・2,L-1・2G に位置し、調査区内に遺構全体がほぼ収まっている。平安時代の住居跡 SI09・10・13 に切られている。梁行１間、桁行３間の側柱建物である。桁行方向 N-61°-W。梁行 3.15 m・10.5 尺、桁行 4.95 m・16.5 尺・一間＝西端間６尺、中央間 4.5 尺、東端間 5.5 尺。各柱穴は平面円形で、次の様相を示す。P1 は長径 78cm、短径 76cm、深さ 32cm。覆土は極暗褐色土から黒色土に至る４層からなる。第１層が柱痕跡で幅 30cm、第２～４層が互層状の水平堆積を示す。P2 は長径 78cm、短径 67cm、深さ 36cm。覆土は黒色土から暗褐色土に至る３層の互層状の水平堆積となっている。P3 は長径 90cm、短径 86cm、深さ 33cm。覆土は黒色土から極暗褐色土に至る４層からなる。第１層が柱痕跡と考えられ、明瞭な幅は確認できなかったが、現状で 43cm を測る。P4 は長径 118cm、短径 71cm、深さ 47cm。覆土は極暗褐色土から暗褐色土に至る３層の互層となっている。P5 は長径 76cm、短径 70cm、深さ 31cm。覆土は２層のレンズ状堆積をなしている。P6 は長径 87cm、短径 83cm、深さ 68cm。覆土は黒色土から極暗褐色土の５層からなっている。第３層が柱痕跡で、柱幅は 26cm を測る。第４・５層は水平堆積を示す掘方埋め土。P7 は長径 102cm、短径 98cm、深さ 54cm。覆土は黒色土から暗褐色土の５層からなる。



第 91 図　SB02

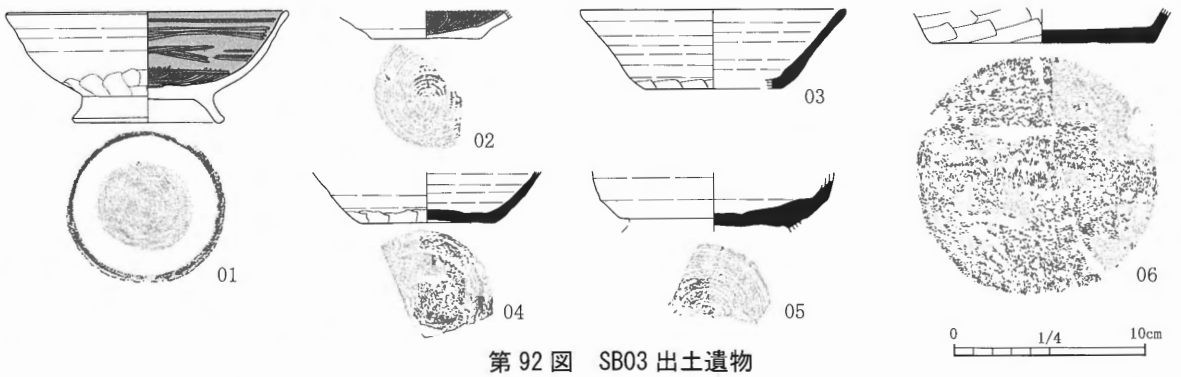
第1層が柱痕跡で、柱幅は24cmを測る。第2～5層が互層状の水平堆積を示す掘方埋め土。P8は長径104cm、短径101cm、深さ51cm。覆土は黒色土から黒褐色土の4層からなる。第1層が柱痕跡で、柱幅は14cmを測る。第2～4層が互層状の水平堆積を示す掘方埋め土。

遺物は、P3とP6の覆土から検出している。P3では縄文土器26.2g、弥生土器8.4g、土師器63.1g、須恵器4.0g、礫5.9g、P6では縄文土器33.0g、弥生土器19.4g、土師器59.5g、礫42.1gがある。土師器には、く字甕の口縁部破片（P6出土）がある他は細片である。須恵器は体部下端・底面ケズリの小破片1点（P3出土）のみである。9世紀を前後する時期であろうとしか言及できない。SI09・10・13に切られることから、本遺構の帰属時期は9世紀前半を下限とする。

SB03（第92・93図・第37・38表・図版21・22・45）

2区J-2,K-1・2Gに位置し、北東部分は調査区外である。古墳時代前期の住居跡SI11を切る。梁行1間、桁行3間の側柱建物である。桁行方向N-69°-W。梁行3.60m・12尺、桁行6.30m・21尺・一間＝端間8尺、中央間5.5尺。桁行の柱穴配置は広い端間と狭い中央間の構成で、SB02に類似している。しかし、各柱穴の平面形は円形を基調としながらも、歪なものが目立つ。また、全体として柱筋の通りが悪い。P1は長径111cm、短径76cm、深さ52cm。覆土は極暗褐色土から黒色土に至る3層の水平堆積である。P2は長径65cm、短径56cm、深さ32cm。柱幅は23cmを測る。P3は長径88cm、短径58cm、深さ30cm。覆土は黒色土から暗褐色土に至る3層からなり、第1層は柱痕跡で、柱幅は17cm。第2・3層が水平堆積をなす掘方埋め土。P4は長径100cm、短径85cm、深さ62cm。覆土は黒色土から極暗褐色土に至る5層からなる。第1層が柱痕跡で、柱幅18cmを測る。第2～4層が互層状の水平堆積を示す掘方埋め土。P5は長径96cm、短径84cm、深さ48cm。覆土は黒色土から極暗褐色土に至る3層からなる。第1層が柱痕跡で、柱幅28cmを測る。P6は長径78cm、短径72cm、深さ44cm。覆土は黒色土と極暗褐色土の2層からなる。さらに、梁行中央には東西ともに、南側柱列から北へ6.5尺の位置に柱痕跡を残す柱穴が存在する（P05・15）。また、両柱穴を結ぶ線上に同じく柱痕跡を有するP03がある。柱掘方の大きさは異なるものの、柱痕跡（幅20cm前後）と位置は、棟持ち柱の掘方として本建物を構成する柱穴と見てよいだろう。

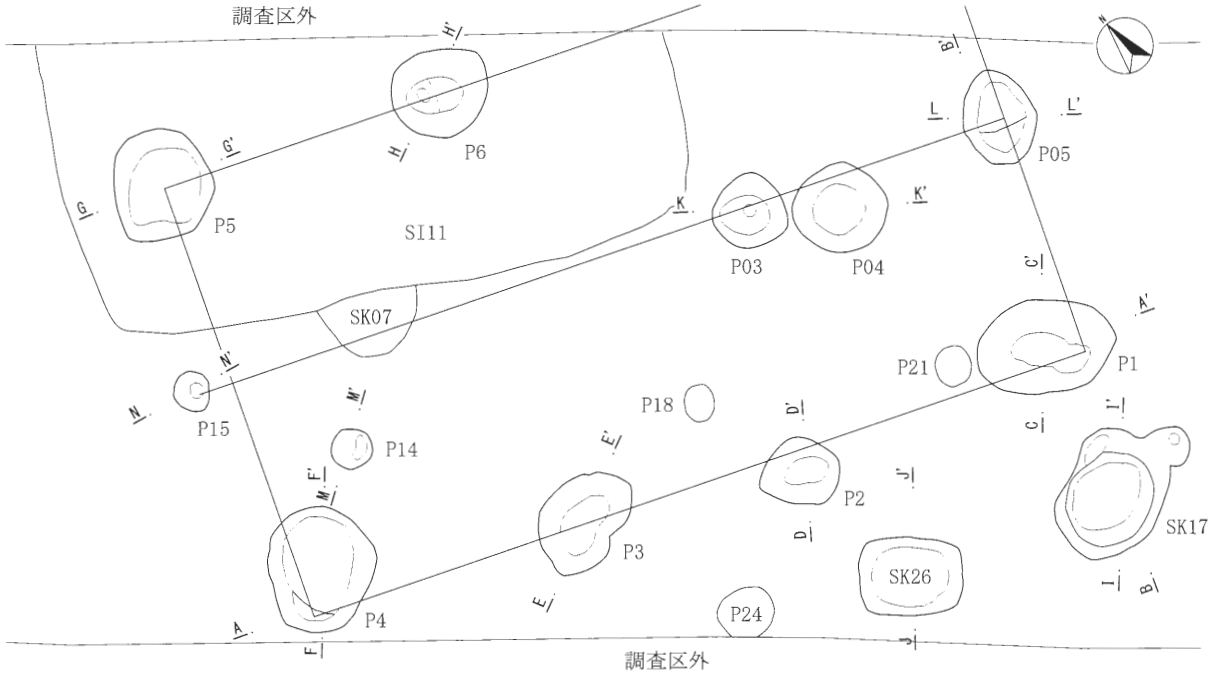
遺物は重複するSI11出土として取り上げられたもので、土師器155.7g、須恵器377.6gがある。04はやや大振りの腰部有稜の須恵器有台坏で、9世紀前葉までのものである。03の同無台坏は底径が大きく、体部下端手持ちケズリ、底面回転ケズリであることから9世紀前半、01の内面黒色処理の土師器有台埦は9世紀後半に位置づけられるものであろう。したがって、本遺構の帰属時期は9世紀前葉から後半の間に求めたい。

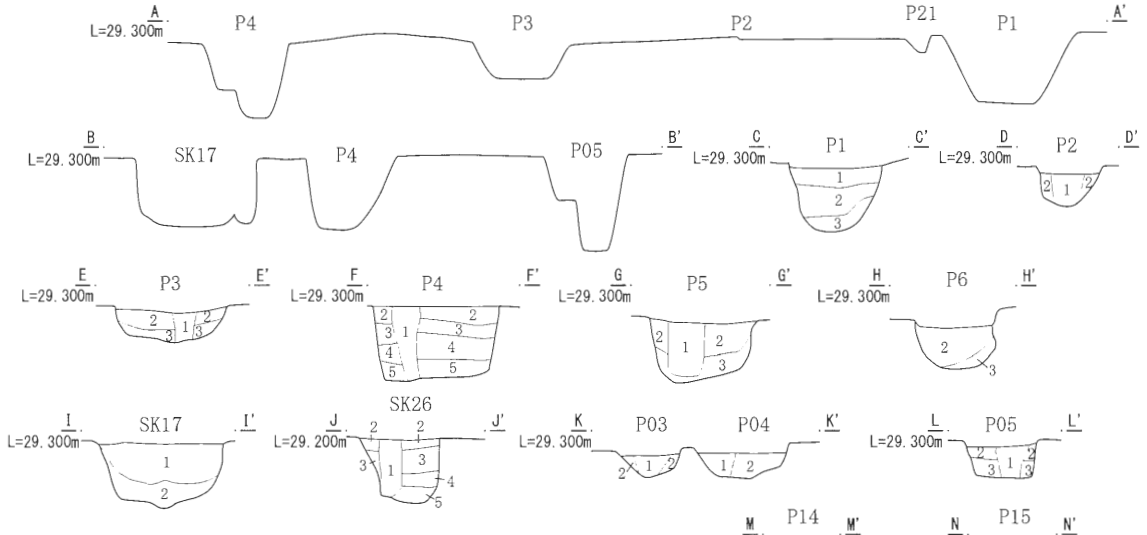


第92図　SB03出土遺物

第37表　SB03出土遺物観察表（1）

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	SI11	土師器	有台埦	124.8	(14.7)	5.9	7.5	高台はやや外反気味に「ハ」の字に開く。体部は緩やかに内湾して立ち、口縁部はやや外反気味に開いて肥厚する。	底部から体部下端では手持ちヘラケズリの後、高台が付される。外面体部はロクロナデ。内面は磨かれる。	雲母多い。	内面 10YR 3/1 黒褐 外面 10YR 5/4 にぶい黄褐	良好	口縁一部～底部	内面黒色処理
03	SI11	土師器	無台坏	30.9	—	(1.5)	6.0	底部は平底で体部はやや外反気味に開く。体部上半から口縁は欠損する。	底部は回転糸切り。内面は磨かれる。外面はロクロナデ。	雲母・白色粒子多い。	内面 10YR 3/1 黒褐 外面 10YR 6/3 にぶい黄橙	良好	腰部～底部	内面黒色処理





P1
1 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり強　Ⅵ・Ⅶブロック・粒子φ 2-20 ㎜多量
2 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり強　Ⅵ・Ⅶブロック・粒子φ 2-20 ㎜少量　炭化物・粒子φ 2 ㎜少量
3 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり強　Ⅵ・Ⅶブロック・粒子φ 2-20 ㎜多量　炭化物・粒子φ 2 ㎜少量

P2・03・04・05・14・15
1 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり弱　Ⅵブロック・粒子φ 2-10 ㎜少量
2 暗褐色土　7.5YR3/4　粘性中　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ 2-10 ㎜主体

P3
1 黒色土　7.5YR1.7/1　粘性中　しまり弱　Ⅵブロック・粒子φ 2-40 ㎜少量
2 暗褐色土　7.5YR3/3　粘性中　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ 2-40 ㎜多量
3 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ 2-40 ㎜少量

P4
1 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ 2-10 ㎜少量
2 極暗褐色土　7.5YR2.3　粘性中　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ 2-10 ㎜中量
3 黒色土　7.5YR2.1　粘性中　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ 2-10 ㎜少量
4 暗褐色土　7.5YR3/4　粘性中　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ 2-10 ㎜主体
5 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ 2-10 ㎜中量

P5・6
1 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ 2 ㎜少量
2 黒色土　7.5YR1.7/1　粘性中　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ 2-30 ㎜中量
3 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ 2-30 ㎜中量

SK17
1 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ 2-20 ㎜中量　炭化物・粒子φ 2 ㎜少量
2 黒色土　7.5YR2.1　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ 2-20 ㎜中量　炭化物・粒子φ 2 ㎜少量

SK26
1 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ 2-10 ㎜少量
2 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ 2-10 ㎜中量
3 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ 2-10 ㎜少量
4 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ 2-40 ㎜少量
5 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ 2-40 ㎜多量

第 93 図　SB03

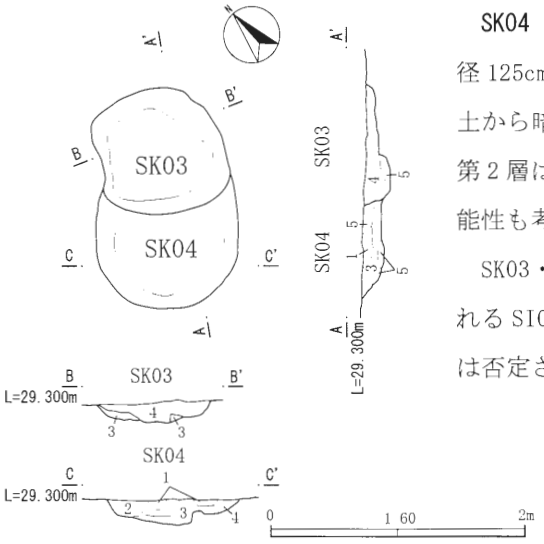
第 38 表　SB03 出土遺物観察表（2）

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
03	SK18	須恵器	無台坏	17.4	(13.6)	〈4.1〉	(7.1)	底部は平底。体部は直線的に開く。	底部及び体部下端は手持ちヘラケズリ。体部は内外面共にロクロナデ。	雲母微量。白色粒子やや多い。小礫あり。	内外面 2.5Y 6/1 黄灰	良好	口縁部破片	
04	SI11 P-01	須恵器	無台坏	43.8	—	〈2.7〉	(7.4)	底部は平底。体部は直線的に開き、口縁部は欠損する。	底部下端は回転ヘラケズリ、体部下端は手持ちヘラケズリ。体部は内外面共にロクロナデ。	雲母やや多い。	内外面 2.5Y 6/1 黄灰	良好	褐部～底部 1/3	
05	SI11	須恵器	有台坏	45.3	—	〈3.1〉	—	高台は剥落している。体部は内湾して立ち、口縁部は欠損する。	底部は回転ヘラ切りの後に高台が付される。体部は内外面共にロクロナデ。	白色粒子やや多い。小礫少量。	内外面 5Y 5/1 灰	良好	褐部～底部	
06	SI11	須恵器	甕	178.5	—	〈1.8〉	(12.4)	径の大きな平底。体部は直線的に立つ。	外面体部はヘラケズリ。底部は砂目ナ。	雲母・白色粒子・スコリアやや多い。	内面 10YR 6/3 にぶい黄橙 外面 10YR 7/3 にぶい黄橙	良好	褐部～底部	

第3項　土　坑

SK03・04（第94図・図版22）

SK03　1区C-2Gに位置しSK04を切っている。長軸方向N-20°-E。長径125cm、短径95cmの平面楕円形で深さ20cmを測る。極暗褐色土～暗褐色土の3層からなる平行堆積である。



SK03・04
1　黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　Ⅵ層φ2-5㎜粒子少量
2　暗赤褐色土　10R3/2　粘性なし　しまり中　焼土主体φ2-5㎜
3　暗褐色土　7.5YR3/4　粘性中　しまり強　Ⅵ層φ2㎜少量
4　極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり中　Ⅵ層φ2㎜少量
5　極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり中　Ⅵ層φ2㎜多量

第94図　SK03・04

SK04　1区C-2Gに位置しSK03に切られる。長軸方向N-42°-E。長径125cm、短径現状83cmの平面長方形で、深さが15cmを測る。黒色土から暗褐色土の4層からなる、攪拌されたような層位で、このうち第2層は暗赤褐色土をした焼土で、焼土層の状況から屋外カマドの可能性も考えられる。

SK03・04ともに遺物は検出されなかった。9世紀前半に位置づけられるSI02の竪穴に接しており、同住居の上屋構造を考えれば同時存在は否定される。

SK05（第83図・図版22）

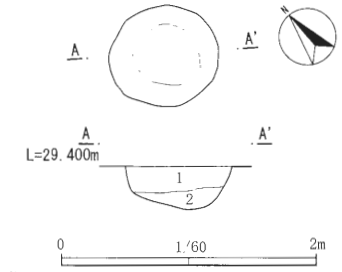
2区I-1Gに位置する。遺構の南側は調査区外となっており、また遺構の東側をSI12に切られている。長軸方向N-48°-W。長径76cm、短径26cmの平面長方形で深さ35cmを測る。覆土は黒色土1層からなる。底部が平坦で壁が垂直に立ち上がっており、住居跡の可能性も考えられる。

遺物は検出されなかった。SI12との重複関係から、本遺構の帰属時期は9世紀前半を下限とする。

SK08（第95図・図版22）

2区J-2Gに位置する。長軸方向N-72°-W。長径85cm、短径75cmの平面円形で深さ33cmを測る。黒色土2層からなるレンズ状堆積である。

遺物は、覆土から土師器30.8g、須恵器24.4gを検出した。須恵器は薄手で還元不良の甕胴部破片で、外面には平行叩きと格子目叩きが認められる。土師器は厚手の口縁部で端部が薄くなるく字甕が見られるが、時期は限定しがたい。前者から、本遺構は平安時代（9世紀代）と思われる。



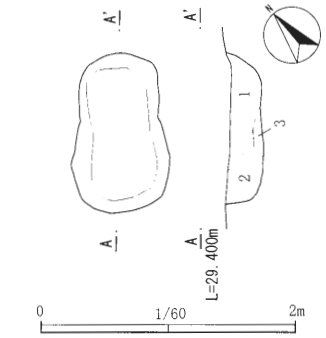
SK08
1　黒色土　7.5YR1.7/1　粘性中　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ2-10㎜少量、炭化物・粒子φ2㎜少量
2　黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ2-10㎜中量

第95図　SK08

SK13（第96図・図版22）

2区L-2Gに位置する。長軸方向N-38°-E。長径125cm、短径63cmの平面楕円形で深さ39cmである。覆土は極暗褐色土から黒色土からなり、本来第2・3層で互層状の平行堆積をなしていたものが第1層で乱されたものと判断される。

遺物は、覆土から弥生土器45.2g、土師器17.5g、須恵器10.8g、礫15.2gを検出した。土師器は甕の胴部小破片。須恵器は薄手の甕の胴部小破片で、還元不良、やや硬質焼成、外面平行叩き、内面には粘土紐積み上げ痕を残すものである。平安時代（9世紀代）に位置づけられるか。



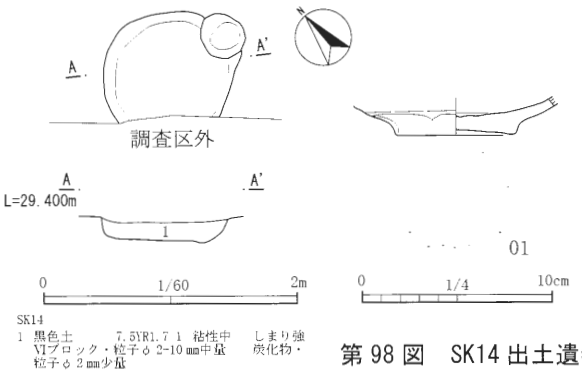
SK13
1　極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ2-10㎜中量
2　暗褐色土　7.5YR3/4　粘性中　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ2-10㎜主体
3　黒色土　7.5YR1.7/1　粘性中　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ2-10㎜少量、炭化粒主体

第96図　SK13

SK14（第97・98図・第39表・図版22・45）

2区J-2Gに位置する。長径113cm、短径97cmの平面円形で深さ19cmを測る。長径37cm、短径34cm、深さ39cmの平面円形ピットに切られる。長軸方向N-77°-W。

遺物は、覆土から土師器89.2g、須恵器17.7gを検出した。土師器は図示した無台坏の底部破片（01）と甕の胴部小破片。須恵器は薄手の甕の胴部小破片で、還元不良、軟質焼成、外面格子目叩き。平安時代（10世紀前半）に位置づけられ、本遺構の時期もここに求められるだろう。



第97図　SK14

第98図　SK14出土遺物

第39表　SK14出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	SK14	土師器	無台坏	74.7	—	<1.95>	2.2	底部は平底。体部は大きく開く。	底部は回転糸切り。体部及び内面はロクロ整形。	雲母微量、白色粒子やや多い。	内面 5YR 6/6 橙 外面 2.5YR 5/6 明赤褐	良好	体部端部～底部	

SK15（第89図・図版22）

2区L-2Gに位置する。長軸方向N-76°-E。黒色土から暗褐色土の3層に至る。2層が柱根で柱幅は19cmである。長径150cm、短径90cmの平面楕円形で、深さ32cmを測る。SB01に伴う柱穴の可能性がある。

遺物は、覆土から土師器7.0g、須恵器8.1gを検出した。土師器は内外面赤彩の坏の口縁部小破片。須恵器は有台坏・盤の体部下端小破片で、白色針状物質（海綿骨針）を胎土に含む。前者は古墳時代中期、後者は奈良・平安時代（8世紀後半～9世紀前半）の所産であろう。

SK16（第89図・図版23）

2区L-1・2Gに位置し、実際にはA・B・Cの3基が重複し、B・C・Aの順に切っているものである。SK16-Aは直径70cmの平面円形で深さは56cmを測る。黒色土から暗褐色土に至る3層で第1層が柱根で第2・3層が平行堆積となっており、柱幅14cmを測る。SK16-Bは長径65cm、短径55cmの平面円形で、深さは48cm、暗褐色土・黒色土の2層からなる。SK16-Cは長径現状70cm、短径47cmの推定平面楕円形で、深さは17cm。

遺物は、覆土から弥生土器8.8g、土師器14.9gを検出した。土師器は古墳時代中・後期の坏の体部細片と甕の口縁部小破片である。重複する掘方覆土に含まれていたものか。本遺構は前述のとおり、SB01との関連から平安時代の所産と考えておきたい。

SK17（第93図・図版23）

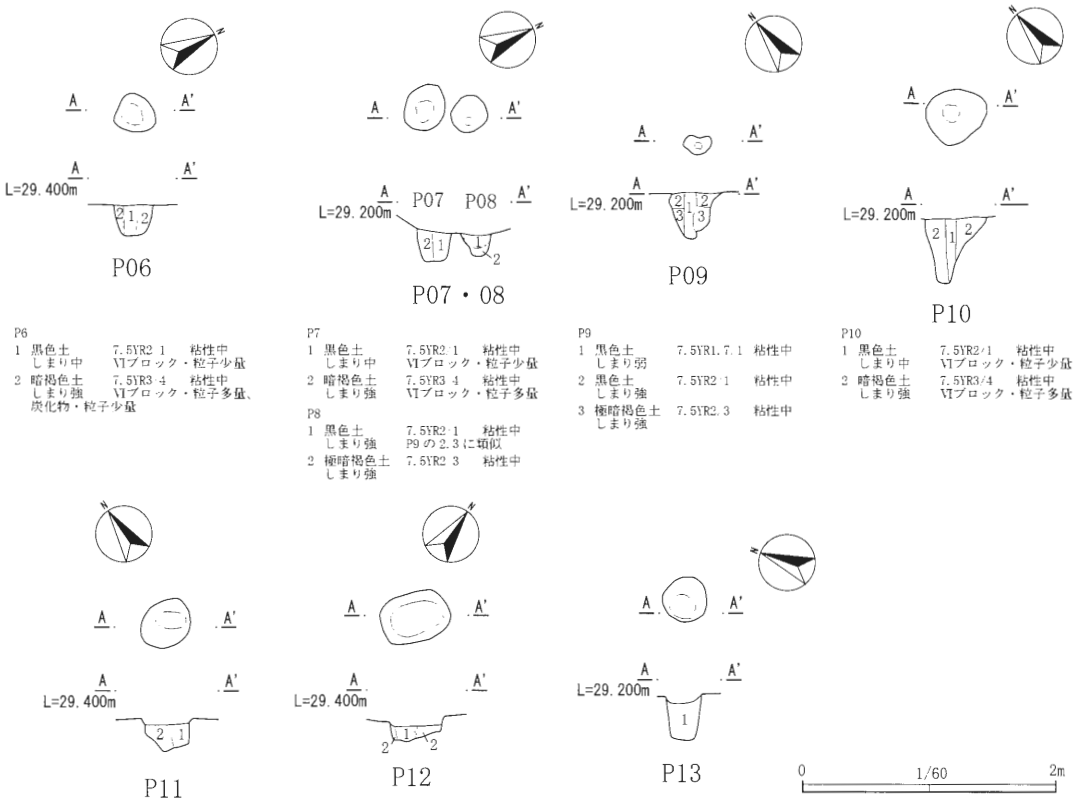
2区K-2Gに位置する。直径36cmの平面円形のピットによって東側を切られているが、概ね長径98cm、短径75cmの平面楕円形となり、深さ54cmを測る。覆土は極暗褐色土・黒色土の2層となる。規模と掘方形状、周辺の状況から、掘立柱建物の柱穴の可能性がある。遺物は検出されなかった。

SK26（第93図・図版23）

2区M-2Gに位置する。長軸方向N-51°-W。長径83cm、短径61cmの平面隅丸長方形で、深さ51cmを測る。覆土は黒色土から極暗褐色土の5層からなり、第1層が柱痕跡、第2～5層が掘方埋め土で互層状の水平堆積をなしている。柱幅は18cmである。組み合う柱穴が不明であるが、覆土の状況から平安時代の掘立柱建物の柱穴と考えられる。遺物は検出されていない。

第４項　ピット（第99図、第47表、図版23・24）

調査区全体では都合38基のピットが確認された。個々の計測値は第47表に示す通りである。遺物が確実に伴い、時期が判明したものは、古墳時代前期のP16のみである。他はほとんど無遺物で、わずかに検出されたものでも、遺構の時期を確定するに至っていない。したがって、覆土の状況から、古代（古墳～平安時代）と中・近世に推定されるものに大別した。古代のものは、覆土が基本土層の第Ⅳ-1～5層（黒色土）に類似し、若干締りがある。



P6
1 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子少量
2 暗褐色土　7.5YR3/4　粘性中　しまり強　VIブロック・粒子多量、炭化物・粒子少量

P7
1 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子少量
2 暗褐色土　7.5YR3/4　粘性中　しまり強　VIブロック・粒子多量

P8
1 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり強　P9の2.3に類似
2 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり強

P9
1 黒色土　7.5YR1.7/1　粘性中　しまり弱
2 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり強
3 極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり強

P10
1 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子少量
2 暗褐色土　7.5YR3/4　粘性中　しまり強　VIブロック・粒子多量

P11
1 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり弱　VIブロック・粒子φ2-10mm少量
2 暗褐色土　7.5YR3/4　粘性中　しまり強　VIブロック・粒子φ2-10mm主体

P12
1 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり弱　VIブロック・粒子φ2-10mm少量
2 暗褐色土　7.5YR3/4　粘性中　しまり強　VIブロック・粒子φ2-10mm主体

P13
1 黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子少量

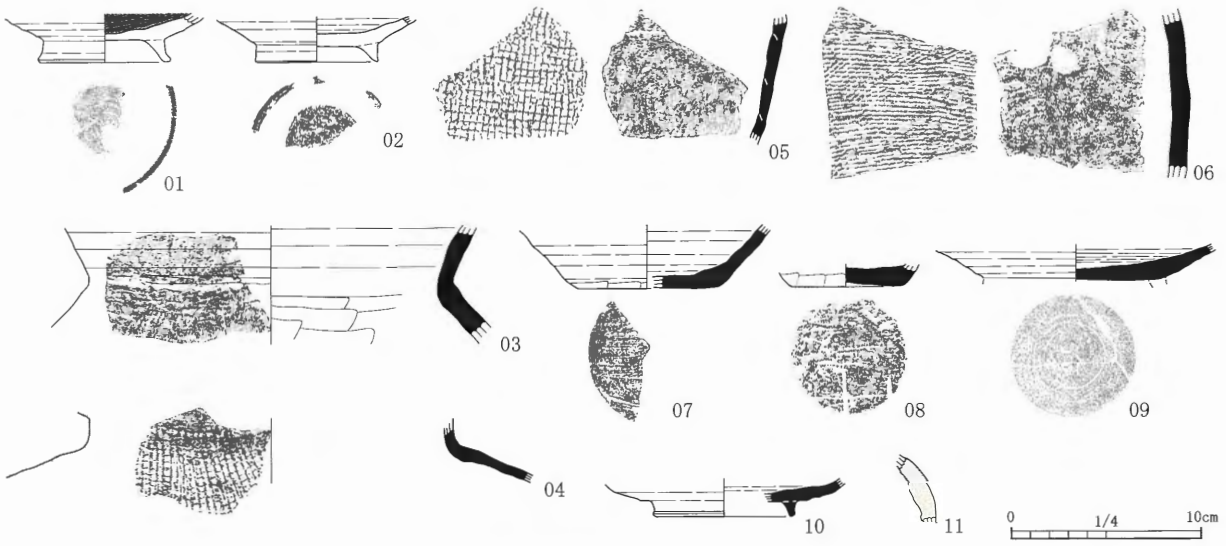
第99図　ピット

第５項　溝　跡

SD08（第45・100図・第40表・図版10・45）

1区F-1・2Gに位置する。SI05を切っている。東西に走行する。走行方向N-54°-W。最大幅は2.0ｍ、深さは90cmを測る。覆土は黒色土2層からなるレンズ状堆積である。出土遺物は覆土中から古墳時代の土師器が出土している。

重複する古墳時代前期の住居跡SI05出土として取り上げられたもののうち、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器については、本来、本遺構覆土に含まれていたものと判断した。したがって、縄文土器69.8g、弥生土器38.5g、須恵器1,849.3、土師器430.8g（古墳前期88.5g含む）、灰釉陶器8.6g、礫13.5gの出土遺物がある。本遺構に伴うと考えられる平安時代の土師器・須恵器は、いずれも小破片が多く、完形品はない。また、出土状況に特筆すべきこともない。これらは9世紀前半に位置づけられる遺物群である。



第100図　SD08出土遺物

第40表　SD08出土遺物観察表

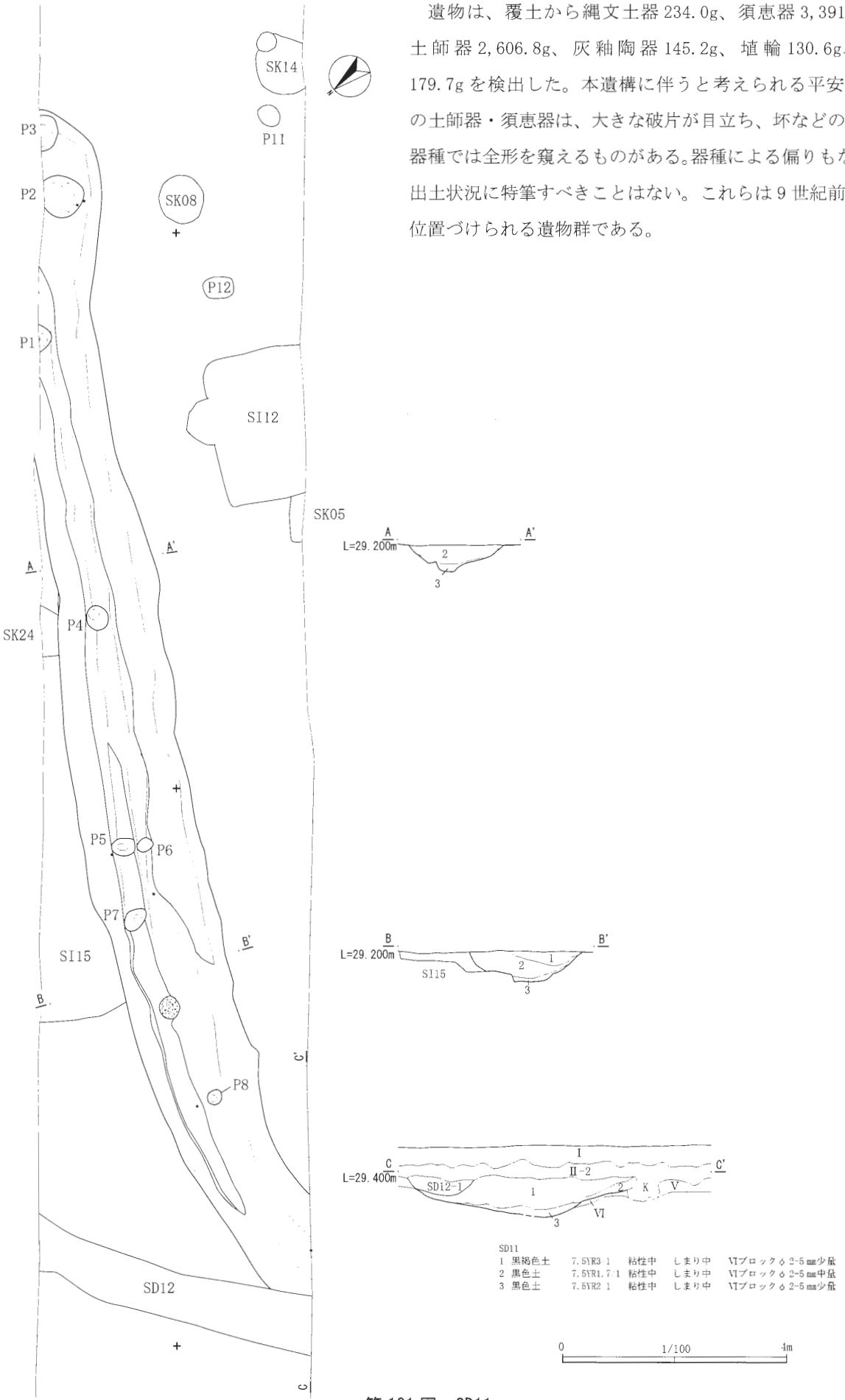
番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	SI05	土師器	有台埦	74.2	—	(3.1)	(6.9)	高台は「ハ」の字に開き内端接地。体部は大きく開く。	外面底部は回転ヘラケズリの後高台が付され、ロクロナデ。内面は磨かれる。	雲母やや多い。白色粒子少量。白色針状物質微量。	内面 7.5YR 2/1 黒 外面 10YR 5/4 にぶい黄褐	良好	体部下端～底部 1/4	内面黒色処理
02	SI05 表土	土師器	有台埦	42.3	—	(2.4)	(6.4)	高台は短く「ハ」の字に開き三角形状を呈する。体部は大きく開く。	高台は回転ヘラケズリの後に付される。内外面共にロクロナデ。	雲母多い。白色粒子少量。黒色粒子微量。	内面 7.5YR 6/6 橙 外面 2.5YR 5/6 明赤褐	良好	体部端部～底部 1/2	
03	SI05	須恵器	甕	81.5	—	(6.1)	—	胴部は球形ヵ。「く」の字に屈曲し頸部は幅広く大きく開く。口唇部は欠損する。	頸部に櫛描は描かれない。外面胴部は平行叩き。外面頸部から内面はロクロナデ。内面屈曲部はヘラナデが施される。	白色粒子やや多い。	内面 N 6/ 灰 外面 N 5/ 灰	良好	頸部破片	
04	SI05	須恵器	甕	30.8	—	(3.4)	—	胴部上半～屈曲部の破片。胴部はやや肩が張る形状であろう。頸部は「く」の字に屈曲して立つ。	外面胴部は平行叩き（擬格子）。頸部は内外面共にヨコナデ。内面胴部はヘラナデ。	雲母・白色粒子少量。	内面 10YR 6/4 にぶい黄橙 外面 10YR 6/3 にぶい黄橙	良好	頸部破片	
05	SI05	須恵器	甕	35.6	—	—	—	胴部破片。やや内湾する。	外面は擬格子叩き。内面は青海波の当具痕。	雲母微量。白色粒子少量。	内面 2.5Y 6/1 黄灰 外面 2.5Y 5/1 黄灰	良好	体部破片	新治産
06	SI05	須恵器	甕	93.3	—	—	—	胴部破片。やや内湾する。	外面は平行叩き。内面は青海波の当具痕。	雲母やや多い。白色粒子少量。小礫微量。	内外面 10YR 6/1 褐灰	良好	体部破片	新治産
07	SI05	須恵器	無台坏	49.3	—	(3.4)	(7.4)	底部は平底。体部は直線的に立つ。	外面底部及び体部下端は手持ちヘラケズリ。体部並びに内面はロクロナデ。	白色粒子・白色針状物質・小礫やや多い。	内外面 5YR 5/1 灰	良好	体部破片	常陸産 B2ヵ
08	SI05	須恵器	無台坏	54.6	—	(1.2)	5.8	底部はやや上げ底気味の平底。	底部及び体部下端は手持ちヘラケズリ。内面はロクロナデ。底部に棒状の圧痕がある。	雲母多い。白色粒子・小礫やや多い。	内面 2.5Y 5/1 黄灰 外面 2.5Y 5/2 暗灰黄	良好	底部	新治産
09	SI05 表土	須恵器	有台盤	173.2	—	(1.9)	—	底部は径が大きく、高台は剥落している。	内外面共にロクロナデ。見込みの中央及び周縁に墨痕が見られる。転用硯ヵ。	雲母多い。白色粒子・小礫少量。	内外面 10YR 7/1 灰白	良好	底部	新治産
10	SI05 表土	須恵器	有台盤	18.0	—	(2.0)	(7.1)	高台は短く「ハ」の字に開き内端接地。体部は水平に開き端部で緩やかに内湾する。口縁部は欠損する。	内外面共にロクロナデ。	雲母・白色粒子多い。小礫多い。	内外面 10YR 4/1 褐灰	良好	体部端部～底部	産地不明
11	SI05	灰釉陶器	瓶	8.6	—	—	—	内湾する肩部の細片。	外面は灰釉。	黒色粒子・白色粒子微量。	内面 2.5Y 5/3 黄褐 外面 7.5Y 5/2 灰オリーブ	良好	底部	尾張産

SD11（第101・102図・第41表・図版25・45）

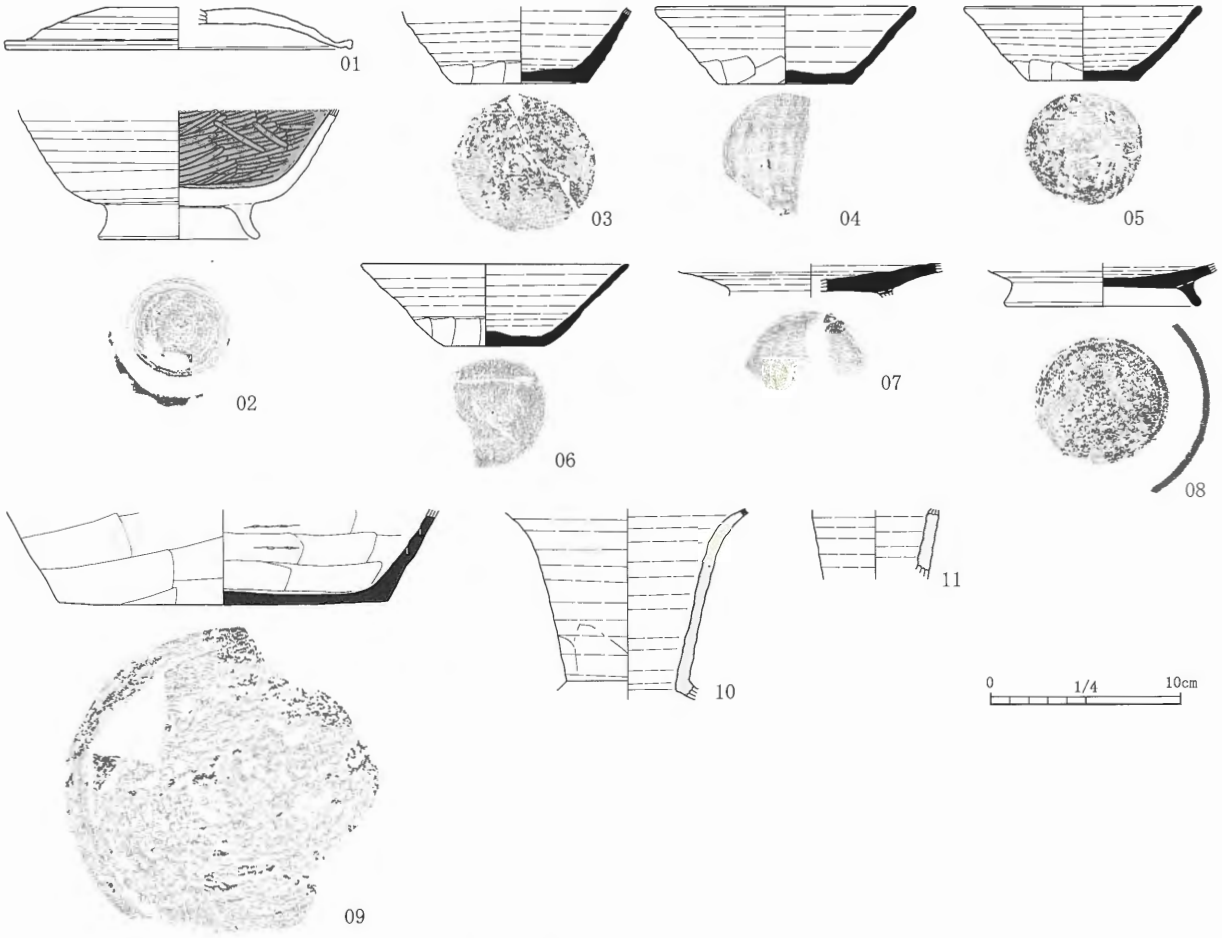
2区H-1･2, I-1･2, J-1Gに位置し、SI15を切り、SD12に切られている。東西に走行している区画溝である。走行方向N-61°-W。上端の幅は、西端で1.50m、東端で2.20mを測り、確認面から底部までの深さは48～70cmである。幅90～130cmのテラス部分を持ち、そこから深さ20cm下がったところを底部とする、細い溝状の筋が穿たれており、幅30cm前後を測る。覆土は黒褐色土から黒色土に至る3層のレンズ状堆積であるが、溝の西に寄ったテラス部分の下層で長径45cm、短径35cm、厚さ5cmの被熱範囲が検出されている。

遺構内にかかる平面円形から楕円形をなすピット8基が検出されている。P1は長径50cm、短径現状21cm、深さ66cm。P2は長径78cm、短径73cm、深さ71cm。P3は直径65cm、短径現状29cm、深さ66cmである。P4は長径38cm、短径35cmの平面円形で深さ34cm。P5は長径40cm、短径35cmの平面円形で深さ47cm。P6は長径26cm、短径25cmの平面円形で深さ43cm。P7は長径49cm、短径25cmの平面楕円形で深さ90cm。P8は長径26cm、短径24cmの平面円形で深さ15cmを測り、それぞれ黒色土1層を充填していた。このうち調査区北壁にかかるP1～3の3基は溝を切った状態で検出されており、他の5基は切り合い不明である。

遺物は、覆土から縄文土器 234.0g、須恵器 3,391.1g、土師器 2,606.8g、灰釉陶器 145.2g、埴輪 130.6g、礫 179.7g を検出した。本遺構に伴うと考えられる平安時代の土師器・須恵器は、大きな破片が目立ち、坏などの小形器種では全形を窺えるものがある。器種による偏りもなく、出土状況に特筆すべきことはない。これらは９世紀前半に位置づけられる遺物群である。



第 101 図　SD11



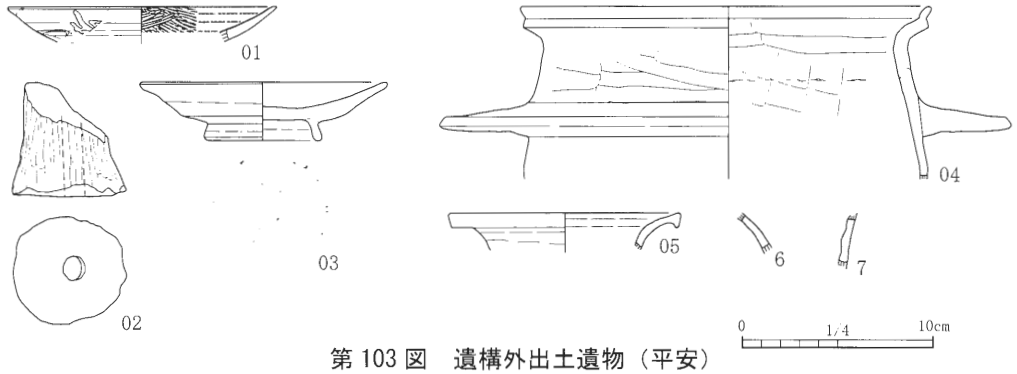
第 102 図　SD11 出土遺物

第 41 表　SD11 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	一括	土師器	蓋	72.8	(18.0)	〈2.35〉	—	天井部より体部は緩やかに内湾し、端部は外反した後に屈曲して垂下する。返しは持たない。摘み部分は欠損している。	外面天井部から体部にかけ回転ヘラケズリ。他は内外共にロクロナデ。	雲母・白色粒子多い。小礫やや多い。	内外面 7.5YR 5/4 にぶい褐	良好	1/4	
02	一括	土師器	有台埦	254.0	—	〈6.8〉	8.2	高台は緩やかに外反して「ハ」の字に開く。体部は内湾気味に大きく開き深い。口縁部は欠損している。	底部～体部下端は回転ヘラケズリ。高台はその後に付されている。外面体部はロクロナデ。内面はやや粗いミガキ。	雲母多い。白色粒子やや多い。小礫少量。	内面 10YR 2/1 黒 外面 10YR 6/3 にぶい黄褐	良好	体部 1/2～底部	内面黒色処理
03	一括	須恵器	無台坏	156.1	—	〈4.0〉	7.0	底部は平底。体部は直線的に立つ。口唇部は欠損している。	底部は一方向のヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ。その他はロクロナデ。	雲母・白色粒子・小礫やや多い。	内外面 2.5Y 6/2 灰黄	良好	口縁部欠損	新治産
04	一括	須恵器	無台坏	66.9	(13.4)	4.05	7.0	底部は平底。体部は直線的に開いて立つ。	底部は一方向のヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ。その他はロクロナデ。	雲母・白色粒子・小礫微量。	内外面 2.5Y 6/1 黄灰	良好	口縁部 1/3～底部 1/3	新治産
05	一括	須恵器	無台坏	108.3	12.3	3.9	5.8	底部は平底。体部は直線的に開いて立つ。口唇部はやや肥厚する。	底部は一方向のヘラケズリ。体部下端は手持ちヘラケズリ。その他はロクロナデ。	白色粒子やや多い。小礫少量。	内外面 2.5Y 5/1 黄灰	良好	口縁部 1/3 欠損	常陸産ヵ
06	一括	須恵器	無台坏	60.5	(13.9)	4.6	5.2	底部は平底。体部はやや外反気味に開いて立つ。薄手。	底部及び体部下端は手持ちヘラケズリ。その他はロクロナデ。	雲母多い。白色粒子やや多い。小礫少量。	内面 2.5Y 5/2 暗灰黄 外面 2.5Y 6/2 灰黄	良好	口縁部 1/16～底部 2/3	新治産
07	一括	須恵器	有台皿	74.9	—	〈1.8〉	—	高台は剥落しているが「ハ」の字に開くものであろう。体部は直線的に水平に近く開く。口唇部は欠損している。	底部は回転ヘラケズリの後に高台が付される。体部は内外共にロクロナデ。	雲母少量。	内外面 2.5Y 5/1 黄灰	良好	底部 2/3	常陸産ヵ
08	一括	須恵器	有台皿	132.2	—	〈2.3〉	10.0	高台は「ハ」の字に開き内端接地。体部は水平に近く開く。	底部は回転ヘラケズリ。体部から高台はロクロナデ。	白色粒子多い。小礫少量。	内外面 N 4/ 灰	良好	体部下端～底部 1/2	
09	一括	須恵器	甕	292.2	—	〈5.0〉	17.2	底径の広い底部資料。底部は平坦で胴部は直線的に開く。	底部は同心円状の不明圧痕。胴部下半は横方向のヘラケズリ。内面はヘラナデ。内面は輪積痕が残る。	雲母・白色粒子少量。スコリア微量。小礫やや多い。	内面 7.5YR 6/4 にぶい橙 外面 7.5YR 5/3 にぶい褐	良好	体部下端～底部	
10	一括	灰釉陶器	長頸瓶	136.1	—	〈10.0〉	—	胴部上端で「く」の字に屈曲して、頸部は緩やかにラッパ状に開く。口唇部は欠損している。	全面に薄い透明釉を掛け、頸部下半には灰釉がハケ塗りされる。内外面共にロクロ整形。	黒色粒子多量。白色粒子。	内外面 10Y 8/1 灰白	良好	口縁部～頸部	尾張産 K90 ヵ
11	一括	灰釉陶器	長頸瓶	9.1	—	〈3.6〉	—	やや外反気味に開く頸部の細片。	薄い透明釉が掛り、自然釉の釉だれが見える。	黒色粒子少量。白色粒子。	内外面 10Y 8/1 灰白	良好	頸部細片	尾張産

第６項　遺構外出土遺物

９世紀代の土師器、灰釉陶器が確認できる。04は常総型甕に鍔を付けた形の羽釜であり、希少例である。灰釉陶器は前記の遺構出土のものと同様、胎土に黒色粒子を含むもので、尾張産、黒笹90号窯式を中心とした所産と考えられる。その他、個別の詳細は観察表を参照されたい。

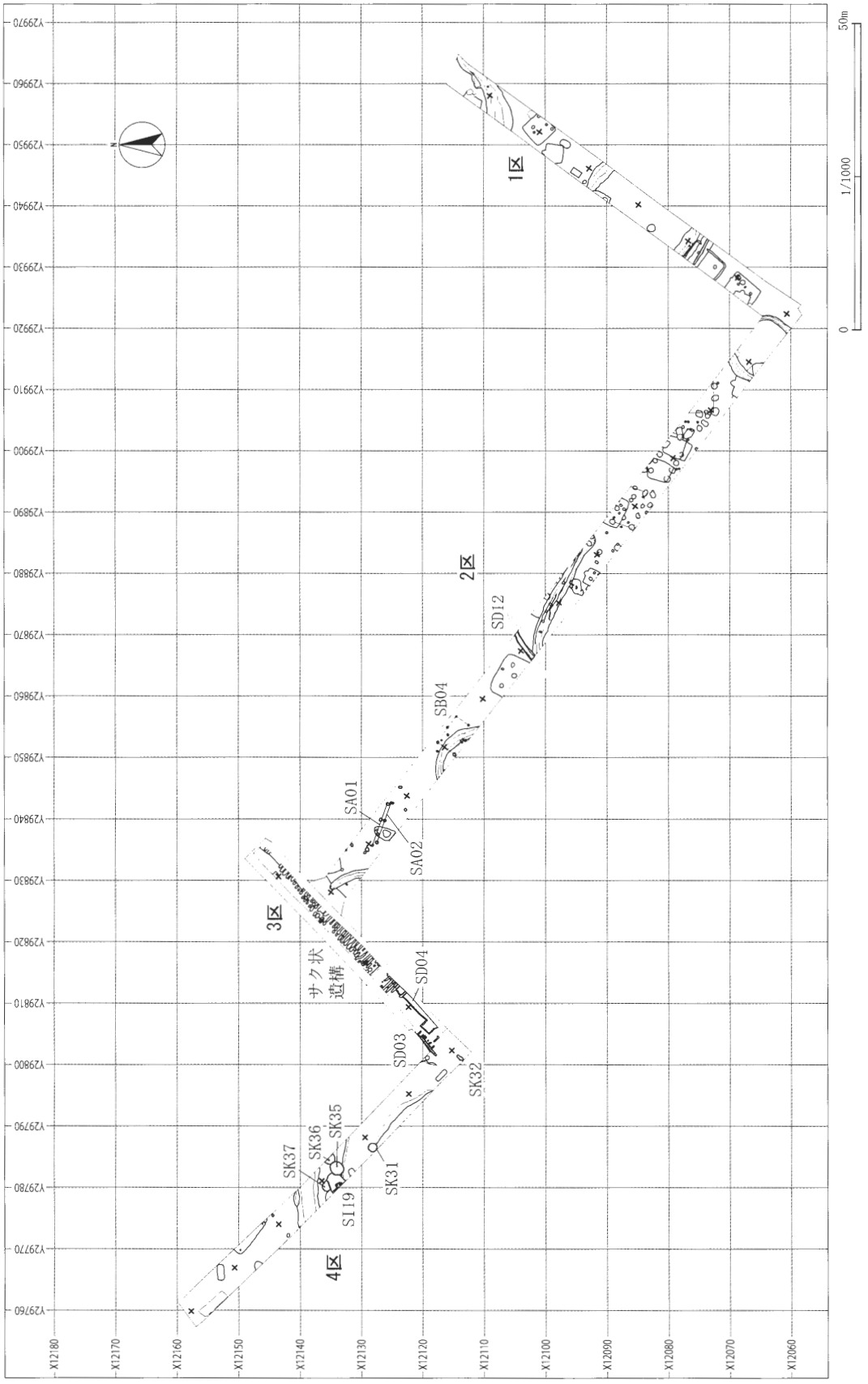


第103図　遺構外出土遺物（平安）

第42表　遺構外出土遺物観察表（平安）

番号	地区名	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	４区	SD01-E1-i	土師器	皿	7.6	(14.1)	-1.9-	—	緩やかに外反する皿の口縁部破片の可能性が高い。口縁はかなりの傾斜で大きく開く。	外面はロクロナデ。内面は細かなミガキの後黒色処理される。	雲母・白色粒子少量。	内面 7.5YR 2/1 黒 外面 5YR 6/6 橙	良好	口縁部破片	墨書「□」内面黒色処理
02	１区	一括	土師器	不明	117.9	タテ -5.9-	ヨコ 5.95	厚 5.5	円錐台形を呈し上端部は破損している。中央に直径1.2㎝の貫通孔が穿たれ孔はほぼ筒状を呈する。下端は剥落の痕跡が認められ、高坏の可能性も考えたが、孔の穿孔状況から鞴羽口の可能性もある。	外面は縦方向のミガキ。剥落部分はナデ整形の後接合を行ったものと判断される。	雲母微量。白色粒子少量。	5YR 5/4 にぶい赤褐	良好	脚柱部一部	
03	２区	一括	土師器	有台皿	106.0	(12.8)	3.1	5.8	高台はやや丸みを帯び、「ハ」の字に開く。内端接地。体部は緩やかに内湾して大きく開く。	底部は回転ヘラケズリの後高台は付される。体部は内外面共にロクロナデ。	雲母やや多い。白色粒子少量。	内外面 10YR 6/3 にぶい黄橙	良好	口縁部１/８～底部	
04	２区	一括	土師器	羽釜	237.2	(21.7)	-8.1-	—	胴部は緩やかに内湾気味に立つ。口縁部は緩やかに外反し口唇部は摘み上げられる。胴上半部に幅広の鍔外が付される。鍔はほぼ水平に広がる。	外面胴部はナデ。内面胴部はヘラナデ。口縁は内外共にヨコナデ。鍔は整形後に貼り付けられ、ヘラにより貼付部の整形が施されている。	雲母微量。白色粒子多い。小礫多い。	内面 10YR 5/4 にぶい黄褐 外面 7.5YR 5/4 にぶい褐	良好	口縁部～体部上端１/４	常総型甕に項似
05	２区	一括	灰釉陶器	長頸瓶	12.1	(12.0)	-1.85-	—	口縁は緩やかに外反して端部で折り返し、垂直に折れ、平坦面を有す。胴部以下は欠損。	内外面共にロクロ整形。頸部の一部に釉薬が掛る。	黒色粒子・白色粒子微量。	内外面 2.5Y 7/2 灰黄	良好	口縁部破片	尾張産 K90 ヵ
06	２区	一括	灰釉陶器	瓶	3.7	—	—	—	肩部付近の細片。	外面は灰釉。内面はロクロ整形痕。	黒色粒子・白色粒子微量。	内面 2.5Y 7/1 灰白 外面 5Y 6/3 オリーブ黄	良好	肩部破片	尾張産
07	１区	一括	灰釉陶器	長頸瓶	4.7	—	—	—	頸部の破片。やや外反気味に開く。	内外面共にロクロナデ。内外面に透明釉が薄く掛る。	黒色粒子・白色粒子微量。	内外面 2.5Y 7/1 灰白	良好	体部破片	尾張産

【注】
1　間尺については、30㎝＝１尺とした。



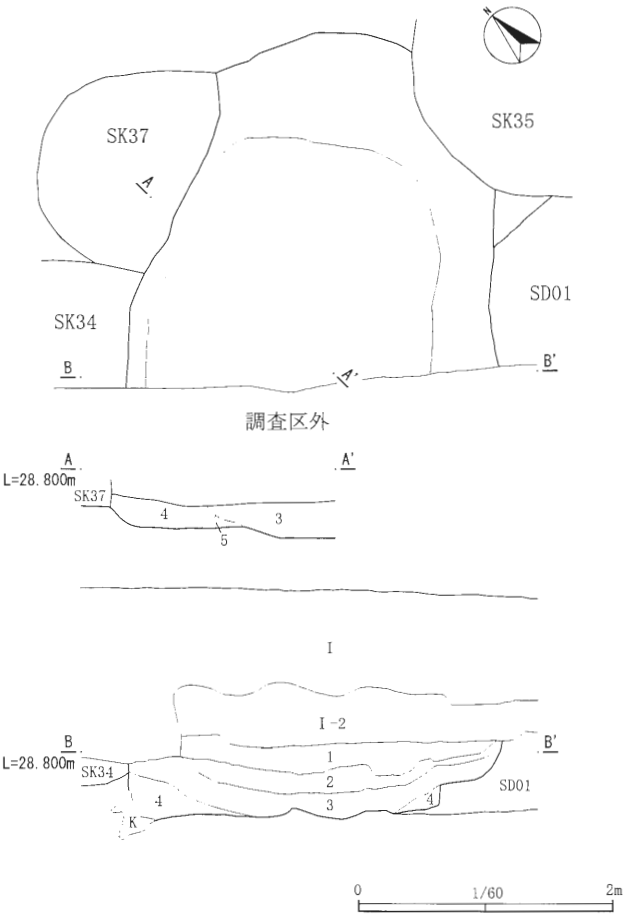
第104図　中・近世遺構分布図

第１項　方形竪穴遺構

SI19（第 105・106 図・第 43 表・図版 25・46）

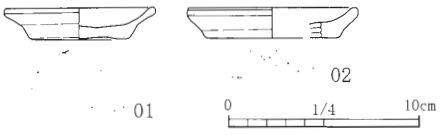
４区 E-2･3G に位置し、調査区内においては遺構の北側が検出され、南側は調査区外となる。SD01 と SK34・37 を切り、SK35 に切られる。調査区内においては炉・カマドが検出されなかったため、仮に北方向を主軸とした。主軸方向 N-37°-E。規模は現状で南北 2.90 m、東西 2.93 mの隅丸長方形で、深さ 28cm を測る。覆土は黒色土から極暗褐色土に至る５層のレンズ状堆積である。床面は地山（VI層）を直接掘削したもので、そこから壁は比較的垂直に立ち上がっている。南から東側の壁（上半部）は崩落のためか、緩やかな傾斜となっている。

遺物は、覆土から弥生土器 7.6g、土師器 209.2g、須恵器 53.3g、礫 581.9g を検出した。土師器は図示した土師質土器小皿と同様の破片が主体を占める。中世の所産と思われる。礫は被熱破砕の小礫２点のほかは絹雲母片岩の破片（６～９cm 大）である。やや被熱痕跡・赤変化が見られる。近接する８号墳に由来するものか、本遺構で使用されたものかは判断できない。硬質で砂質的特徴を有し、筑波寄りの産出が推定される。



SI19
1 黒色土　7.5YR2.1　粘性中　しまり弱　VI・VIIブロック・粒子φ２mm少量
炭化物・粒子φ２mm少量
2 黒色土　7.5YR2.1　粘性中　しまり強　VI・VIIブロック・粒子φ２-20 mm少量
炭化物・粒子φ２mm少量
3 黒色土　7.5YR2.1　粘性中　しまり強　VI・VIIブロック・粒子φ２mm中量
炭化物・粒子φ２mm少量
4 極暗褐色土　7.5YR2.3　粘性中　しまり強　VI・VIIブロック・粒子φ２mm多量
炭化物・粒子φ２mm少量

第 105 図　SI19



第 106 図　SI19 出土遺物

第 43 表　SI19 出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	一括	土師質土器	小皿	30.3	7.8	1.65	4.9	底部は平底。体部は外反気味に短く立つ。	底部は回転糸切りの後ナデ。体部内外面共ナデ整形。	雲母・白色粒子少量。白色針状物質・スコリア微量。	内外面 7.5YR 6/4 にぶい橙	良好	1/2	中世
02	一括	土師質土器	小皿	15.6	(8.8)	<1.6>	(6.8)	底部は平底。体部は外反気味に短く立つ。	底部は回転糸切りの後ナデ。体部内外面共ナデ整形。	雲母微量。白色粒子やや多い。	内外面 7.5YR 6/4 にぶい橙	良好	1/4	中世

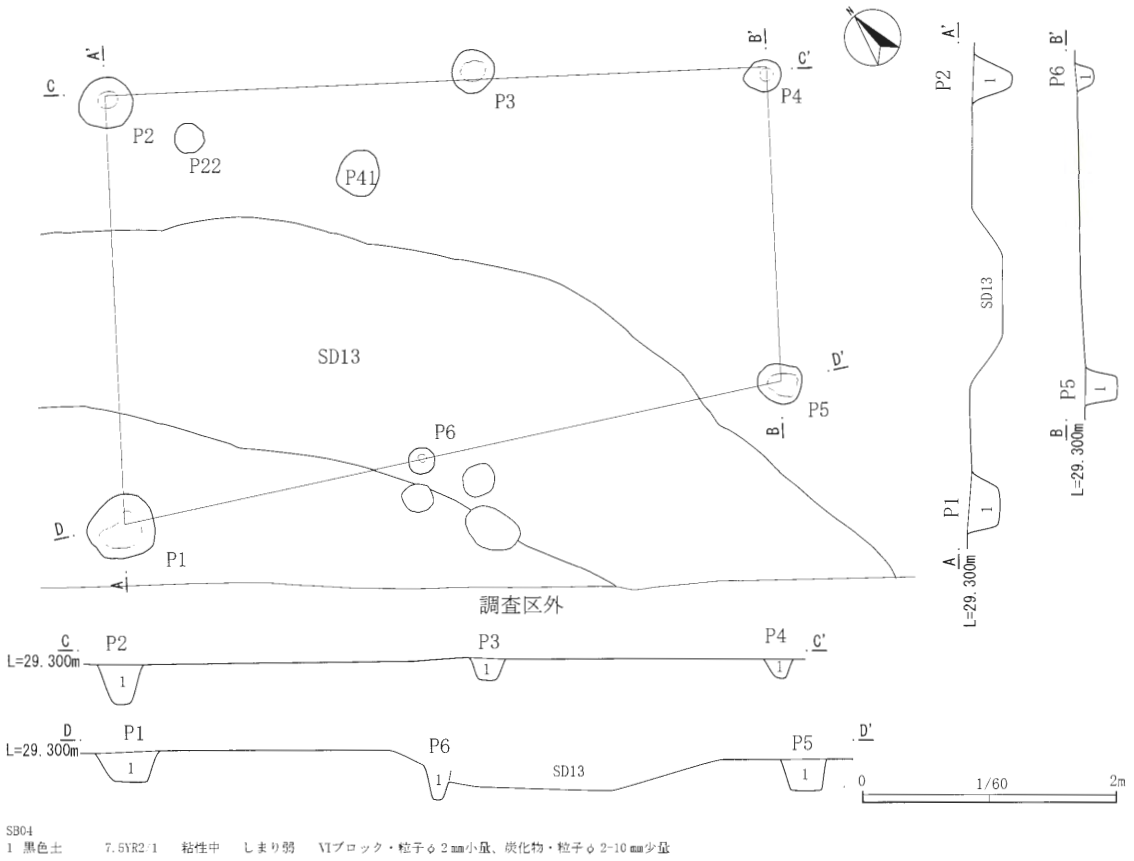
第 2 項　掘立柱建物跡

SB04（第 107 図・図版 26）

2 区 F-1・2G に位置し、14 号墳の周溝である SD13 を切る。P1 ～ 6 の 6 基が検出されている。桁行が北側の P2・3・4 の 2 間で 2.90 m・2.83 m となり全長は 5.73 m。南側の P5・6・1 の 2 間で各 29.0 m となり、全長 5.80 m を測る。また梁行は西側の P1・2 の 1 間で 3.40 m、東側の P4・5 の 1 間で 2.46 m を測る。桁行方向 N-57°-W。

P1 は長径 52cm、短径 50cm の平面円形で深さ 26cm。P2 は長径 46cm、短径 41cm の平面円形で深さ 31cm。P3 は長径 28cm、短径 23cm で深さ 18cm。P4 は長径 35cm、短径 33cm の平面円形で深さ 15cm。P5 は長径 38cm、短径 30cm の平面円形で深さ 26cm。P6 は長径 22cm、短径 20cm の平面円形で深さ 28cm となっている。各ピットとも第Ⅱ -2 層に類似した覆土を充填している。遺構の覆土及び平面形状から中近世の構築と判断される。

遺物は検出されなかった。



第 107 図　SB04

第3項　柵・掘立柱塀跡

SA01（第108図・図版26）

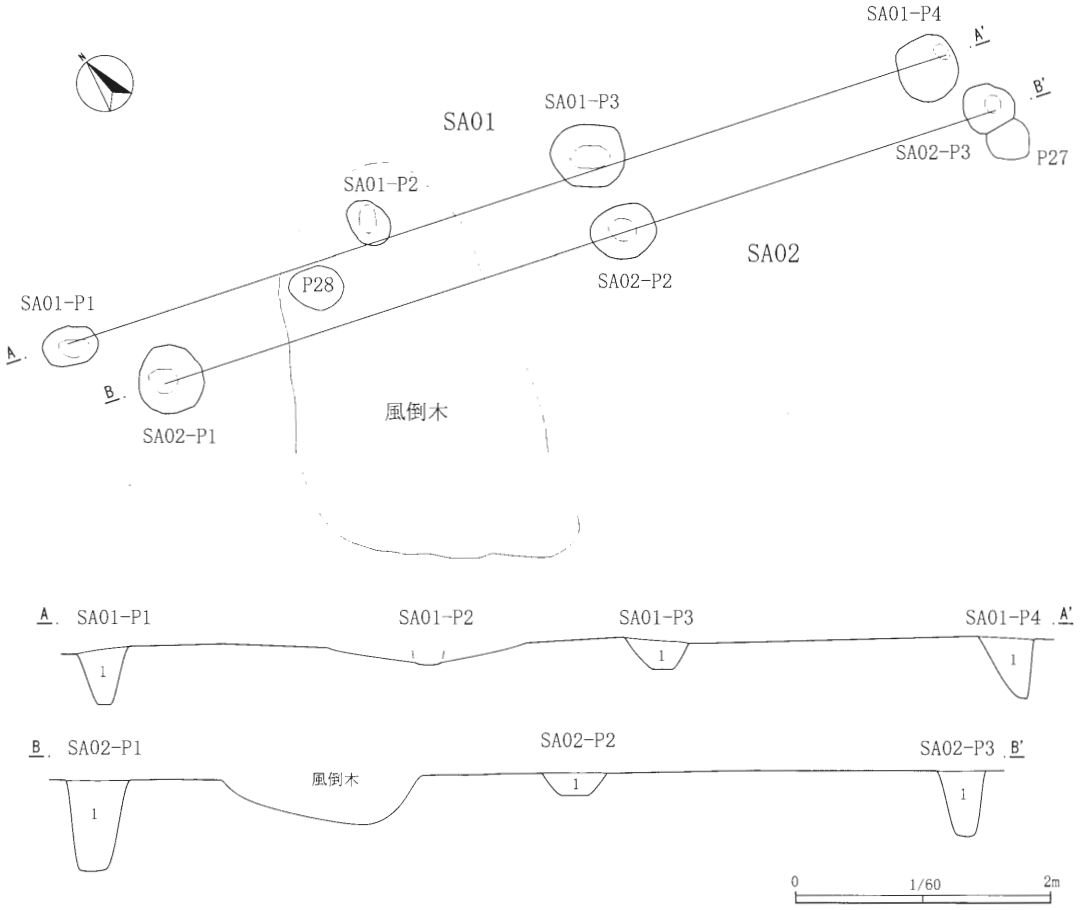
2区D-1・2Gに位置し、P1～4の4基が、南に位置するSA02と並行して東西に3間並んで配置されている。長軸方向N-68°-W。規模は、P1-2間2.50ｍ、P2-3間2.15ｍ、P3-4間が2.60ｍとなり、全体で7.25ｍを測る。各ピットの形状規模は次の通りである。P1は長径34cm、短径30cmの平面円形で深さ43cm。P2は長径40cm、短径30cmの平面楕円形で深さ19cm。P3は長径60cm、短径49cmの平面楕円形で深さ20cm。P4は長径52cm、短径49cmの平面円形で深さ49cmを測り、いずれも第Ⅱ-2層に類似した覆土を充填している。

遺物は検出されなかった。

SA02（第108図・図版26）

2区D-1・2Gに位置し、P1～3の3基が、北に位置するSA01と並行して東西に2間並んで配置されている。円形ピットP27に切られる。長軸方向N-68°-W。P1-2間が3.80ｍ、P2-3間が3.10ｍ、全体で6.90ｍを測る。各ピットの形状規模は次の通りである。P1は長径54cm、短径51cmの平面円形で深さ72cm。P2は長径52cm、短径42cmの平面楕円形で深さ20cm。P3は長径42cm、短径34cmの平面楕円形で深さ52cmを測る。各ピットとも第Ⅱ-2層に類似した覆土を充填している。

遺物は検出されなかった。



第108図　SA01・02

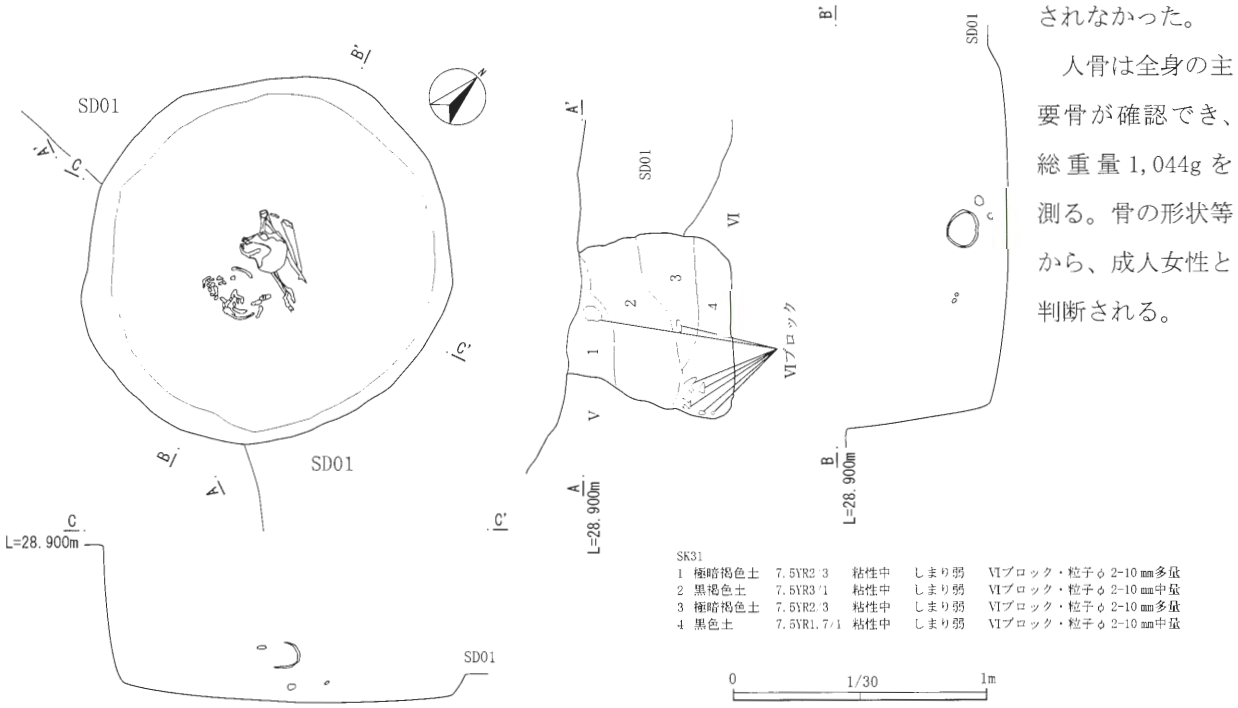
SA01・02
1　黒色土　　7.5YR2/1　粘性中　しまり弱　Ⅵブロック・粒子φ2mm小量、炭化物・粒子φ2-10mm少量

第4項　土　坑

SK31（第109図・図版27・48）

4区E･F-2Gに位置し､8号墳の周溝であるSD01を切る。長径152cm､短径142cmの平面円形で､深さ40cmを測る。覆土は極暗褐色土から黒色土に至る4層からなる。人骨が出土しており、発掘時の状態では崩れていたが、土坑の形状から埋葬時において座位であったと推定され、そこから近世の土坑墓と判断される。副葬遺物などは検出されなかった。

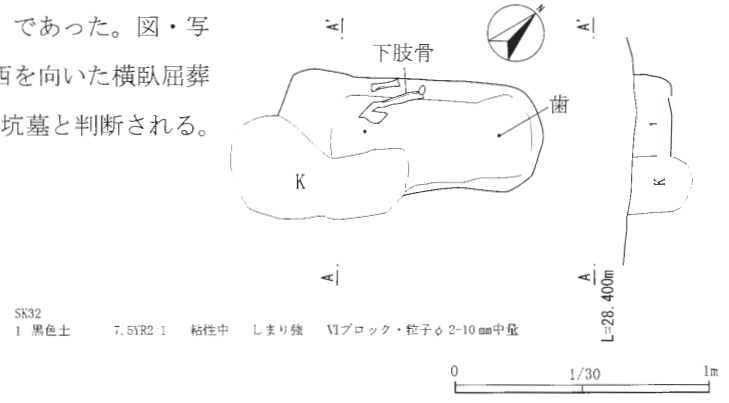
人骨は全身の主要骨が確認でき、総重量1,044gを測る。骨の形状等から、成人女性と判断される。



第109図　SK31

SK32（第110図・図版27）

4区G･H-1Gに位置する。北西隅を南北方向に攪乱が走り、検出された人骨も破損していた。長軸方向N-42°-Eを。長径123cm､短径49cmの平面長方形で深さ24cmである。覆土は黒色土の単層である。人骨は残存状態が悪く、明確に把握できたのは歯と下肢骨（脛骨ほか）であった。図・写真で十分に記録ができなかったが、北頭位で西を向いた横臥屈葬の状態と判断された。墓壙の形状から中世の土坑墓と判断される。副葬遺物などは検出されなかった。



第110図　SK32

SK35（第111図・図版27）

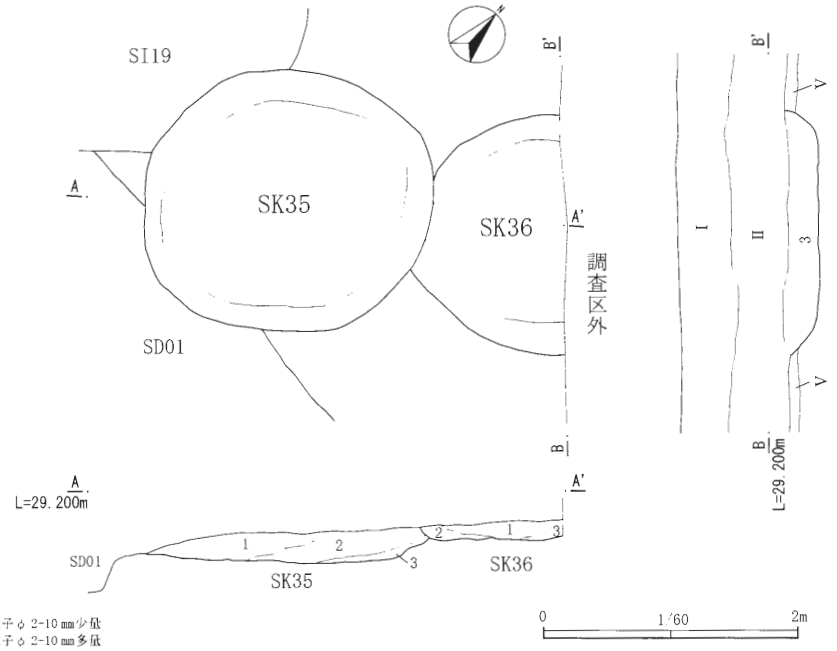
4区E・F-1Gに位置し、SI19を切り、SK36に切られる。長軸方向N-10°-Eを。長径237cm、短径213cmの平面円形で深さ25cmを測る。覆土は黒褐色土から暗褐色土に至る3層の堆積で、南に向かって下降する形である。

遺物は、覆土から土師器9.9g、須恵器4.7gを検出した。中世のSI19を切ることから、本遺構はそれ以降の所産となる。

SK36（第 111 図・図版 27）

４区 E-1G に位置し、遺構の北側は調査区外である。SK35 を切る。長軸方向 N-49°-E。長径 188cm、短径現状 180cm の推定円形で、深さ 24cm を測る。覆土は黒褐色土から暗褐色土に至る３層のレンズ状堆積である。

遺物は、覆土から土師器 12.6g を検出した。遺構の重複関係から、本遺構は中世以降のものと考えられる。



SK35・36　Aセクション
1　黒褐色土　7.5YR3/1　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ2-10㎜少量
2　極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ2-10㎜多量
3　暗褐色土　7.5YR3/4　粘性強　しまり強　Ⅵブロック・粒子φ2-10㎜少量

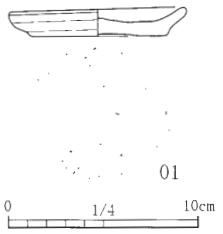
SK36　Bセクション
3　暗褐色土　7.5YR3/4　粘性中　しまり中　Ⅵブロック・粒子φ2-40㎜中量

第 111 図　SK35・36

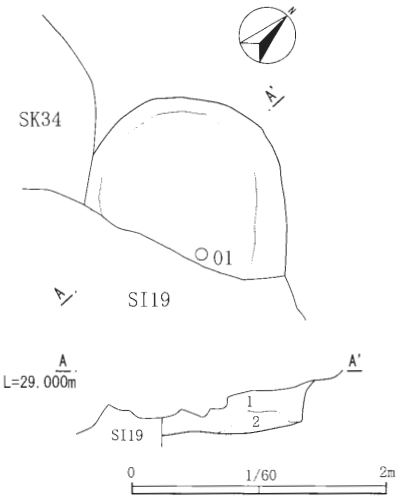
SK37（第 112・113 図・第 44 表・図版 25・46）

４区 E･F-2G に位置する。SI19 及び SK34 に切られている。長軸方向 N-27°-W。長径 162cm、短径 120cm の平面長方形で深さ 30cm を測る。覆土は黒褐色土・極暗褐色土の２層からなる堆積である。

遺物は、覆土第１層から完形の土師質土器小皿(01)が１点検出された。重複する SI19 出土の小皿と酷似し、互いに切り合う位置で検出されていることから、本来は SI19 に帰属する遺物の可能性がある。



第 112 図　SK37 出土遺物



1　黒褐色土　7.5YR3/1　粘性中　しまり中　Ⅵブロック　φ2-10㎜中量
2　極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり中　Ⅵブロック　φ2-10㎜多量

第 113 図　SK37

第 44 表　遺構外出土遺物観察表

番号	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
1	No. 01	土師質土器	小皿	75.1	9.1	1.4	7.1	底部は平底、体部は外反気味に短く立つ。	外面底部は回転糸切り無調整、内外面共ナデ。	雲母・白色粒子やや多い、小礫やや多い。	内外面 7.5YR 6/4 にぶい橙	良好	完形	中世

第５項　ピット

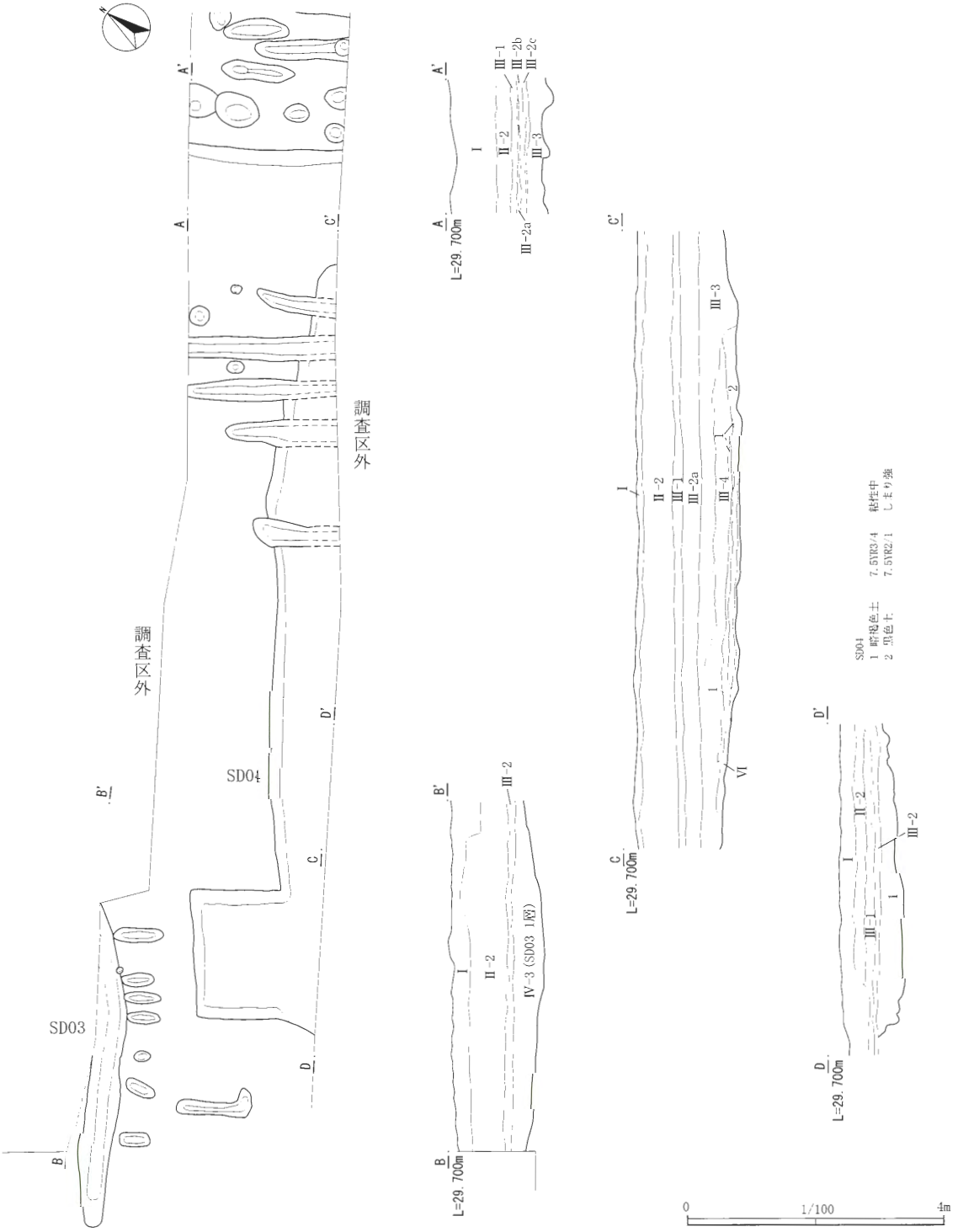
前節で記したとおり、覆土の特徴から、帰属時期を推定した。個々の計測値は第 47 表に示す通りである。中・近世と推定したピットの覆土は、基本土層Ⅱ-2 層（黒色土）に類似したもので、古代と推定したものよりもやや明るい色調で締りが弱い。SB04 や SA01・02 を構成する柱穴に類似している。

第6項　溝　跡

SD03（第114図・図版27）

3区E-1Gに位置し、幅33～50cm、深さ15cmで南北に走行する。走行方向N-55°-E。SD04やサク状遺構と同様に、遺構確認を行った第Ⅵ層上面で検出された。第1層は基本土層のⅣ層と同じものである。中近世の構築である可能性がある。

遺物は検出されなかった。



第114図　SD03・SD04・サク状遺構（南半部）

SD04（第114図・図版27）

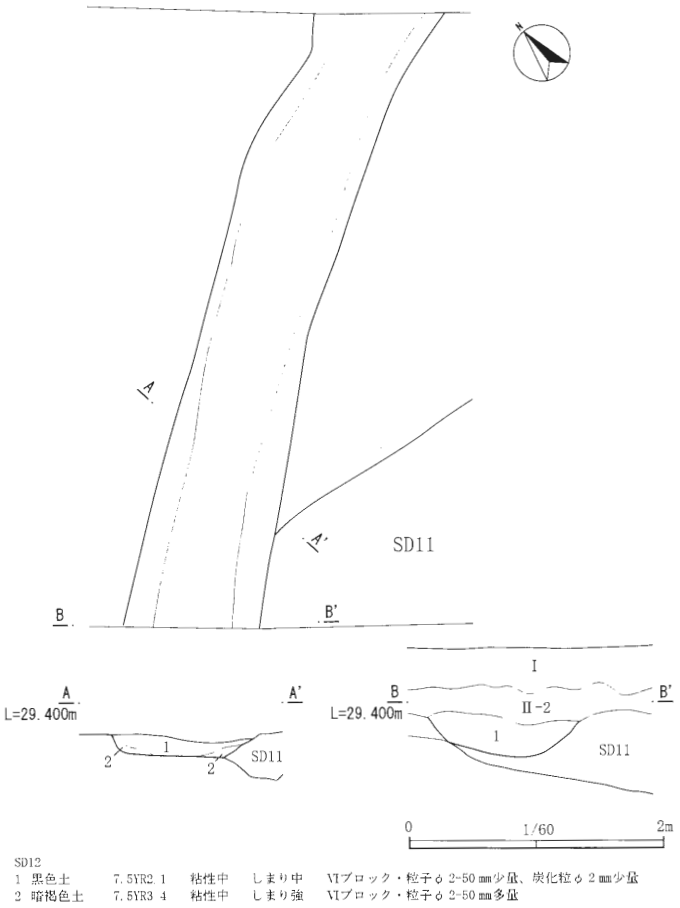
3区D・E-2Gに位置する。調査区内で確認できる幅は、現状で70cm、深さ10cm前後を測る。南北に走行し、東西方向に走行するサク状遺構の東西溝群に切られる。走行方向N-56°-E。SD03やサク状遺構と同一の遺構確認面第Ⅵ層上面で検出された。覆土は暗褐色土から黒色土に至る2層からなっている。基本土層の第Ⅳ-1・2層として処理した。中近世の構築である可能性がある。

遺物は検出されなかった。

SD12（第115図・図版27）

2区G-2,H-1・2Gに位置する。南北に走行してSD11を切っている。走行方向N-56°-E。幅0.73～0.97m、深さ7～34cmを測る。覆土は黒色土から暗褐色土の2層からなる。

遺物は検出されなかった。

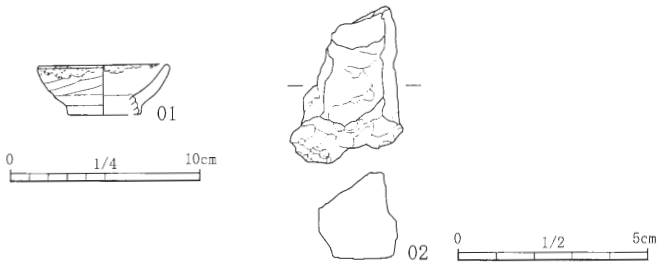


第115図　SD12

第7項　サク状遺構（畑跡）（第8図）

サク（溝）の覆土からの出土遺物はない。間接的ではあるが、遺構外出土遺物（3区一括遺物、第116図）に図示した土師質土器小皿（灯明皿）と鉄滓のほかに、縄文土器51.7g、土師器71.0g、須恵器52.3g、埴輪446.0g、陶器30.0g、瓦96.6g、礫81.0gがある。陶器には中世焼締陶器と近世施釉陶器がある。瓦は近世の燻し瓦で、本遺構を覆う第Ⅲ-3層に包含されていたものである。また、この第Ⅲ-3層の上には近世以降、現代に至る道路の客土が載っている。遺物の詳細な時期は細片のために明確にできないが、本遺構は近世の畑作によるものと判断される。

第8項　遺構外出土遺物



第116図　遺構外出土遺物（中・近世）

第45表　遺構外出土遺物（中・近世）

番号	地区名	注記	種類	器種	重量	口径	器高	底径	器形の特徴	整形の特徴	胎土	色調	焼成	残存	備考
01	3区	3区一括	土師質土器	小皿	15.0	(6.8)	<2.5>	(3.8)	底部は平底で体部は内湾して立つ。やや器高があり小杯状を呈する。	内外面共にナデ整形が行われている。	精良。	内外面 7.5YR 8/3 浅黄橙	良好	1/2	16世紀 口唇部油煙付着 灯明皿
02	3区	3区一括	鉱滓	鉄滓	26.5	縦 4.1	横 2.1	厚 2.2	塊型滓の破片であろうか、下面には砂が付着し、上面には流出滓が見られ、磁石につく。	—	—	—	—	—	

第7節　時期不明の遺構

第1項　土　坑

SK06（第117図・図版27）

2区L-1Gに位置し、SI09に切られている。長軸方向N-79°-Eを。長径200cm、短径95cmの隅丸円形、深さ36cmで、覆土は黒色土から暗褐色土の2層からなり、南に傾いた状態で堆積している。

遺物は検出されていない。

SK07（第118図・図版27）

2区J-1・2Gに位置する。長軸方向N-79°-Eを。長径78cm、短径70cmの平面円形、深さ21cmである。覆土は黒色土・黒褐色土2層からなるレンズ状堆積である。

遺物は検出されていない。

SK24（第36図・図版28）

2区I-1Gに位置し遺構の北側が調査区外で、SI15を切る。長軸方向N-64°-Wを。長径91cm、短径現状56cmの推定平面円形で、深さ25cmを測る。覆土は黒色土・極暗褐色土の2層で、東に偏って傾斜した堆積である。

遺物は検出されていない。

SK25（第119図・図版28）

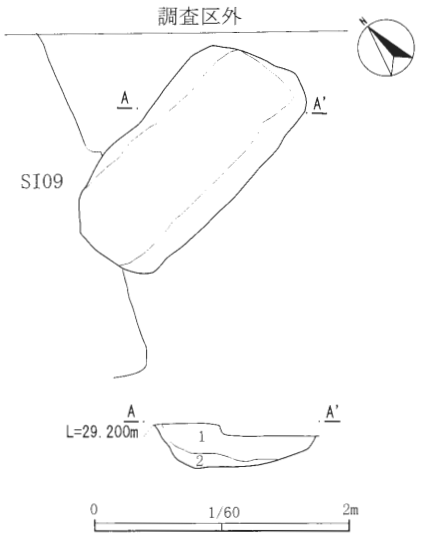
2区K-1Gに位置し、遺構の北側は調査区外である。長軸方向N-37°-Eを。長径81cm、短径62cmの平面楕円形で深さ48cmを測る。覆土は黒褐色土1層からなる。

遺物は縄文土器33.1g、礫21.0gが検出された。縄文土器は細片のため、型式不明。

SK29（第120図・図版28）

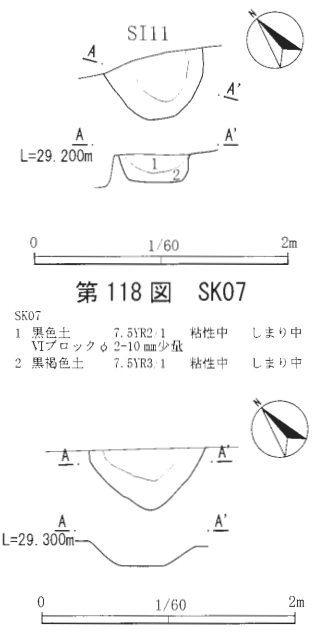
4区B-1・2Gに位置する。主軸方向N-88°-Eを。長径257cm、短径112cmの平面長方形で、深さ42cmを測る。覆土は黒色土から極暗褐色土に至る3層からなり、レンズ状堆積となっている。

遺物は、覆土から縄文土器156.1g、弥生土器8.2gを検出したが、遺構の時期を判断するに至らない。



第117図　SK06

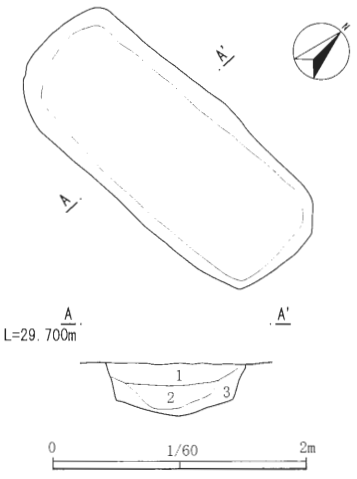
SK06
1　黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子少量、炭化物・粒子φ2mm少量
2　暗褐色土　7.5YR3/4　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子中量



第118図　SK07

SK07
1　黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　VIブロックφ2-10mm少量
2　黒褐色土　7.5YR3/1　粘性中　しまり中

第119図　SK25



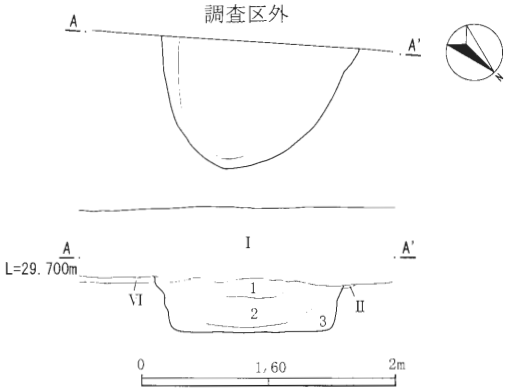
第120図　SK29

SK29
1　黒色土　7.5YR1.7/1　粘性中　しまり中　VIブロックφ2-10mm少量、炭化物少量
2　黒色土　7.5YR2/1　粘性中　しまり中　VIブロックφ2-10mm中量
3　極暗褐色土　7.5YR2/3　粘性中　しまり中　VIブロックφ2-40mm多量

SK30（第 121 図・図版 28）

4 区 C-2G に位置し、遺構の南側は調査区外である。長軸方向 N-57°-E。長径現状 155cm、短径現状 102cm の平面円形で深さ 43cm を測る。覆土黒色土から極暗褐色土に至る 3 層からなるレンズ状堆積である。

遺物は検出されていない。



第 121 図　SK30

SK30
1 黒色土　7.5YR1.7 1　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子φ 2 ㎜少量、炭化物・粒子少量
2 黒色土　7.5YR2 1　粘性中　しまり中　VIブロック・粒子φ 2 ㎜中量
3 極暗褐色土　7.5YR2 3　粘性中　しまり強　VIブロック・粒子φ 2-20 ㎜多量

SK33（第 122 図・図版 28）

4 区 G-1G に位置し、北西隅付近において攪乱を受けている。長軸方向 N-45°-W。長径 224cm、短径 70cm の平面長方形で、深さが 24cm を測る。覆土は黒色土から極暗褐色土に至る 3 層からなる。

遺物は検出されていない。

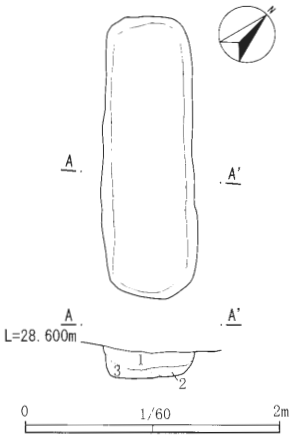
SK34（第 123 図・図版 25）

4 区 D-2G に位置し、遺構の南側は調査区外で、SI19 と SK37 に切られる。長軸方向 N-45°-W。長径 168cm、短径 100cm の推定平面円形で深さが 28cm を測る。覆土は黒色土・黒褐色土の 2 層からなるレンズ状堆積である。遺物は、須恵器 28.8g、礫（砂岩円礫）809.7g を検出した。須恵器は奈良・平安時代のものと思われるが、小片でもあり、時期を明確にし得ない。また、SI19 の覆土からも同一個体と見られる破片が検出されている。

SK39（第 124 図・図版 28）

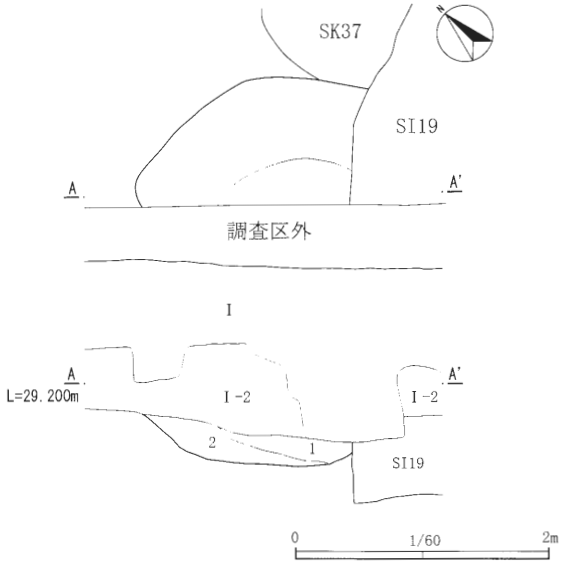
4 区 E-2G に位置し、遺構の南側が調査区外である。8 号墳の周溝である SD01 に切られる。長軸方向 N-64°-E。長径 102cm、短径 94cm の推定楕円形で、深さが 12cm を測る。覆土は暗褐色土 1 層からなる。

遺物は検出されていない。



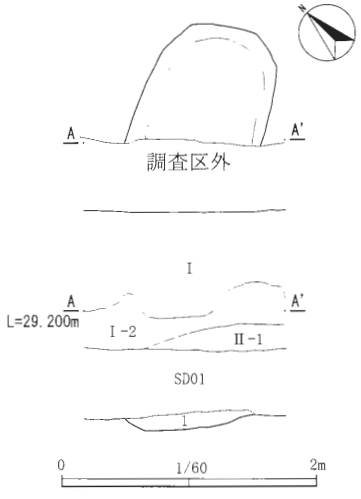
第 122 図　SK33

SK33
1 黒色土　7.5YR2.1　粘性中　しまり中
VIブロックφ 2-10 ㎜少量
2 黒色土　7.5YR2 1　粘性中　しまり中
VIブロックφ 2-10 ㎜中量
3 極暗褐色土　7.5YR2 3　粘性中　しまり中
VIブロックφ 2-10 ㎜主体



第 123 図　SK34

SK34
1 黒色土　7.5YR1.7 1　粘性中　しまり中　VIブロックφ 2-40 ㎜中量、
炭化物・粒子φ 2 ㎜少量
2 黒褐色土　7.5YR3 1　粘性中　しまり中　VIブロックφ 2 ㎜少量



第 124 図　SK39

SK39
1 暗褐色土　7.5YR3 4　粘性中　しまり中

第5章　まとめ

第1節　下坂田塙台遺跡の変遷と歴史的位置

今回の調査は、本遺跡において初めての発掘調査となった。その成果は前章までに報告したとおり、縄文・弥生・古墳・平安、中・近世の各時代の住居跡・建物跡が確認され、長期にわたる複合遺跡であることが判明した。周辺では近年、第2章に記したとおり、東隣の下坂田中台遺跡、さらに東側の赤弥堂遺跡において発掘調査が実施されている。桜川下流域左岸の当地域の歴史が明らかにされつつある。ここでは今回の調査成果をまとめ、今後の課題を提示するとともに、地域史解明の一助たらんとするものである。なお、周辺各遺跡の典拠は第2章を参照されたい。

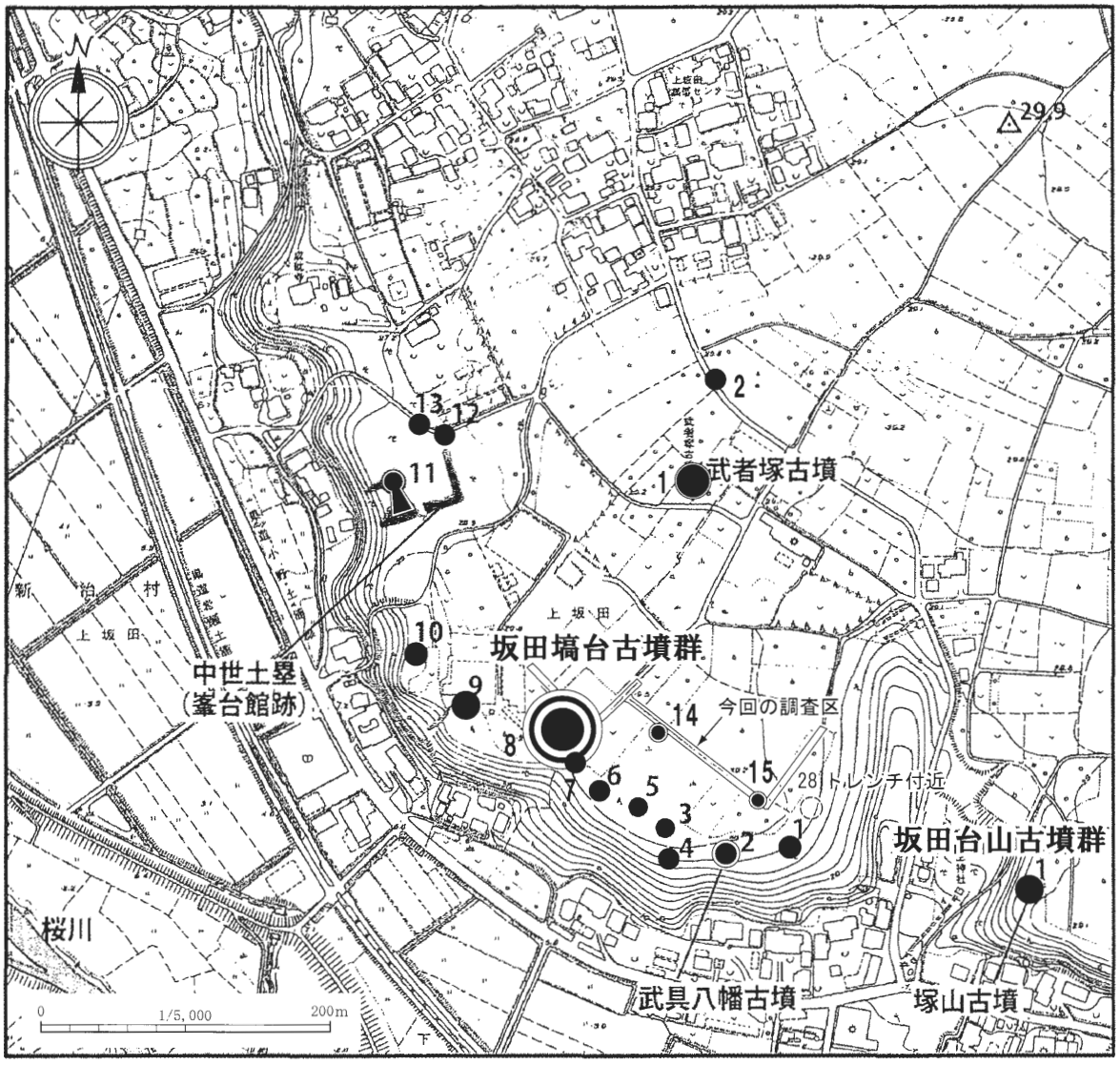
縄文時代　調査区東側の1区で中期・阿玉台式期の住居跡が1軒確認された。一部の把握にとどまったが、東方の赤弥堂遺跡の当該期集落との係わりが注意される。この住居跡の南側では、貝層を包含する土坑を1基確認した。下部のピット状部分にはハイガイとマガキを主体とする鹹水性の貝類からなる混土貝層が充填され、上部の皿状部分の覆土からは早期末葉～前期中葉を主体とする土器小片が検出されている。地点貝塚は赤弥堂遺跡（下坂田馬場先貝塚）では前期・関山式と中期・阿玉台式のものが、東隣の中台遺跡（下坂田貝塚）では後期・加曽利B式のものが明らかにされている。赤弥堂前期貝塚はハイガイとカキを主体とし、同中期貝塚はマガキとサルボウ、中台後期貝塚はヤマトシジミ、さらに北方の上坂田寺裏前期貝塚はハイガイ、同中期貝塚はサルボウとハマグリ、上坂田北部前期貝塚はハイガイを主体としており、坂田地区における貝塚の時期的組成の傾向を示している。また、遺構外出土の縄文土器は早期～後期にわたるが、やはり、東側の1区に濃密に分布する。本遺跡における縄文時代の集落は、東に入り込む小支谷寄りにその中心があるものと推定される。

弥生時代　調査区東側の1区と2区東端で各1軒ずつ住居跡を確認した。両者に帰属する土器は不安定な状況であるが、遺構外出土の弥生土器はほとんどが後期のものであり、十王台式より前に主体があるものと判断された。2軒の住居も当該時期に営まれたものと考えておきたい。また、遺構外出土の弥生土器は2区に多く分布している。縄文時代と同様、遺跡範囲東側に集落の中心があるものと考えられる。周辺の遺跡における弥生時代の遺物・遺構の検出は、現時点では皆無に等しく、西方の常名地区の山川古墳群下層遺構に確認されているのみである。

古墳時代　本遺跡の中核の一つをなす時代である。前期から後期に至る各種の遺構が調査区全体に分布する。前期は、住居跡6軒が調査区全体に分布する。うち1軒（SI03）は焼失家屋であった。いずれの住居跡出土土器とも、概ね前期前半、庄内式後半に並行する時期に位置づけられるものであろう。その他の遺構では、調査区西寄りの2区西端で平面弧状・断面逆台形の溝が確認され、底面付近で高坏が検出された。ほとんどの部分が調査区外と3区の攪乱によって全体形を把握し得ないが、内側の直線的な形状から、低墳丘の方墳（方形周溝墓）の可能性がある。帰属時期は住居跡と同じ前期前半の範疇でよいだろう。また、東側の1区中央では断面U字形の溝2状が相対するように存在し、やはり低墳丘の古墳の周溝の可能性がある。明確な時期は判然としないものの、前期の住居（SI05）を切ることから、前期後半を中心とするものと推定される。このように古墳時代前期に入って、本遺跡における居住域が全体に拡大する。その中で、可能性ではあるが墳墓が混在する状況が推定される。同時期の墳墓は、赤弥堂遺跡（東地区）において方墳（方形周溝墓）が1基、北方の上坂田北部貝塚で同じく1基確認されており、常名地区の山川古墳群では前期の方墳群が明らかとなっている。

後期は、後期初頭の中規模円墳である坂田塙台8号墳が築造される。墳丘径約30ｍ、残存高6.2ｍ、二重周溝（注1）を有する。外側周溝の外径は直径約55ｍを測り、大型円墳に匹敵する「兆域」を占有する。外面二次B種ヨ

コハケ調整を含む円筒埴輪（本章第2節参照）が検出され、形象埴輪は調査区外に埋没しているものと思われる。また、地元の言い伝えから、埋葬施設は箱式石棺と考えられる。本古墳群では、武具八幡古墳（2号墳、増田編1986）がほぼ同時期の古墳として明らかとなっている。安政元年（1854年）に地元の百姓によって甲冑（冑・短甲・札甲・頸甲・肩甲・籠手）や鉄鏃が掘り出された。墳丘は直径15mほどの円墳であるが、付属具を伴う複数セットの甲冑を副葬されていることから、8号墳とともに畿内中枢との連携を有する、当地域社会において中核を担った人物の墳墓と考えられる。両者ともに、現状では本古墳群の先駆けとして造営された盟主墳と評価できよう。本古墳群ではその後、6世紀中葉に全長28mの前方後円墳、11号墳（小野塚2010）が築造される。また、岩崎卓也氏によって報告された女子埴輪の頭部（岩崎1986）は、6世紀中葉の高崎山2号墳（平岡編2001）出土の人物埴輪と同じ作風のもので、8号墳の埴輪とは大きく時期が異なるものであることが判明した。岩崎氏が指摘するもう一つの9号墳に帰属する可能性を考えておきたい。今回、新規発見された14・15号墳の小規模円墳や、試掘確認調査28トレンチに想定される古墳も6世紀代の埴輪を有するもので、台地内側にも削平された埋没古墳が展開することが明らかとなった。さらに内陸に位置する7世紀後葉の武者塚古墳（武者塚1号墳）は、銀製冠や銀装と青銅装の飾大刀、青銅製柄杓などを副葬する。以上、本古墳群とその周辺の墳墓は、6世紀から7世紀にかけて、有力な人物の墳墓が点在することが明らかになりつつある。今後、対岸の宍塚・つくば市吉瀬地区の古墳との比較・検証をする必要はあるが、本古墳群の規模が拡大する可能性も含め、桜川下流域における中心



第125図　坂田塙台古墳群（小野塚2010第2図に加筆）

的な墳墓群と位置付けることが可能となろう。

後期の集落は、今回、調査区東側1区の南端にSI06の1軒が確認されたのみである。時期は5世紀末葉である。集落規模が縮小すると言うよりは、古墳群の形成に伴って墓域と居住域が区分された状況と見たい。さらに古墳の造営が継続されていくと推定される6世紀代以降の遺物はほとんど見られなくなる。徐々に本遺跡は墓域に転換していくのかも知れない。東方の赤弥堂遺跡では周辺の墳墓の造営は低調で、前期19軒、中期5軒、後期4軒と前期にピークがあるものの、継続的な居住域として展開するようである。

平安時代　7～8世紀の遺構・遺物分布のブランクを挟んで、9世紀になると再び集落の痕跡が明確となり、古墳時代とともに本遺跡の中核をなす。概ね、9世紀前半と同後半に2分される。9世紀前半は、1区南側のSD08と2区中央のSD11が二段掘りの特徴的な溝で、一連のものと考えられる。4軒の住居跡と2棟の掘立柱建物はこの溝の南側に存在し、前章までに指摘してきたとおり、建物群を区画する溝として機能していたと推定される。SD11の溝底にはピットが点在し、区画の機能を担う構造の可能性もある。2棟の掘立柱建物（SB02・03）は主軸を溝の走行方向に合わせる傾向が指摘できる。出土遺物には尾張産の灰釉陶器が散見される。9世紀後半にはこの区画溝も埋没し、住居跡の分布も溝の北側（想定される区画範囲の外）に広がる。4軒の住居跡と1棟の掘立柱建物跡が確認されている。SI09出土の鉄製品は馬具（鐙吊金具）の可能性がある。掘立柱建物（SB01）は9世紀前半のものとは異なり、主軸はほぼ東西に向けている。現状では、建物構造や出土遺物に官・公・寺的な様相は確認できない。

周辺では、赤弥堂遺跡で転用硯や墨書土器が検出されており、さらに東方の常名地区の弁才天遺跡では8世紀後半～9世紀の方形区画溝を伴う住居・掘立柱建物群が調査されている。後者では螺旋状暗文のある土師器坏、東濃産緑釉陶器、尾張産灰釉陶器、転用硯、墨書土器、刻書のある砥石、和同開珎、金銅製帯金具あるいは馬具、銅製丸鞆といった、一般集落では見られない多様な文物が住居跡から検出されており、中央政府との係わりを持つ人々の集落であったことが特筆される。

中・近世　中世では調査区西側の4区における土坑群を主体とし、中世前半の土師質土器小皿（かわらけ）が一部で出土している。平面長方形の土坑で人骨が検出され、時期不明のものを合わせ土坑墓を含む遺構群であることが推定される。近世でも座棺と考えられる円形土坑から人骨が検出されている。また、掘立柱建物や柵・塀跡や溝跡は覆土の状況から中・近世と推定され、3区のサク状遺構は近世陶器・瓦の出土から近世の畑作痕跡と推定された。

以上、下坂田塙台遺跡・坂田塙台古墳群における今回の調査は、農道建設部分の狭小な調査となったが、遺跡全体にトレンチを入れた状況でもあり、本遺跡の状況を窺うに足る成果を収めることができた。それは、本遺跡が縄文時代に始まり、弥生・古墳・平安・中・近世と連綿と続いた当地域の人々の営みであり、地域社会の一翼を担う活動の痕跡であった。今後、周辺における調査が進展した暁には、今回の調査成果も地域の歴史を考究するうえでの基礎史料となるものと信ずる。

【注】

1　周辺地域において、二重周溝を有する円墳を探索したところ、茨城県域では確認することができなかった。ただ、隣接する千葉県域の下総・上総地域において、若干の事例を確認することができた。最も塙台8号墳の築造時期に近いものでは、成田市の龍角寺101号墳（墳丘径24.1m、高さ3.6m、外側周溝外径約42m、安藤ほか1988）が挙げられる。同墳の北方には南羽鳥正福寺1号墳（墳丘径20.5m、高さ2.3m、外側周溝外径38.5m、宇田編1996）があり、近在の南羽鳥高野1号墳（同文献）は二重周溝を有する全長44mの前方後円墳である。三者ともに6世紀前半の円筒埴輪と豊富な形象埴輪群を樹立し、特に龍角寺101号墳は雲母粒子を多量に含む胎土を使用するもので、筑波山系の埴輪との関連が指摘されるものである（石橋2004）。千葉県域では他にも、6世紀後半以降、いわゆる「変則的古墳」に二重周溝の事例（下記）が散見され（沼澤2006・2010）、その意味が問われるところでもある。

千葉市稚名崎A-2号墳・神明社裏1号墳（造り出し付円墳）、佐倉市池向3号墳・石川1号墳、山武市松尾1号墳・経僧塚古墳、
香取郡東庄町今郡カチ内遺跡（3基確認、千葉県2010）。

第2節　坂田塙台8号墳出土埴輪について

今回の調査によって、8号墳の周溝からまとまった量の埴輪が採取された。いずれも破片資料で全形を知ることができるものはないが、同工品分析の視点から分類を行い、本古墳に設置・使用された円筒埴輪の型式の把握に努めた。以下、同工品分類結果のまとめ・確認を行い、その中の特徴的な属性を既出資料との比較を通して、本古墳出土埴輪の位置づけをしておく。

1　坂田塙台8号墳の円筒埴輪

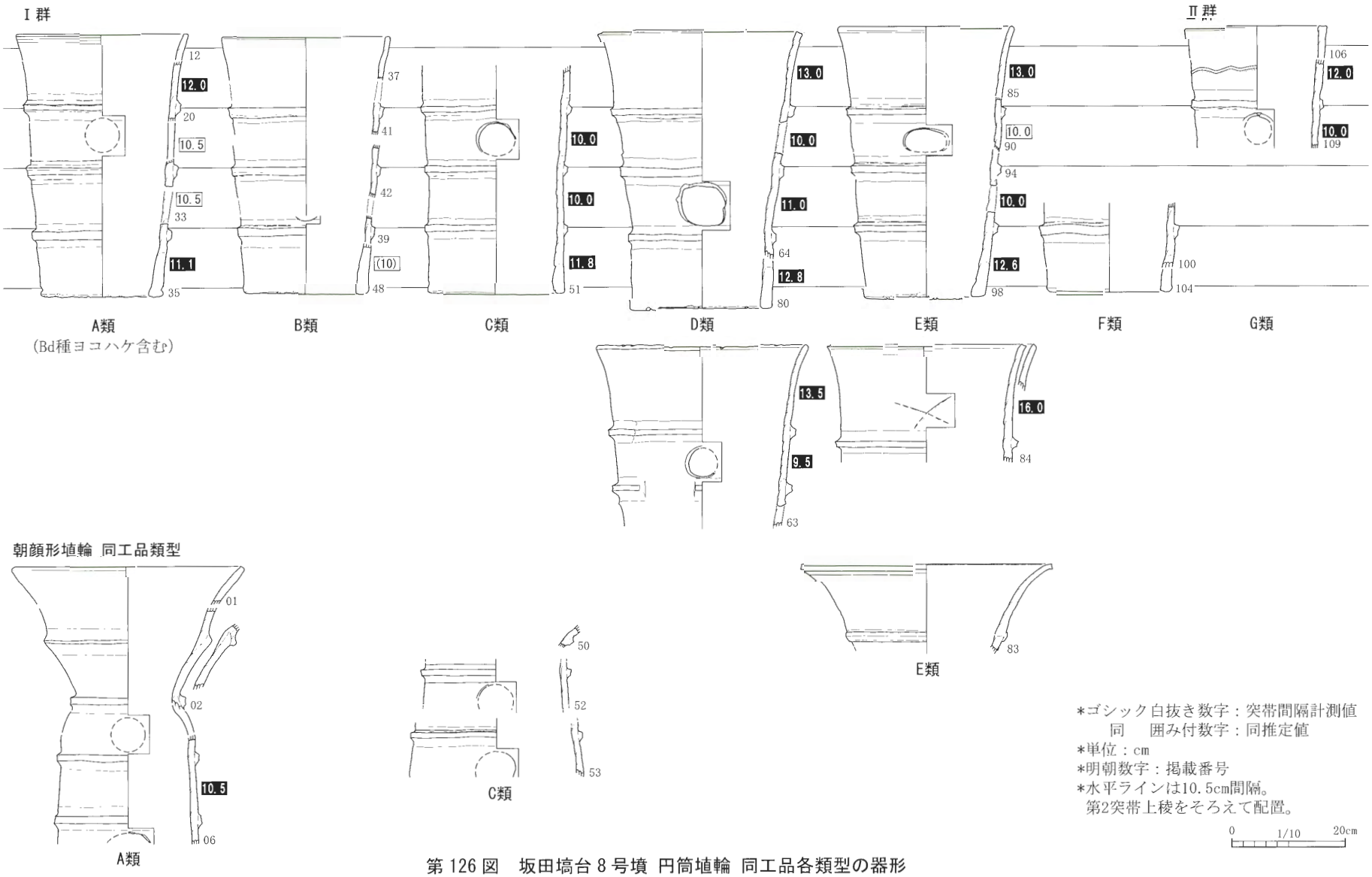
いずれも白雲母の細片を多量に含む胎土で、筑波山地南麓、桜川流域を中心に分布する「筑波山系の埴輪」（塩谷 1997・石橋 2004）の例に漏れない。基部粘土帯を用いた紐づくり、外面タテハケ調整を基調とし、無黒斑であることから窖窯焼成と考えられる。全体形は3突帯4段構成と推定される。しかし、各個体の製作法は一様ではなく、前章で報告したとおり、7類型の同工品を確認した。各類型の属性をまとめたものが第46表である。また、Ⅰ群埴輪（後述）は突帯間隔の設定がされており、各段の高さは一定の規格による製作が想定されるので、各段の高さが確認できる資料を基に全形を推定した状況が第126図である。

7類型の同工品は、突帯間隔設定技法を用いたⅠ群（6類型）と、「断続ナデ」手法によって突帯貼付を行ったⅡ群（1類型）に大別された。Ⅰ群は突帯間隔設定技法の適用から、鐘方正樹氏が定義（鐘方 1997・99、注1）した「Ⅳ群系埴輪」に該当し、川西宏幸分類（川西 1978）のⅣ群埴輪の系列にあるものと評価できる。A類の一部（25・26）に確認できた外面二次Bd種ヨコハケ調整（一瀬 1988）の存在はこれを支持するものである。Ⅱ群は断続ナデ手法の適用から、「Ⅴ群系埴輪」に該当し、川西分類のⅤ群埴輪の系列ということになる。

塙台Ⅰ群埴輪　　各類型間でばらつきを見せている属性は、成・整形手法である。最たるものは突帯・口縁部と内面調整で、同工品の分類作業で第一の指標とした突帯の調整（ヨコナデ）と形状は、口縁部とともに6類型それぞれの状態を示している。それ故に同工品分類の指標となる訳である。内面調整（成形）は、A類は左上りのナナメ指ナデあるいはタテ指ナデ、B類ではタテ指ナデに加えて板（ハケ）状工具を用いた器壁を掻き取るような特徴的なタテナデが施され、接合痕跡を残さない丁寧な出来である。C類は砂粒の移動が目立ち、ユビケズリ（設楽 1981）とも称されるタテ指ナデ。D類は平滑面を示すことから板状工具を用いたヨコナデが施されたものと考えられるが、接合痕が顕著に残る粗いものである。E類も接合痕跡が明瞭なナナメ指ナデ。F類は接合痕

第46表　坂田塙台古墳群出土円筒埴輪の類型別属性表

分類		ハケメ	出土箇所	刺き手	外面調整	内面調整				口縁端部調整	胴部器厚	突帯		透かし孔		ヘラ記号	
群	類					胴部	状態	口縁部	底部			間隔設定	調整	切り抜き	仕上げ	位置	形状
Ⅰ	A	1	8号墳	右	タテハケ（→Bd種ヨコハケ）	左上・タテナデ	丁寧（接合痕跡少）	ヨコハケ（外面と別工具ヵ）	–	幅広	10～15	凹線2条口縁端部外面に凹線	上下面を最後にナデ	右回り	無調整	外面	左上り平行斜線
Ⅰ	B	1	8号墳	右	タテハケ	タテナデ、タテ板ナデ・ハケ	丁寧（接合痕跡なし）	なし	ヨコケズリ	幅広	9～13	凹線	上下端面をナデヵ	右回り	無調整	–	–
Ⅰ	C	1	8号墳	右	タテハケ	タテナデ、砂粒移動目立つ	粗い（接合痕明瞭）	左上・ヨコナデ	–	不明	10～12	凹線	上下面を強くナデ	右回り	無調整	不明	不明
Ⅰ	D	2	8号墳	右	タテハケ	ヨコ板ナデ	粗い（接合痕顕著）	ヨコハケ→ヨコ（ヘラ）ナデ	–	甘い	10～12	凹線2条	下面ナデあまい部分あり	右回り	無調整	外面	左上開きC字形
Ⅰ	E	3	8号墳	右	左上ハケ、口縁・胴部は正逆ハケメ、底部ヨコナデヵ	左上ナデ	粗い（接合痕明瞭）	ヨコハケ→ヨコナデ	–	強い	10～12	凹線2条	上下端面をナデ	右回り	ナデ	外面	×形
Ⅰ	F	–	8号墳	右	タテ板ナデ	タテナデ	丁寧（接合痕跡なし）	不明	ヨコケズリ	不明	10～13	不明	上下面を最後にナデヵ	不明	不明	不明	不明
Ⅱ	G	4	8号墳	右	左上ハケ（→波状文）	タテナデ→左上ハケ	丁寧（接合痕跡少）	左上ハケ	不明	狭い	10～14	断続ナデ	下面ナデ甘く、凹凸	右回り	無調整	–	–
–	H	5	14号墳	右	タテハケ	タテナデ	丁寧（接合痕跡少）	左上ハケ	–	丁寧	8～13	不明	上下端面をナデ	右回り	ナデ	–	–
–	I	6	14号墳 28トレンチ	左	タテハケ	右上・タテナデ	丁寧（接合痕跡少）	右上ハケ	不明	狭い	10～14	断続ナデ	下面ナデ甘く、凹凸	左回りヵ	無調整	–	–
–	J	5ヵ	15号墳	右	タテハケ	タテナデ	丁寧（接合痕跡少）	ヨコハケ	不明	不明	10～12	断続ナデ	下面ナデ甘く、凹凸	不明	不明	内面	右上り斜線
–	K	7	15号墳 1・4区遺構外	右	タテハケ	タテナデ	丁寧（接合痕跡あり）	ヨコハケ	–	不明	10～14	不明	上下面丁寧にナデ	右回り	無調整	–	–
–	L	–	15号墳 2区遺構外	右	タテ板ナデ	ヨコ・左上ナデ	丁寧（接合痕跡なし）	ヨコ・左上ナデ	不明	不明	9～12	断続ナデ	下面ナデ甘く、凹凸	右回り	無調整	内面	左上り斜線



第126図　坂田塚台8号墳 円筒埴輪 同工品各類型の器形

が残らない丁寧なタテ指ナデである。外面調整は前述のとおりタテハケを基調とするが、E類は左上りのナナメハケ、F類はハケメを記さないいわゆるタテ板ナデ。内面の底部下端にはB類とF類でヨコケズリが施されている。透かし孔の切り取り面の処理は、E類のみナデ仕上げが認められる。ヘラ記号は破片資料の制約のために確認が不十分であるが、D類で左上が開放するC字形、E類で×形が認められた。

このように、各類型とも口縁部・底部の高さや口径・底径のばらつきはあるものの、口径32cm、底径21cm、器高47cm（Ⅰ群平均値、器高は推定平均値）の逆台形のプロポーションは同調するようである。突帯間隔がそろえられていたのは第2段と第3段と見られ、各類型とも10cm前後の値を示している。形態的な近似性、型式的なまとまりをもった一群との印象が強い。また、A・B・C類の3類型の外面調整のハケメパターンは一致しており、同一工具の共用あるいは兄弟工具の製作・使用（犬木1995・城倉2009）が考えられる。

塙台Ⅱ群埴輪　口径26.3cmと細身で寸胴形の器形と直立する口縁部形状は、一見してⅠ群と弁別される。また、突帯は下面の特徴的な凹凸から「断続ナデ」手法が用いられたものと判断され（注2）、その突帯の貼り付けに伴う器壁の歪みが指摘できる。明らかに系列の異なる製作が推察されるものである。しかし、胎土はⅠ群と同じであり、製作地を大きく異にするとは考えられない。突帯間隔（10.0cm）、口縁部高（12.0cm）もⅠ群と同調している。また、当群の特徴の一つに口縁部外面の「波状文」がある（後述）。

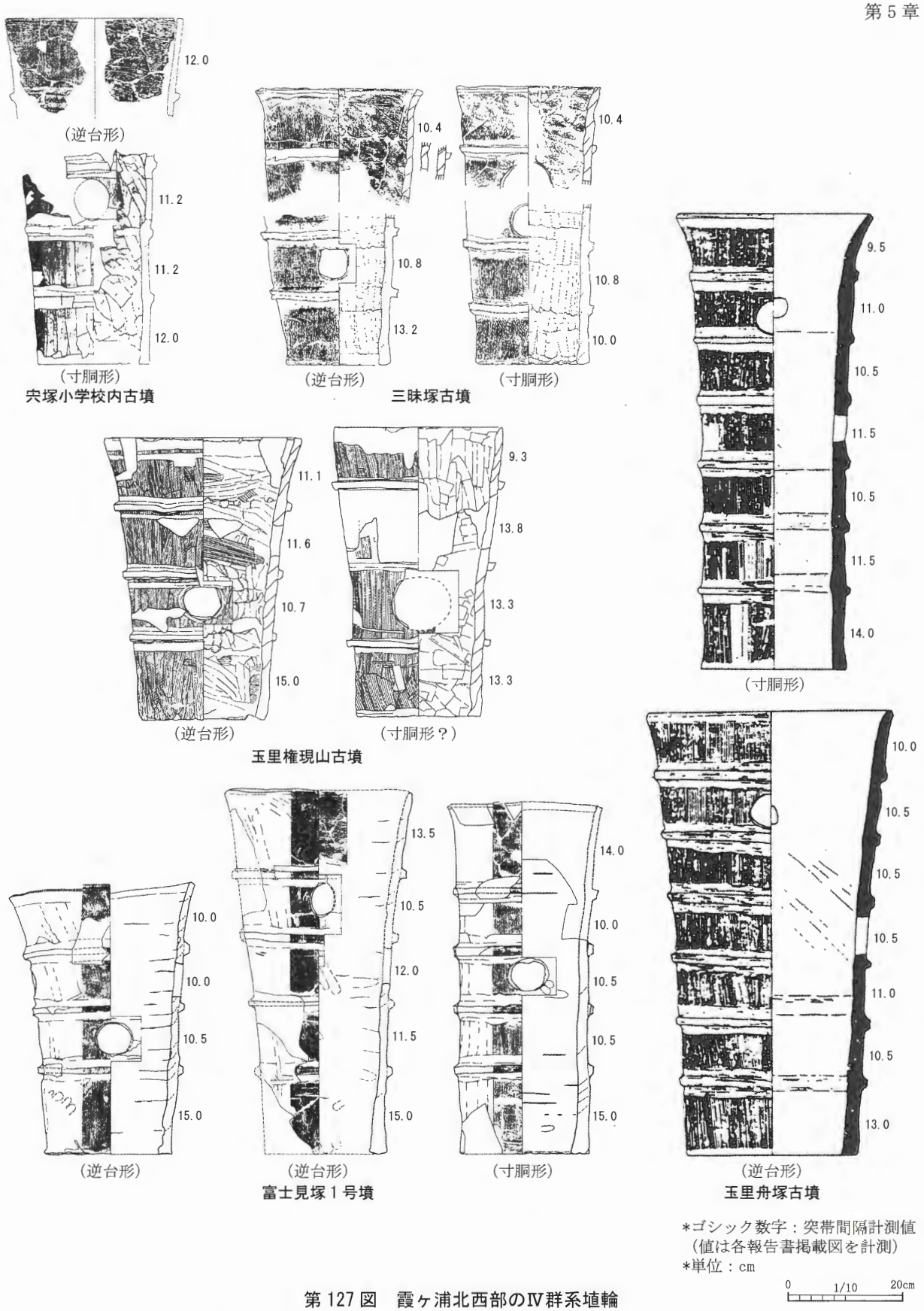
以上、全体の98.6%を占めるⅠ群と、わずか1.4%のⅡ群で構成され、前者は中期の型式を引き継ぐⅣ群系埴輪、後者は新式の後期・Ⅴ群系埴輪であり、両者は全く異系統の型式である。主体をなすⅠ群の各類型は製作技法、形態、法量ともに等価な型式群であった。今回、各類型の数量比を示すまでに至らなかったが、外面ナデ調整のF類は707.2g（0.6%）と1%に満たない。本書掲載量を見ていただいても、他の類型はおおよそA群が最も多く、B～E類はほぼ同量を示す感じである。本古墳の埴輪製作は、A群の製作者を中心として行われていたものと思われ、わずかに認められたBc種ヨコハケ調整のものも、このA群製作者によってなされたものと考えている。

2　既出資料との比較

次に、8号墳の埴輪で把握された属性の中で、「Ⅳ群系埴輪」（B種ヨコハケ調整・突帯間隔の設定）と「波状文を施す円筒埴輪」に着目する。本古墳が立地する桜川流域を始め、霞ヶ浦北西部（高浜入り及び土浦入り地域）及び茨城県域の調査資料と比較しておく。

霞ヶ浦北西部におけるⅣ群系埴輪　茨城県域におけるⅣ群埴輪は、窖窯焼成の導入を一つの定点とすると、5世紀中葉～後葉の石岡市の府中愛宕山古墳や小美玉市（旧　新治郡玉里村）の妙見山古墳を初現とするが（塩谷1997、日高2001）、資料の状況が今一つ十分ではない。その後、定形化した埴輪として、5世紀後葉のひたちなか市の川子塚（かごづか）古墳（斉藤2000b、田中・高橋2002）が挙げられる。馬渡窯跡C地区から供給されたものと見られており、Bc種ヨコハケが施されている。未発掘調査であるが、現状で把握できる資料は寸胴形（筒形）の器形で、突帯間隔と底部高をそろえる（高さ12cm）ものが知られている（斉藤2000a・b）。その他、窖窯焼成品と考えられるB種ヨコハケ調整の断片的な資料は、桜川市（旧　真壁郡大和村）の高森1号墳（斉藤ほか2003）や筑西市（旧　同郡明野町）の宮山観音古墳（日高2001）において確認されている。そのような状況下で今回、塙台8号墳で検出されたB種ヨコハケ調整の埴輪は、県域南部の霞ヶ浦周辺地域では初見例となった（注3）。しかし、外面調整にB種ヨコハケが施されないと言えども、5世紀末葉から6世紀前葉に位置づけられる当地域の埴輪には、突帯間隔設定の凹線（沈線）が見られ、「Ⅳ群系埴輪」と評価することができる。これらの資料を概観することによって、塙台Ⅰ群埴輪の位置づけを考えておきたい。

霞ヶ浦北西部のⅣ群系埴輪は、土浦市の宍塚小学校内古墳（5世紀末葉、塩谷編1987）、かすみがうら市の富士見塚1号墳（旧　富士見塚古墳、TK-47～MT-15型式期、杉山ほか2006）、小美玉市の玉里権現山古墳（権現平



第127図　霞ヶ浦北西部のⅣ群系埴輪

5号墳、TK-47～MT-15型式期、小林編2000）に見られる。また、突帯間隔設定痕跡は確認されていないが、同時期の資料として行方市（旧　行方郡玉造町）の三昧塚古墳（TK-47型式期、大塚・小林編1995、小林編2001）も検討に加える（第127図）。

形態は3突帯4段を基本形とし、富士見塚1号墳のみ4突帯5段との組み合わせとなる。いずれの古墳においても寸胴形（筒形）と逆台形の二者が認められる。富士見塚1号墳では鼓形を呈するものの存在が指摘されてい

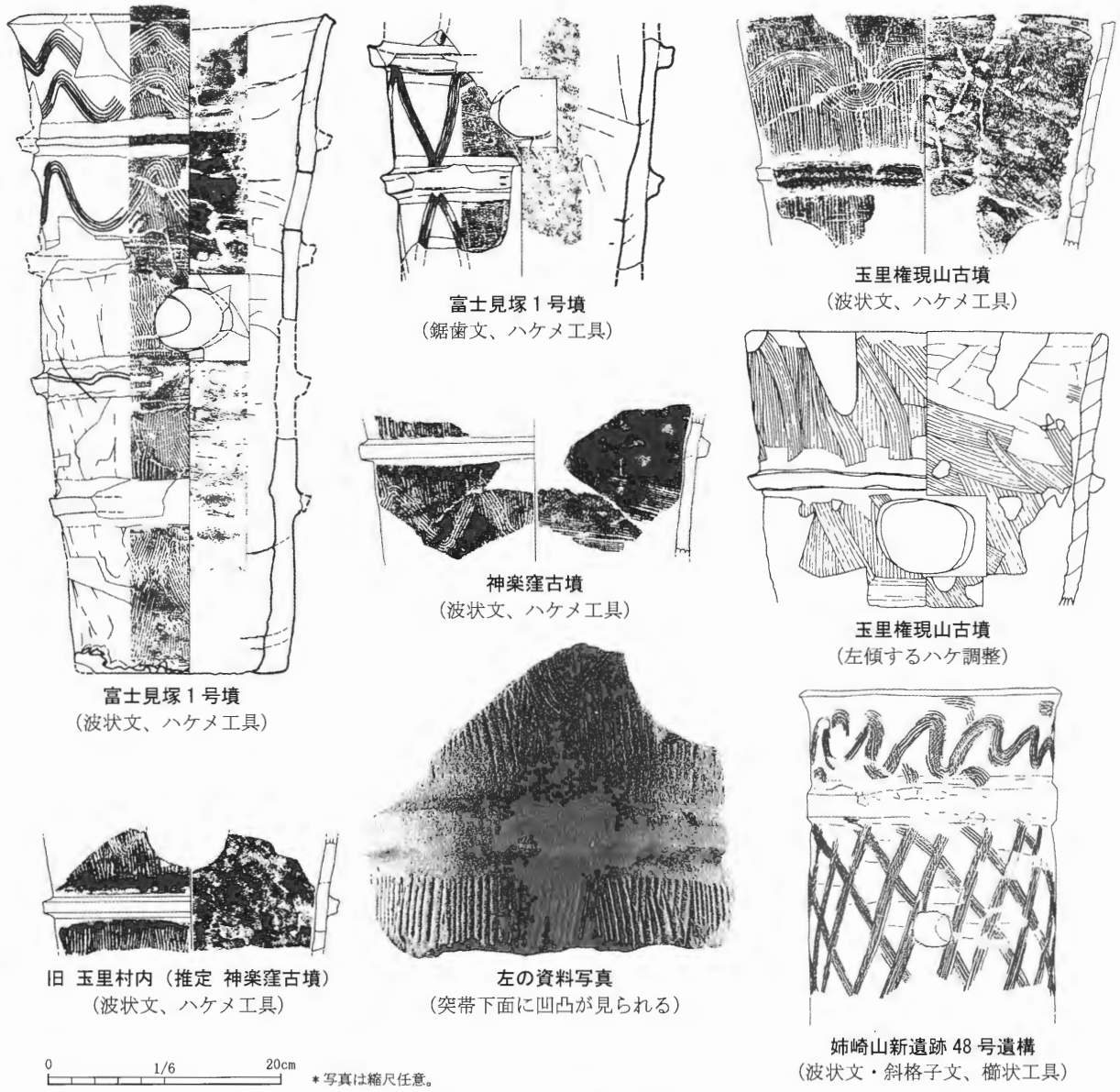
るが、安定した型式とは思われない。宍塚小学校内古墳では概要報告書に図示された資料が寸胴形であるが、未報告資料には逆台形のものもあるようである。各古墳とも全形が把握できる資料が少なく、二者の比率を分析することは難しいが、富士見塚1号墳では寸胴形が多く、権現山古墳と塙台8号墳では寸胴形が少ないように見える。成形法については基部粘土帯を用いるものと底部から粘土紐積み上げのものがあり、後者は富士見塚1号墳の一部と三昧塚古墳で認められる。前出の妙見山古墳は後者である（日高2001）。塙台8号墳のB類とF類に認められた底部内面のヨコケズリは、権現山古墳の一部に確認できる。

突帯間隔の設定はいずれの古墳においても、中間段（第2･3段）を規定する（そろえる）かたちで機能している。その間隔はいずれも10～12cmの間を示しており、権現山古墳の13.5cmのもの以外は差異を強調することはできない。底部（第1段）高はほとんどがこの突帯間隔を1～5cm上回る値を示しており、三昧塚古墳と権現山古墳では突帯間隔とそろえるものもある。一方、口縁部（第4段）高は突帯間隔とほぼそろえる傾向であり、1～3cmほど高いものも認められる。こうした各段の設定傾向は、Ⅳ群系埴輪と評価できる6世紀前半の玉里舟塚古墳（忽那2010）にも指摘できる。

こうして見ると、塙台8号墳を含めた霞ヶ浦北西部の5世紀末葉～6世紀前葉のⅣ群系埴輪は、個々のばらつき・個性を指摘されるものの、ある程度の（あるいは、緩やかな）まとまりをもった埴輪群と捉えることもできるだろう。そして、舟塚古墳の造営に伴い確立する小幡北山窯の埴輪製作へと引き継がれていく。ただ、基部の積み上げ手法や底部内面のヨコケズリの存在は、成形技術の根本的な相違であり、今後、その技術系列の追究をすべき課題である。

波状文を施す円筒埴輪　高浜入り地域で多く認められ、これまでに、かすみがうら市の富士見塚1号墳、風返9号墳、小美玉市（旧 玉里村）の神楽窪古墳、玉里権現山古墳、石岡市の府中愛宕山古墳で確認されている（本田2002）（第128図）。風返9号墳と愛宕山古墳例は状態を確認していないが、他例はいずれも明瞭な櫛描き波状文を示している。今回、土浦入り地域に位置する塙台8号墳のG類を新たに加えることになったが、注意されるのはその製作法の系列である。塙台G類は突帯の貼付手法に断続ナデが想定される「Ⅴ群系埴輪」であった。上記の既出例のうち、富士見塚1号墳例は、突帯間隔設定が行われた「Ⅳ群系埴輪」である。一方、神楽窪古墳出土の可能性が指摘されている旧 玉里村内出土資料は、霞ヶ浦町郷土資料館第19回特別展展示解説書（千葉編1997）に掲載の写真（第128図下段中）を見ると、突帯下面に凹凸が認められ、塙台G類の状態と酷似している。本田信之氏の報告ではその点の指摘はないものの、断続ナデによる突帯貼付がなされたものと思われる。想定されるプロポーションや法量（胴部径）も近似しており、両者の製作事情の近さを強く感じる。また、権現山古墳の資料（第128図上段右）は法量（口径）が大きいものの、直線的に開く形状や口縁端部に明瞭な平坦面を持つところは、塙台G類とよく似ている。

ところで、波状文を記す円筒埴輪は、千葉県市原市の姉崎（あねさき）二子塚古墳（小橋2010、施文具〔以下同じ〕櫛状工具）、姉崎山新（さんしん）遺跡48号遺構（小橋2008、同、有黒斑）、同富津市の内裏塚古墳（小橋2011、ハケメ工具、TK-216型式期）、同木更津市の清見台A-4号墳（木川2001、ハケメ工具、Ⅳ期･5世紀後葉）等、東京湾東岸地域にも見られる。また、姉崎二子塚古墳、山新遺跡、内裏塚古墳では斜格子文も共存し、市原市の五霊台（ごりょうだい）遺跡（高橋1998、櫛状工具）と富津市の富士見台2号墳（ハケメ工具、Ⅳ期）では斜格子文が見られれる。一方、茨城県域では前述の波状文の事例の他に、斜格子文あるいは斜格子状のハケメが常陸太田市の梵天山3号墳（高山塚古墳、白井2002、有黒斑・2次ヨコハケ調整）や川子塚古墳（田中・高橋2002）でも確認されている。また、高浜入り地域の富士見塚1号墳の鋸歯文（ハケメ工具）や鋸歯状のハケメ、権現山古墳の「左傾するハケ調整」は文様効果が指摘・報告されているとおり、これらの有文埴輪の系列に属するものと評価できるだろう。東京湾東岸と高浜入りの事例とは型式的な距離があり直接的な対比は難しいものの、早くに白井久美子氏が指摘し（白井2002）、小橋健司氏



第128図　「有文埴輪」の類例

が想定する（小橋2011）ように、古墳時代中期から後期初頭の常総地域内における各埴輪製作者の関係・製作事情を表すものと思われる。さらに、富士見塚1号墳で共伴している鋸歯文や有軸綾杉文、斜格子文などのヘラ描き線刻文様は、既に塩谷 修氏が指摘（塩谷1997）している群馬県高崎市の三島塚古墳（車崎1998）や長野県長野市の土口将軍塚古墳（大塚ほか1987、TK-73型式期）で良く似ているものが存在している。

3　資料の位置づけ

V群系埴輪は「中期の末頃に」「出現し、後期に主体化する」（鐘方1997）。具体的にはTK-208型式期（5世紀中～後葉）に河内地域で認められるようであるが、V群埴輪の成立はTK-23・47型式期（後期、5世紀末葉）である。また現状では、6世紀の茨城県域におけるIV群系埴輪は「小幡北山型」埴輪（稲村2002）にも指摘され、同型埴輪は6世紀初頭～前葉に成立し、同前～中葉の玉里舟塚古墳の築造に伴い確立するとされる。すなわち、同県域ではIV群系埴輪が6世紀後半まで残ることが明らかであるから、IV群系埴輪の存在は下限を示し得ない。一方、前述の霞ヶ浦北西部の5世紀末葉～6世紀前葉の諸例と比較しても同時期のものと見て誤りない。さらに、塙台8号墳ではBd種ヨコハケが存在することから、「TK-23・47型式期、5世紀末葉」に位置づけるのが現在の所見では妥当なところと考えられる。

小　結

坂田塙台８号墳の円筒埴輪は、Ⅰ群は霞ヶ浦北西部の「Ⅳ群系埴輪」に類似するものであり、Ⅱ群は高浜入り地域に認められている「有文埴輪」の土浦入り地域における初例を追加することとなった。今後、土浦入り地域においても類例が発見されるものと思われる。現在認識されている古墳の分布を見ても、両地域の古墳の「格・質」と分布密度は高浜入り地域の優位が動かないものと思われるが、今回の調査事例によって、両地域の埴輪製作環境の親縁性を窺うことができた。両地域は地形的にも、塙台古墳群の西側が立地する上坂田地区の北西には大きな谷津が入り込み、高浜入りの河川・恋瀬川の支流・天の川上流域に近い。出島半島を大きく迂回せずとも、河川（内水面）を利用した水上交通とわずかな陸交によっても、地域（人や文物）の通交は頻繁であったと思われるのである。土浦入り・高浜入り両地域に分布する埴輪は、胎土の含有物を手掛かりとして異なる製作地（窯）が推定される訳であるが、今回、検討の対象とした後期初頭・５世紀末葉～６世紀前葉では製作環境の緊密な交流があったものと思われる。

さて、８号墳の埴輪は上記のとおり、大多数、６類型からなるⅣ群系埴輪（塙台Ⅰ群）と、全体の 1.4％に過ぎない１類型のみのⅤ群系埴輪（塙台Ⅱ群）で構成されていることが判明し、最大の特徴である。畿内地域の円筒埴輪の系統を明確に示した鐘方氏は、「後期の円筒埴輪を考える上で重要となるのは、それぞれの埴輪がどの系統に属して製作されてきたかを追求することであ」り（鐘方 1997）、「関東におけるⅤ期の埴輪展開（中略）を読み解くには、やはりⅤ群系とⅣ群系の存在を指摘しなければならない。」（鐘方 1999）と提言している。

今回、同工品分析の視点から出土埴輪の分類を行い、系統の把握をすることができた。何分、破片資料からのアプローチであるので、同工品各類型の構造（数量比や詳細な型式）とその意義を整理・把握するには至っていないが、霞ヶ浦西部地域における後期初頭の埴輪型式の一端を提示することができたのではないかと思う。今後は、新規資料の展開を期待するとともに、既出資料の再分析を進める必要があるように思う。繰り返しとなるが、わかりにくいとされる茨城県域の埴輪も、「工人集団、技法といったもの、あるいは組列・系譜といったようなものをきちんと把握していか」なければならないだろう（車崎ほか 2002）。前述の茨城県域における６世紀代の「Ⅳ群系埴輪の残存」は注意しなければならない点であり、これとⅤ群系埴輪との係わりを読み解く必要がある。また、Ⅴ群埴輪が「製作期間がほぼ 100 年に及ぶにもかかわらず、明確な型式変遷の追究が困難となっている」のは、「それまでに保持してきた埴輪製作上での規格性を放棄し、極限的に効率化させた製作工程によって、非常に合理的な量産体制」のもとに製作されたためである（鐘方 2003）のなら、効率化・合理化の方向性、それを達成するための手法の創意・工夫、そして進歩の足跡があるはずである。今後、これをいかに見出し、整理するかに懸かっていると言えよう。

【注】

1　Ⅳ群とⅤ群の分類は川西宏幸氏による円筒埴輪の５群大別（川西 1978）に準拠し、各系統の定義は鐘方正樹氏が示したもの（下記、鐘方 1997）に拠る。

Ⅳ群系埴輪：突帯間隔設定技法が用いられており、突帯間は均等幅である。（中略）断続ナデ技法を用いない。外面調整にはヨコハケを用いる。

Ⅴ群系埴輪：突帯間隔設定技法を放棄し、粘土紐を目分量で器壁になでつけて突帯を成形する断続ナデ技法を採用する。このために突帯間隔や底部高・口縁部高はばらついて一定しない。外面はヨコハケ調整が省略されてタテハケのみとなる。

2　「断続ナデ」手法の評価については、日高　慎氏による慎重な判断が示されている（日高 2001）。確かに、日高氏が報告された妙見山古墳例（突帯間隔設定沈線あり、無黒斑）や、鐘方氏がⅣ群系と位置付けた尾張型埴輪（愛知県豊田市の上向イ田窯跡Ⅰ群の一部、鈴木編 2009）などにも確認され、Ⅴ群系埴輪以外にも伴う事実がある。本稿では系列の違い（Ⅳ群系とⅤ群系）を指摘する観点から、塙台Ⅱ群に認められる突帯下面の凹凸を「断続ナデ」の痕跡として、あえて積極的に評価したが、そもそも、「断続ナデ」手法は単なる突帯貼付手法であり、今後、藤井幸司氏が定義（藤井 2003）するⅣ群系埴輪以前に認められる「突帯貼付技法Ａ類」との識別が必要となる。

3　行方市（旧 行方郡玉造町）の兜塚古墳でＢ種ヨコハケ調整が確認されているようであるが、焼成法は不明瞭のようである（日高 2001）。また、これまでに発掘調査が行われていない妙見山古墳で、今後、Ｂ種ヨコハケが発見される潜在的可能性はある。

第3節　叩き手法を用いる「常総型甕」についての一考察

「常総型甕」の呼称については、下野地域では「下野型甕」、茨城県内では「常陸型甕」とも称される。これらの甕は基本的に同様のものと理解される。形状的には口縁部が「く」の字に開き、口唇部が摘み上げられる。胴部はナデ整形またはヘラケズリ整形され、胴部下半に粗い縦方向のミガキが施されるものが多い。全体に薄手のつくりとなっている。

その分布範囲は千葉県下総地域・茨城県全域・栃木県東部に限定されている。隣接する福島県・群馬県・東京湾沿岸から千葉県下総西部では、基本的に煮沸具として一般的な使用は行われていない。千葉県北部の印旛沼周辺では「常総型甕」が優位を占める傾向が見られるのに対して、南関東では「武蔵型甕」が中心となり、東京湾岸の千葉市から東葛地域では一部混在が認められるものの「武蔵型甕」が優位になる。

「常総型甕」についてはその出自、製作技法またはその製作工人などについては不明な点が多く、一概に「常総型甕」が須恵器生産技法と同一技法によるものとは限定することはできないが、本遺跡出土資料を基に、9世紀代の「常総型甕」の製作技法として叩き手法の存在について考察してみたい。

1　「常総型甕」の整形手法別分類

「常総型甕」の初源は6世紀代に遡り、9世紀末～10世紀初頭頃には姿を消す。その器形及び整形手法は、以下の種類に分類することができる。

器　形

A類　やや厚手で、胴部の最大径を中位から下位に有するもの（6～8世紀）

B類　やや厚手で、肩部から口縁にかけてやや頸部が立つもの（6～8世紀）

C類　薄手で、頸部が短く胴部から直接口縁が外反し、胴部の最大径が中位よりも上位に位置するもの（8世紀末～9世紀代）

D類　小形化するもの（9世紀後半代）

E類　薄手で、胴部がやや直線的な寸胴または円筒状になるもの（9世紀後半代）

F類　薄手で、羽釜状に鍔が付され、ナデ整形が行われるもの（10世紀前半代）

整　形

①　外面にナデ整形を施し、胴部中位から下半にかけて粗い縦方向から斜め方向のミガキを施し、内面はヘラナデ及びナデ整形が行われているもの。

②　外面全体にヘラケズリを行った後に、胴部下半に粗いミガキを施し、内面はヘラナデ及びナデ整形を行うもの。

③　外面胴部上半はナデ整形され、底部付近にヘラケズリが行われているが、内外面に円形の凹凸（指頭痕もしくは当具痕）を残すもの。

④　叩き整形を行った後にナデ整形を行い、外面の叩き目痕をナデにより消しているが、内外面にわずかながら叩き目が残るもの。

⑤　叩き整形を行った後に、全体にヘラケズリを行い、内面に円形の凹凸が残るもの。

⑥　全体にヘラケズリのみで整形され、内面はヘラナデ及びナデ整形を施すもの。

⑦　外面上半に叩き目痕が明瞭に残り、内面はナデ整形を施すもの。

器形では、A・B類は古墳時代後期に見られるもので、C・D・E・F類は8世紀以降、9世紀から10世紀初頭に

通有に見られるものである。

整形の特徴では、外面に磨きを施すものが6世紀代に出現し、ヘラケズリを全面に施すものが新しくなる傾向がある。さらに、叩き目痕を有するものはヘラケズリの段階に増加する傾向があり、底部に砂目を有する例も出現する。

2　下坂田塙台遺跡出土の「常総型甕」

今回調査を実施した下坂田塙台遺跡は茨城県のほぼ中央に位置し、筑波山南麓から霞ヶ浦北西岸に位置する。平安時代・9世紀代の住居跡は8軒確認され、そのうち、叩き手法による「常総型甕」を検出したのはSI08・SI09の2軒である。

SI02　01･02･03の甕はヘラケズリ手法により整形されているが、口縁及び口唇部の摘み上げの形状より「常総型甕」C類⑥と判断した。供伴する遺物としては、ロクロ整形による有台埦05・有台皿06・新治窯跡群産須恵器無台坏07がある。05は内面黒色処理・ミガキが施されている。07は体部下端に手持ちヘラケズリが行われている。いずれも長石･石英･雲母を多量に含む。この遺構については9世紀中葉から後葉にかけてと判断される。

SI07　甕02は外面胴部に僅かに凹凸が確認出来るが、ナデにより完全に消し去られている。内面には小口痕が観察されヘラナデが行われていることからC類①とした。供伴する遺物としてはいずれもロクロ整形による新治窯跡群産須恵器の無台坏07・09、有台皿08があり、長石・石英・雲母を多量に含む。この遺構については9世紀前葉と判断した。

SI08　甕01の特徴としては、叩き整形の後ヘラケズリにより整形するもので、内面には当て具痕がわずかに確認できるものの、そのほとんどがナデ整形により擦り消されている。C類⑤に相当する。甕02・03は、胴部上位寄りのミガキが観察されることからC類①に相当する。04は胴部上位に斜方向の平行叩きが明瞭に確認されることからC類⑦に相当する。供伴する遺物として新治窯跡群産の須恵器坏・皿・盤・甕があり、長石・石英・雲母を多量に含む。これらの遺物から9世紀前葉と判断される。

SI09　甕01は胴部の張りが弱くやや円筒形を呈するが、口縁及び口唇部の摘み上げの形状より「常総型甕」と判断した。胴部上半には横方向の平行叩きが明瞭に施され、内面には当て具痕が確認できることからE類⑦と判断した。供伴する遺物としては、内面黒色処理・ミガキが施されている土師器無台坏03・有台皿04があり、いずれもロクロ整形である。この遺構については9世紀後葉と思われる。

SI12　甕03は小形の新治窯跡群産須恵器である。形状的には「常総型甕」と言えるであろう。外面はヘラケズリにより整形されており、内面はナデが施されていることからD類⑥と判断した。供伴する遺物としては内面黒色処理・ミガキが施されている土師器無台坏01・02があり、01には外面に刻書が見られ、体部下端は手持ちヘラケズリが行われている。この遺構については9世紀前葉と判断した。

遺構外出土04の羽釜は口唇部の形態が「常総型甕」と類似するためにF類とした。

以上の分類から、叩き手法による「常総型甕」の出現は9世紀におけるものと判断され、胎土中に多量の雲母を混入する点から新治窯跡群産の須恵器との関連性を強く感じさせる。

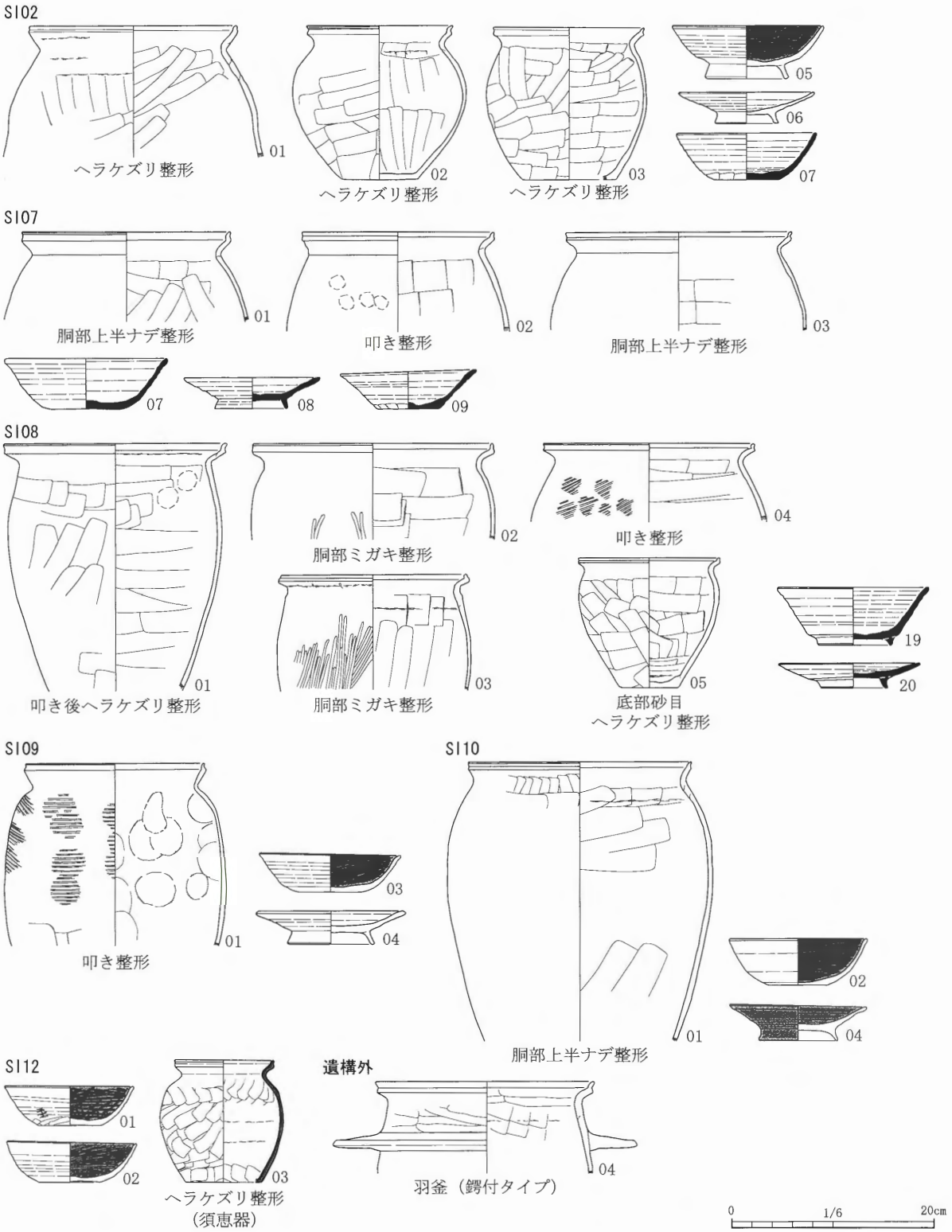
3　過去の調査によって得られた叩き手法を用いる「常総型甕」の再検討

紙幅の都合及び時間的な制約により悉皆的な調査を行っていないが、管見に触れた資料について提示しておく。

千葉県成田市南羽鳥正福寺遺跡（宇田1996）　第2地点において火葬墓が18基検出され、1・3・8～12・15・16・18号の10基の火葬墓において「常総型甕」が蔵骨器として用いられている。このうち、1号火葬墓から叩き手法を用いる「常総型甕」が2点出土している。詳細な遺物の観察がなされていないために明瞭ではない

が、掲載図から判断すると1は格子目叩きが胴部上半に施され、下位はナデ整形が行われる。内面には円形の当具痕を残す。2は胴部上半に平行叩きが施され、下半にはヘラケズリが施される。内面には楕円形の当具痕が残されている。分類ではいずれもC類⑦に相当するが、1の格子目叩きは他に類例を見ない。遺構の時期は明瞭ではないが、供伴する灰釉陶器瓶類から9世紀後半代が想定できる。

土浦市栗山窯跡（吉沢・日高 1997）　灰原から出土している105は、外面胴部上半はナデ整形、中位から下半にかけては縦方向の粗いミガキが施される。内面は底部付近でヘラナデが見られるが、中位付近では楕円形の



第129図　下坂田塙台遺跡出土の「常総型甕」と供伴遺物

凹凸が残されている。報告書では指頭圧痕としているが、当具痕の可能性が高い。本窯は新治窯跡群産の一群に含められる。報告者も指摘しているが、栗山窯の灰原から出土した点は須恵器製作工人と「常総型甕」の関連性を考える上で重要な資料と考える。この「常総型甕」は形状からC類④と判断される。また、灰原出土遺物から窯の操業時期は7世紀末～8世紀初頭と判断され、遺物も8世紀の遺物の可能性がある。一方、近接する根鹿北遺跡（後述）では、粘土採掘坑から9世紀代のほぼ同様の形状をした「常総型甕」が出土しており、栗山窯を7世紀末～8世紀初頭のみの操業と限定するにはやや齟齬を感じる。

日立市遠下遺跡（佐藤・大平 1975）　31号住居跡から指頭圧痕の残された「常総型甕」が出土している。時期はⅢ期・9世紀以降としている。また、F類羽釜が1点出土しているが、塙台遺跡で出土した羽釜とは形状が異なるものの、羽釜が混在する時期としては9世紀後葉～10世紀前半と判断される。

笠間市長峰西遺跡（大賀ほか 2010）　CUT5-12号住居跡及びCUT6-4号住居跡で叩き目が残る「常総型甕」が出土している。CUT5-12号住居跡1は外面上半に平行叩きの痕跡が残り、下端ではヘラケズリが行われる。内面は横方向のヘラナデが施され、明瞭な当具痕は擦り消されたものか観察できない。C類⑦。CUT6-4号住居跡1は外面全体がヘラケズリされるものの、内面に円形の凹凸が残り当具痕と想定される。C類⑥。前者は9世紀前半、後者は9世紀後半の所産である。

千葉県柏市花前Ⅱ-1・2遺跡（鈴木・郷堀・田井 1985）　常磐自動車道路の建設に伴い実施された調査である。Ⅱ-1遺跡013・031・032号住居跡より出土した43は、外面胴部上半はナデ整形。下半は縦方向の粗いミガキ。内面に弧状の（ナデと報告されている）痕跡が図化されている。これは内面の当具痕の可能性が高い。C類⑤の可能性がある。Ⅱ-2遺跡012号住居跡3の遺物には外面胴部に平行沈線状の痕跡が図化されており、ナデにより叩きの痕跡を消す時に残された可能性がある。C類⑤か。Ⅱ-2遺跡056号土坑24は平行叩きを行った後に、内外面共にナデを行い叩き目を消している。C類⑤に相当する。

土浦市扇ノ台遺跡（平岡 1999）　27号住居跡4の遺物がある。外面胴部はナデ整形されるが器面には凹凸が残る。E類⑤である。供伴遺物では須恵器有台坏・無台坏・高坏があり、9世紀前葉の遺構と判断される。33号住居跡6は外面上半がナデ整形され、報告では指頭圧痕とされるが、器面に凹凸が全面に残される。下半はヘラケズリ、内面はヘラナデされている。C類⑤に当る。供伴遺物では内面黒色処理される無台坏が出土しており、9世紀中葉以降と判断される。

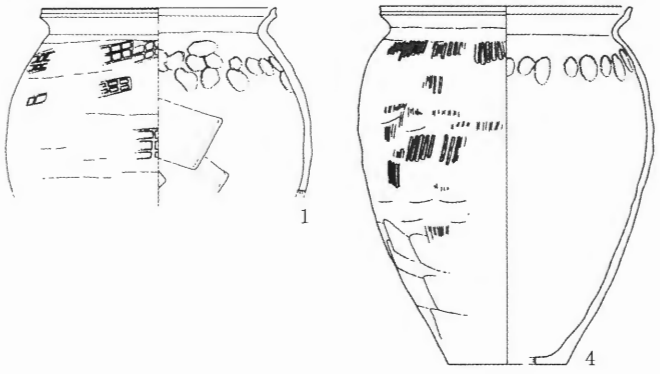
千葉県柏市天神向原遺跡（渡辺 1990）　18号住居跡4の遺物がある。カマドからの出土で、外面胴部上半はナデ整形、下半はヘラケズリ。内面は指による圧痕が見られる。C類⑥。供伴遺物から9世紀前半と判断される。さらに、26号住居跡では土師器甕で13の平行叩き、14の平行叩きの後ヘラケズリ、15の底部砂目で、胴部下端にはヘラケズリの後縦方向のミガキが施されている。いずれも破片で器形を知り得ないが、「常総型甕」と須恵器の関係を見る上で重要な遺物である。同住居跡からは9世紀後半から10世紀に近い遺物が出土している。

筑西市炭焼戸東遺跡（伊藤・田中 2009）　18号住居跡92は外面がナデ整形され、内面には円形の当具痕が残される。E類⑤。供伴遺物の内面黒色処理の無台坏から9世紀後半と判断される。

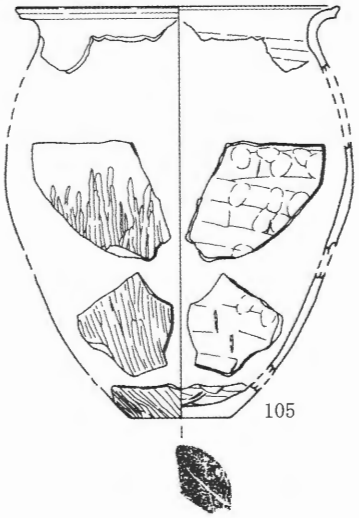
土浦市長峰遺跡（黒澤・関口 1997）　4号住居跡2は胴部上半にナデ整形を行い、輪積部分の内外面に指頭圧痕が施され、下半には粗いミガキが施される。C類④。同住居跡は出土遺物から8世紀末頃と想定される。6号住居跡14は内外面に円形の凹凸が見られるもので、下半はヘラケズリが行われる。D類⑦。供伴遺物から住居跡は9世紀後葉と判断される。8号住居跡出土16・18は胴部上半の資料であり、全容は不明であるが内外面共に指頭による圧痕が観察される。

土浦市根鹿北遺跡（関口ほか 1997）　栗山窯と近接する遺跡である。集落の他に粘土採掘坑が検出されており、同採掘坑からも多量の「常総型甕」がまとまって出土している。33号住居跡5は外面に円形の凹凸が多く

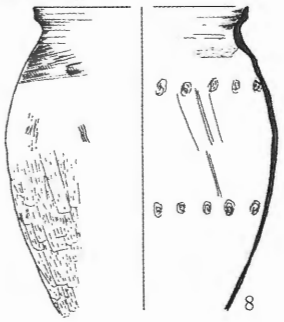
千葉県成田市南羽鳥正福寺遺跡第2地点
1号火葬墓



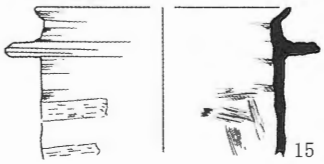
土浦市栗山窯跡
灰 原



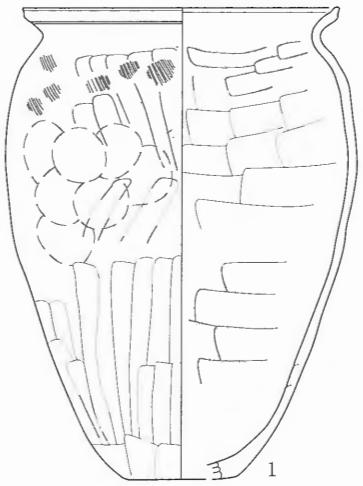
日立市遠下遺跡
31号住居跡



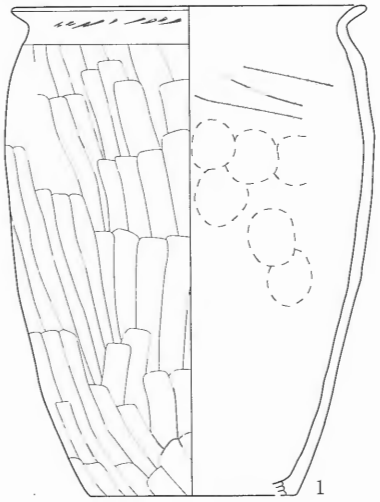
33号住居跡



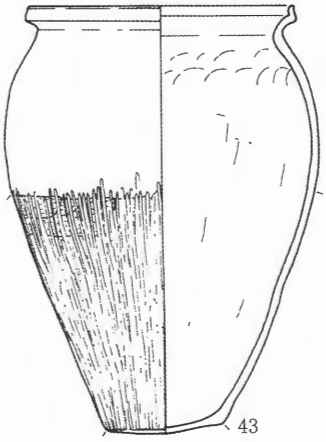
土浦市長峰西遺跡
CUT5 12号住居跡



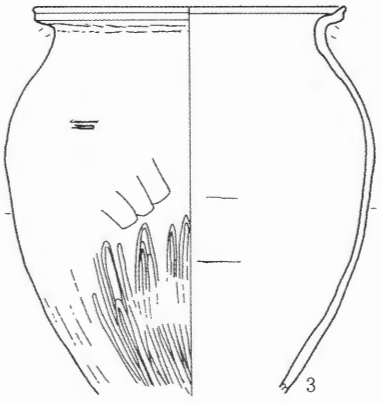
CUT6 4号住居跡



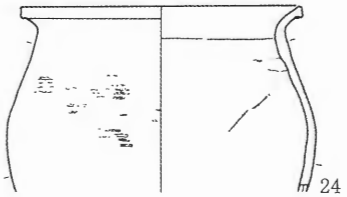
千葉県柏市花前Ⅱ-1遺跡
013号住居跡

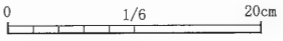


花前Ⅱ-2遺跡
012号住居跡

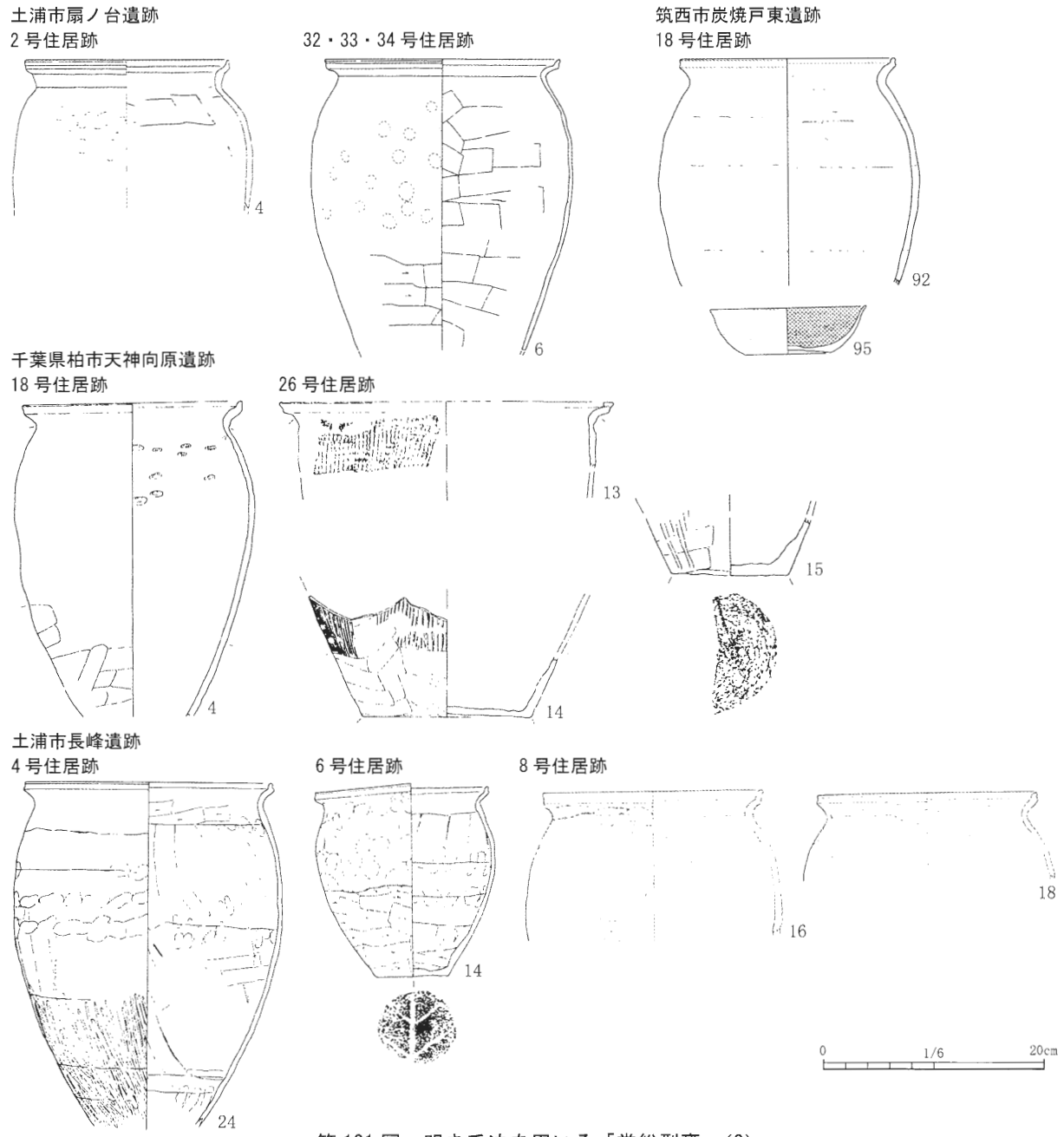


056号土坑





第130図　叩き手法を用いる「常総型甕」(1)

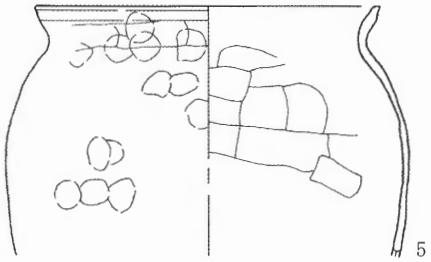


第131図　叩き手法を用いる「常総型甕」(2)

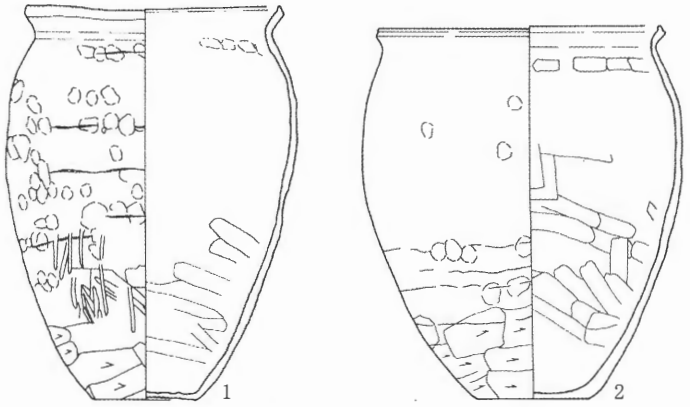
残されている。内面は横方向のヘラナデ。薄手でやや寸胴に近いタイプで、E類に含められるものであろうか。整形は④。報告では供伴遺物から10世紀代のものと想定している。図は提示しなかったが、F類とした羽釜の鍔部分が本住居並びに35号住居跡から出土している。36号住居跡1・2・3・4の4点を示した。いずれも底部が砂目となる資料で、外面に円形の凹凸が残され、報告では指頭圧痕と報告されている。内面はヘラナデされる。概ねC類④に含まれるものと判断される。39号住居跡は8・9のC類④。11はE類④で胴部がやや寸胴になる。12は外面にナデ整形を行うが円形の凹凸が残り、下半はナデ整形の後にヘラケズリされている。内面はナデ整形。外面胴部に「丈部真麿」の墨書が記されている。C類④か。同住居からは瓦塔の出土があり、遺構は9世紀前葉から中葉頃と判断されている。7号土坑1は口縁部・底部ともに欠損する資料であるが、外面上半に平行叩きの痕が残され、下半はヘラケズリが施される。内面はナデ整形され、輪積痕が残る。雲母の混入は記載されていない。11号土坑9はやや寸胴になり、外面は上半でナデ整形が行われるが円形の凹凸が見られる。下半はヘラケズリが施される。内面はヘラナデ、円形凹凸、輪積痕が残される。E類④。粘土採掘坑16はやや小形の「常総型甕」

土浦市根鹿北遺跡

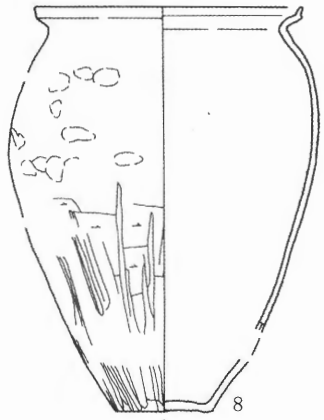
33号住居跡

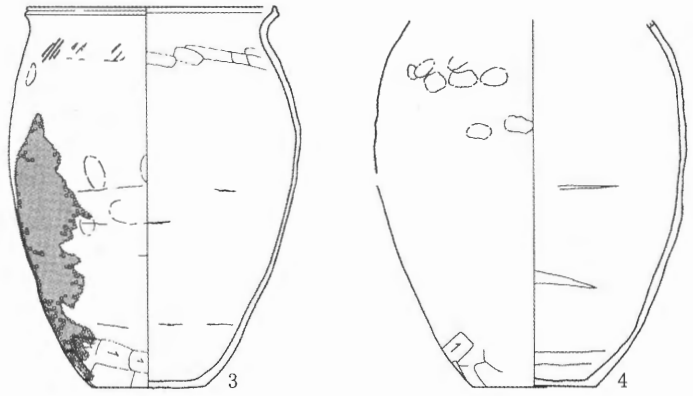


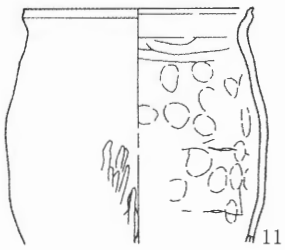
36号住居跡

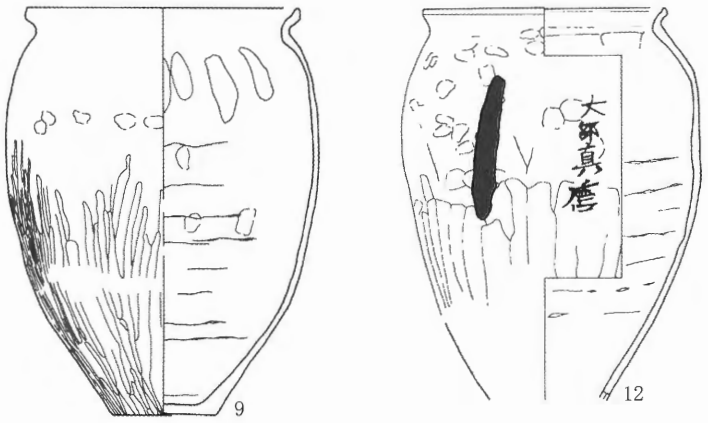


39号住居跡

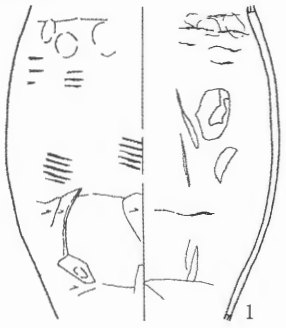




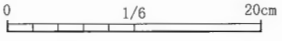




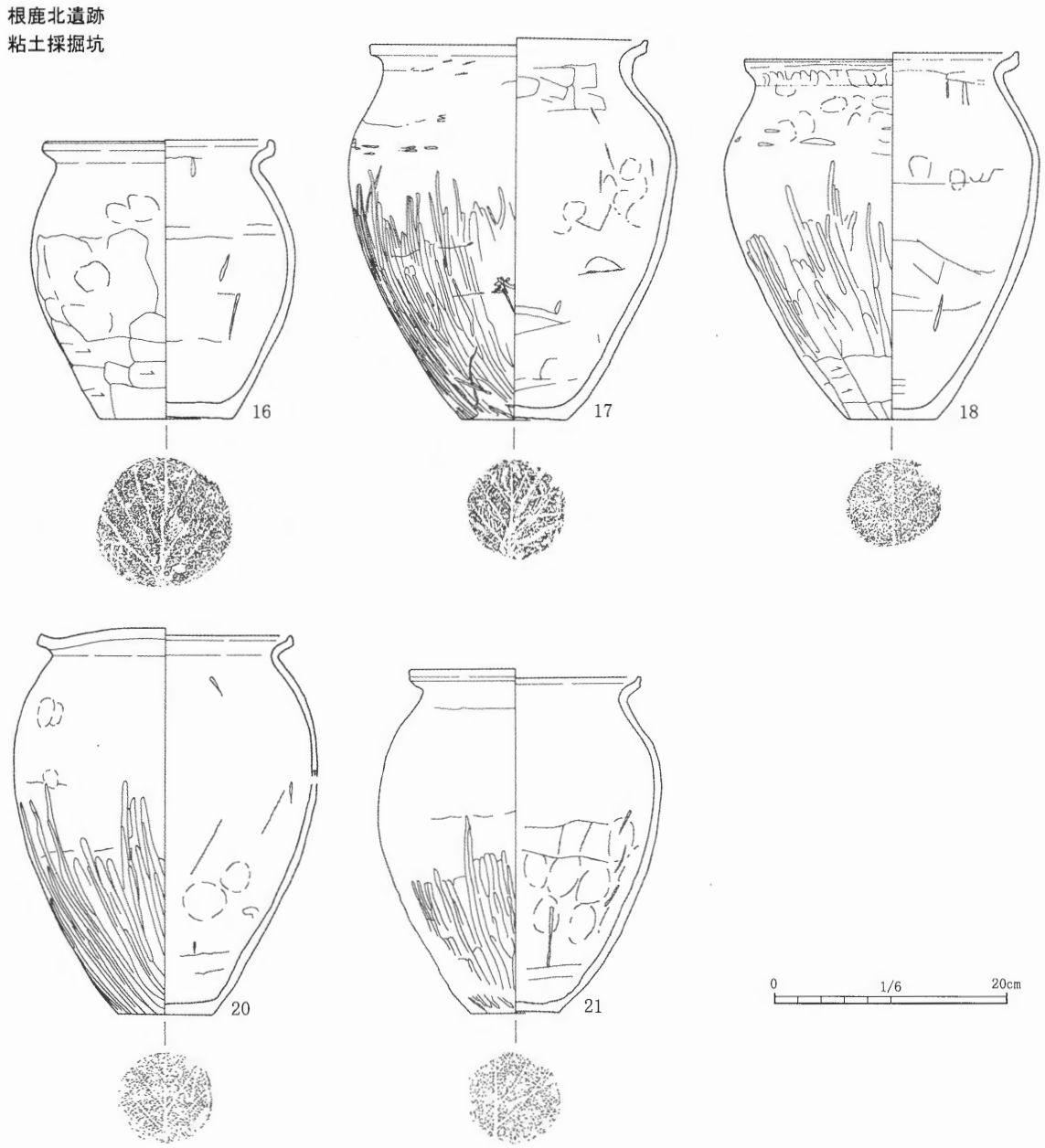
7号土坑



11号土坑



第132図　叩き手法を用いる「常総型甕」(3)



第133図　叩き手法を用いる「常総型甕」(4)

で外面上半部はナデを行うが円形の凹凸が残る。胴部下半は横方向のヘラケズリが施される。内面はヘラナデ。底部は木葉痕。D類⑥。17・18・20・21は大形で上位に最大径を有する「常総型甕」である。いずれも外面上半部にナデを施した後、胴部下半には粗い縦方向のミガキが施されている。17・21では内面のみに円形の凹凸が、18・20では内外面に円形の凹凸が見られる。

小　結

「常総型甕」の定義としては、前述したとおり、土師器の甕で口縁部が「く」の字に開いた後に口唇端部がS字状に摘み上げられるものを条件として資料を集成した。

叩き手法を用いて製作されている「常総型甕」の例は、茨城県笠間市長峰西遺跡CUT5-12号住居跡1・CUT6-4号住居跡1、筑西市炭焼戸東遺跡SI8-92、本遺跡、土浦市扇ノ台遺跡33・34号住居跡6、千葉県印旛沼周辺の成田市南羽鳥正福寺遺跡第2地点1号火葬墓1・2がある。茨城県中西部域から千葉県の印旛沼周辺域にわたる

ことが確認できる。東京湾岸の市原市や市川市の国府域では「常総型甕」自体出土量は少なく、「武蔵型甕」が主流となる。

カマドに煮沸具として用いるには、通常、須恵器は適さない。土師器がカマドに掛けられて出土する例が大半で、須恵器が煮沸具として出土する例は少ない。これは、焼き締められた須恵器では、火に当ると器面が剥落（破損）するためで、おのずと煮沸具としては素焼きの土師器の使用が主体となり、中世・近世の焙烙・内耳鍋にも通ずる。さらにカマドに掛ける土器としては熱効率の高い薄手の土器が必要になり、「常総甕型」、「武蔵型甕」いずれの器壁も薄く仕上げられている。薄手の器壁を製作するために「武蔵型甕」ではヘラケズリ手法が用いられるが、「常総型甕」では器面がナデ整形により大半が滅失しており、明瞭な製作技法として確認できないものが多い。しかし本遺跡において検出されたものの器面には偶然にも、あるいは意識的に叩き目痕が残されていた。今回、叩き手法が採用される「常総型甕」を近隣の遺跡を中心に報告書を見直したところ、複数の遺跡で明瞭に叩き目痕が残る遺物が確認できた。これらは、9世紀代の須恵器甕の製作技法に類似するもで、須恵器製作工人による製作の可能性が高い。「常総型甕」で叩き手法が確認された遺物の時期は8世紀から9世紀に集中する。「常総型甕」の胎土中に雲母を多量に混入する点も含めて、新治窯跡群産の須恵器の胎土・操業時期と同様である。新治窯跡群産須恵器は、その生産が終焉を迎えるのは9世紀後半で、8世紀から9世紀前半にかけては印旛沼・手賀沼周辺域にも多量に搬入されている。また、底部にはほとんどの場合木葉痕が観察されるが、少数ではあるものの砂目が残されているものもある。一方で、「常総型甕」の内面に残されている凹凸を、指頭圧痕とする報告が多いが、外面を叩き整形する際の当具痕の可能性が想定される。今回は、このような指頭圧痕とされる遺物についても叩き整形による当具痕、もしくはナデによって擦り消された当具または叩き目の痕跡の可能性があると見て集成した。なお、管見に触れるものでは青海波文様は確認されていない。

ところで、外面にヘラケズリを多用する「常総型甕」については茨城県北部域に比較的多く、中部～南部域では下半にミガキを施すものが多くなる傾向を示すが、この胴部下半にミガキを施す手法については、6世紀段階ですでに出現しており、叩き手法の出現とは別系統と判断される。叩き手法を用いる「常総型甕」は、カマド構造の変化によって甕の形状が変化し、より熱効率の良い土器を製作するにあたり生みだされたものと思われる。ケズリ手法が主流となる9世紀代を中心とする時期、叩き手法を有する須恵器製作集団の中で、新治窯跡群を中心として製作されたものと考えられる。

【参考引用文献】

赤塚次郎　1979「円筒埴輪製作覚書」『古代学研究』第90号　古代學研究會

安藤鴻基ほか　1988『千葉県成田市所在 竜角寺古墳群第101号古墳発掘調査報告書』 千葉県立房総風土記の丘編・千葉県教育委員会

石川　功編　2008『高崎山2号墳と桜川流域の後期古墳』第13回企画展 土浦の遺跡13展示解説パンフレット　上高津貝塚ふるさと歴史の広場

石橋　充　1995「常総地域における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学 先史学・考古学研究』第6号　筑波大学歴史・人類学系

石橋　充　2004「『筑波山系の埴輪』の分布について」『埴輪研究会誌』第8号　埴輪研究会

一瀬和夫　1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」一瀬編『大水川改修にともなう発掘調査概要』Ⅴ　応神陵古墳外堤Ⅰ・古室遺跡Ⅲ　大阪府教育委員会

稲村　繁　1999『人物埴輪の研究』 同成社

稲村　繁　2002「常陸における埴輪の変遷―常陸中・北部を中心に―」茂木雅博ほか編『常陸の円筒埴輪』―茨城大学人文学部考古学研究報告第5冊―　茨城大学人文学部考古学研究室

犬木　努　1995「下総型埴輪基礎考―埴輪同工品論序説―」『埴輪研究会誌』第1号　埴輪研究会

岩崎卓也　1986「遺跡の環境―坂田古墳群」増田精一編『武者塚古墳』武者塚古墳・同2号墳・武具八幡古墳の調査　武者塚古墳調査団編・新治村教育委員会

宇田敦司編　1996『南羽鳥遺跡群』Ⅰ　成田カントリークラブゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）財印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第112集　財印旛郡市文化財センター編・成田スポーツ開発株式会社

大賀　健　2011「まとめ―出土遺物の年代観」大賀編『杉ノ井遺跡（旧泉台遺跡）』石岡市埋蔵文化財調査報告書　石岡市教育委員会・有限会社勾玉工房Mogi

大賀 健ほか　2009『赤弥堂遺跡（東地区）』―県営畑地帯総合整備事業（担い手支援型）坂田地区 埋蔵文化財発掘調査報告書―　土浦市教育委員会・有限会社勾玉工房Mogi

大賀 健ほか　2011『赤弥堂遺跡（西地区）』―県営畑地帯総合整備事業（担い手支援型）坂田地区 埋蔵文化財発掘調査報告書―　土浦市教育委員会・有限会社勾玉工房Mogi

大塚初重・小林三郎編　1995『三昧塚古墳発掘調査報告書』 明治大学編、玉造町教育委員会・玉造町遺跡調査会

大塚初重ほか　1987『長野県史跡 土口将軍塚古墳』―重要遺跡確認緊急調査―　土口将軍塚古墳調査会編、長野市教育委員会・更埴市教育委員会

小野塚拓造　2010「茨城県土浦市所在坂田塙台11号墳の測量調査報告」『筑波大学 先史学・考古学研究』第21号　筑波大学人文社会科学研究科歴史・人類学専攻

加藤一郎　2003「関東における中期古墳の円筒埴輪」『埴輪―円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析―』第52回埋蔵文化財研究集会発表要旨集　埋蔵文化財研究会

鐘方正樹　1997「中期古墳の円筒埴輪」鐘方編『史跡大安寺旧境内』Ⅰ―杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告―　奈良市埋蔵文化財調査研究報告第1冊　奈良市教育委員会

鐘方正樹　1999「2条突帯の円筒埴輪」『埴輪論叢』第1号　埴輪検討会

鐘方正樹　2003「円筒埴輪の地域性と工人の動向」『埴輪―円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析―』（前掲）

川西宏幸　1978「円筒埴輪総論」『考古學雑誌』第64巻第2号　日本考古学会（川西1988『古墳時代政治史序説』塙書房 に再録）

木川浩司　2001「君津・市原地域の円筒埴輪編年試論―千葉県の円筒埴輪編年①―」『埴輪研究会誌』第5号　埴輪研究会

忽那敬三　2010『王の埴輪―玉里舟塚古墳の埴輪群―』2010年度特別展展示図録　明治大学博物館

車崎正彦　1998「埴輪からみた前期古墳から中期古墳へ」『前期古墳から中期古墳へ』第3回東北・関東前方後円墳研究会大会シンポジウム発表要旨資料　東北・関東前方後円墳研究会

車崎正彦ほか　2002「第2回研究発表会討議の記録」『埴輪研究会誌』第6号　埴輪研究会

小玉秀成　2004『霞ヶ浦の弥生土器』平成16年度特別展展示図録　玉里村立史料館

小橋健司　2008「千葉県市原市姉崎山新遺跡の櫛描文埴輪」『埴輪研究会誌』第12号　埴輪研究会

小橋健司　2010「千葉県市原市姉崎二子塚古墳の櫛描文埴輪」『埴輪研究会誌』第14号　埴輪研究会

小橋健司　2011「内裏塚古墳と畑沢埴輪生産遺跡」『埴輪研究会誌』第15号 杉山晋作先生退任記念　埴輪研究会

小浜　成　2003「円筒埴輪の観察視点と編年方法―畿内円筒埴輪編年の提示に向けて―」『埴輪論叢』第4号　埴輪検討会

小林三郎編　2000『玉里村権現山古墳発掘調査報告書』 玉里村教育委員会

小林三郎編　2001『三昧塚古墳第3次発掘調査報告書』 明治大学編、玉造町遺跡調査会・玉造町教育委員会

斉藤　新　2000a「古墳を歩く1―古墳の記録」『フィールドノート』vol.12　ぶんかざいほごねんぽう1999　財ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

斉藤　新　2000b「ひたちなか市川子塚出土の円筒埴輪について（1）」『埴輪研究会誌』第4号　埴輪研究会

斉藤　新　2001「茨城県北部の円筒埴輪」『埴輪研究会誌』第5号　埴輪研究会

斉藤　新ほか　2003「大和村高森古墳群―高森1号墳採集の埴輪について」『領域の研究』―阿久津久先生還暦記念論集―　阿久津久先生還暦記念事業実行委員会・纂集堂

塩谷　修　1997「霞ヶ浦沿岸の埴輪―5・6世紀の埴輪生産と埴輪祭祀―」千葉隆司編『霞ヶ浦の首長―古墳にみる水辺の権力者たち―』第19回特別展展示解説書　霞ヶ浦町郷土資料館

塩谷　修　2010「土浦市域の古墳群」佐々木憲一・田中 裕編『常陸の古墳群』 六一書房

塩谷　修編　1987『般若寺遺跡（西屋敷地内）・竜王山古墳 般若寺遺跡（宍塚小学校地内）発掘調査概報』 土浦市遺跡調査会編・土浦市教育員会

設楽博己　1981「調査成果の概要―根本古墳」増田精一編『筑波古代地域史の研究』昭和54～56年度文部省特定研究経費による調査研究概要　筑波大学

白井久美子　2002『古墳から見た列島東縁世界の形成』千葉大学考古学研究叢書2　平電子印刷所

杉山晋作ほか　2006『茨城県かすみがうら市　富士見塚古墳群』考古学研究室報告乙種 15 冊　国士舘大学考古学研究室編・かすみがうら市教育委員会
鈴木　徹編　2009『上向イ田窯』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 38 集　豊田市教育委員会
城倉正祥　2009『埴輪生産と地域社会』　学生社
高橋康男　1998『市原市五霊台遺跡』(財)市原市文化財センター調査報告書第 64 集　細田哲平・東日本建設(株)・(財)市原市文化財センター
田中裕貴・高橋和成　2002「ひたちなか市川子塚古墳」茂木ほか編『常陸の円筒埴輪』(前掲)
田中　裕　2012「古墳と水上交通―茨城県域とその周辺及び「畿内」の古墳立地を比較して―」『東日本における前期古墳の立地・景観・ネットワーク』第 17 回東北・関東前方後円墳研究会大会シンポジウム発表要旨資料　東北・関東前方後円墳研究会
(財)千葉県教育振興財団文化財センター　2010「文化財センター速報」平成 22 年 12 月
千葉隆司編　1997『霞ヶ浦の首長―古墳にみる水辺の権力者たち―』第 19 回特別展展示解説書　霞ヶ浦町郷土資料館
辻川哲郎　2003「突帯―突帯間隔設定技法を中心として―」『埴輪―円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析―』(前掲)
伝田郁夫　2001「霞ヶ浦北西部の埴輪に関する 2、3 の考察」『埴輪研究会誌』第 5 号　埴輪研究会
中島和彦　1992「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題―埴輪の生産と供給―『断続ナデ技法』の再評価」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』1991　奈良市教育委員会
沼澤　豊　2006『前方後円墳と帆立貝古墳』考古学選書 52　雄山閣
沼澤　豊　2010「中小古墳における形態と規模の企画性」『研究連絡誌』第 71 号　(財)千葉県教育振興財団文化財センター
萩原恭一　1994「房総における埴輪の変遷と分布」『千葉県文化財センター研究紀要』15　(財)千葉県文化財センター
日高　慎　2001「妙見山古墳の埴輪―その位置づけと高浜入り周辺の埴輪生産―」『玉里村立史料館報』第 6 号　玉里村立史料館
日高　慎　2003「霞ヶ浦周辺の円筒埴輪一編年研究をおこなうための前提作業―」『埴輪研究会誌』第 7 号　埴輪研究会
(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社　2005・2006『フィールドノート』vol.17・18 ぶんかざいほごねんぽう 2004・2005
平岡和夫編　2001『高崎山古墳群西支群第 2 号墳・第 3 号墳』　山武考古学研究所・新治村教育委員会
藤井幸司　2003「円筒埴輪製作技術の復元的研究―窖窯焼成導入以降を中心に―」『埴輪―円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析―』(前掲)
本田信之　2002「玉里村神楽窪古墳出土の波状文を施す円筒埴輪―霞ヶ浦高浜入りを中心として―」『玉里村立史料館報』第 7 号　玉里村立史料館
埋蔵文化財研究会　2003『埴輪―円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析―』第 52 回埋蔵文化財研究集会発表要旨集
増田精一編　1981『筑波古代地域史の研究』昭和 54 ～ 56 年度文部省特定研究経費による調査研究概要　筑波大学
増田精一編　1986『武者塚古墳』武者塚古墳・同 2 号墳・武具八幡古墳の調査　武者塚古墳調査団編・新治村教育委員会
山田俊輔　2008「上毛野における畿内系埴輪の地域波及と展開」『古代文化』第 60 巻第 1 号　(財) 古代学協会
渡辺　誠　1984『縄文時代の漁業』考古学選書 7　雄山閣出版

第 5 章第 3 節関連

伊藤廉倫・田中暁穂　2009『炭焼戸東遺跡』―つくば明野北部工業団地侵入路埋蔵文化財発掘調査報告 3　茨城県筑西市教育委員会　有限会社勾玉工房 Mogi
宇田敦司　1996『南羽鳥遺跡群』Ⅰ　成田スポーツ開発株式会社・(財)印旛郡市文化財センター
大賀 健　1999『秋平遺跡・池平遺跡・中桜貝塚』―ザ・インペリアル・ゴルフクラブ建設に伴う埋蔵文化財報告書　江戸崎町教育委員会
大賀 健・大賀さつき・大越直樹　2010『長峰西遺跡』　笠間市教育委員会・有限会社勾玉工房 Mogi
大賀 健・大賀さつき・長谷川秀久・大越直樹　2010『赤弥堂遺跡（中央区）』　有限会社勾玉工房 Mogi・土浦市教育委員会
大賀 健・長谷川秀久・大越直樹・大賀さつき　2011『赤弥堂遺跡（西区）』　有限会社勾玉工房 Mogi・土浦市教育委員会
大賀 健・鈴木 徹・大賀さつき　2012『杉ノ井遺跡』　石岡市教育委員会・有限会社勾玉工房 Mogi
大川 清・鈴木公男・工楽善通　1996『日本土器辞典』　雄山閣
樫村宣行　1998「『常陸型甕』編年小考―茨城県南部を中心として」『列島の考古学』渡辺誠先生還暦記念論集　渡辺誠先生還暦記念論集刊行会
黒澤春彦・関口 満　1997『長峰遺跡』―田村・沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―第 3 集　土浦市教育委員会・土浦市遺跡調査会・田村・沖宿土地区画整理組合
古代生産史研究会　1997『東国の須恵器―関東地方における歴史時代須恵器の系譜―』'97 シンポジウム発表要旨・資料
佐々木義則　2007「常陸甕の生産と流通―奈良時代以前の様相」『婆良岐考古』第 29 号　婆良岐考古同人会
佐藤政則・大平達雄　1975『日立市遠下遺跡調査報告書』　日立市教育委員会
鈴木定明・郷堀英司・田井知二　1985『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ―花前Ⅱ-1・花前Ⅱ-2・矢船―　日本道路公団東京第一建設局・(財)千葉県文化財センター
鈴木 徹・長谷川秀久　2012『府中城跡』　石岡市教育委員会・有限会社勾玉工房 Mogi
関口 満ほか　1997「根鹿北遺跡」関口編『根鹿北遺跡・栗山窯跡』土浦市今泉霊園拡張工事事業地内埋蔵文化財調査報告書　土浦市遺跡調査会編、土浦市教育委員会
高橋一夫　2010「常陸型甕と武蔵型甕」『埼玉考古』第 45 号　埼玉考古学会
中村哲也　2003「"常陸型甕" 以前―桜川流域における古墳時代甕型土器の型式学的検討」『領域の研究』阿久津久先生還暦記念論集　阿久津久先生還暦記念事業実行委員会
西川修一　1996「南関東の甕」『鍋と甕 そのデザイン』第 4 回東海考古学フォーラム　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
平岡和夫　1999『扇ノ台遺跡』―宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―　土浦市教育委員会・山武考古学研究所
吉沢 悟・日高 慎　1997「栗山窯跡」関口編『根鹿北遺跡・栗山窯跡』(前掲)
渡辺健二　1990「天神向原遺跡」『大井東部地区遺跡群』―大井東部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査―　大井東部地区遺跡群発掘調査会・沼南町教育委員会

第47表　ピット計測表

遺構名	グリッド	平面形	規模（cm）			柱痕跡	時期	挿図No.	備考
			長径	短径	深さ				
P01	欠番（SB03-P2に振り替え）								
P02	欠番（SB03-P3に振り替え）								
P03	2区K1	円形	60	60	24	有（幅40cm）	古代	第93図	
P04	2区K1	円形	76	72	27	有（幅30cm）	古代	第93図	
P05	2区K1	楕円形	76	57	78	有（幅22cm）	古代	第93図	SB03柱穴ヵ
P06	2区L1	円形	30	30	26	有（幅14cm）	古代	第99図	
P07	2区L1	楕円形	42	30	25	有（幅12cm）	古代	第99図	
P08	2区L1	円形	30	30	15	無	古代	第99図	
P09	2区L1	楕円形	24	18	11	有（幅10cm）	古代	第99図	土師器（古墳前期）12.5g
P10	2区L1	円形	48	42	41	有（幅10cm）	古代	第99図	
P11	2区J2	楕円形	42	36	26	有（幅20cm）	古代	第99図	
P12	2区I2	楕円形	54	36	18	有（幅18cm）	古代	第99図	
P13	2区M1	円形	36	36	35	無	古代	第99図	
P14	2区J2	円形	30	30	29	有（幅 9cm）	古代	第93図	
P15	2区J2	楕円形	36	60	49	有（幅20cm）	古代	第93図	SB03柱穴ヵ
P16	2区C1	円形	42	42	42	無	古墳前期	第39図	SI17に切られる
P17	2区C2	楕円形	72	60	44	無	中・近世	第7図	土師器（古墳）5.1g、埴輪94.7g、石器（剥片）10.4g
P18	2区J2・K2	楕円形	30	24	29	無	中・近世	第7図	
P19	2区K2	円形	36	30	27	無	中・近世	第7図	
P20	2区K2	楕円形	30	24	39	無	中・近世	第7図	
P21	2区K2	円形	33	30	15	無	中・近世	第7図	
P22	2区F1	円形	24	24	37	無	中・近世	第7図	
P23	2区E1	円形	30	30	26	無	中・近世	第7図	
P24	2区K2	推定円形	46	(39)	47	無	中・近世	第7図	
P25	2区L2	推定円形	46	(42)	45	無	中・近世	第7図	
P26	2区D2	円形	48	42	25	無	中・近世	第7図	
P27	2区D1	円形	(30)	33	62	無	中・近世	第7図	SA02-P3に切られる
P28	2区D2	楕円形	42	34	39	無	中・近世	第7図	
P29	2区C1	楕円形	54	36	55	無	中・近世	第7図	
P30	2区C1	楕円形	28	16	15	無	中・近世	第7図	
P31	2区C2	楕円形	48	36	46	無	中・近世	第7図	
P32	2区C2	円形	30	26	20	無	中・近世	第7図	
P33	4区G1	楕円形	72	60	36	有（幅20cm）	古代	第9図	縄文（早・前期）22.4g
P34	4区C2	楕円形	60	45	15	無	中・近世	第9図	
P35	4区D1	円形	42	39	38	無	中・近世	第9図	
P36	2区L1	円形	36	30	36	無	中・近世	第7図	SD02を切る
P37	2区L2	円形	39	33	27	無	中・近世	第7図	
P38	4区D2	推定楕円形	(42)	(18)	25	有（幅10cm）	古代	第9図	SD02を切る
P39	2区L1	円形	30	30	21	無	中・近世	第7図	
P40	2区J1	円形	39	36	55	無	中・近世	第7図	
P41	2区F1	円形	36	33	11	無	中・近世	第7図	
P42	2区E1	楕円形	60	36	37	無	中・近世	第7図	

写　真　図　版

調査区（調査前状況）

1　武者塚古墳から坂田塙台８号墳を望む

2　１区調査前状況 南から

調査区（調査前状況）

1　2区調査前状況 西から

2　4区調査前状況 東から

調査区（1区）

1　1区北側全景 北から

2　1区南側全景 南から

調査区（2区）

1　2区西側全景 西から

2　2区東側全景 東から

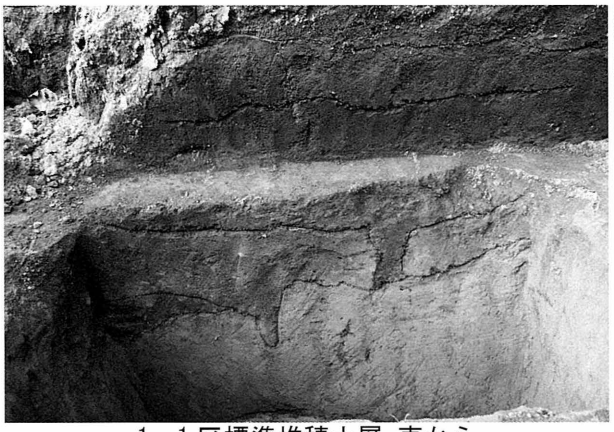
1　3区北側全景 北から

2　3区南側全景 南から

調査区（4区）

1　4区西側全景 西から

2　4区東側全景 東から

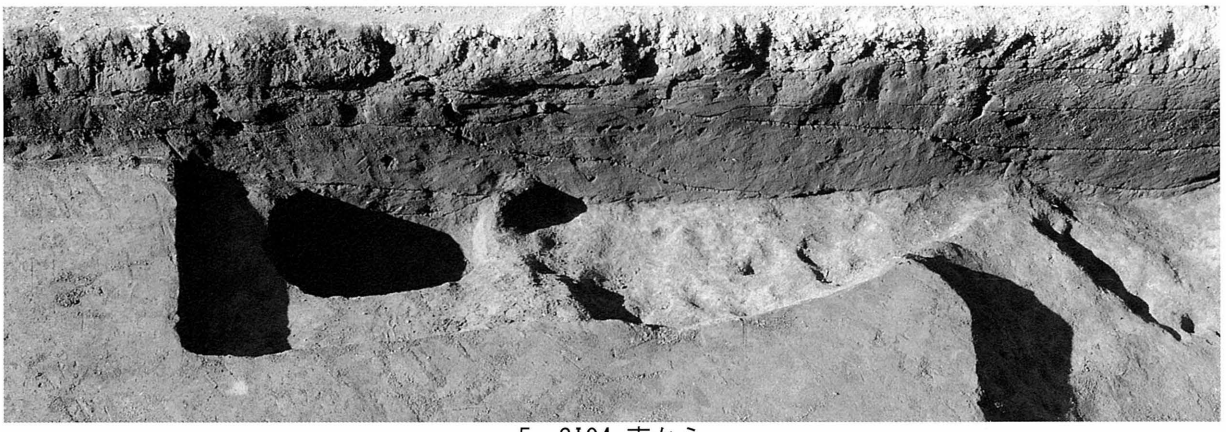


1　1区標準堆積土層 東から

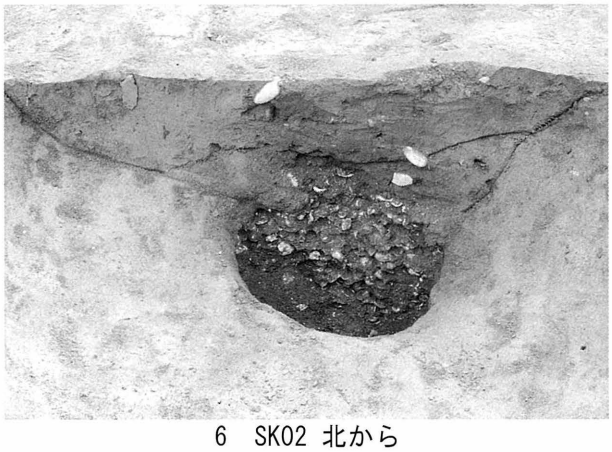
2　2区標準堆積土層 南から

3　3区標準堆積土層 東から

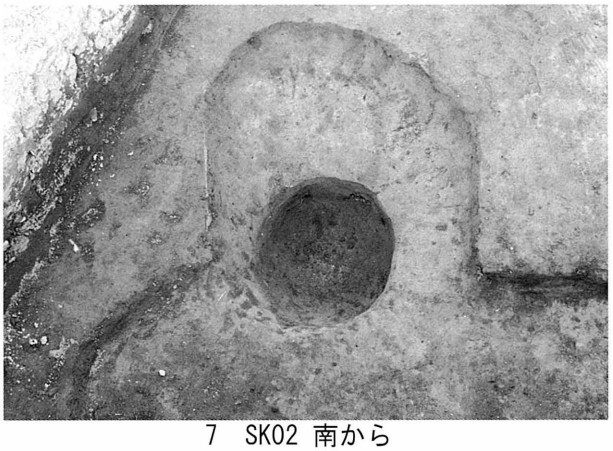
4　4区標準堆積土層 南から



5　SI04 東から

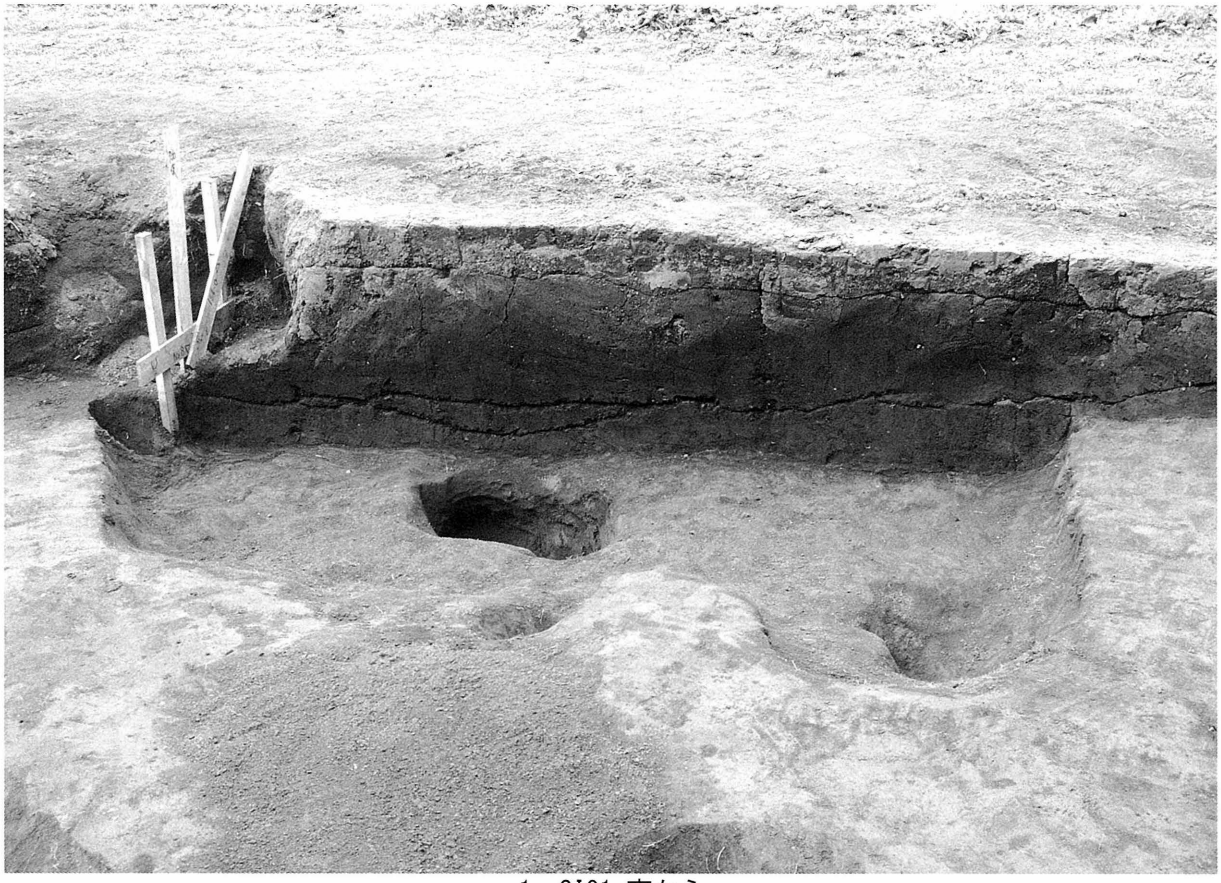


6　SK02 北から



7　SK02 南から

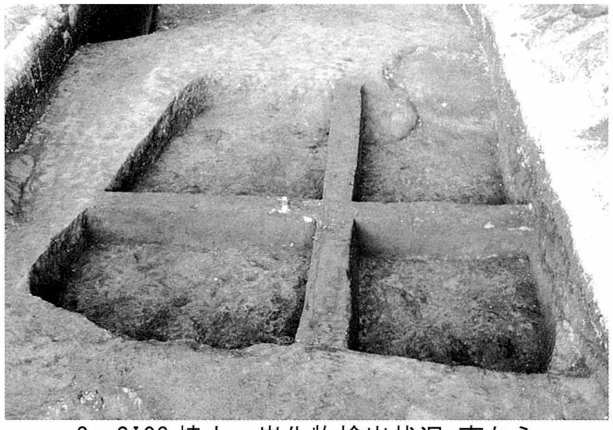
弥生時代（住居跡）



1　SI01 南から

2　SI16 東から

1　SI03 西から



2　SI03 焼土・炭化物検出状況 南から

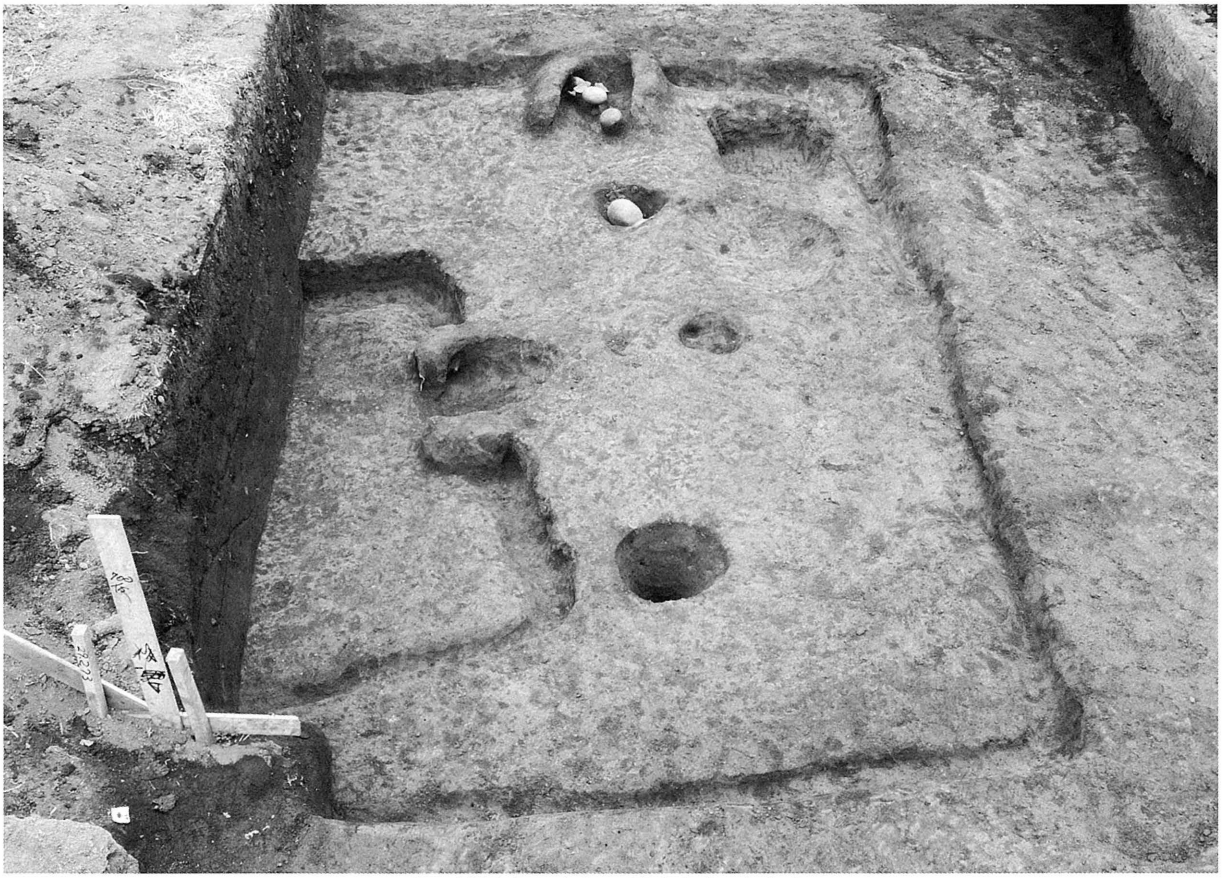
3　SI03 炉 南から

4　SI05 遺物出土状況 西から

5　SI05・SD07・08 南から

古墳時代（住居跡）

1　SI05・SD08 東から



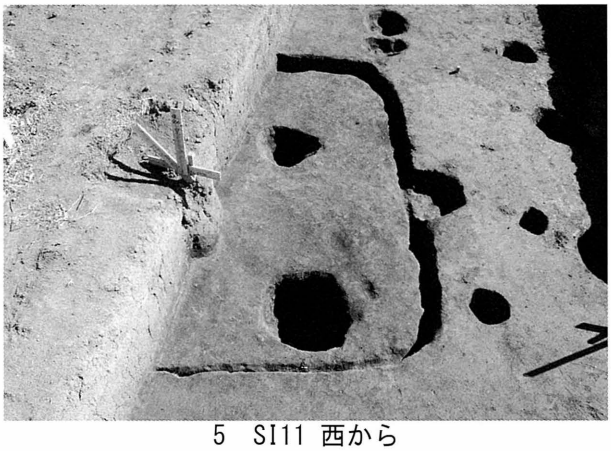
2　SI06（中央）・07（左） 南から

1　SI06 遺物出土状況 南から

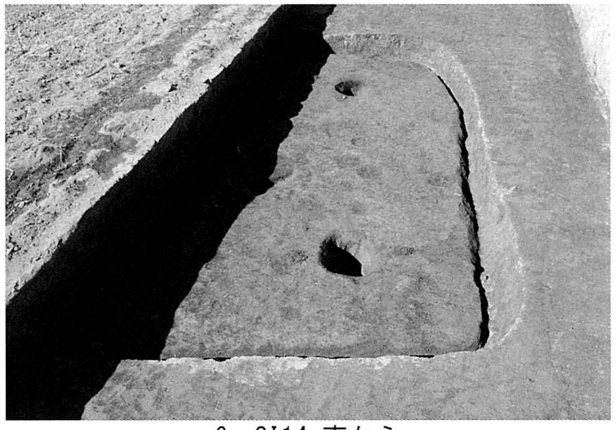
2　SI06 カマド 南から

3　SI07 遺物出土状況 南から

4　SI07 カマド 西から

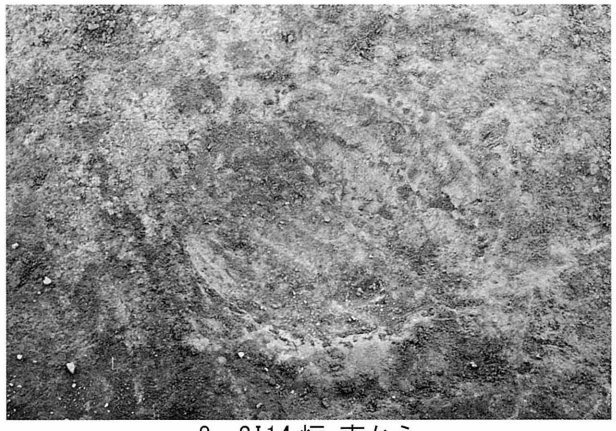


5　SI11 西から



6　SI14 東から

7　SI14 遺物出土状況 東から



8　SI14 炉 南から

古墳時代（住居跡・土坑・ピット・溝跡）

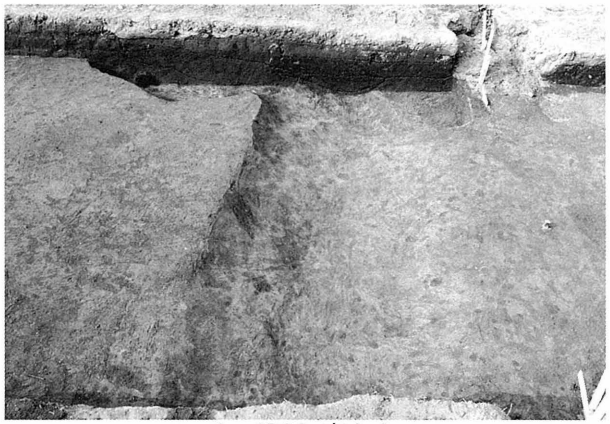
1　SI15 西から

2　SI15 掘方 西から

3　SI18 北から

4　P16 遺物出土状況 東から

5　SD05 北から



6　SD06 東から

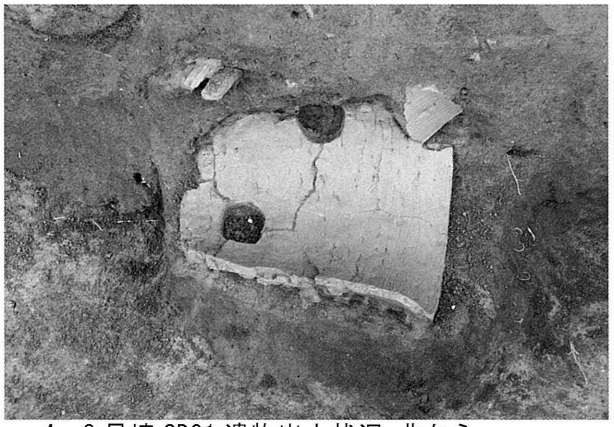
7　SD07 東から

8　SD14 西から

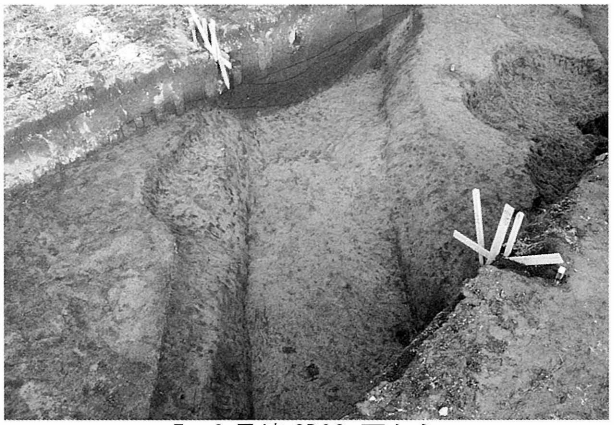
1　8号墳 北から

2　8号墳 SD01 Dセクション（西側）北から

3　8号墳 SD01 Dセクション（東側）北から



4　8号墳 SD01 遺物出土状況 北から



5　8号墳 SD02 西から

古墳時代（古墳）

1　14号墳 SD13 北から

2　15号墳 SD09（手前）・SD10（奥） 東から

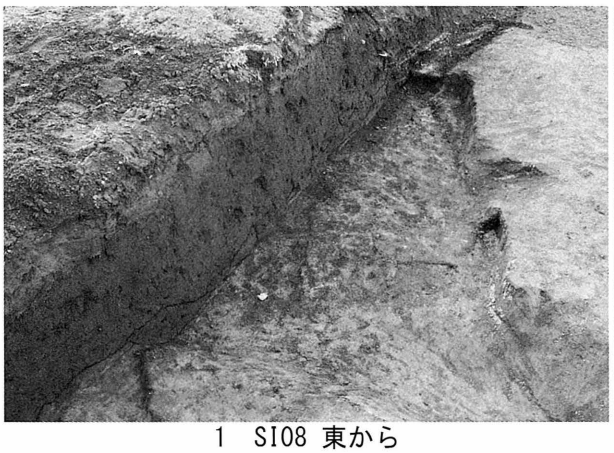
1　SI02 南から

2　SI02 遺物出土状況 西から

3　SI02 カマド 南から

4　SI08 遺物出土状況 南から

平安時代（住居跡）



1　SI08 東から

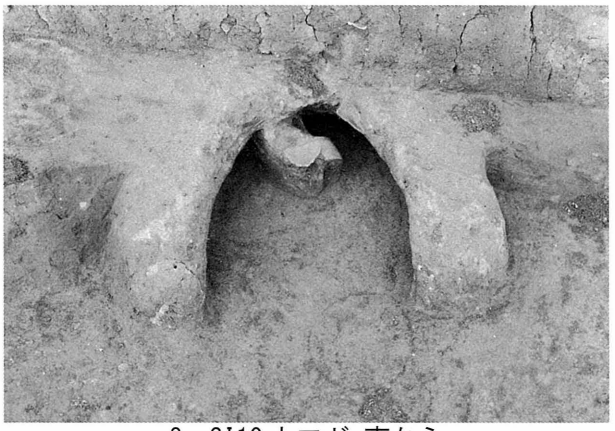
2　SI08 カマド 南から

3　SI09 遺物出土状況 南から

4　SI09 B セクション 東から

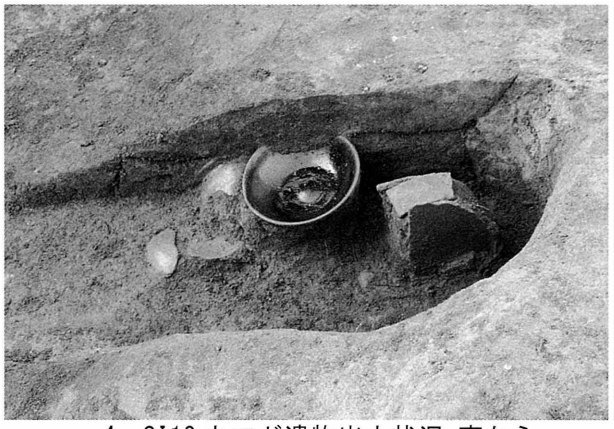
5　SI09（左）・13（右） 西から

1　SI09 カマド 西から



2　SI10 カマド 南から

3　SI10 南から

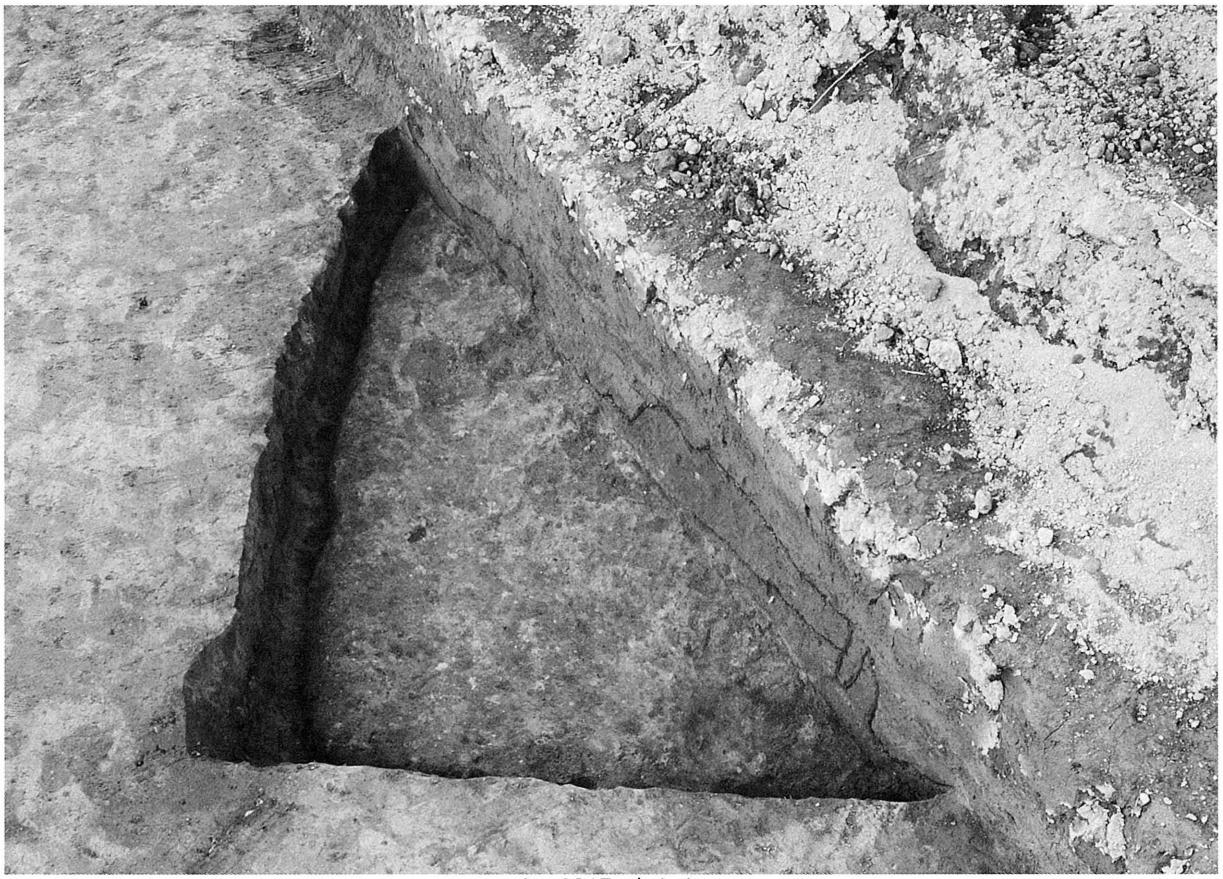


4　SI12 カマド遺物出土状況 東から

5　SI12 カマド 南から

平安時代（住居跡）

1　SI12（手前）・SK05（奥）東から

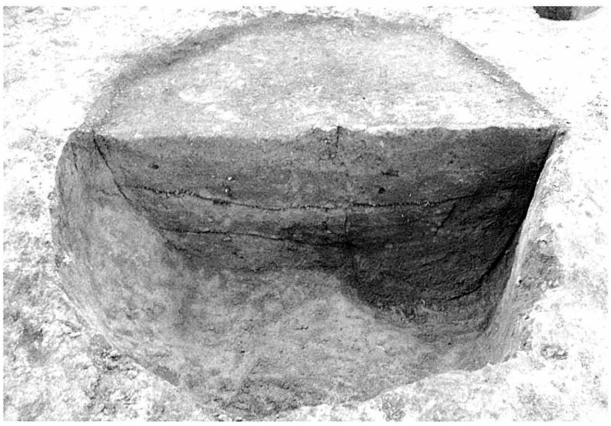


2　SI17 東から

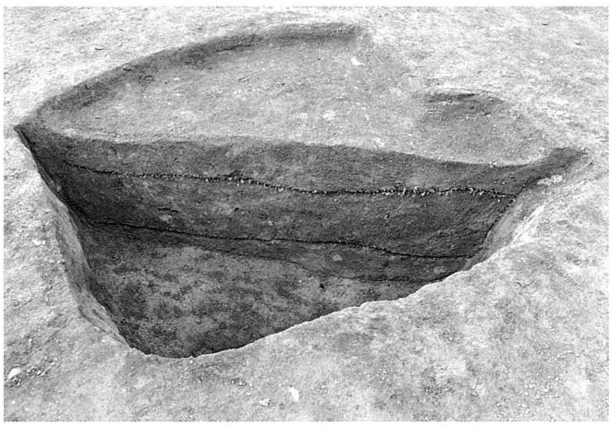
1　SB01 西から

2　SB01-P1 セクション 南から

3　SB01-P2 セクション 東から

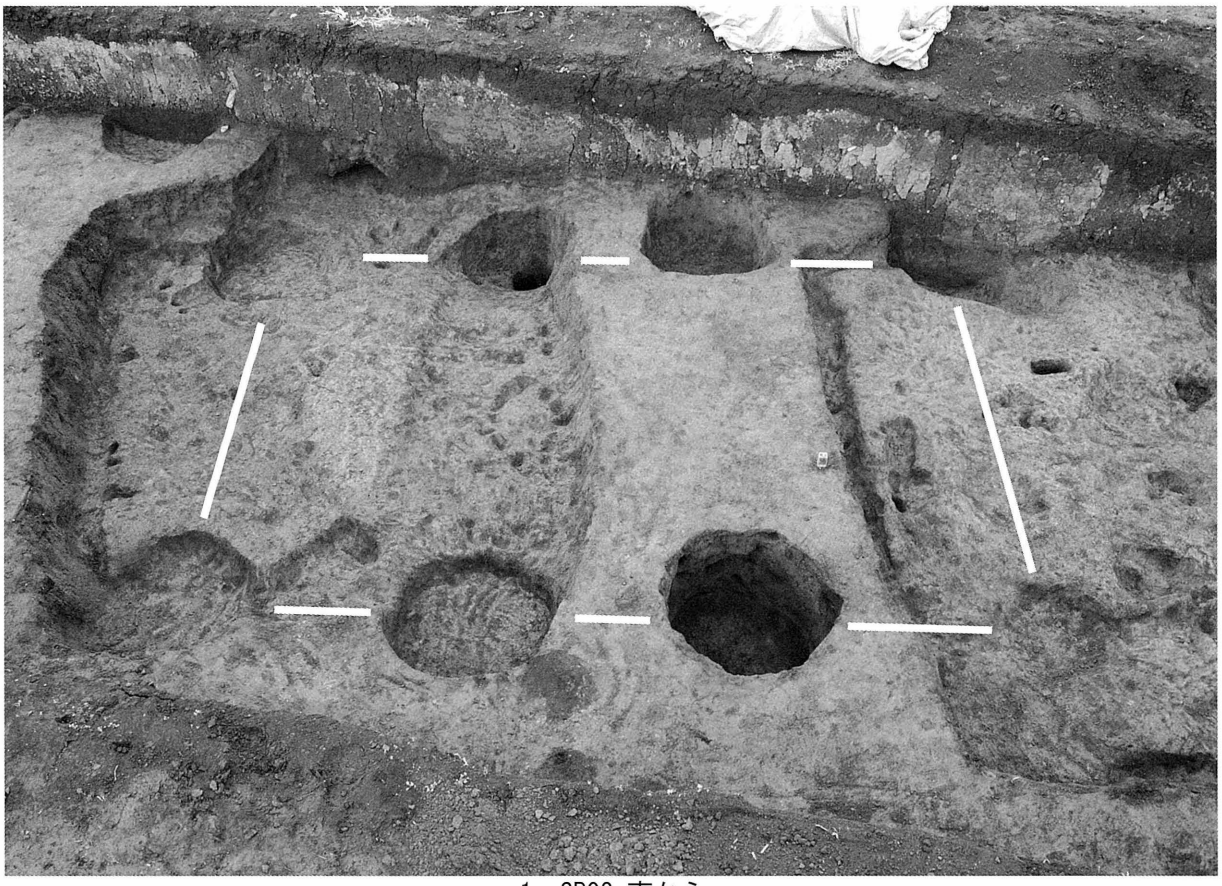


4　SB01-P3 セクション 東から



5　SB01-P4 セクション 東から

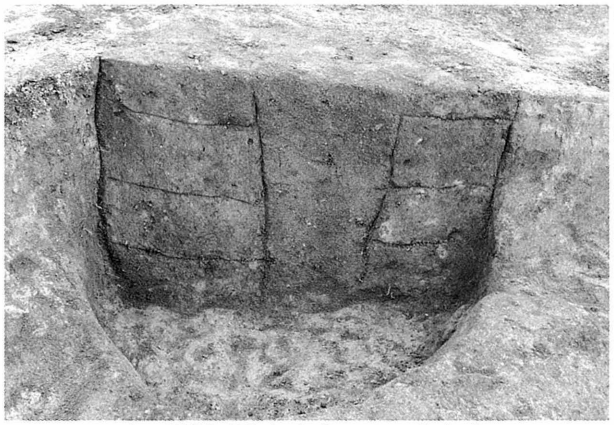
平安時代（掘立柱建物跡）



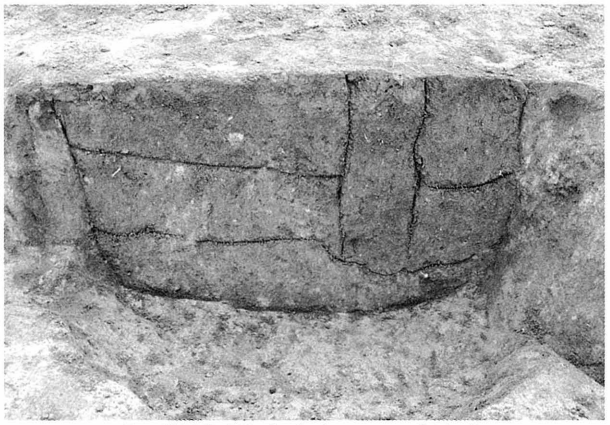
1　SB02 南から

2　SB02-P3 セクション 南から

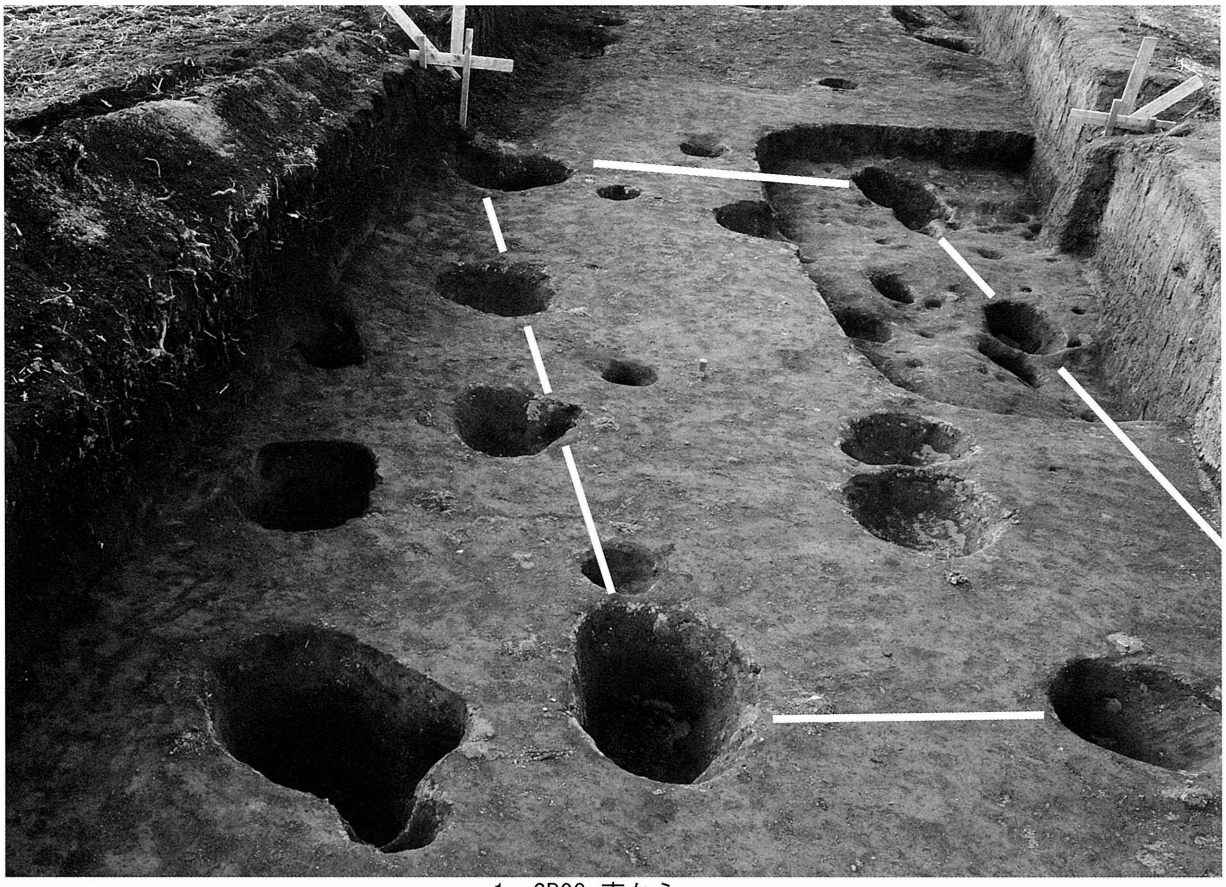
3　SB02-P6 セクション 南から



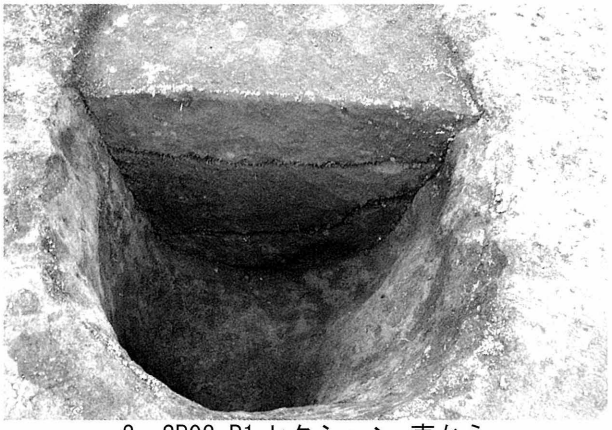
4　SB02-P7 セクション 北から



5　SB02-P8 セクション 東から

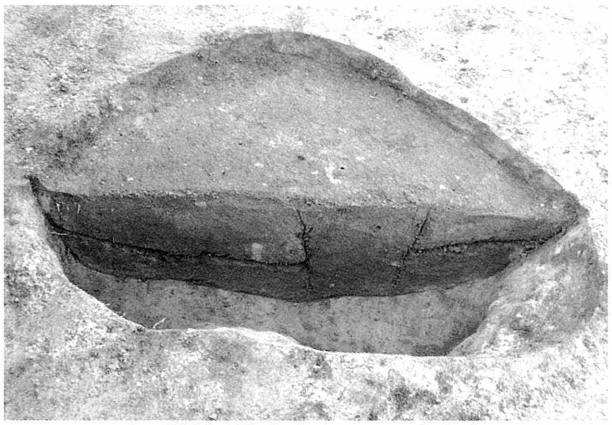


1　SB03 東から



2　SB03-P1 セクション 東から

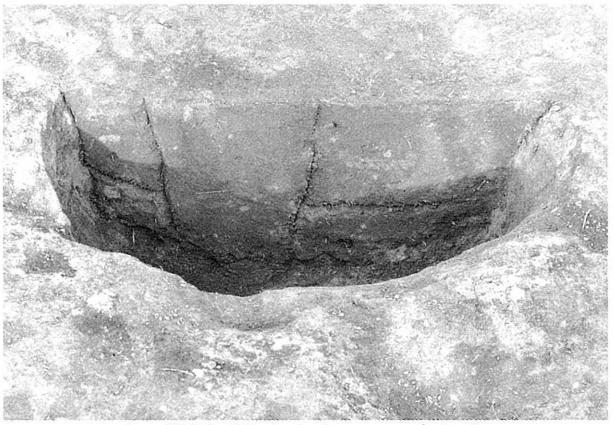
3　SB03-P2 セクション 東から



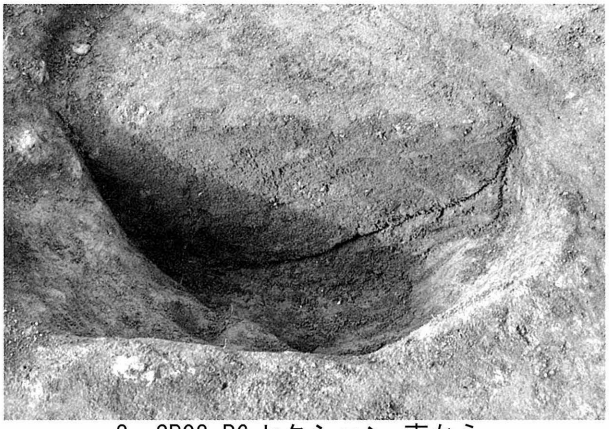
4　SB03-P3 セクション 東から

5　SB03-P4 セクション 東から

平安時代（掘立柱建物跡・土坑）

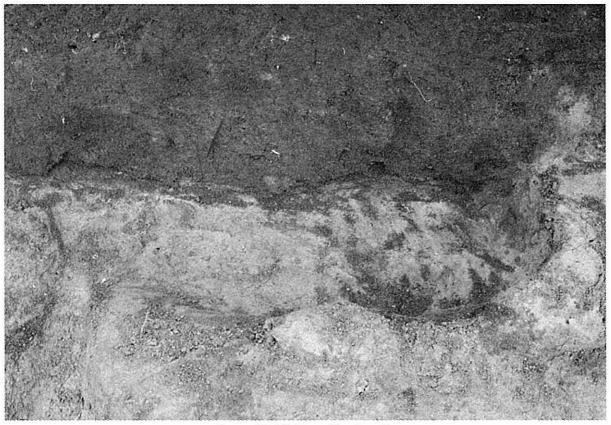


1　SB03-P5 セクション 南から

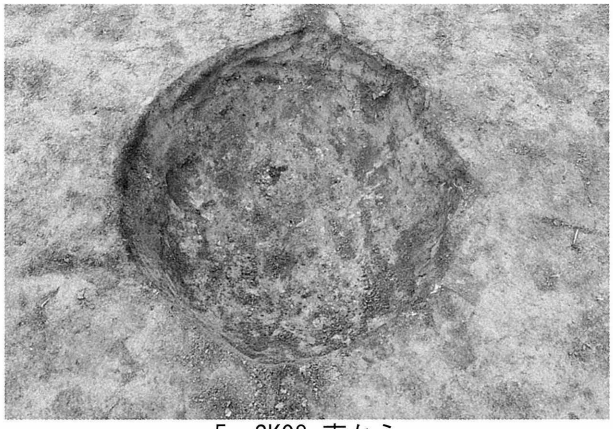


2　SB03-P6 セクション 東から

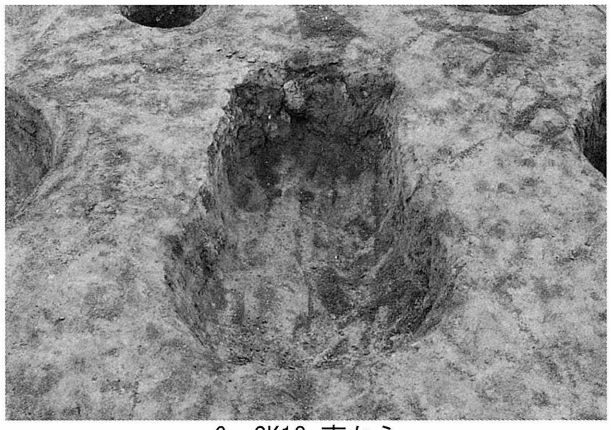
3　SK03（右）・04（左） 東から



4　SK05 北から

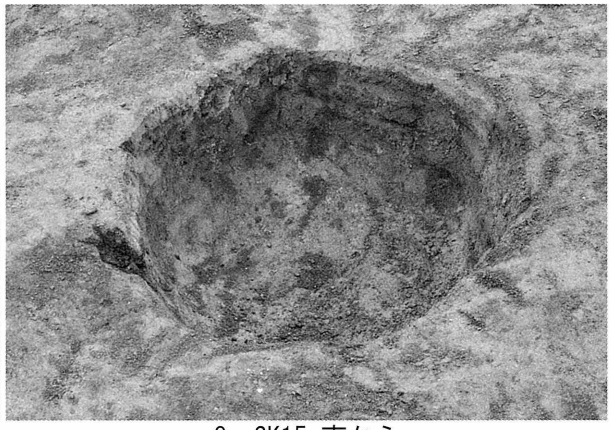


5　SK08 東から



6　SK13 南から

7　SK14 南から

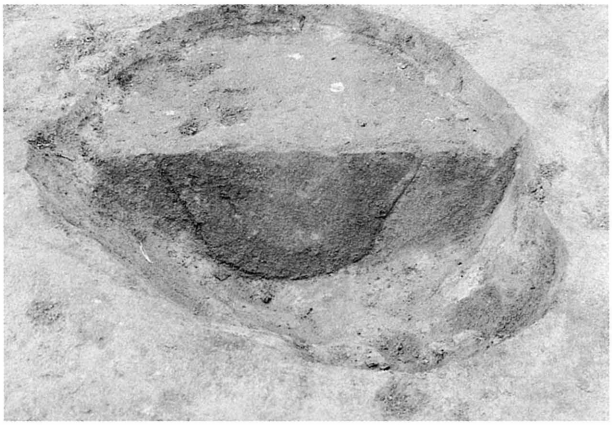


8　SK15 南から

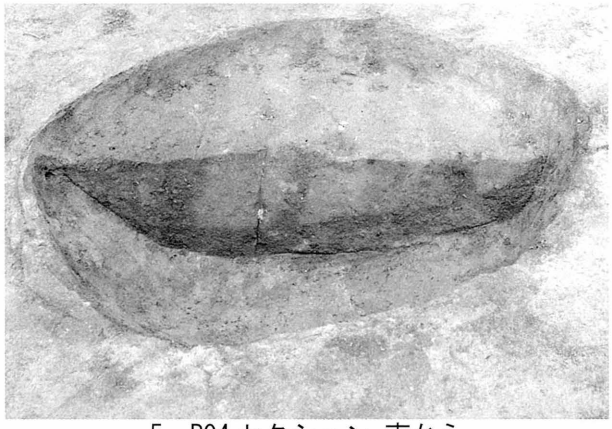
1　SK16 北から

2　SK17 北から

3　SK26 北から



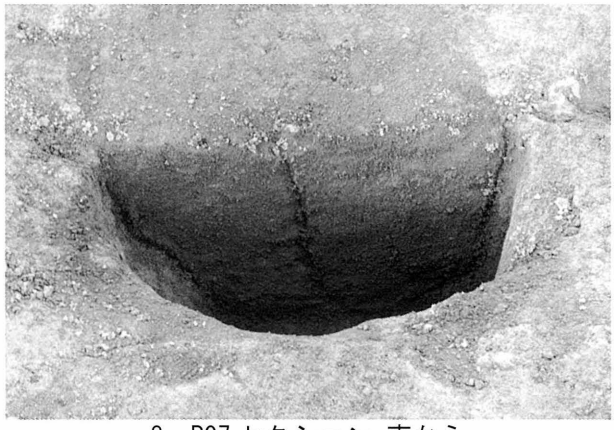
4　P03 セクション 南から



5　P04 セクション 南から

6　P05 セクション 南から

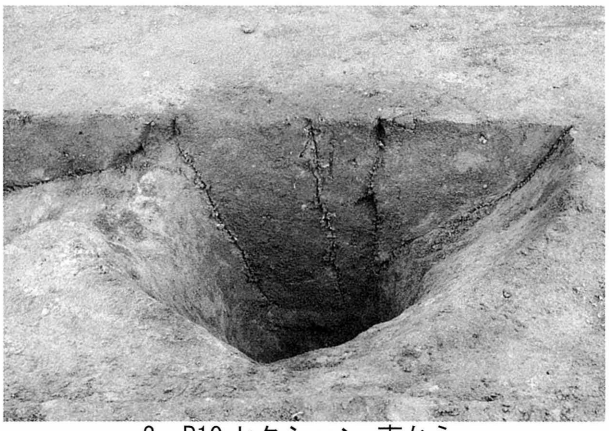
7　P06 セクション 東から



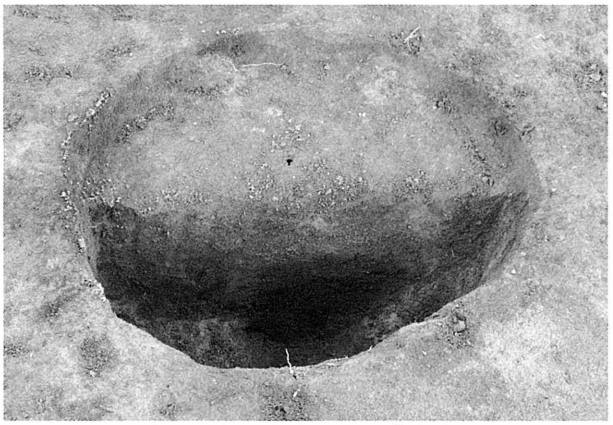
8　P07 セクション 東から

平安時代（ピット）

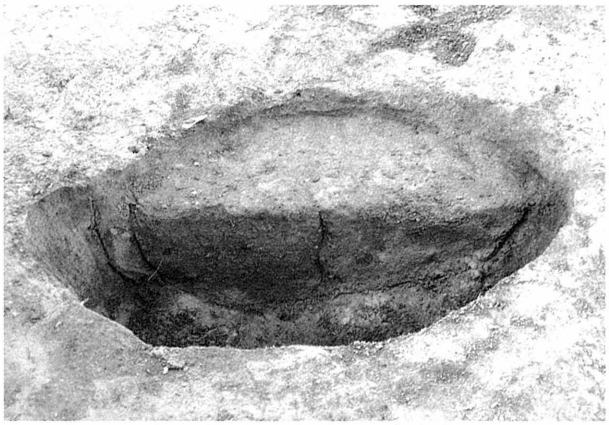
1　P08 セクション 東から



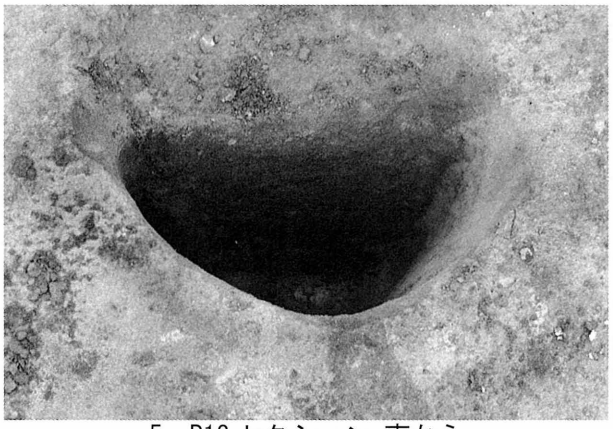
2　P10 セクション 南から



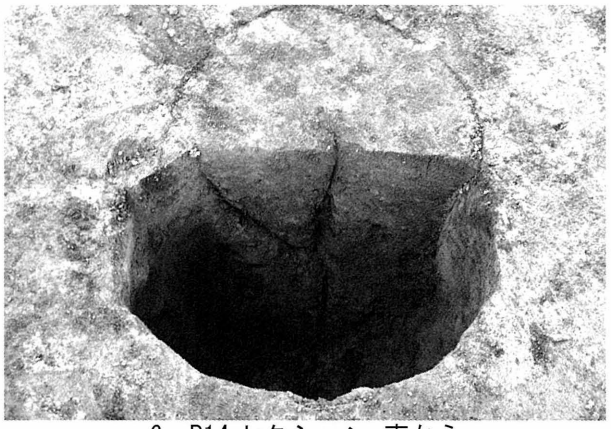
3　P11 セクション 北から



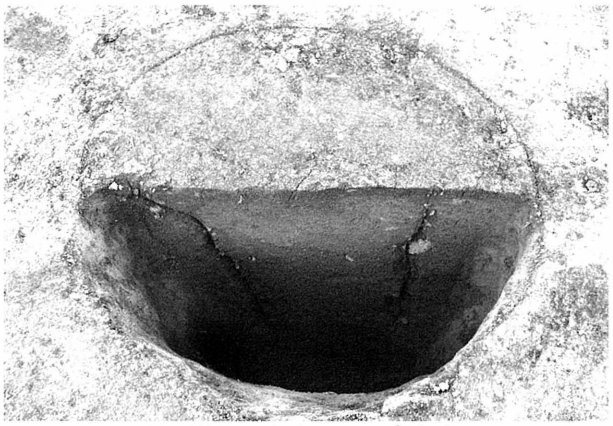
4　P12 セクション 東から



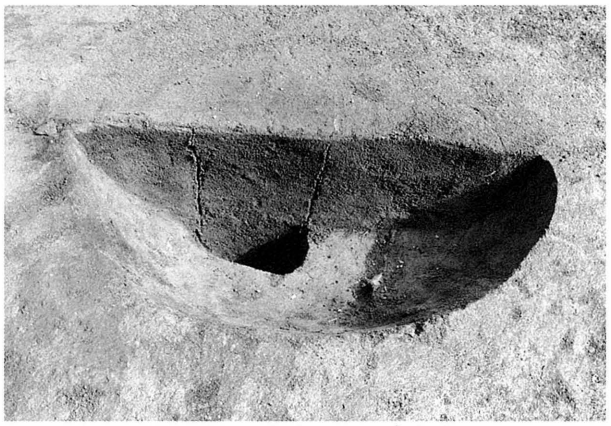
5　P13 セクション 南から



6　P14 セクション 東から



7　P15 セクション 南から

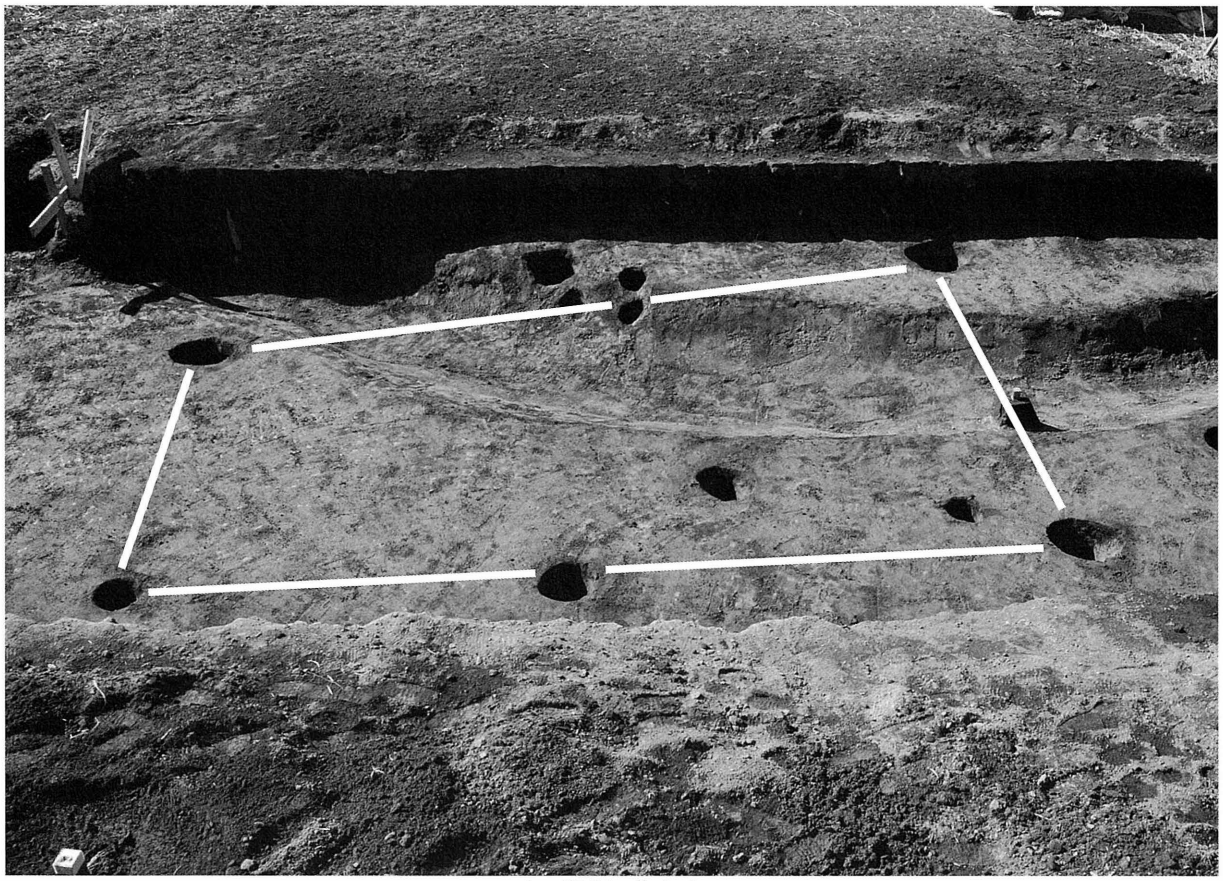


8　P33 セクション 南から

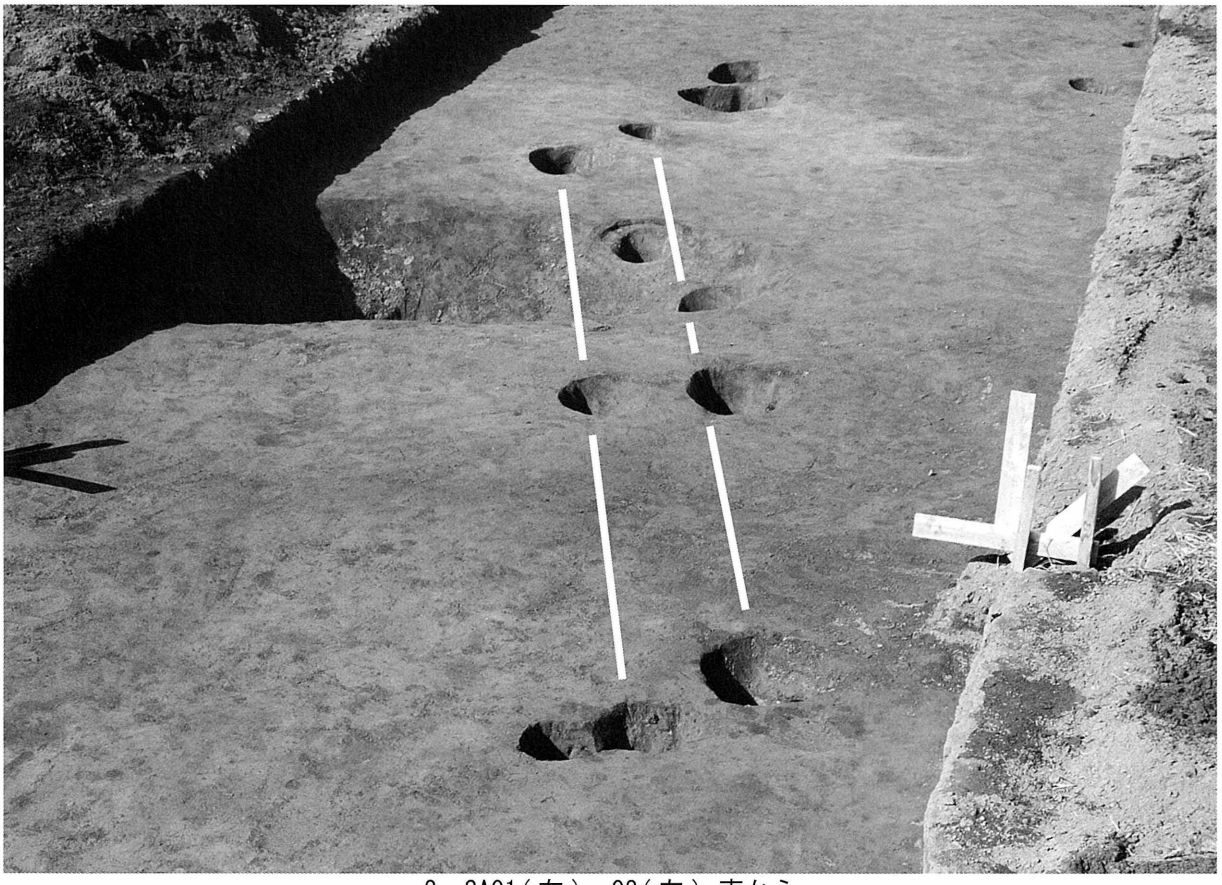
1　SD11 西から

2　SI19（中央）・SK34（右奥）・37（右手前） 北から

中・近世（掘立柱建物跡・柵・掘立柱塀跡）

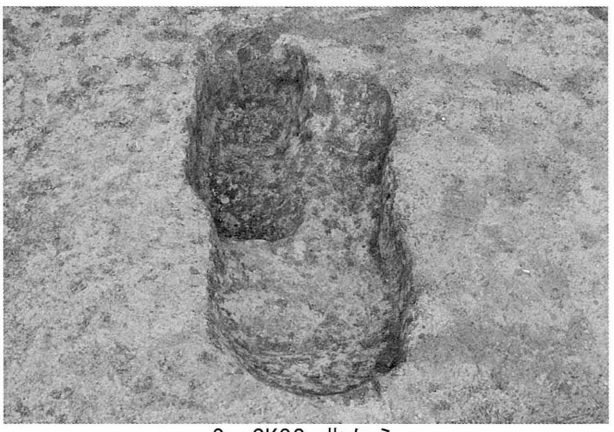


1　SB04 北から



2　SA01（右）・02（左） 東から

1　SK31 北から



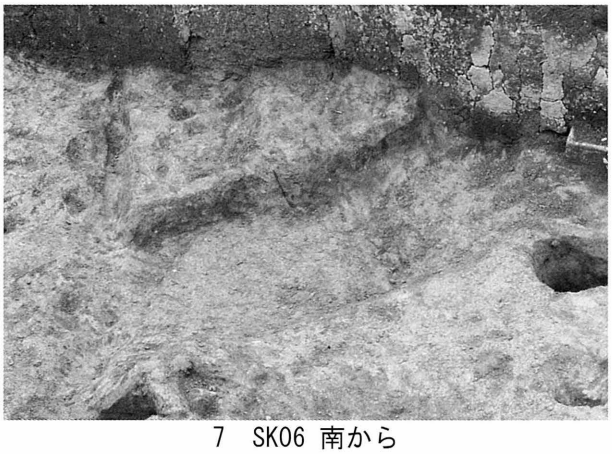
2　SK32 北から

3　SK35（左）・36（右） 東から

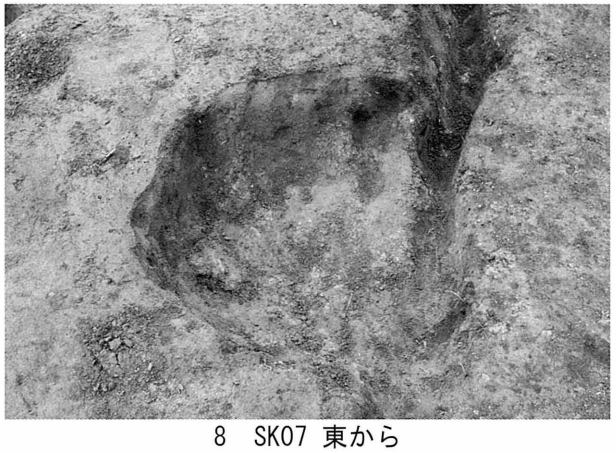
4　SD03 南から

5　SD04 南から

6　SD12 南から

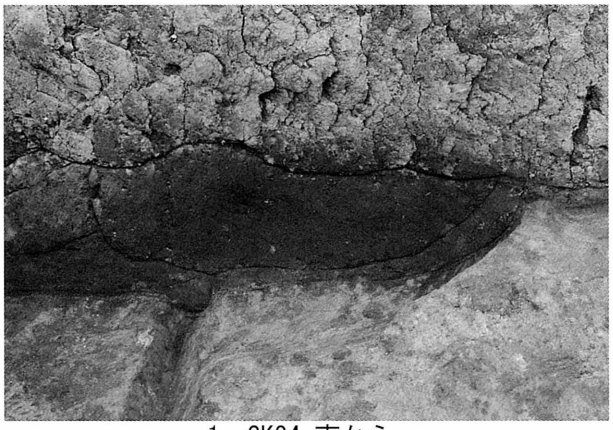


7　SK06 南から

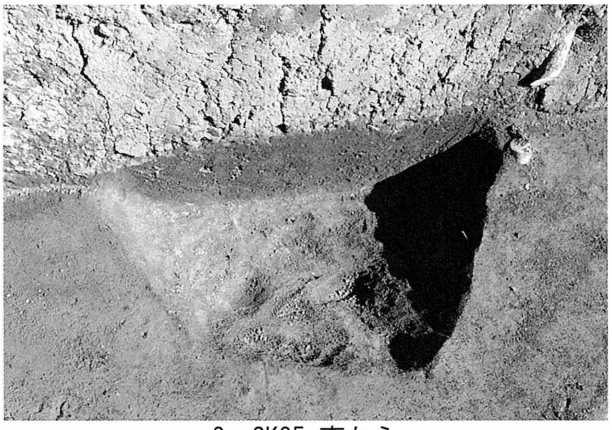


8　SK07 東から

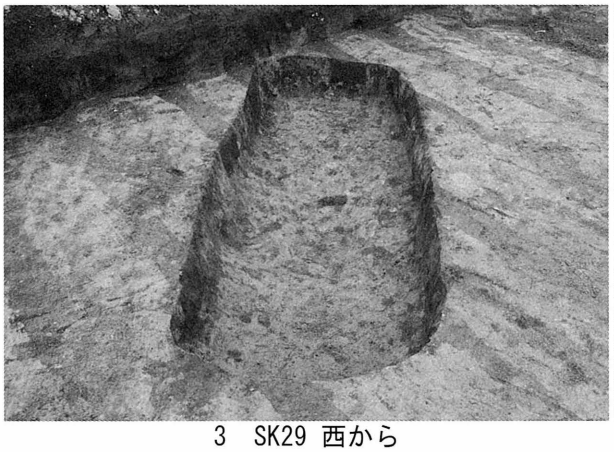
時期不明（土坑）・調査風景



1　SK24 南から

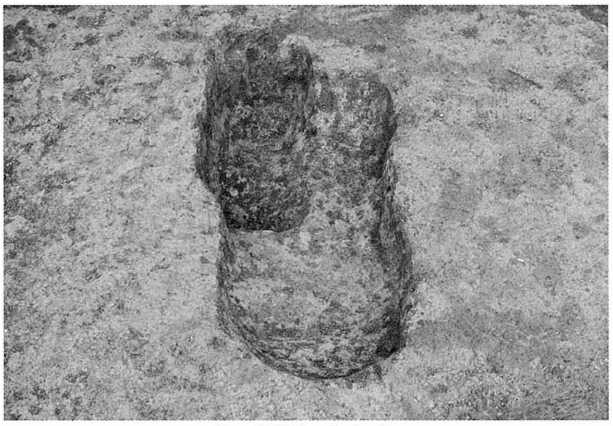


2　SK25 南から

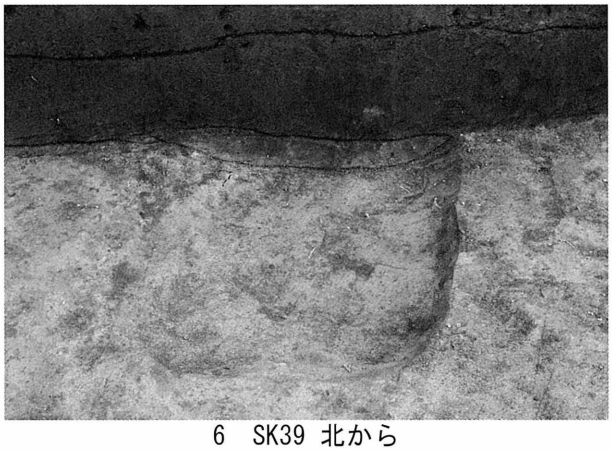


3　SK29 西から

4　SK30 東から



5　SK33 北から

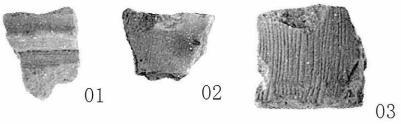


6　SK39 北から

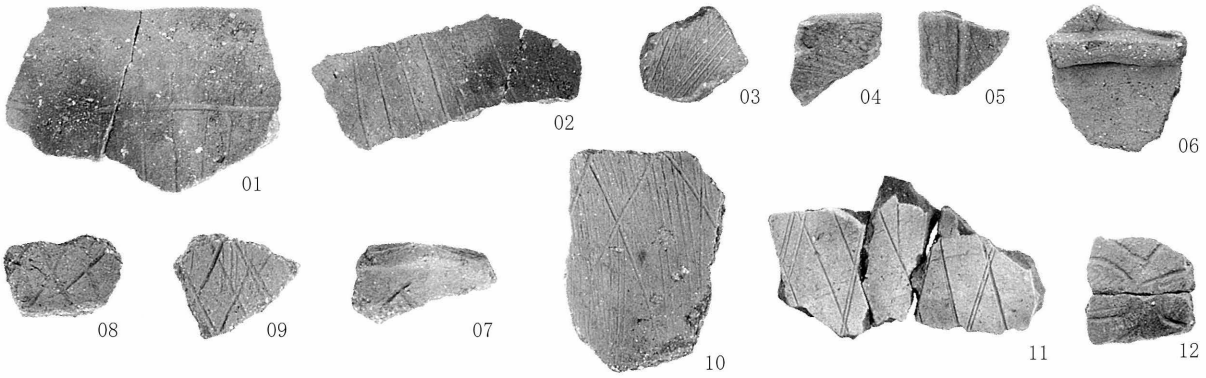
7　8号墳小グリッド設置状況 東から

8　8号墳調査風景 東から

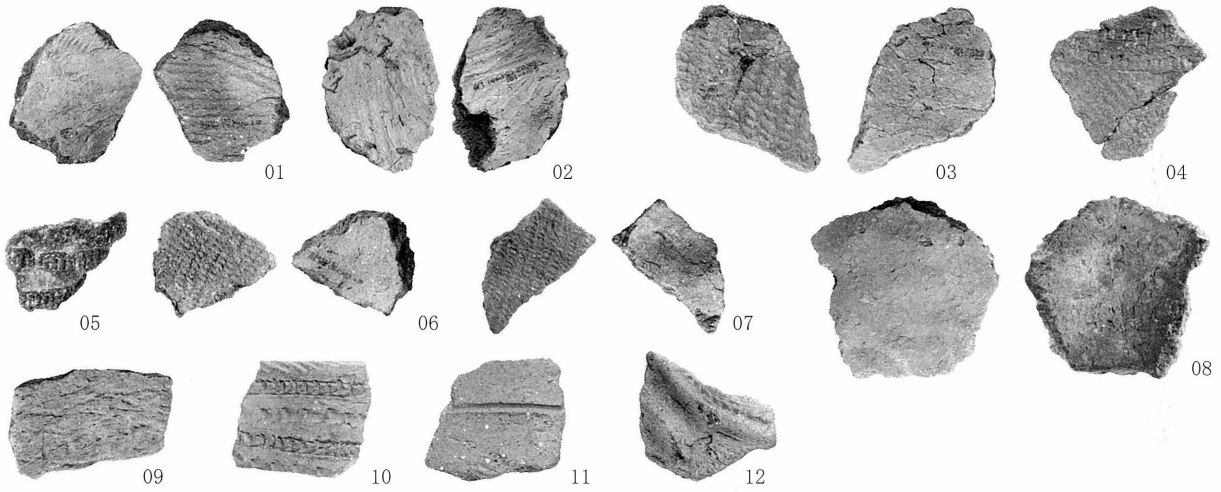
試掘確認調査



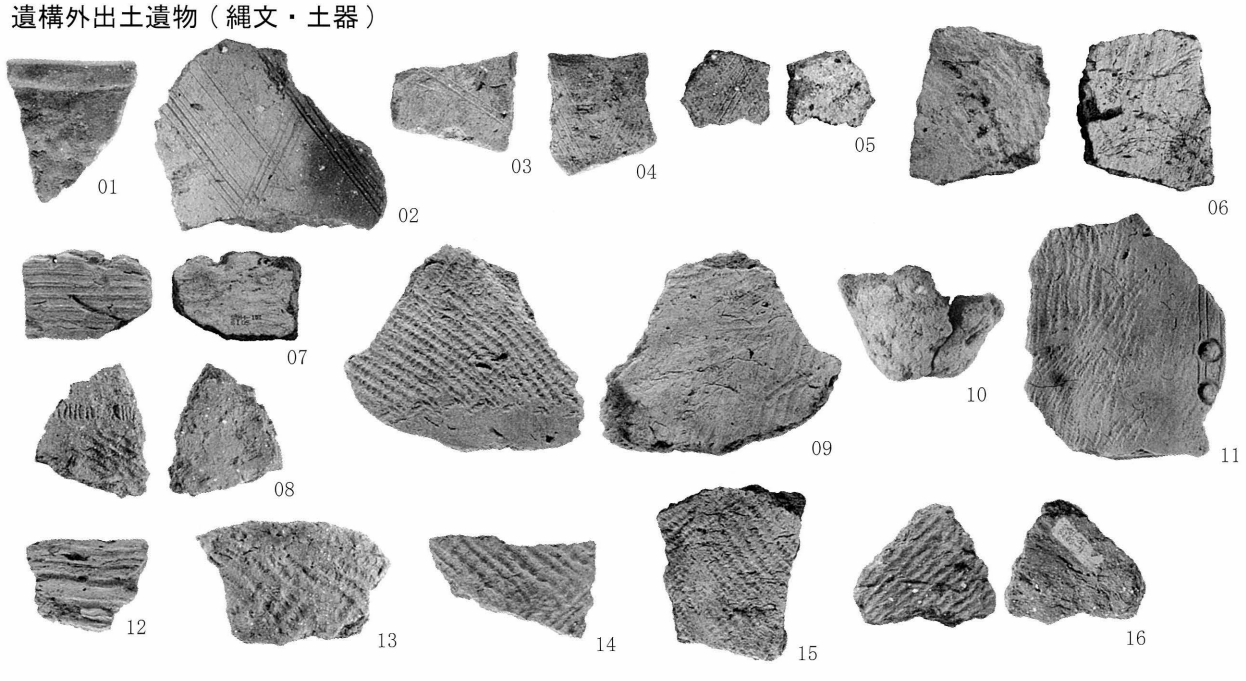
SI04 出土遺物



SK02 出土遺物

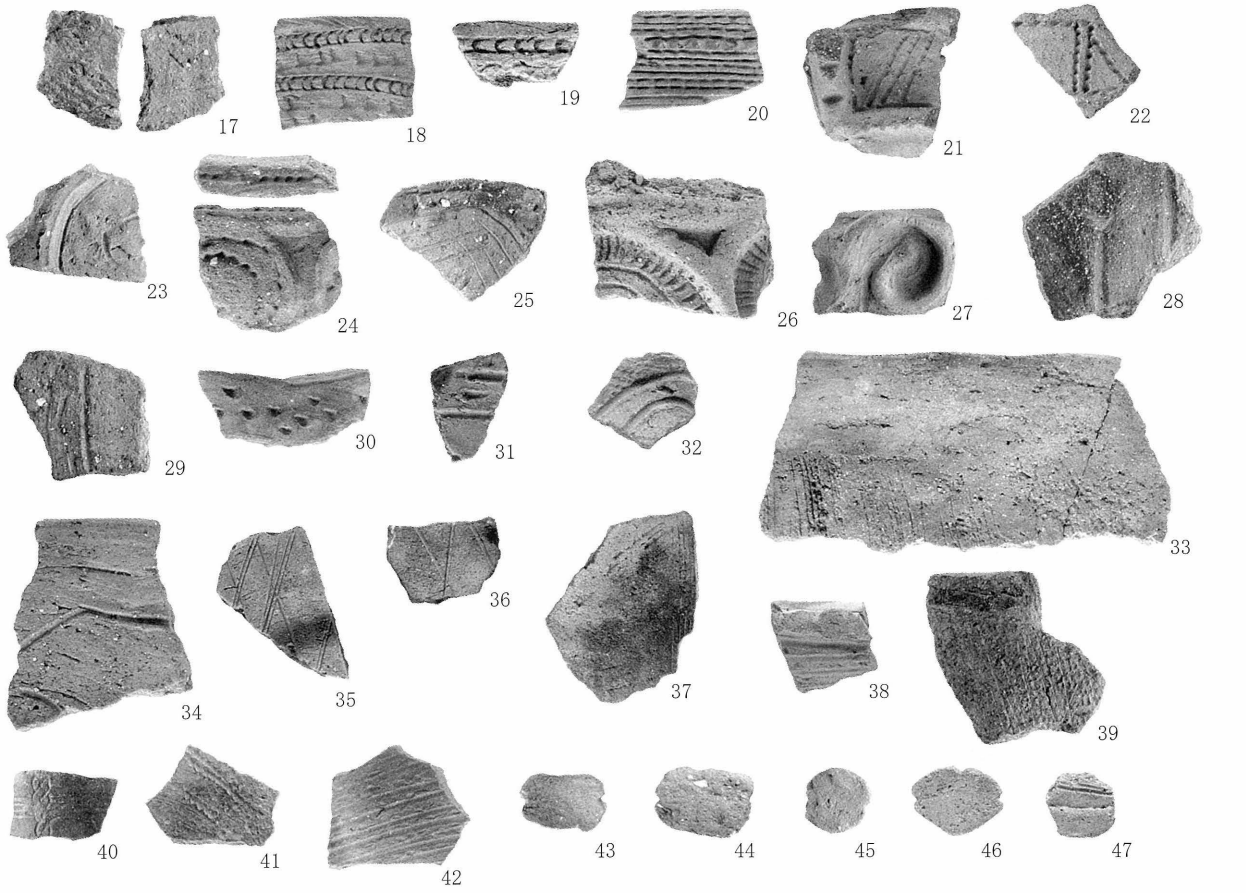


遺構外出土遺物（縄文・土器）

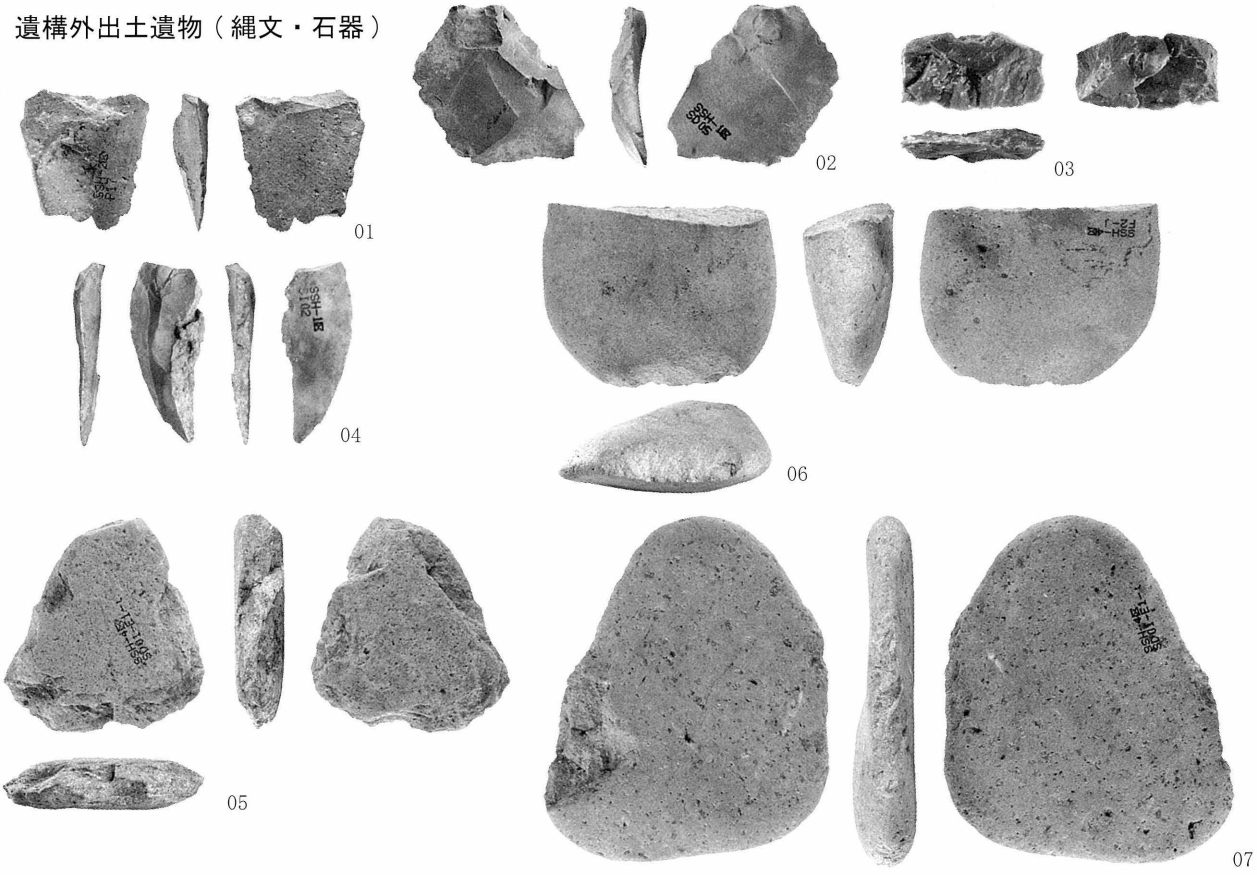


縄文時代（2）

遺構外出土遺物（縄文・土器・土製品）



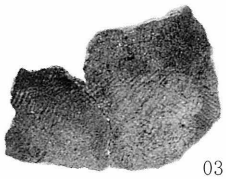
遺構外出土遺物（縄文・石器）



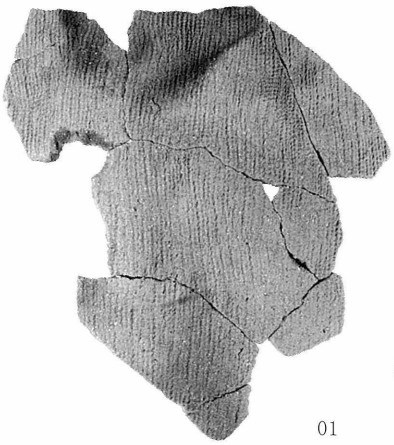
SI01 出土遺物

01

02

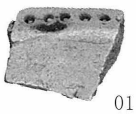

03

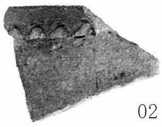
SI16 出土遺物


01

02

遺構外出土遺物（弥生）

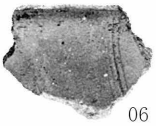

01


02

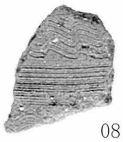
03

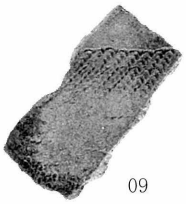
04

05


06

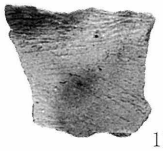
07


08

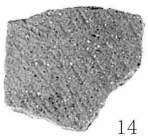

09

10

11

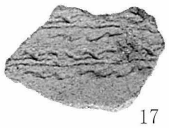

12

13


14

15

16


17

18

19

20

21

22

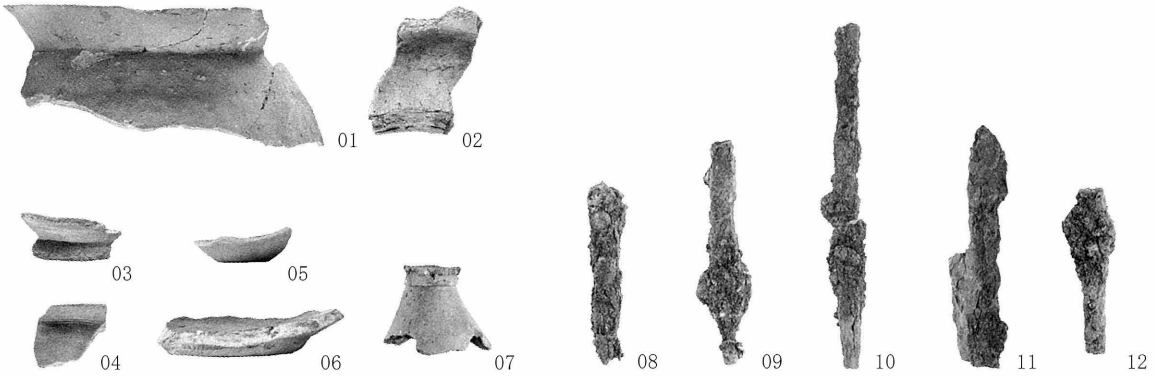
23

24

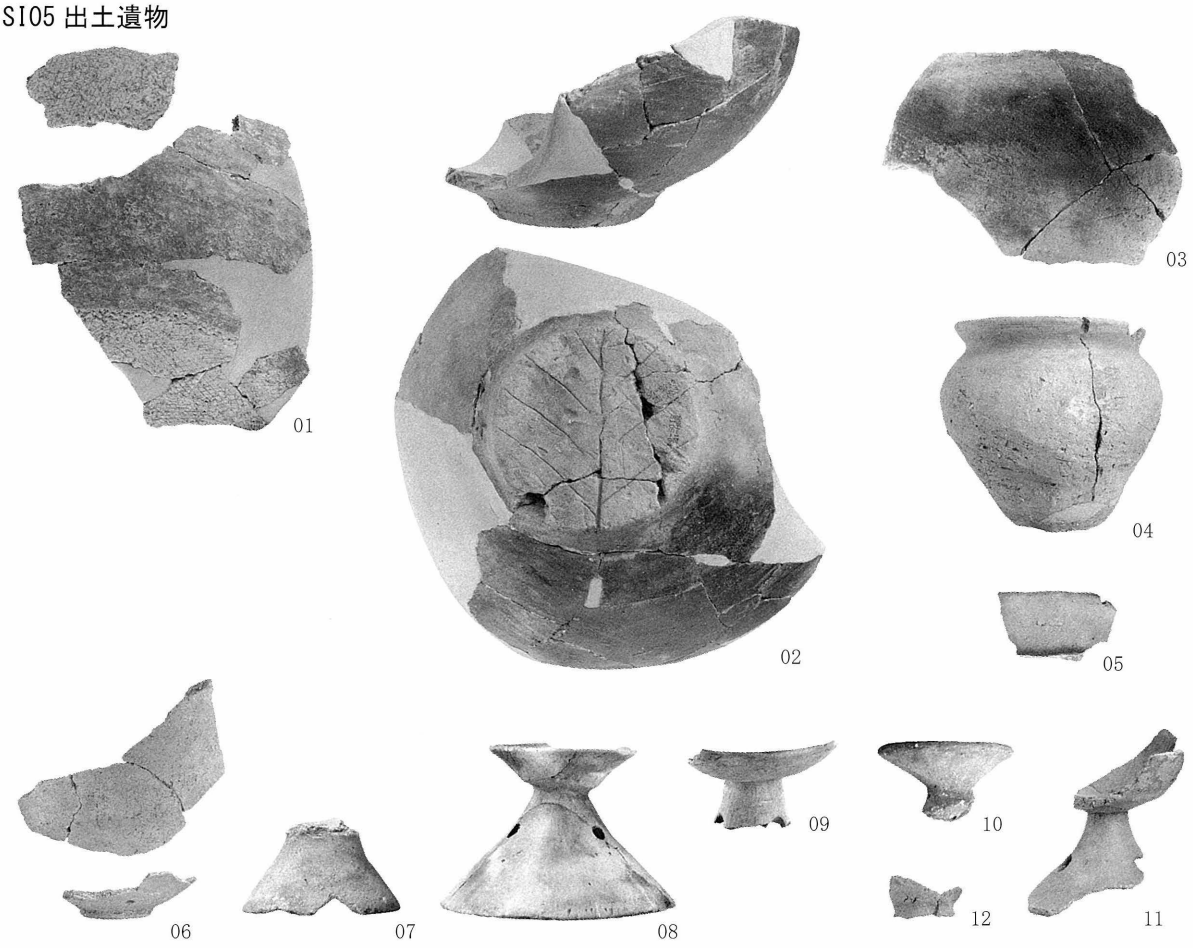
25

古墳時代（1）

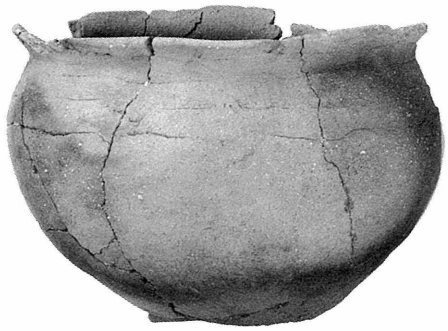
SI03 出土遺物

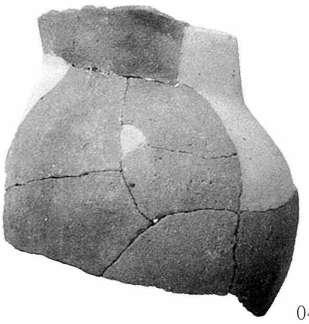


SI05 出土遺物



SI06 出土遺物

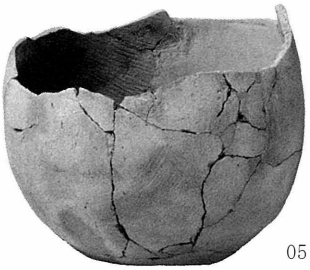




04

01

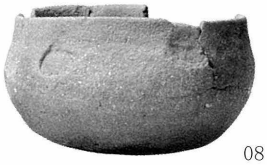
02



05

06

07



08

09

10

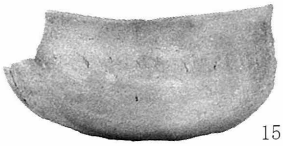
11

12

03

13

14

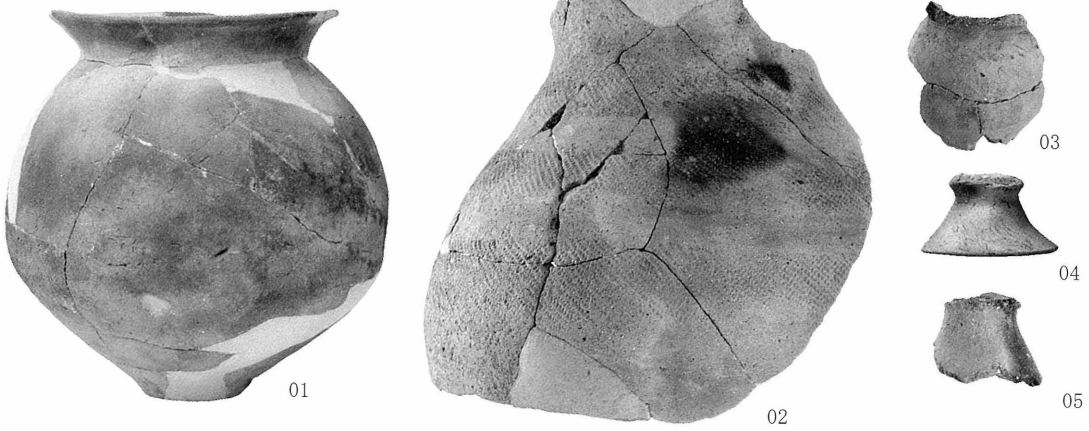


15

16

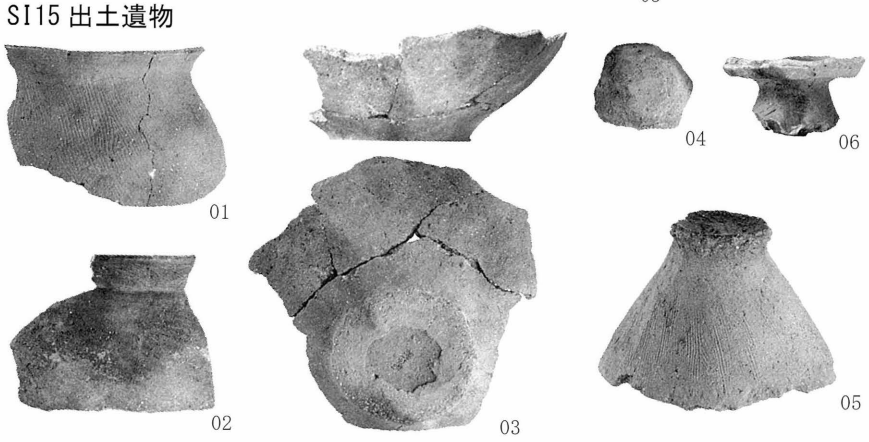
古墳時代（3）

SI11 出土遺物

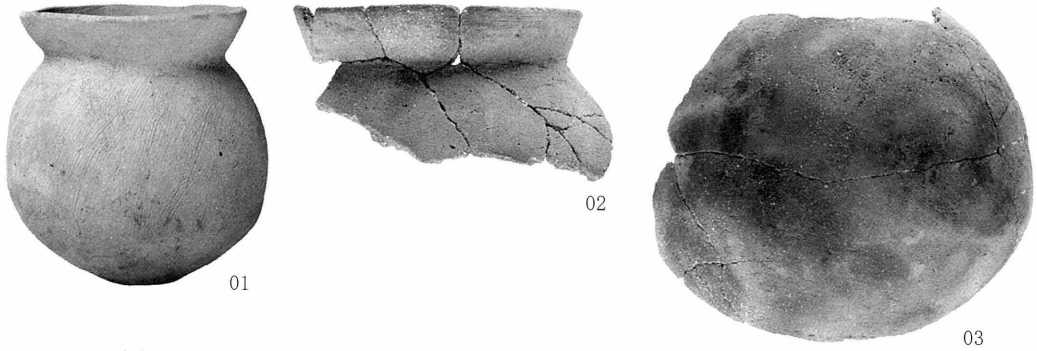


SI14 出土遺物

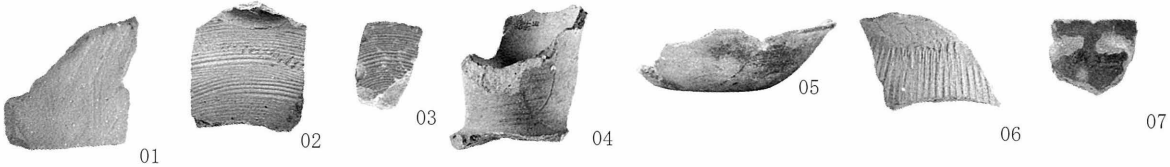
SI15 出土遺物



P16 出土遺物

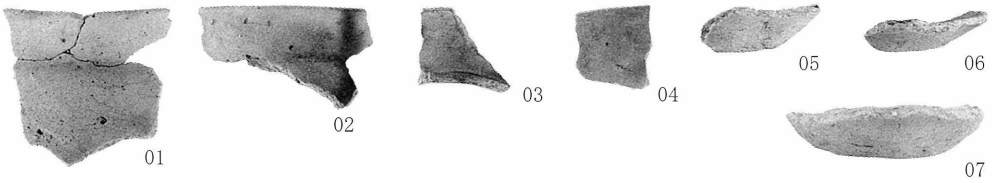


SD05 出土遺物



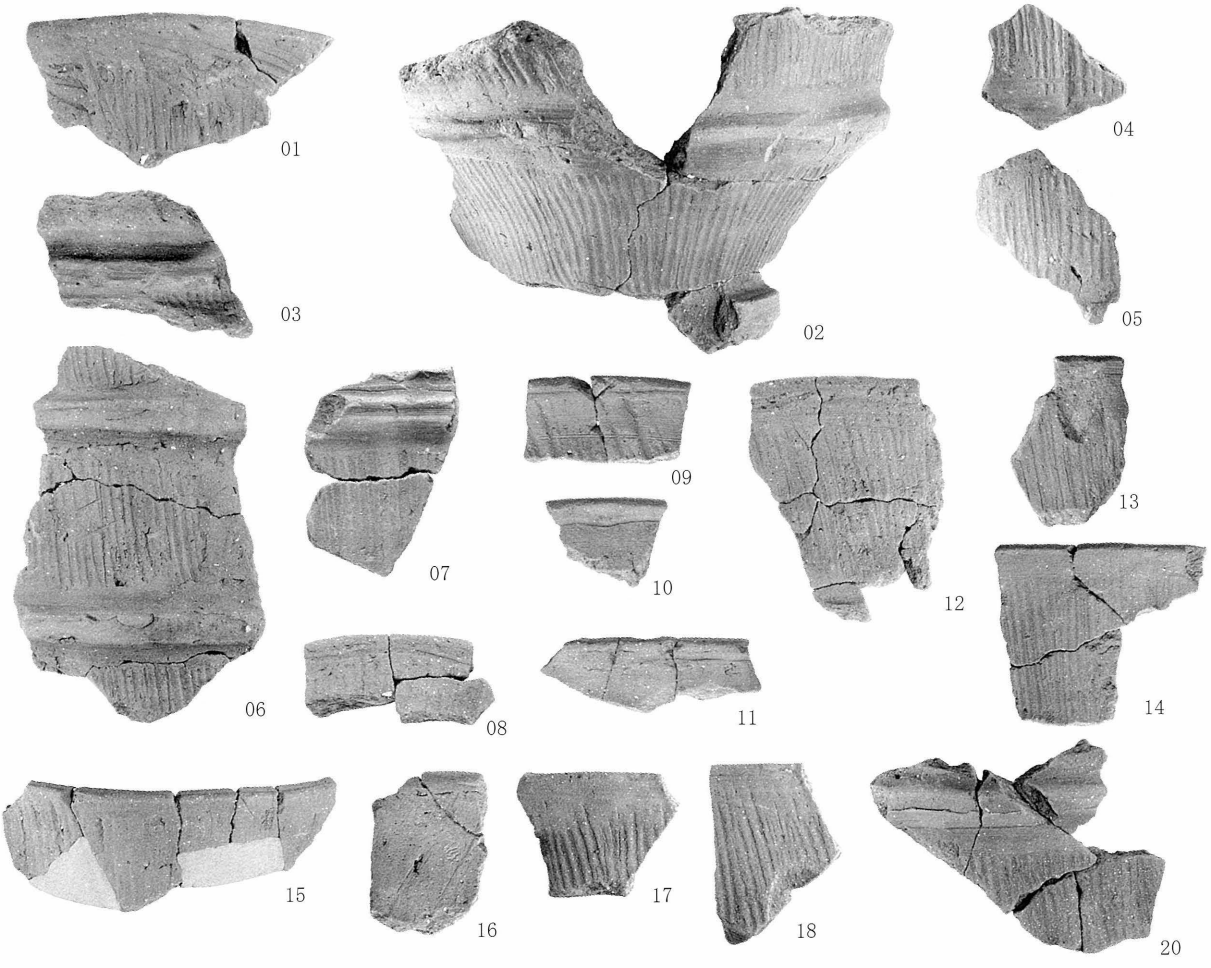
SD06 出土遺物

SD07 出土遺物



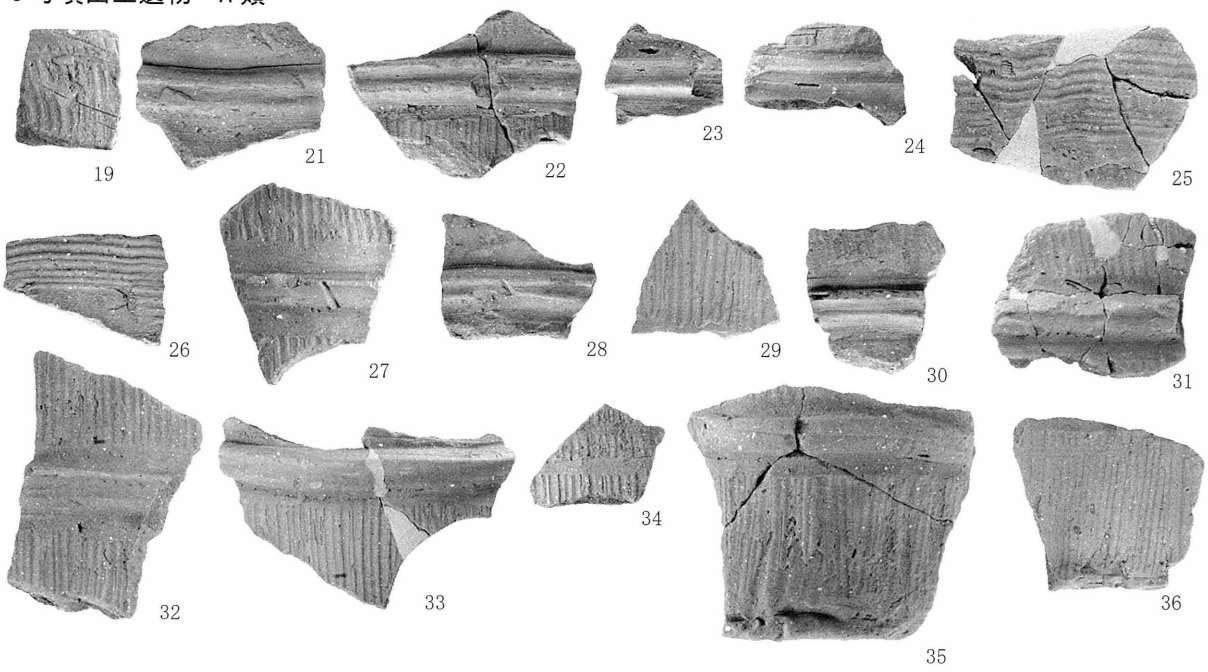
SD14 出土遺物

8 号墳出土遺物・A 類

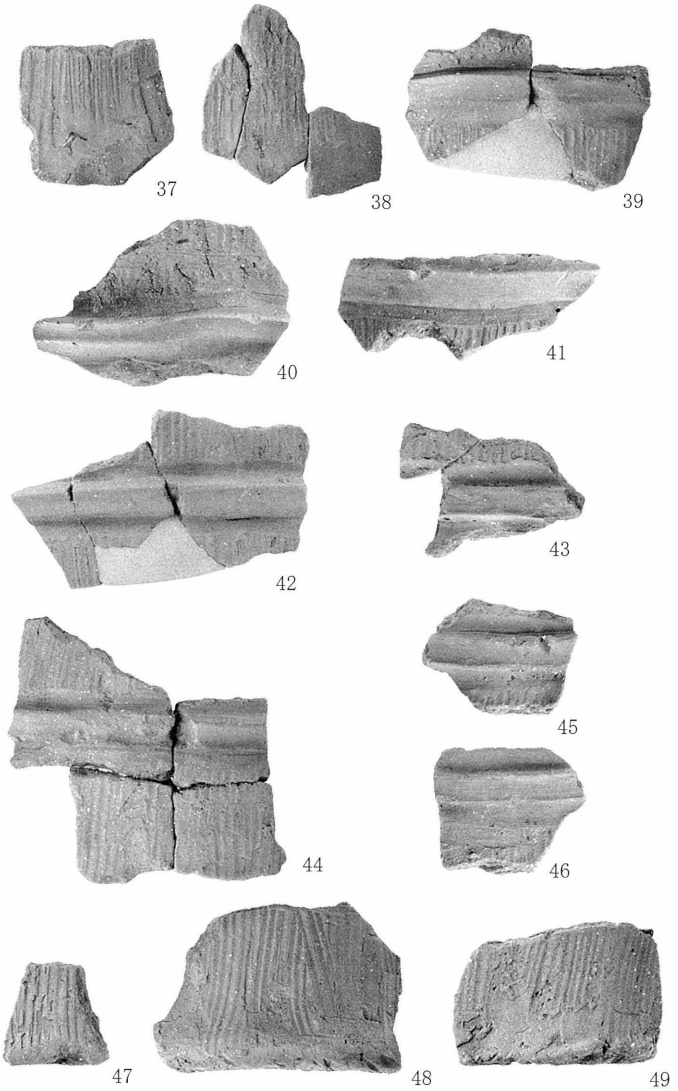


古墳時代（5）

8号墳出土遺物・A類

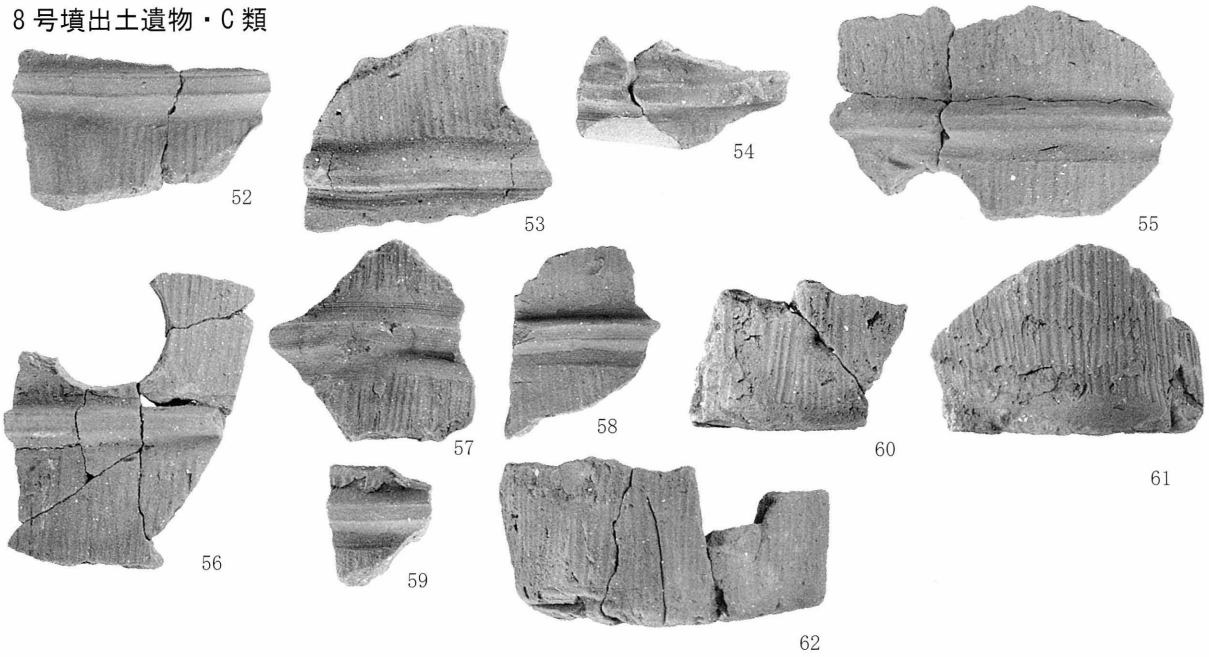


8号墳出土遺物・B類

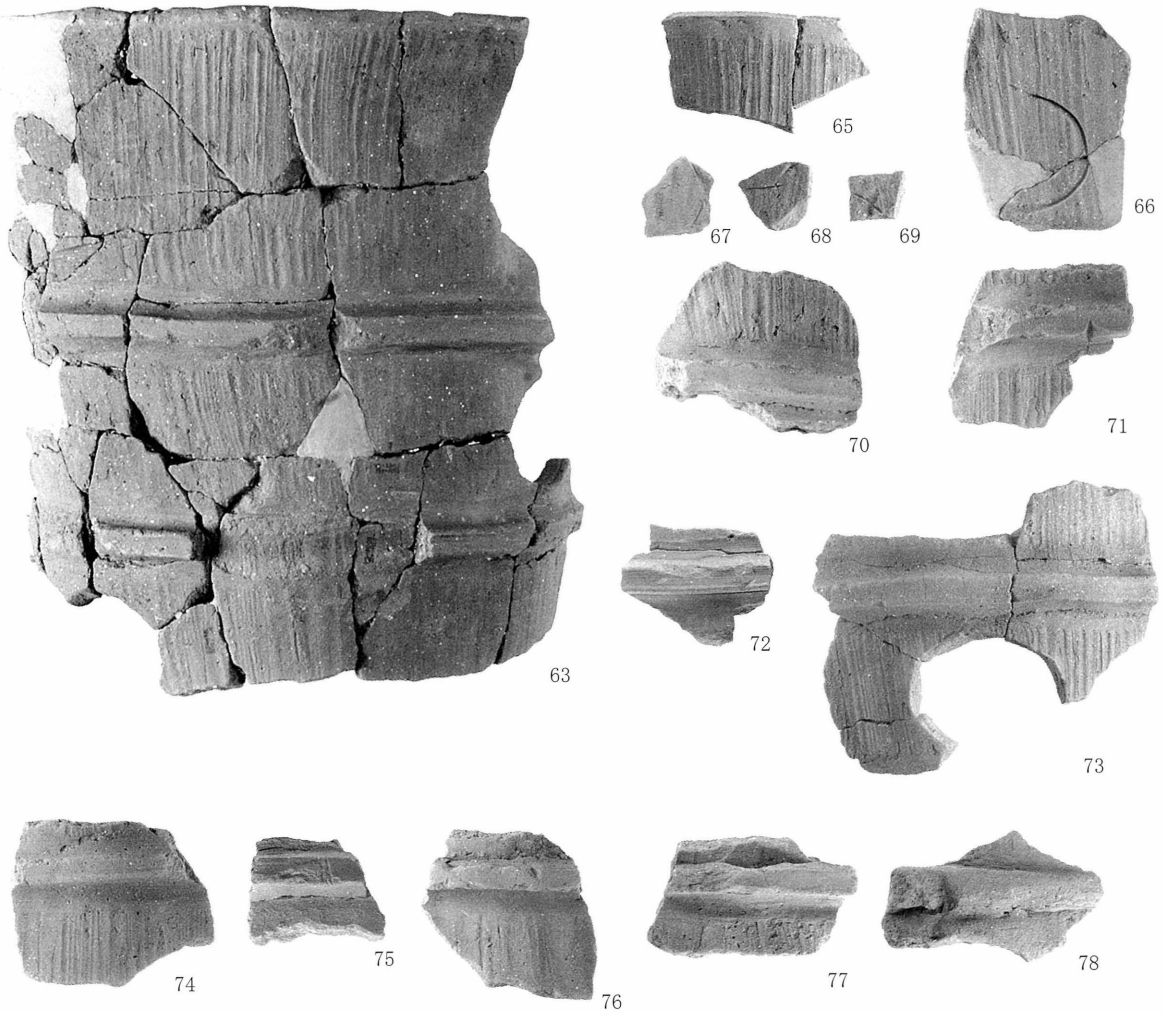


8号墳出土遺物・C類

8号墳出土遺物・C類



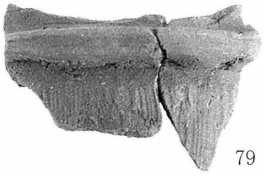
8号墳出土遺物・D類

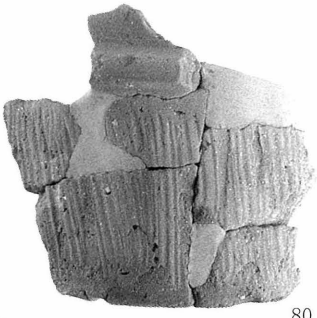


古墳時代（7）

8号墳出土遺物・D類

64

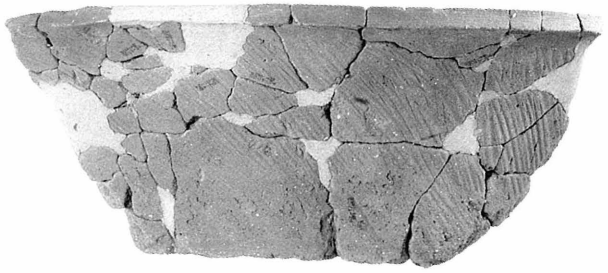

79

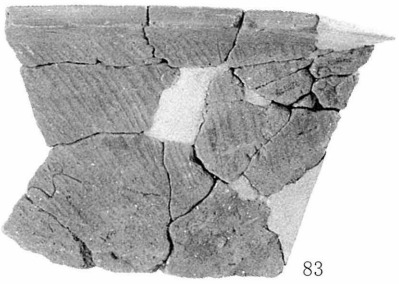

80

81

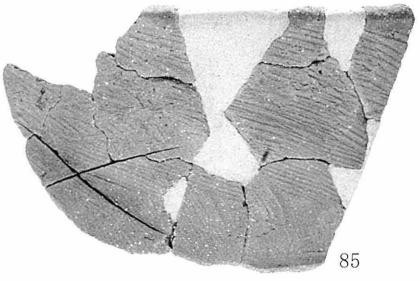
82

8号墳出土遺物・E類




83

84


85

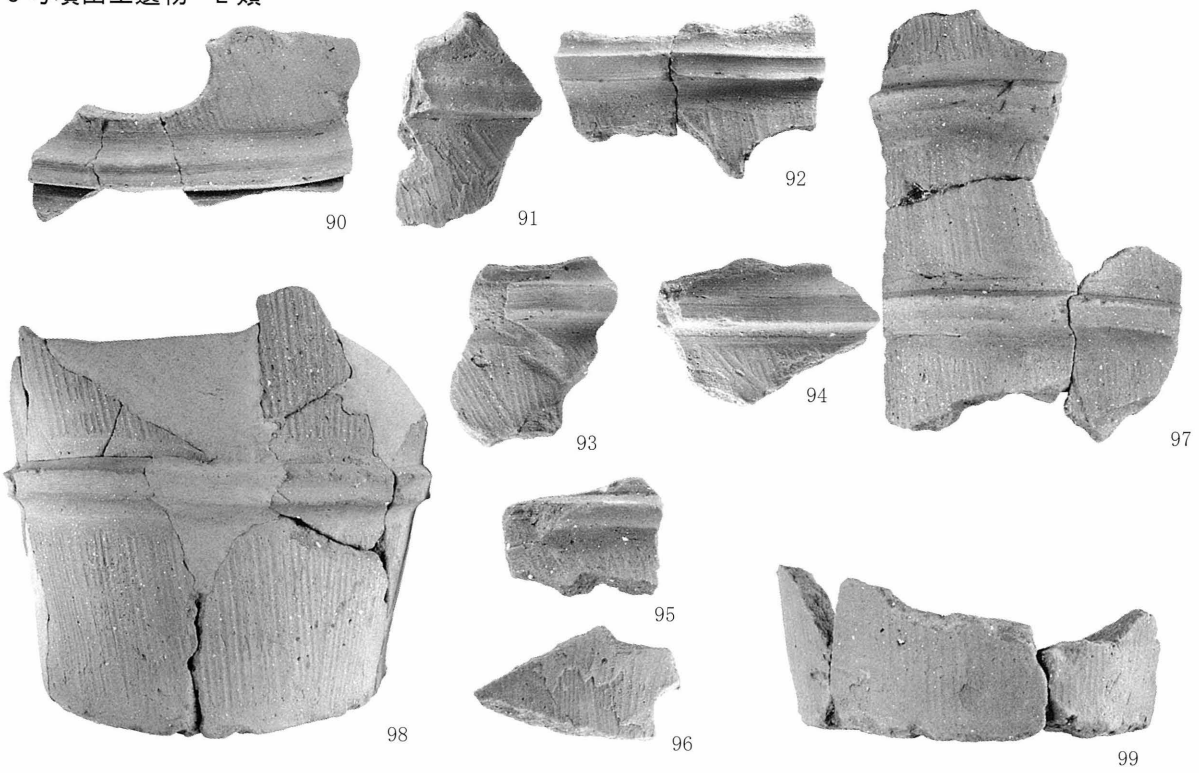
86

87

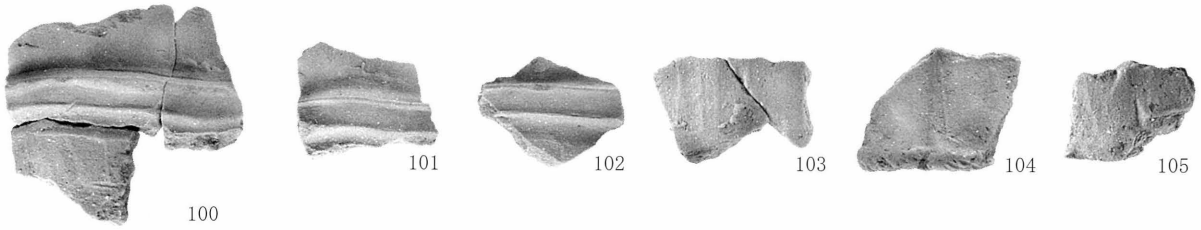
88

89

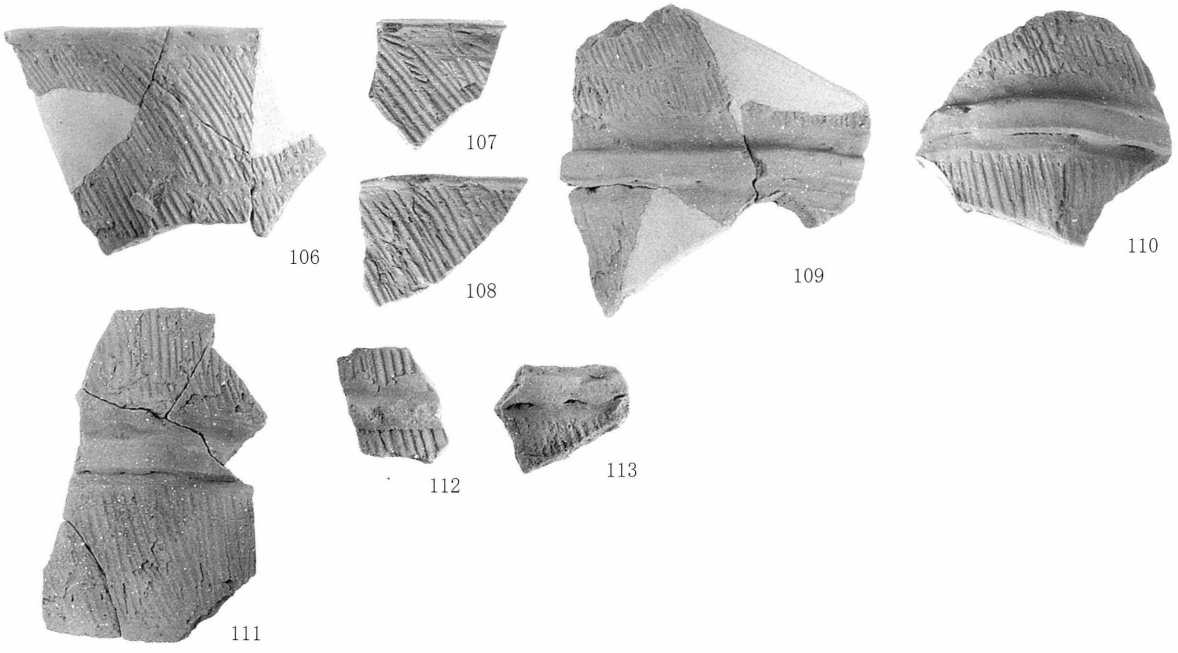
8号墳出土遺物・E類



8号墳出土遺物・F類

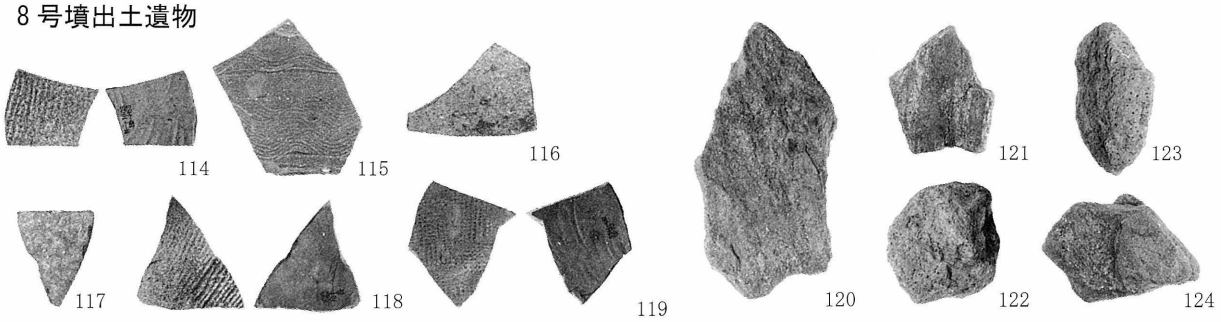


8号墳出土遺物・G類



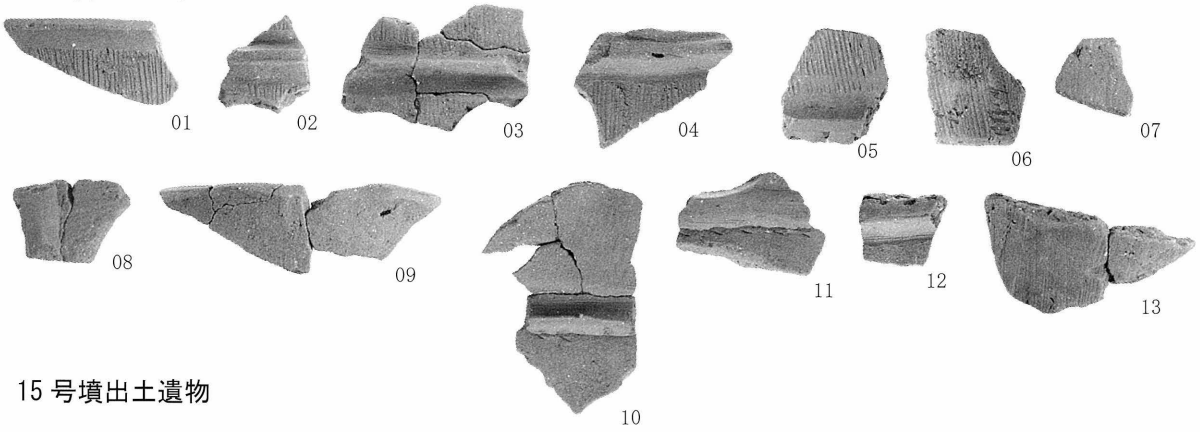
古墳時代（9）

8号墳出土遺物

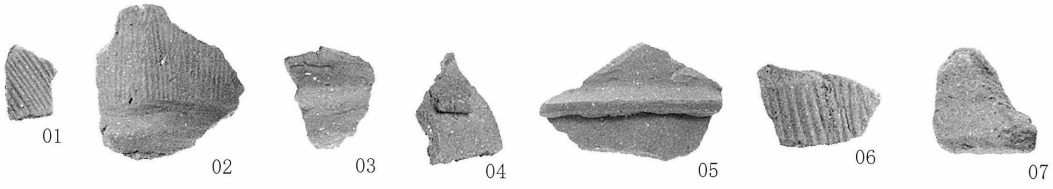


（石棺材 S=1/4）

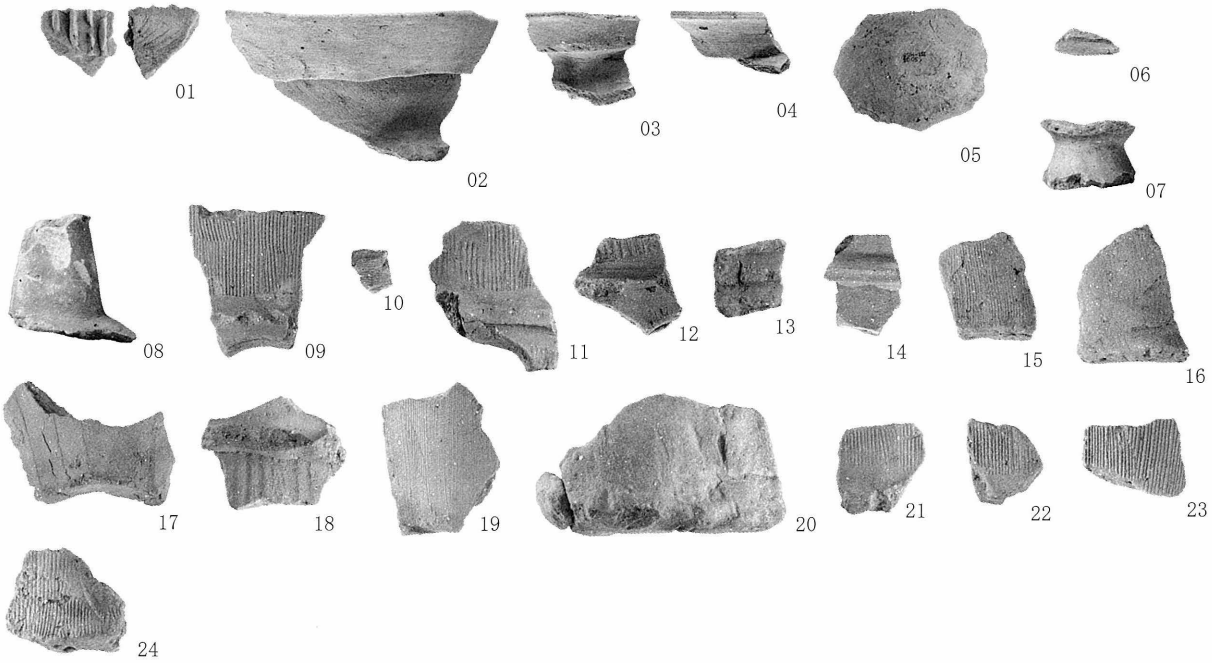
14号墳出土遺物



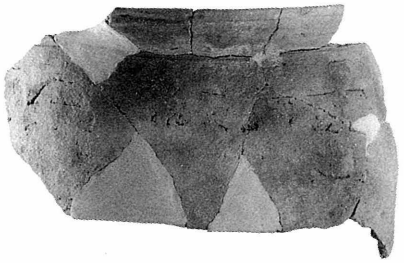
15号墳出土遺物

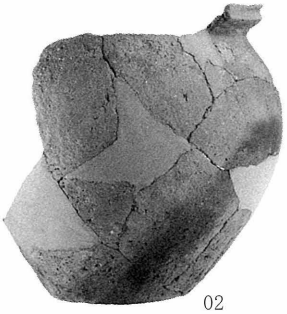


遺構外出土遺物（古墳）



SI02 出土遺物


01


02

03

04

05

06

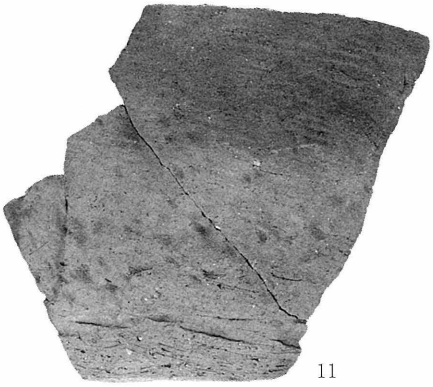
07

08

09

10

12

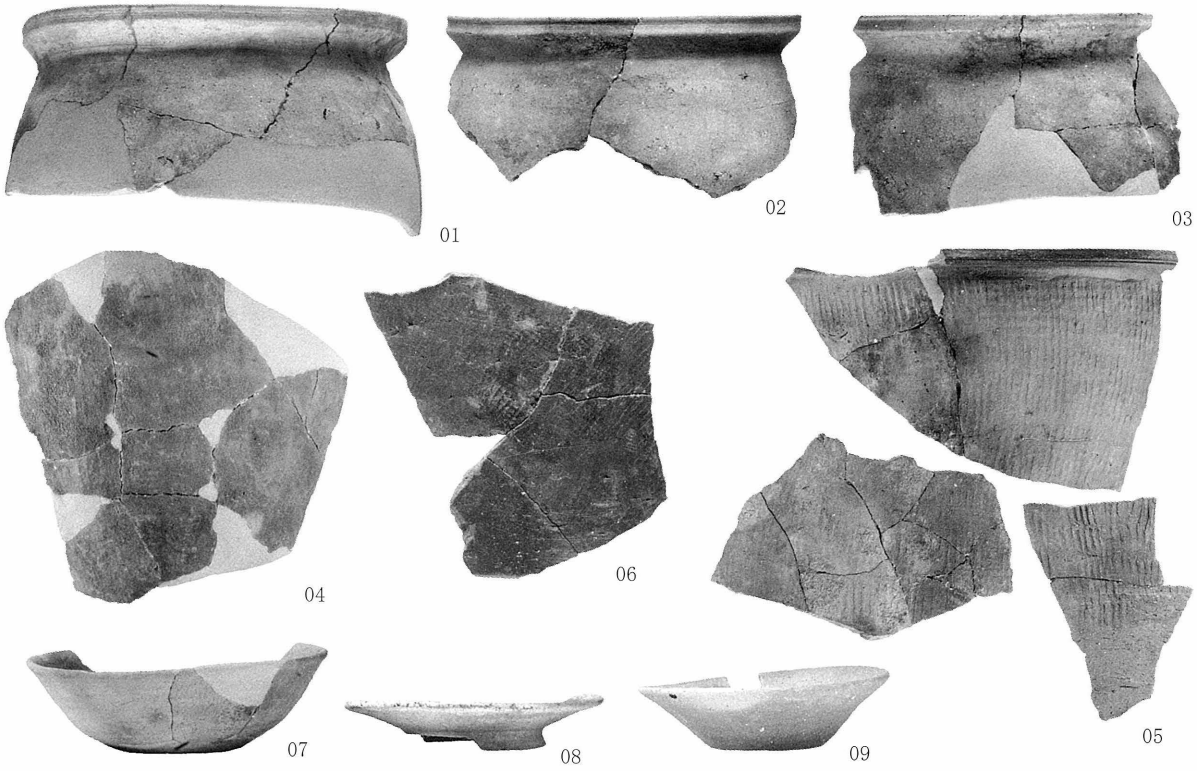

11

13

14

平安時代（2）

SI07 出土遺物



SI08 出土遺物

SI08 出土遺物

16

17

18

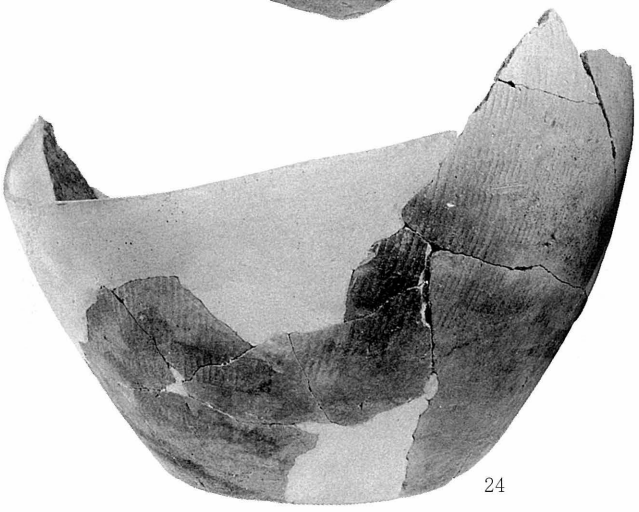
19

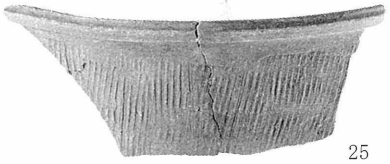
20

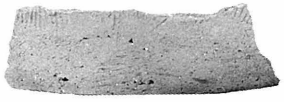
21

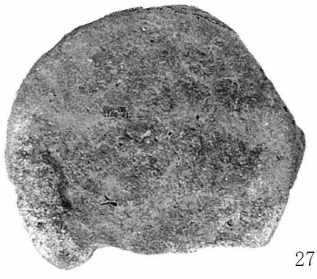
22

23


24


25


26


27

28

29

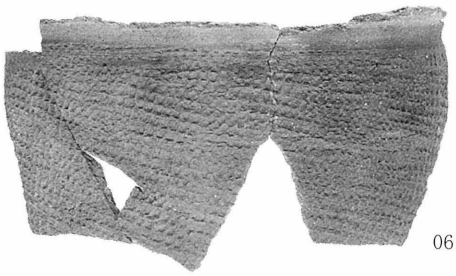
30

平安時代（4）

SI09 出土遺物

01

02


06

03

04

05

07

08

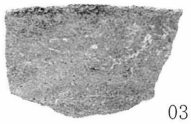
09

10

11

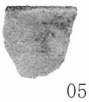
SI10 出土遺物

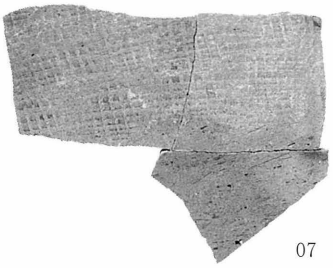
01


03

06

04


05


07

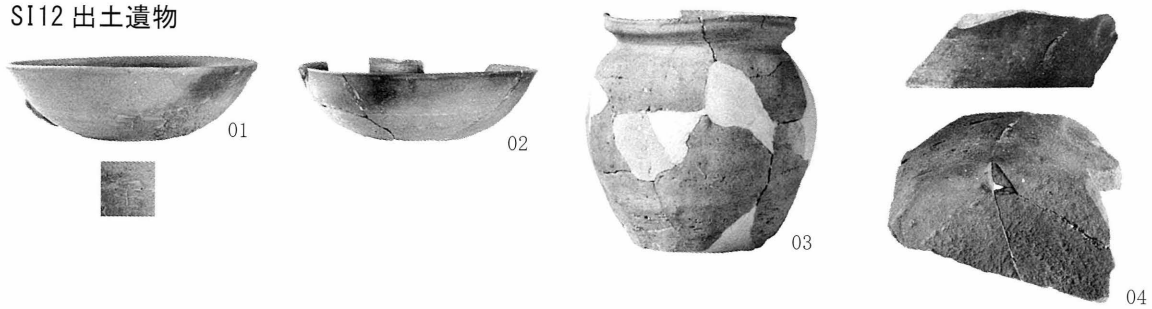
09

02

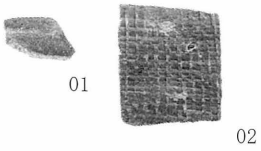
08

10

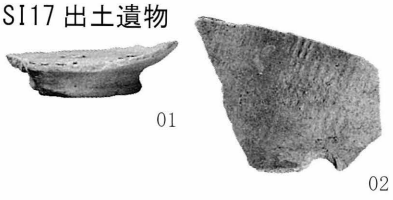
SI12 出土遺物



SI13 出土遺物



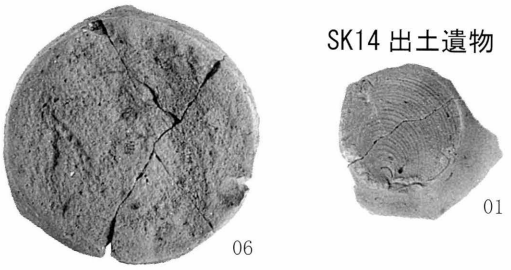
SI17 出土遺物



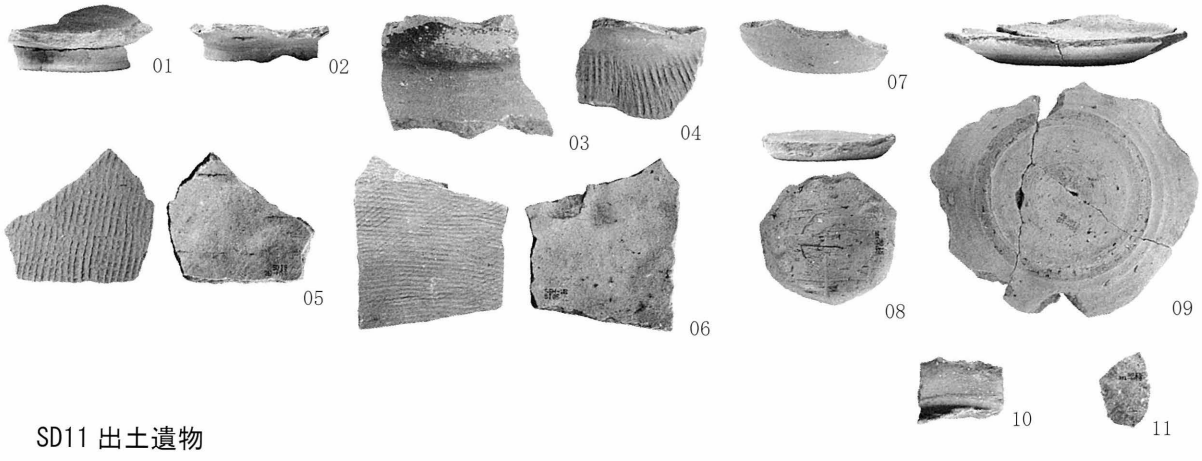
SB01 出土遺物

SB03 出土遺物

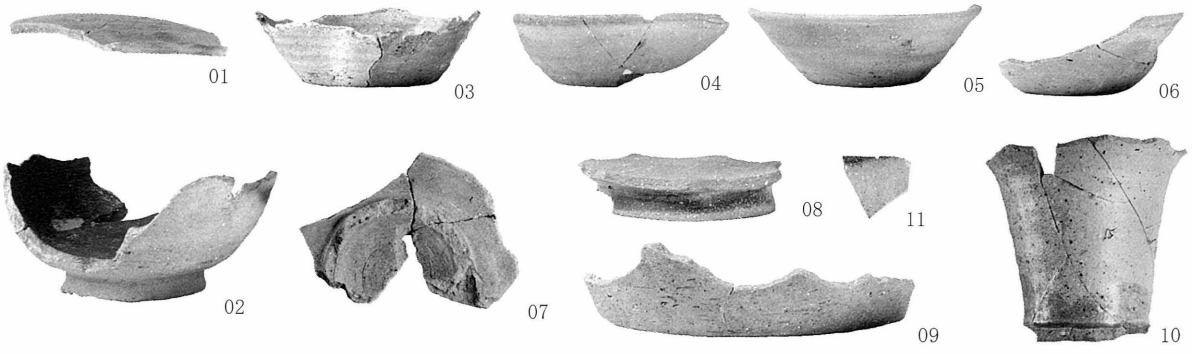
SK14 出土遺物



SD08 出土遺物

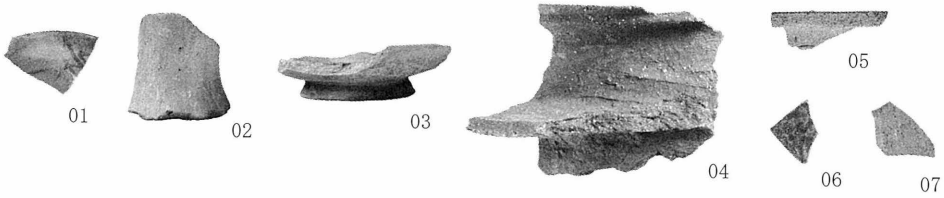


SD11 出土遺物



平安時代（6）・中・近世

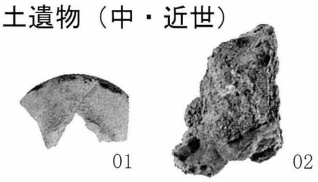
遺構外出土遺物（平安）

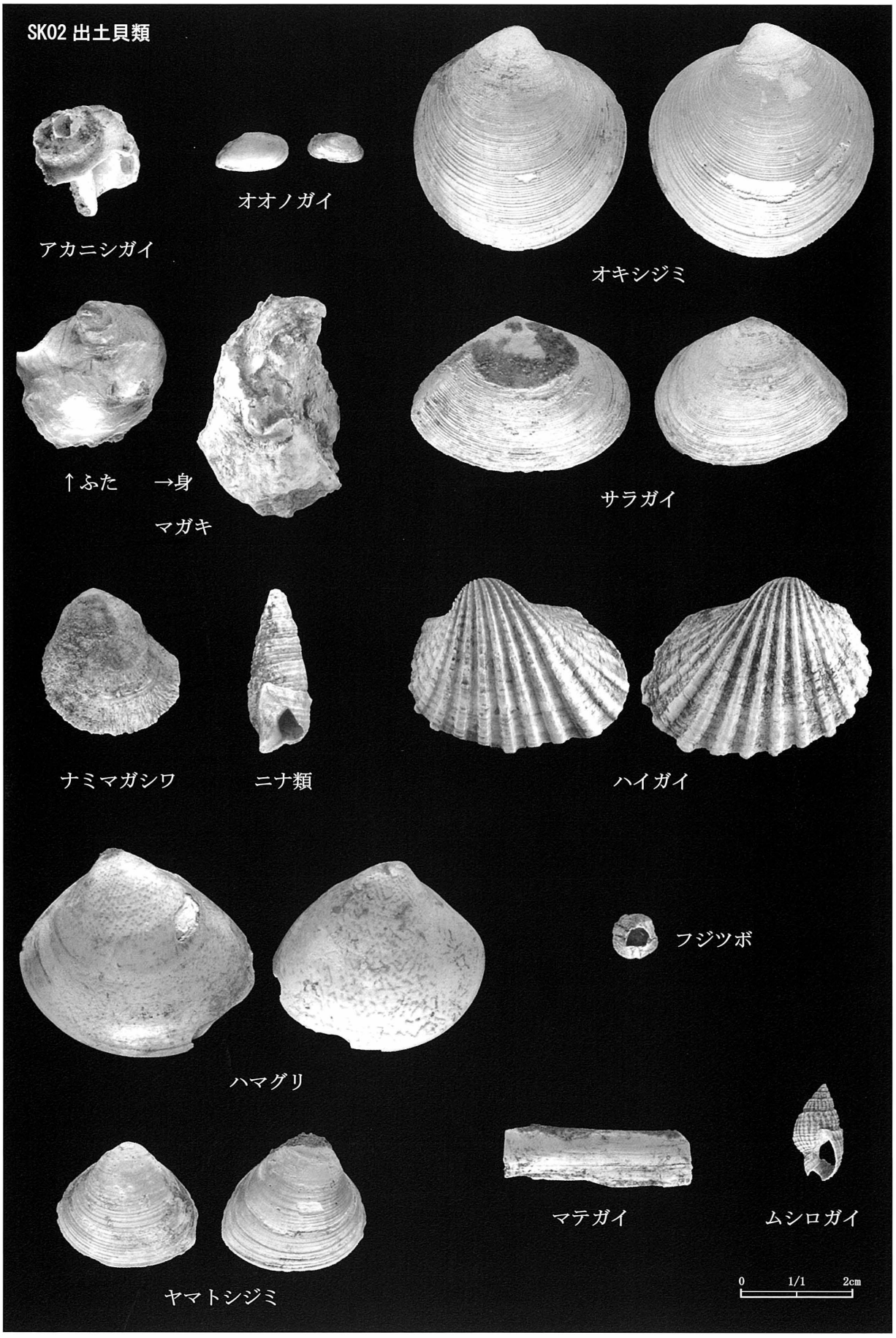


SI19 出土遺物

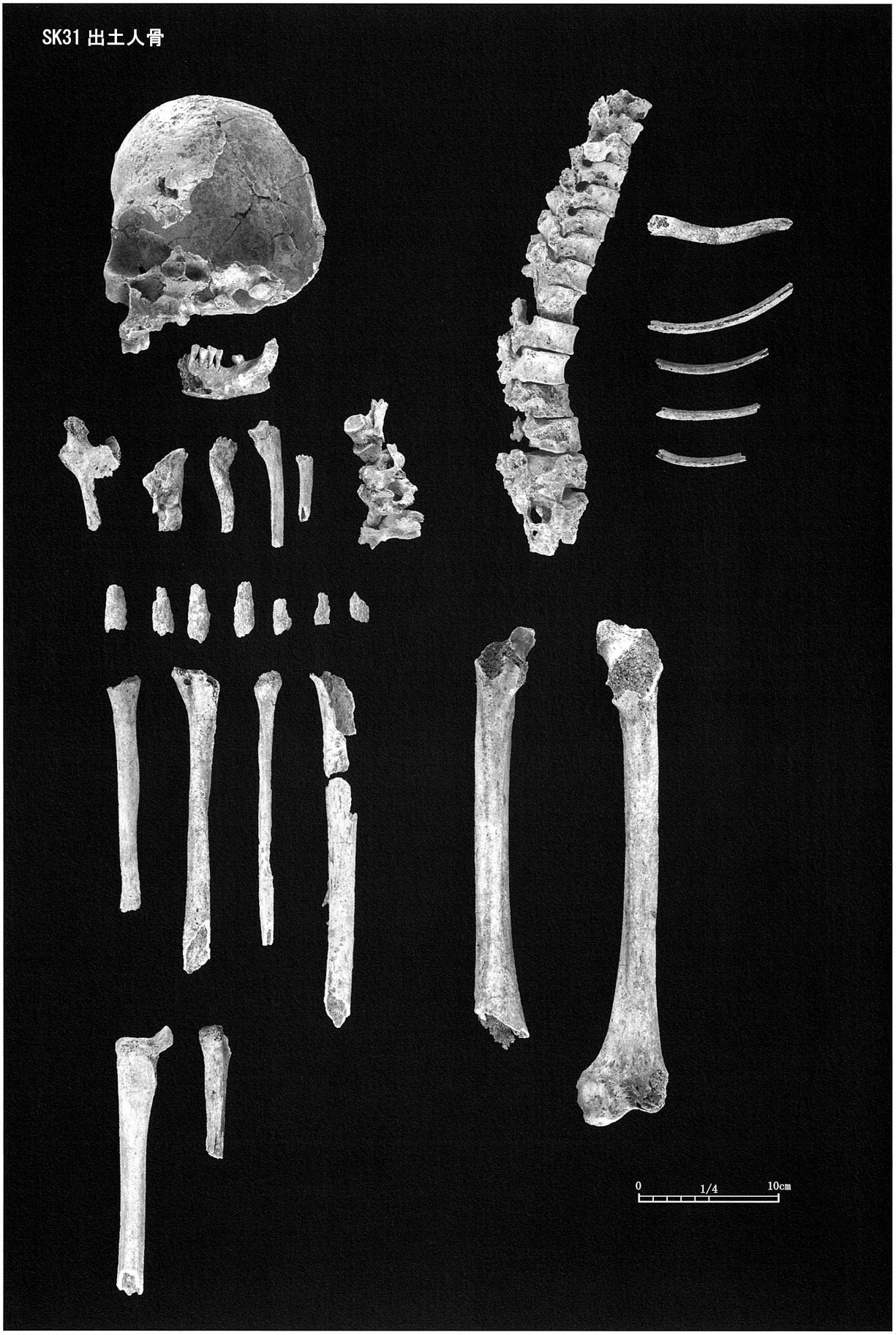
SK37 出土遺物

遺構外出土遺物（中・近世）




SK02 出土貝類
アカニシガイ
オオノガイ
オキシジミ
↑ふた
→身
マガキ
サラガイ
ナミマガシワ
ニナ類
ハイガイ
フジツボ
ハマグリ
マテガイ
ムシロガイ
ヤマトシジミ
0
1/1
2cm

SK31 出土人骨



抄　録

ふりがな	しもさかたはなわだいいせき・さかたはなわだいこふんぐん
書名	下坂田塙台遺跡・坂田塙台古墳群
副書名	県営畑地帯総合整備事業（担い手支援型）坂田地区埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	
編著者名	比毛君男　大越直樹　大賀 健　大賀さつき　鈴木 徹
編集機関	有限会社 勾玉工房Mogi　〒286-0203 千葉県富里市久能238番地100 TEL0476(92)0658
発行機関	土浦市教育委員会
発行年月日	西暦2013(平成25)年3月8日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
しもさかたはなわだいいせき 下坂田塙台遺跡 ・ さかたはなわだいこふんぐん 坂田塙台古墳群	いばらきけんつちうらし 茨城県土浦市 しもさかた 下坂田 1050番地外	465	104 ・ 007	36° 06′ 31″	140° 09′ 54″	20111213 ～ 20120228	1,800㎡	県営畑地帯 総合整備事業 （担い手支援型）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
下坂田塙台遺跡 ・ 坂田塙台古墳群	集落跡	縄文時代	住居跡 土坑(貝塚)	1軒 1基	縄文土器・石器・貝殻	本遺跡における初めての調査。縄文時代から平安時代の集落を確認。 古墳群としては、周知の8号墳が直径30mの二重周溝を有する円墳であることが判明。周溝からはB種ヨコハケ調整を含む5世紀末葉の円筒埴輪が出土。また、台地内側にも古墳が分布することが判明。
		弥生時代	住居跡	1軒	弥生土器	
		古墳時代	住居跡 溝跡	8軒 4条	土師器	
		平安時代	住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝跡	7軒 3棟 13基 2条	土師器・須恵器・灰釉陶器	
		中・近世	掘立柱建物跡 柵・掘立柱建物跡 土坑 溝跡	1棟 2基 12基 2条	土師質土器	
	古墳	古墳時代	古墳	3基	埴輪	
	墳墓	中・近世	土坑墓	2基	土師質土器・人骨	

茨城県土浦市

下坂田塙台遺跡・坂田塙台古墳群

県営畑地帯総合整備事業（担い手支援型）
坂田地区埋蔵文化財発掘調査報告書

刊行　2013（平成25）年3月8日

発　行　土浦市教育委員会
〒300-4115　茨城県土浦市藤沢975番地
TEL 029(826)1111（代表）

編　集　有限会社 勾玉工房Mogi
〒286-0203　千葉県富里市久能238番地100
TEL 0476(92)0658

印　刷　株式会社 エイティー
〒289-1115　千葉県八街市八街ほ211
TEL 043(444)2024